

---

# プリキュアオールスターズD X 2 N E X T 新たな伝説 銀河最大の超決戦！

桔梗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

プリキュアオールスターズDX2NEXT      新たな伝説      銀河最大の超決戦！

### 【Nコード】

N2498N

### 【作者名】

桔梗

### 【あらすじ】

フェアリーパークでの激戦から数カ月後、プリキュアたちに星全体がテーマパークになっている「ワンダー・プラネット」から招待状が届く。現れた宇宙船に乗って宇宙へ飛び出し、ワクワクしながら「ワンダー・プラネット」へ向かうプリキュアたち。だが、それこそ新たな敵が仕掛けた罠だった。しかも敵には誰も知らない謎のプリキュアがついていて……。いま、地球の未来を守るためにプリキュアが銀河を駆ける！

## まえがき

はじめまして。初投稿でいきなりプリキュアオールスターズに挑んだ桔梗です。（注1）一応2011年3月19日公開予定の『プリキュアオールスターズDX3（仮）』までには完結したいと思っています。稚拙な文章になるかもしれませんが、頑張って書きますので、よろしくお願いします。

まず、みなさんには本文を読んでもらう前に説明したいことがあるので、まえがきとして書いておこうと思います。

最初に本文での時系列は『DX2』から数カ月後となっており、ハートキャッチ以外のプリキュアはみな戦いは終わったことになっています。ハートキャッチではキュアサンシャインとなった明堂院いつきは勿論のこと、月影ゆりもキュアムーンライトとして復活しているという設定にしています（また、ふたりとも歴代プリキュアとすでに面識あります）。（注2）キュアムーンライトはまだTV本編で復活していませんが、彼女をどうしても参戦させたかったので、もしかしたら本編のゆりとは考えられないような行動や台詞、絡ませ方をしてしまうかもしれませんが、どうか大目に見てください。

なお、『ウルトラ銀河伝説』も原作にした理由は当然本文にウルトラマンベリアルとウルトラマンゼロに当たるキャラクターを登場させるからです。詳細はまだ秘密ですが、ふたりとも私が生んだオリジナルプリキュアです。一応タイトルに「超」とつけてしまったので原作に負けない作品にできるようにします。では、お楽しみください。

（注1）『プリキュアオールスターズDX3 未来にとどけ！世界をつなぐ 虹色の花』と公式に製作決定しました。

(注2) 2010年9月26日第33話にてキュアムーンライトは  
遂に復活しました。

## プロローグ

見渡す限り、広大な砂漠が地平線まで続いていた。

風は吹いてなく、太陽はギラギラと残酷に輝き、気温と湿度は上昇し続け、周辺は地獄のような熱気を放っていた。

そんな砂漠の中を少女は一人で歩いていった。

少女「はあ、はあ・・・っ」

少女はイスラム教徒のようなボロボロのフードを身にまとっていたが、日本人だった。歳は十六か十七くらいで、手には長い木の枝を持ち、杖として使用している。

少女「はあ、はあ・・・はあっ」

焼けつくような暑さの中を少女は顔中汗だらけにし、足腰がふらふらになりながらも気力で立ち、歩き続けていたが、その気力も限界に達し、少女は倒れた。

???「マヤちゃんっ!」

少女が倒れた瞬間、彼女の頭上から声が聞こえ、白い小さな光が猛スピードでそばへ降りてきた。光は地面に突っ伏した少女の顔に寄り添い、励ますように声をかける。

白い光「マヤちゃんしっかりして口モ。あともうすこしだから口モ。なんだったら、口モモが誰か呼んでくる口モから、がんばって・・・」

少女「なんで、私がこんな目に遭うのよ・・・っ」

だが、少女は光に怒りで震えた声で答えた。

白い光「マヤちゃん・・・?」

少女「私も、みんなも、世界を守るために・・・少しでも世界が良くなるためにがんばってきたのに」

少女は両手の拳を握り締め、顔を上げた。その目からは憎しみに溢れ、涙が流れている。

少女のその憎しみは三日前の記憶を思い起こした。

三日前、突如炎と黒煙の中から姿を現した両目の赤い男。そいつは少女の目の前で次々と彼女の大切な人たちを奪った。

少女「あいつが、あいつが私から全部奪った。・・・なんで、みんな何も悪いことしてないのに、むしろ世界が少しでも良くなるように願って努力して、私もそう信じて戦ってきたのに。それなのに、これが世界つてもんなの？私が守ってきた世界は弱者を虐げ、強者が成り上がっていくものだったの！？だったら、私は、私は・・・！」

白い光「マヤちゃん、落ち着いて口モ」

光は怒りをあらわにしている少女をなんとかだめようとしたが、次の瞬間少女は大空に向かって吠えた。

少女「だったら、私はこんな世界なんていらなかつ！みんななくなつてしまえばいい！！」

白い光「！！・・・マヤちゃん！」

少女は大きく吠えた途端悲しくなり、下を向いて泣き出した。ロボ口と涙がこぼれ、砂の中へと消えていく。一粒の涙が頬をつたつて口へいき、しよっぱさを感じたその時だった。

???「世界が憎いか？」

突然図太い男の声が響き、少女はハッと顔を上げた。すると少女の目の前に何の音もなく漆黒のカーテンが現れ、周囲を闇へと包み込んだ。さつきまで強く輝いていた太陽も今は月のような淡い光しか放てなくなつてしまった。

白い光「なに口モ？怖い口モ・・・」

光が驚きの声をあげ、ブルブルと震えだす。少女も驚き、周囲を見渡した時、再び声が響いた。

???「もう一度聞く。世界が憎いか？」

その声に反応し、少女が前を向くと、闇のカーテンの向こうから人の形をしたシルエツトが現れ、頭部から白い両目が突き出た。

少女「！！・・・あなたは、何者？」

???「我が名はアルティメツト。全宇宙を支配する究極の闇だ」

少女「全宇宙を？」

アルティメット「そうだ。俺はこの地球だけでなく全宇宙の星々にある生命や文明を滅ぼし、全て無から新たな生命を生み出して従わせる統治者となるのだ」

白い光「なんだって口モー！？」

少女「！・・・そんなことっ」

少女は怒りの矛先をアルティメットへ向け、目を鋭くして睨みつけた。だが、アルティメットは少女の反応を見えない口でニヤツと笑い返した。

アルティメット「許さないと？だがおまえはたった今言っただろう。こんな世界なくなってしまうといいと。俺が全宇宙の支配者となったら、少なくともこの地球は全て最初からやり直しておまえの望む優しい世界を作ることが何回でもできるのだぞ」

少女「！・・・優しい世界を、最初から？本当に？」

アルティメット「ああ。だから、おまえ俺の右腕にならないか？」

少女「えっ？」

白い光「！？・・・な、なに言ってる口モー！？」

アルティメット「俺とともに今の醜い世界を壊し、新しい世界をつくっていいじゃないか」

アルティメットは手を少女に差し伸べた。その手からは黒い炎のようなものが灯り、触れた途端火傷を負いそうなイメージがよぎる。しかし、少女はアルティメットの言葉を思い起こしていた。

優しい世界。

それこそ少女が一番求めていたもの。

それを、もしかしたら、自分の手で作れるかもしれない。自分は世界を守るために戦ってきたのに、その世界は少女を裏切って少女の大切な人たちを奪っていった。もし本当に作れるのなら、たとえば悪魔と契約を結んでも・・・。

白い光「ダメ口モ。マヤちゃん、逃げる口モ・・・」

少女「口モモ、ごめん」

光が少女に言ったが、少女は光の言葉を遮った。・・・そして、  
 ゆっくりとアルティメットの手に近づいた。

白い光「口モ!？」

少女は手の前で一旦足を止め、一瞬だけチラリと手を見やった。だが、次の瞬間、少女は右手でアルティメットの手を思いつきり握った。

アルティメット「ようこそ。闇の世界へ」

アルティメットの手から黒い炎のようなものが輪を描くように噴き出し、少女を包み込んだ。

白い光「マヤちゃんっ！！」

[illegible]

光が叫んだが、少女の耳には届いていなかった。彼女はアルティメットとともに闇の中へと消えていった・・・。



## プロローグ（後書き）

長かった。ちゃんと最後まで書けるかな。次回はプリキュアたちの登場です。

## 招待状（M H s i d e）（前書き）

一気に全員登場させたかったですが、やっぱり長くなるので五組に分けました。まずはM H組です。

## 招待状 (M H s i d e)

一年後。

ベローネ学院から少し離れた公園に「T A K O C A F E」と看板が書かれたたこ焼き移動販売車が停まっている。この屋台はオーブンカフェ形式で外に客用のテーブルが数点置かれている。そのひとつにふたりの少女が座っていた。

美墨なぎさと雪城ほのか。それがふたりの少女の名前である。彼女たちはかつて伝説の戦士プリキュア・キュアブラックとキュアホワイトに変身し、自分たちが住む虹の園と呼ばれるこの街をドックゾーンという闇の組織から守ってきたのだ。今ではドックゾーンは消滅し、平和な毎日を送っている。

なぎさ「あゝん。んんっ、うまいっ。アカネさん、ジャンボたこ焼きもうひとつ!」

ほのか「もおゝなぎさったら。そんなに食べると晩ご飯食べられないくなっちゃうわよ」

タコカフェで買ったたこ焼きを大口で全部飲み込んでもなお注文をしたなぎさを見て、ほのかは毎度のことと分かっておきながらもあきれ顔で言った。

なぎさ「だーいじょうぶだっ。アカネさんのたこ焼きと晩ご飯は別腹だから」

アカネ「あははは。まあなぎさがこうして毎日来ていくつも注文してくれるから、こっちは商売繁盛なんだけどね」

タコカフェの店主・藤田アカネはふたりの先輩である。かつてはとある会社の優秀な社員だったのだが、自らの希望で職場を去り、今の屋台を始めたのだ。

アカネ「さてと・・・あれ?材料が切れてる。ひかりー、買出しに行ってくるから、ちよっとお留守番頼むねー」

ひかり「あ、はい！」

元気よく答えたのは、アカネとともに暮らしている九条ひかりである。彼女は実は光の園に君臨するクイーンの命であり、シャイニールミナスとしてキュアブラックとキュアホワイトとともにドックゾーンと戦ったひとりなのだ。

アカネが出かけるとひかりは屋台から降り、空いたテーブルを拭き始めた。

ほのか「精が出てるわね、ひかりさん」

ひかり「はい！・・・あ、ところでなぎささんにほのかさん、今朝こんなものが届いていたんですけれど」

なぎさ「ほのか「ん？」

ひかりはエプロンのポケットから、何かを取り出した。それは一枚の招待状のカードだった。表面にはこう書かれてある。

『ワンダー・プラネット開業一周年記念特別サービス！このカードが届いたあなたは超ラッキー！このカードを持ってくれば、どなたでも何人でも無料で入場できます！お友達を誘って宇宙へ行こう！

集合時間は8月1日10:30 場所は・・・』

なぎさ「え？ひかりにも届いていたの？」

ほのか「ちよつと待つて。じゃあなぎさも？」

そう言つてふたりは鞆からそれぞれカードを取り出した。それは全く同じものだった。

ほのか「不思議ね。同じカードが三人に届くなんて」

なぎさ「そもそもこのワンダー・プラネットってなんなワケ？」

「???」星全部が遊園地になっているところだメポー！」

声がした次の瞬間、なぎさのポケットからポン！と煙が出てきて黄色いうさぎのような生き物が飛び出してきた。彼は妖精のメップル。光の園の住人であり、キュアブラックのパートナーでもある。そしてそのメップルの登場に反応し、ほのかとひかりのポケットから同じく妖精のミップル、ポルン、ルルンも飛び出してきた。

ポルン「わーいわーい、遊園地、ポルンも行きたいポポー！」

ルルン「ルルンも行きたいルル！」

メップル「コラー！おまえたちそんなにはしゃいで誰かに見られたら、どうするんだメポー！」

ミップル「ふたりとも静かにするミポ。メップルも落ち着くミポ」

途端にテーブル上は妖精たちの喧騒の場となり、メポミポポポルルと周囲に響いた。ほのかとひかりはなんとか静かにさせようとするが、全く聞き耳を持たない。しかし三人の中で最も短気ななぎさが最終兵器を使った。バンツ！とテーブルを叩き、「うるさーいっ！！」と一声怒鳴ったのである。さすがの妖精たちも驚き、一瞬で動きが止まった。

なぎさ「もう、なんなのよあんたたち。いきなり出てきて大騒ぎして」

ほのか「まあまあ、なぎさ。ところでメップル、知ってるみたいだけど、何なの？ワンダー・プラネットって？」

ほのかが質問すると、驚きで固まっていたメップルはハツとなつて、おほんと咳払いをした。

メップル「メップルも行ったことないから詳しく知らないけど、ワンダー・プラネットというのは一年前に開業した星全体が遊園地になっている惑星メポ。星の周りにはシールドが張られていて簡単には見つからないらしいんだメポ。でも、もうメップルみたいな妖精や精霊が何人も行つてて評判になってるらしく、一度行つてみたいと思つていたんだメポ」

なぎさ「へー。星全体が遊園地か。楽しそう。夏休みだし、集合場所も近いし、行ってみない？」

ほのか「でも無料のうえに何人も来ていいなんて、できすぎじゃないかしら？いくら一周年記念だからって」

なぎさ「ないないって。もう何人も行つてるみたいだし、亮太も連れてくるからさ。行こうよ、みんなで」

ほのか「まあ、なぎさがどうしてもって言うなら、いいけど。・・・ひかりさんは？」

ひかり「大丈夫です。行けると思います」

なぎさ「じゃ、決まり！あゝ、早く8月1日が来ないかなー」

なぎさはのんきそうに言うと、うーんと身体を伸ばした。

この時三人は8月1日が最悪な日になるとは思ってもいなかった。

招待状(M H s i d e) (後書き)

次はS S組です。

## 招待状 (S S i d e) (前書き)

今回は少し短めです。



## 招待状 (S Side)

海原市夕凧町。その街にある夕凧中学校から少し離れた山の頂上に巨大な樹木がそびえ立っている。

大空の樹と呼ばれるその樹は別次元に存在する世界樹とつながり、全ての世界の命を司るとも言われている。そんな樹の根元にふたりの少女が寄り添うように座っていた。

日向咲と美翔舞。ふたりもまたプリキュアであり、それぞれキュアブルーム、キュアイーグレットまたはキュアブライト、キュアウインディと名乗っていた。そしてふたりは滅びの力を持つダークフォールと戦い、世界を守ったのである。今ではダークフォールも消え、平和な毎日を送っていた。ふたりのパートナーである妖精のフラッピーとチョッピー、そしてムーブとフープも目の前で笑いながら目隠し鬼をして遊んでいる。

咲「やっぱりここはいつ来ても落ち着くなあ」

舞「そうね。私もここが好き。絵のアイディアが行き詰っても、ここに来るとなんだか励ましてくれる気がして力が湧いてくるの」

咲「うん」

咲が言った途端、ざざあ・・・と大空の樹の枝葉が優しく風になびいた。

舞「こうしていると、あの戦いの日々がうそのようね」

咲「うん。でも、フェアリーパークでカレーパンとハナミズスターレが出てきた時にはびっくりしたけど」

舞「ふふ。そうね」

舞が少し苦笑した。と言うのも咲が言った「カレーパン」と「ハナミズスターレ」というのは、ふたりが戦った敵・ダークフォールの幹部の一員なのだが、本当は「カレハーン」と「ミズシターレ」という。今はふたりとも消えてしまったが、もし生きて今の咲の言葉を聞いたなら、「カレーパンじゃない。カレハーンだ!」「ミズシ

タワーレよ！あんたわざと言ってんでしょっ！」と怒って飛び出てきただろう。

舞「それはそうと咲、私の家にこんなのが届いたんだけど」

ふと舞がポケットから、一枚の招待状カードを取り出した。表面にはワンダー・プラネット一周年記念だとか宇宙へ行こうとか書いてある。

咲「え？舞にも届いたの？私もなんだ」

そう言うとき咲も取り出した。それは同じカードだった。

舞「咲にも届いているなんて、偶然かしら？」

咲「分かんないけど、何だろ？ワンダー・プラネットって？」

フラッピ・チョッピ・ムープ・フープ「ワンダー・プラネット（ラピ、チョピ、ムプ、フプ）！？」

咲の言葉を聞くやいなや、目隠し鬼で遊んでいた妖精たちがいっせいに声を合わせて驚きの声をあげた。

咲「！・・・なにになっ？」

舞「みんな、知ってるの？」

舞が聞くと、妖精たちは順番に話した。星全体がテーマパークとなっている惑星ということ。行ったことはないが、すでに何人かの妖精や精霊たちが遊びに行つてとても大好評だったと聞いていること。全てを話し終わると咲が「へー」と声を漏らした。

咲「星そのものが遊園地になつてるなんてちょっと想像できないけど、なんだか楽しそうね」

フラッピ「そうラピ。フラッピも前から行つてみたかったんラピ」  
チョッピ「チョッピも行つてみたいチョピ」

ムープ「ムープも行きたいムプ」

フープ「フープもフプ」

咲「夏休み中だし、集合場所もそんなに遠くないし、行ってみようよ舞」

舞「でも、宇宙に行くみたいだし、危ないかしら？」

咲「大丈夫だよ！開業して一年も経つてことは一年も何もなかつ

たつてことでしょ？二年目も何も起きない自信があるから、私たちにも招待状を贈ったんだよ。フラッピたちも行きたがってるし、みのりや満と薫、健太たちも誘うから、みんなで行こうよ舞」

咲が目を輝かせて顔をズイツと顔を近づけると舞は困ったような表情になった。助けを妖精たち求めようと顔を向けたが、妖精達も目を輝かせて舞を見つめ続けていた。五人（？）のキラキラ光線にさすがの舞も遂に折れた。

舞「分かったわ。みんなで行きましょう」

舞の言葉を聞いた途端、みんなは「やったーっ！」と飛び上がった、手を叩き合った。舞は妖精たちとはしゃぐ咲の姿を見て、なんだかんだと嬉しそうに微笑んだ。

しかし、その「ワンダー・プラネット」に行く8月1日が最悪な日になるうとはふたりは知るよしもなかった。

招待状 (S S side) (後書き)

次は5 G O G O ! 組です。

## 招待状(5 Go Go! side)

サンクルミエール学園から少し離れた広い湖のすぐそばに「ナッツハウス」と呼ばれるアクセサリーショップがあった。そのナッツハウスに一人の少年が入る。

少年の名は甘井シロー。ただし、それは仮の姿で、本当はシロップというペンギンに似た姿の妖精で、運び屋を仕事としている。シロップがナッツハウスの中に入ると「シロップー！」と上から元気な声が聞こえた。見上げると、桃髪の少女が二階から手を振っている。シロップの位置からは、彼女の他にわずかに五人の少女たちの顔が見えた。

彼女たちはそれぞれ夢原のぞみ、夏木りん、春日野うらら、秋元こまち、水無月かれん、美々野くるみという名を持ち、一人を除き、みなプリキュアだった。彼女たちは変身するとそれぞれキュアドリーム、キュアルージュ、キュアレモネード、キュアミント、キュアアクアと名乗り、「プリキュア5」としてやはり悪の組織ナイトメア、エターナルと戦ったのだ。ただし、エターナルとの戦いに途中参戦した美々野くるみは本当はパラレルワールドにあるパルミエ王国国王のココとナッツの準お世話役として仕えるミルクという妖精で変身するとミルキローズというプリキュアに似た戦士となり、プリキュア5以上の力を発揮するのだ。今ではナイトメアとエターナルも消滅し、平和な毎日を送っている。

シロップはのぞみの顔を見るとわずかに嫌な顔をした。

シロップ「ったく。なんで俺がおまえたちのおやつを買ってこなきゃならないんだよ」

のぞみ「じゃんけんに負けたんだから、文句言わない。それより、ほら、早く早く」

のぞみに言われ、シロップがしぶしぶ階段へ向かおうとすると、奥から一人のさわやかそうな青年が出てきた。彼の名は小々田コー

ジ。彼こそがパルミエ国国王ココであり、もちろん人間は仮の姿。本当は白いタヌキに似た妖精である。

ココ「やあ、シロップ。おつかいごくらうさま」

シロップ「ココ・・・。ん？ナッツは？姿が見えねえけど」

ココ「ああナッツなら、ミラクルライトの新型を作っている最中だよ。もうすぐできると言ってたけど」

ココが言った途端、奥の扉が開き、もう一人の国王・ナッツが出てきた。やはり仮の人間の姿をしている。

ココ「！・・・ナッツ、早かったな。完成したのか？」

ナッツ「ああ。テストはしてないから効果は完璧かどうか分からないが、だいたい完成したと思う。テストが終わったら、すぐ人数分量産できるようにとりかかる」

ココ「そうだな。僕も手伝うよ」

のぞみ「ココー、ナッツー、シロップー！早くおやつ食べようよー！」

うらら「私もう待ちきれません！」

三人の頭上からのぞみとうららの声が響いた。「今行くよー」とココが答え、三人は階段を上った。二階に着くとシロップは「ほらとテーブル上に袋ごとお菓子を置き、彼女たちはいつせいに好きなお菓子を取り、はむはむと幸せそうにほおばった。そんな彼女たちを見て、ふとシロップは何かを思い出して鞆に手を入れた。

シロップ「そうだ。おまえたちに手紙が届いてたぞ」

のぞみ「むしゃむしゃ・・・手紙？誰から？」

シロップ「さあ？差出人の名前は書いてなかったからな・・・ああこれだ」

シロップが取り出したのは六枚の小さな封筒だった。表面にのぞみたちの名前は書いてなかったが、彼女たちがプリキュアに変身した時の自分たちを象徴する五色の蝶と青いバラの絵が描かれていた。りん「何だろ？」

彼女たちがそれぞれの封筒を手にし、封を切ると、中からカード

が出てきた。表面にはワンダー・プラネット一周年記念などと書いてある。

こまち「何かしら？招待状みたいだけど・・・」  
くるみ「こ、これって・・・！」

一同はくるみがカードを両手で掲げ、小刻みに体が震えているのに気がついた。あまりの異常さに何人かが声をかけようとした途端、ポン！とくるみは煙を発して、うさぎ似の妖精・ミルクへと変わった。そしてそのままテーブル上へ降りると、満面の笑顔ではしゃぎ回った。

ミルク「わーいわーい、ワンダー・プラネットミルー！遂にミルクのところにも招待状が来たミルー！」

かれん「ちよっ、ちよっとミルク、どうしたの？」

こまち「ミルクさん落ち着いて。何か知っているの？」

ミルク「ミル！ワンダー・プラネットというのは星全体が遊園地になっている惑星ミル。ミルクも聞いたんだけど、星の周りにはシールドが張られていて外からは見えないみたいミル。でも、もう何人も妖精たちが行つて、一日じゃ遊び足りないくらい楽しいと評判で、ミルクも一回は行つてみたいと思つてたんだミル！」

りん「へー、じゃあそのワンダー・プラネットって宇宙にあるんだ？」

うらら「宇宙にある遊園地って聞いただけで、なんだか楽しそうですわね」

ココ「そういえば、パルミエ王国でも国民が話をしていたのを聞いたことがあるなあ」

のぞみ「ねえねえみんな、みんなでそのワンダー・プラネットに行つてみない？」

のぞみの言葉に全員が「えっ！？」と声をあげた。

のぞみ「だって、せっかくみんなに招待状が来たんだよ。これってみんなで来てくださいってことじゃない。8月1日って夏休みだし、集合場所もここから近いし、みんなで行こうよ！」

ココ「確かにせっかく届いたからなあ、みんなで行ってみるか」  
ナツツ「おいココ、俺たちには国王としての義務が・・・」

ココ「国王にも息抜きは必要だよ。ナツツも一緒に行こうって。ド  
ーナツ国王たちも誘ってみるからさ」

ナツツ「（ココはいつも息抜きしてる気がするが・・・）」

りん「私もこの日は部活や花屋のお手伝いの予定はないし」

うらら「私も歌手や女優のお仕事はありません」

こまち「私も特にといった用事はないわ」

のぞみ「あとは・・・」

一同はいっせいにじくつとかれんに目を向け、かれんは思わずビ  
クツと反応した。

かれん「わ、私にも用事や予定は入ってないけど、でもいくら一周  
年記念だからって無料で何人も来て良いなんて都合よすぎない？」

のぞみ「えゝ。そんなのかれんさんの考えすぎだよ。一周年だから、  
こんなサービスしてくれるじゃない？」

かれん「でも、宇宙にあるのよ。危なくない？」

かれんがそう言った途端、のぞみがかれんの両手を握り、ズズズ  
イツと顔を近づけた。

のぞみ「なに言ってるの、かれんさん！宇宙だよ。宇宙にあるから  
こそ、行かなきゃ。いくらかれんさんがお金持ちでも、宇宙にまで  
行ったことないし、行ってみたいでしょ？」

かれん「そりゃないし、行けるなら行ってみたいけど・・・」

のぞみ「ねえ行きましようよ。かれんさんが来てくれないと楽し  
くないよ。ねえゝ、かれんさゝん・・・」

のぞみは駄々っ子のような声を出してさらに顔をズイツと近づけ  
た。こういう状態ののぞみにはとても勝てない。かれんは助けを求  
める目でメンバーの顔を伺ったが、みなじくつとかれんを見つめ続  
けるだけだった。再びのぞみに顔を向けると彼女も大きな目でじく  
つとみつめている。かれんは口角をひくひくさせ、一同の視線に耐  
えていたが、すぐに折れた。



かれん「分かったわ・・・」

のぞみ・りん・うらら・ミルク「やったーっ（ミル）！！」

のぞみとりんとうららとミルクは歓声をあげると、お互いに手を叩き合った。そんな四人の様子をこまちとココは嬉しそうに見つめ、ナッツは無表情で紅茶を口に運んだ。かれんは苦笑いしていたが、すぐにはあつとため息を吐いた。しばらく叩き合った後、のぞみはお決まりのポーズを取った。

のぞみ「よし、みんなでワンダー・プラネットに遊びに行くぞー。けってーい！さっそく準備しなくちゃ」

りん「早すぎるでしょうが！」

ナッツ「まあ行く行かないにしろ、これ一枚で何人も入場できるのなら、六枚は多すぎだ。一枚で十分といたいのが、万一なくしても大丈夫なようにあと二、三枚は余分に保管しておくとするか」

ココ「そうだな。確かに六枚は多すぎる。シロップ、悪いけどあとの三枚は捨てていてくれないか？」

シロップ「はいよ」

シロップはテーブル上の六枚のうち三枚の招待状を手に取り、ゴミ箱へ放り投げた。

しかし、放り投げたうちの一枚が風に乗り、外へ飛び出したのに誰も気づかなかった。

ナッツハウスから少し離れた公園のベンチに黒い服を着た男がぐんにやりとした様子で座っていた。男の名はブンビーといい、かつてプリキュア5の敵・ナイトメア及びエターナルの一員だった。しかし、今では改心し、「ブンビーカンパニー」という小さな会社を起こして社長を務めているが、社員たちにいつもなめられて、なかなかうまくいかない様子であった。ギラギラと日光を浴びる中、ブンビーは疲れた表情でいた。

ブンビー「あーあ。仕事ははかどらないし、我が社員たちはボンク

ラばかりだし、私このままやっていけるんだろうか……。気晴らしにどこか旅行にでも行きたいなあ。でも、お金もないし……」

はあっとため息を吐いた瞬間、何かが彼の目を覆った。驚いてあわてて取ると、一枚の招待状カードだった。

ブンビー「何だこれは？ん？ワンダー・プラネット？聞いたことがあるようなないような……。な、なにっ！？タダでしかも何人もOK？こりゃあいい。ぜひ、私の社員たちにも……。いや、ダメだ。あいつらがいるとロクなことがない。フェアリーパークに行ったら時もそうだったし。うむ、これは仕事がつまみかず、スランプになっている私への神様からのプレゼントだ。私一人で行って有義に楽しんでこよう！いやー、人生って悪いことばかりじゃないんだなー」

ブンビーは上機嫌になり、スキップで公園をあとにした。

しかし、その日がブンビーにとっても最悪な日になるとは当然思ってもいなかった。

招待状(5 G o G o ! s i d e ) (後書き)

次はフレッシュ組です。

## 招待状（フレッシュサイド）

四つ葉町にあるクローバータウンストリートを抜けると公園が見えてくる。その公園にドーナツの移動販売車が停車してある。この屋台もオープンカフェ形式で、外にテーブルが数点置いてある。

そのひとつのテーブルに四人の少女が座ってドーナツを食べていた。

桃園ラブ、蒼乃美希、山吹祈里、東せつな。それが四人の少女たちの名前で、やはり同じくプリキュアであった。彼女たちはそれぞれキュアピーチ、キュアベリー、キュアパイン、キュアパッションと名乗り、パラレルワールドにある管理国家ラビリンスの猛威から世界を守ってきたのだ。ちなみに彼女たちのうちの一人、キュアパッションは東せつなとはイースというラビリンスの幹部の一員だったのだが、キュアピーチたちと戦ったのちに和解し、一度は命を落としたのだが、四人目のプリキュア・キュアパッションとして生まれ変わったのである。今は、ラビリンスの統治者・メビウスを倒し、毎日平和な生活を送っている。せつなも故郷であるラビリンスへ帰ったが、それでも時々は四つ葉町へ来てくれていた。今日もそうなのである。

ラブ「んん、おいしい。やっぱ、カオルちゃんのドーナツは最高だよー」

ドーナツを一口食べ、幸福な気分になったラブは思わず頬に手をやった。他の三人もドーナツを口にし、同じ行為をする。

美希「本当。やみつきになるわ」

祈里「ほっぺたが落ちるって、まさにこのことね」

せつな「一口だけで幸せになっちゃいそうね。ラビリンスの子供たちにも買ってあげようかしら」

四人だけでなく、すぐそばでフェレットとパンダに似た生き物もおいしそうにドーナツをほおばっていた。ふたり（？）は同じくス

ウィーツ王国に住む妖精で名前をそれぞれタルト、シフォンといった。

シフォン「うまうま、プリプー」

タルト「やっぱ、兄弟が作ったドーナツは天下一品や」

タルトがそう言っていると、屋台の店主・カオルちゃんがひよいと顔を出した。ちなみに彼はラブたちがプリキュアということもタルトが妖精ということも知っている。

カオルちゃん「おう、ありがとね、兄弟。いやー、美しいお嬢さんたちにまで褒められて、オジさんサービスしちゃうっかなーな、なんて、グハッ」

ラブ「え？本当にサービスしてくれるの、カオルちゃん？」

カオルちゃん「あいよ。何でもタダであげるよ。一個だけ」

ラブ「やった。じゃあ、チョコファッションもう一つ！」

美希「私たちにもー」

カオルちゃん「あいよ」

カオルちゃんはそう答えると、店の奥へ消えた。その直後、せつながふと何かを思い出したような顔をした。

せつな「あ、そうそう三人とも。今朝、私の家にこんなものが届いたんだけれど」

彼女が取り出したのは一枚の招待状カードだった。表面にはワンダー・プラネットやら超ラッキーやら書かれている。

ラブ「え？せつなにも来たの？私にもなんだけど」

美希「ちよつと待って、ラブも？私にも来たわ」

祈里「みんなにも！？私にも届いたわ」

そう言って三人は急いでカードを出した。四枚とも同じものだった。

せつな「ラブたちにも来てたなんて・・・驚いたわ」

ラブ「本当だね。ここまできると偶然って怖いね」

美希「本当に偶然かしら？無料に一枚で何人も来ていいなんて怪しくない？」

祈里「何なのかな、ワンダー・プラネットって？」

タルト「ワンダー・プラネットやてえーッ!!」

ラブ・美希・祈里・せつな「うわあっ!？」

突然タルトが大声をあげたので、三人はびっくりした。

ラブ「ちよつとタルト!いきなり大声出さないでよ。びっくりするじゃ・・ぶぶっ!？」

祈里「そんなことよりタルトちゃん。知ってるの、そのワンダー・プラネットって？」

ラブの顔を押しつけて祈里が聞くと、タルトは四人に説明をした。自分も行ったことはないが、聞いた話だとワンダー・プラネットは星全体がテーマパークになっている惑星だということ。行ったことのある妖精たちの話だと、一日じゃ遊び足りなくなるくらい楽しいらしいっていうこと。全てを話し終えると、タルトはその場で軽快にスキップした。

タルト「そやからワンダー・プラネットちゅうところは、わいら妖精さんにとっちゃ、いっぺんは行ってみたいところなんやで。その招待状がピーチはんに来たっちゅうんはもうぜひと遊びに来てくだあさいってこっちゃ。しかもタダでぎょーさん来てええなんて、なんちゅう太っ腹や。な、頼むさかい。わいを連れてってや」

美希「そうは言われても・・・」

せつな「なんだかピンと来ないわ」

ラブ「いいじゃん。行ってみようよ!」

ラブの言葉に三人は「ええっ!？」と振り返った。

ラブ「なんだか楽しそうじゃん。せつかく来たのに行かないなんてもったいないよ。夏休みだしさ、集合場所もそう遠くないし、行くよみんなで」

美希「ラブ、そりや行ってもいいけど、いくら記念だからって、やっぱり無料のうえに何人も来ていいなんておかしくない？」

ラブ「ミキたん心配しすぎだよ」。タルトの話じゃおかしいところはなかったし、開業して一年も経つんだよ。それに・・・」

シフォン「ラーブー」

シフォンが空を飛んでラブの腕の中に来た。

シフォン「ラーブー、シフォンも行きたーい行きたーい」

ラブ「ほら、シフォンも行きたいって言ってるよ。行こうよみんなで」

美希、祈里、せつなはしばらくぼかんとしていたが、すぐにすました顔になった。

美希「そうね。確かに心配のしすぎかもしれないわね。私も和希を誘ってみようかしら」

祈里「シフォンちゃんがどうしても行きたいんじゃ、しょうがないわね。せつなちゃんは大丈夫？」

せつな「ええ。隼人と瞬も誘っていいかしら？ふたりともこのところ、働き詰めでたまには息抜きしてほしいし」

ラブ「もちろんだよ！じゃあ、8月1日に駅の前で集合。約束だよ」

美希・祈里・せつな「うん！」

こうして四人は約束した後、カオルちゃんが持ってきてくれたあげたてのチョコファッションを食べて別れた。しかし、この約束をしなければよかったかもしれないと後悔しても後の祭りだと当日知ることになるうとは思ってもみなかった。

## 招待状（フレッシュside）（後書き）

歴代の妖精の中でシフォンとタルトの話し方が難しい（あとカオルちゃんも）。出番少なくなきょうかしら。次はお待たせしました。ハートキャッチ組です。



## 招待状（ハートキャッチside）

希望ヶ花市。その街の中に大きな植物園がある。その中に赤髪の少女が花々に水をやっていた。

少女の名前は花咲つぼみ。彼女もプリキュアで、変身するとキュアブロッサムと名乗り、今は三人の仲間とともに世界征服を狙う砂漠の使徒と戦う日々を送っていた。今日は珍しく敵の襲撃はなく、つぼみは学校から帰ると、ひさしぶりに植物園の花々の手入れをしていた。パートナーである妖精のシプレの他、コフレ、ポプリも園内を飛び回って遊んでいた。

つぼみ「お花さん。はい、お水ですよ」

つぼみが紫の花に水を優しくかけた時、「つぼみー」とすぐ後ろから声が聞こえた。振り返ると青髪の少女が立っていた。彼女の名前は来海えりか。つぼみの親友で、えりかもまたプリキュアである。変身するとキュアマリンと名を名乗り、ともに砂漠の使徒と戦っている。

つぼみ「えりか」

えりか「やつぱりここだったんだ。つぼみって、ほんと花が好きだよね」

つぼみ「はい。花たちを見ているとなんだか・・・」

えりか「優しい気持ちになれるんでしょ？」

つぼみ「はい！」

つぼみが笑って答えると、「つぼみー、えりかー」とふた리를呼ぶ声が聞こえた。声がした方向に振り向くと、誰かが植物園の扉を開けて入ってきた。明堂院いつきだった。つぼみとえりかが通う私立明堂学園の理事長の孫で生徒会長を務めている。少年のような外見を持ち、制服も男物だが、女の子である。彼女もプリキュアで、変身するとキュアサンシャインと名乗り、ともに砂漠の使徒と戦っている。

つぼみ「い、いつき!？」

つぼみは途端に顔が赤くなった。つぼみは当初いつきを男の子と勘違いし、心から恋愛感情を持っていた。いつきが女の子と知った時はそうとうショックを受けたが、彼女がプリキュアになってからもつぼみはいつきに特別な思いを捨てずにいた。

いつき「花に水をあげてたの、つぼみ？」

つぼみ「は、はい。い、いつまでも、きれいな花を咲かせてほしいので」

いつき「偉いなあ、つぼみは。ボク尊敬するよ」

つぼみ「そ、そんな……。尊敬なんてでて……。…」

えりか「ところでいつき、今私たちを呼んだじゃん?なんか話でもあるの?」

頭から煙が出ているつぼみを見てられなくなったのか、えりかが口をはさんだ。

いつき「ん?ああそうそう。実はふたりに見てもらいたいものがあるんだ」

つぼみ「見てもらいたいもの、ですか?」

いつき「うん。今朝、郵便受けに入っていてさ、もしかしたら知ってるんじゃないかなって思ってた」

いつきを取り出したのは一枚の招待状カードだった。表面にはワNDER・プラネット一周年記念、これ一枚で何人も入場許可しかも無料などが書いてある。

つぼみ「あれ?これ?」

えりか「これ確か……。…」

ふたりは小さく驚くとすぐさまポケットに手を入れ、すぐに出した。ふたりの手には同じカードが握られている。

いつき「ふたりにも届いていたんだ」

えりか「うん。言ってることがよく分かんなくて、最初捨てようと思ったんだけどさ、どーも気になっちゃって」

つぼみ「でも不思議ですね。三人の家に届くなんて」

「あなただけじゃないわよ」

三人の後ろから声が聞こえ、彼女たちは振り返った。すると、そこには高校生くらいの、長髪で、メガネをかけた少女が立っていた。月影ゆりである。彼女もキュアムーンライトと名を持つプリキュアで、つばみたちよりも先に砂漠の使徒と戦っていた。一度敗北し、変身できなくなってしまうが、つばみたちのおかげでようやく復活できたのである。

つぼみ「ゆりさん……」

ゆり「あなたが持っているそのカード、私にも届いたの」

ゆりは静かに右手を上げ、つぼみたちに見せた。手のひらには全く同じカードがあつた。

つぼみ「ゆりさんにも来てたなんて・・・」

えりか「うーん、謎だ。こりや謎だよ」

いつき「そもそも何なんだろう、ワンダー・プラネットって？」

シプレ・コフレ・ポプリ「ワンダー・プラネットでしゅか！？見せてくださいですう」

突然、今まで遊んでいたシプレ、コフレ、ポプリが目を輝かせて飛び込んできた。

つばみ、いつき、ゆりはとっさによけたが、えりかはよけきれず、妖精たちのアタックを顔に受けて倒れた。シプレ、コフレ、ポプリはえりかの顔の上で手足をバタバタ動かして、はしゃいだ。

シプレ・コフレ・ポプリ「ワンダー・プラネットに行ってみたく  
すう。行きたいですう。行きたいですう。行きたいですう。行き  
たい！行きたい！行きたい！行きたい！行きたい！行きたい！行き  
たい！行きたーい！！」

えりか「あゝっ、もう！うるさああああああいっつつっ！！」

えりかが顔を上げて最大級の怒鳴り声を浴びせたため、妖精たちはオバケを見るよりもびっくりして一目散に飛んで逃げた。

えりか「全く。何なのよ、あんたたちは！？いきなり人の顔にぶつ

かって来て」

つぼみ「シプレ、何か知ってるんですか？このワンダー・プラネットについて」

つぼみが尋ねると、妖精を代表してシプレがつぼみたちの前に降りてきた。

シプレ「ワンダー・プラネットというのは、宇宙の中に存在する遊園地なんです。星そのものがいろんなアトラクションで埋まっていて、行った人が言うには一日じゃとても遊び足りないらしいんです。ワンダー・プラネットは周囲にシールドが張られていて一度宇宙に出てしまうと見えなくなっちゃうらしくて、見つけるのはとっても大変と聞いてるです」

えりか「へえ」。宇宙にある遊園地か。なんだかすっごく面白そう」

シプレ「だから、シプレたちみたいな妖精にはとても簡単には行けない、でも行ってみたい場所なんです」

えりか「簡単には行けない・・・か。そうとう楽しいんだろなあ。ねえ、つぼみ、いつき。行ってみない？その星」

つぼみ「ええーっ！？えりか、マジですかあーっ」

えりか「マジもマジ。大マジだよ。だってこれ一枚でタダで入れるうえに何人もOKなんだよ。それがなんの苦労もなく手に入れられたんだから、拾った宝くじで一億円当てたようなもんじゃん」

いつき「（それ法律違反だよ）いや、そもそもそれがおかしいんじゃないかな。一周年の記念だからって、無料に何人でも来ていいなんてあまりにも優遇が良すぎるんじゃない？」

えりか「なーに言ってるの、いつき！逆だよ逆。記念だからこそ、こんなにもサービスが良いんじゃない。これはズバリ、めちゃくちゃ楽しんでもらうことで、テーマパークの人気をもっと盛り上げてこれからもじゃんじゃんお客さんに来てもらおうって魂胆だよ。行こうよいつき。こんなチャンス、もう人生に二度と来ないよ。集合場所も近いし、夏休みだし、ファッション部のみんなも誘うからさ

」。ね、ね、ね、行こうよ」

いつき「わ、分かった。行く。行くよ」

目から炎を出して演説するえりかの気迫に負け、いつきは承諾した。

つぼみ「でもえりか、宇宙にあるんですよ。危なくないんでしょうか？」

えりか「つぼみもなーに言っちゃってんの！？宇宙にあるからこそ行くんじゃない。宇宙に行けるチャンスだって、もうこの先ないかもしれないんだよ。つぼみ、その心配グセ少し治さないとこれから先、損な人生を送るよ」

つぼみ「！・・・そうなんですか？」

えりか「そーだよ。だからさ、これを機会にそのクセ治そうよ。ね？」

つぼみ「は・・・はい！」

いつき「（えりかって、本当に人を取り込むのがうまいよね。もし生徒会長に立候補したら、とんでもない強敵になるかも）」

えりか「よし、決まり！あ、そうだ。ゆりさんも一緒に行きませんか？」

えりかはゆりにも声をかけたがゆりはツンと無表情で答えた。

ゆり「悪いけど、私は行かないわ。そもそも、もう遊園地に行く年頃でもないしね」

ゆりは三人に背を向け、植物園を出ようとした。

えりか「そっか。残念だなー。せつかくも姉も誘うつもりだったのに」

その途端、ぴたりとゆりの足が止まった。

ゆり「・・・ももか、行くの？」

えりか「え？まあ、もも姉ってこんなのが結構好きだからさ、たとえ宇宙にあらうが地底にあらうが絶対行きたいっておもっよ」

ゆり「・・・行くわ」

ゆりはそう言うと、三人にの方へ顔を戻した。なぜか頬がほんの

りと赤くなっている。

つぼみ「え？ゆりさん、今・・・」

ゆり「勘違いしないで。遊ぶために行くんじゃないわ。あなたたちみたいな子たちが何人も行くんだったら、ももかが保護者として大変だと思っし、もしかしたらももかがアトラクションで遊べなくなるかもしれないから、手伝ってあげるのよ。そうすれば、ももかだって助かるし、少しは効率良くなるじゃない？分かるかしら？」

つぼみ「は、はあ（ゆりさんって、ももかさんが関わると声に熱が入ってるような気がします、気のせいなんでしょうか？）」

えりか「（やっぱり。前から薄々気づいていたけど、だんだんゆりさんの釣り方が見えてきた）」

いつき「（言っていることは正論だけど、この人が変に見えてくる気がするの、ボクのほうがおかしいのかな）」

えりか「まあ、とにかく、これで決まりだね。じゃあ8月1日はみんな8時まで・・・」

????「おや。みんなお揃いで珍しいわね」

そう言って、つぼみの祖母・花咲薫子は植物園に入ってきた。彼女はここの園長であり、かつて最強と謳われたプリキュア・キュアフラワーで、砂漠の使徒の襲撃をことくはね返した経歴も持つのだ。

薫子「なんだか楽しそうだったわね。おばあちゃんには内緒の話？」

つぼみ「え？ううん、おばあちゃん、実はね・・・」

つぼみは薫子に全てを話した。話し終わると、薫子は一言「へえ・・・」と言った。

薫子「そう。そんなのがあるんだったら、確かに遊びに行きたくなるわねえ・・・」

えりか「だったら、つぼみのおばあちゃんも一緒に行こうよ」

薫子「ううん。でも私も年だからねえ。それにここの植物たちをお世話しなくちゃいけないしね。みんなで行ってらっしゃい。ゆりちゃん、つぼみたちをお願いね」

ゆり「あ、はい」

薫子「つぼみ、ちょっとだけいいかしら？」

つぼみ「何？おばあちゃん？」

薫子がつぼみに近づくとぽんと彼女の肩に手を置いた。そして少しだけ厳しい表情を見せた。

薫子「砂漠の使徒との戦いはこれからもきつと激しさを増すわ。きつとつぼみたちの至る所に姿を現すとも思う。もちろん最後まであきらめずに戦うのもいいけど、もし危ないと思ったら、すぐに逃げて安全な場所へ避難しなさい。決して無茶はしないで。いいわね？」

つぼみ「は、はい。分かりましたおばあちゃん」

薫子「みんなもよ」

薫子是他の三人と妖精たちにも言うつと、みんな「は、はいっ」と気迫に押されたかのように答えた。

全員の返答を確認すると、薫子は「ならよし」といつもの優しい笑顔に戻った。

しかし、当日おばあちゃんの言いつけをもう破ってしまうとはつぼみたちは夢にも思っていなかった。

## 招待状（ハートキャッチside）（後書き）

歴代プリキュアの中で、えりかが一番台詞が書きやすい。次回は全員集合！



## 宇宙船

8月1日を迎え、つぼみたちは9時すぎに家を出た。駅で待ち合わせした後は電車に乗り込み、指定された集合場所へと向かう。しかし、途中乗り換える時ラッシュに巻き込まれ、ファッション部の一人が行方不明になったため、ようやく見つけ出して指定場所の最寄の駅に到着した時には時間まであと二十分と迫っていた。

えりか「みんな急いで。置いてかれちゃうよ」

つぼみ「えりか、待つてくださいよ」

先頭をえりかが走り、そのあとをいつき、つぼみ、ファッション部の仲間たち、ももか、ゆりと続く。

そして、遂に指定場所に到着し、えりかは大きく「着いたあゝっ！」と叫んだ。しかし、指定場所には先客が何人も来ていた。

つぼみ「結構人がいますね」

つぼみが何人か顔を見ていると、ふとその中に多くの知った顔を見つけ、声をあげた。

つぼみ「ああーっ！！あなたがたは！？」

祈里「つぼみちゃん！？」

咲「なんでみんなここに？まさか・・・」

りん「ええっ！あんたたちにも招待状が届いたの！？」

つぼみたちが会ったのは歴代のプリキュアたちだった。フェアリーパークでの激戦で初めて出会い、いつきとゆりが仲間になってからもふたりを連れて時折会っていたのだが、最近はそうでもなかったのも、こうしてまた会うのはものすごい久しぶりであった。

いつき「みんなにもワンダー・プラネットから招待状が来たの？」

ひかり「はい。だからみんなとっても驚いていたんです」

のぞみ「みんなに来るなんて、ほんと偶然って怖いねー」

ラブ「そうだよー」

りん「いやいや、偶然ってレベルを超えていますって、これ」

かれん「どうしてプリキュアばかり・・・？」

美希「やつぱり、怪しい」

舞「というより・・・」

ほのか「だまされたんじゃないかな」

なぎさ「だっもっ！こんなところからどーやって宇宙に行くのよおおっ！！」

なぎさは海に向かって大きく吠えた。招待状に書かれ、みんながいるその場所は港湾近辺にある防波堤だったのだ。

みのり「薫おねえさん、宇宙船はー？」

咲の妹・みのりがキョロキョロと周囲を見回し、後ろにいる赤い短髪の少女と青い長髪の少女を振り返った。ふたりの名は霧生満、霧生薫という。ふたりはかつて咲と舞が戦ったダークフォールの一員だったが、和解し、ともに戦ったかけがえのない親友となっていた。

薫「大丈夫、みのりちゃん。もうすぐ出てくると思うから」

薫がひざを折り曲げてみのりに話すと、満は咲に声をかけた。

満「ねえ咲。この場所で合ってるの？間違えたんじゃない？」

咲「そんなはずないと思うけど、おっかしいな」

咲が首をかしげる一方でくるみはある人物と会い、険しい顔で睨みつけていた。

くるみ「ちよっと、なんであなたもここにいるのよ？」

ブンビー「な、なんでとはなんだ。私にも招待状が届いたから来たんだぞ」

くるみ「それ、本当は拾ったんじゃないの？」

ブンビー「・・・な、な、な、なんてことを言うんだキミは！！」

図星だったので、ブンビーは汗だくで叫んだ。ブンビーが四苦八苦している一方でせつなが長髪の青年とサングラスをかけた青年と話していた。ふたりの青年の名は南瞬と西隼人。ふたりともせつなと同じようにかつてはラビリンスの一員で、サウラーとウエスターという名でキュアピーチたちと戦ったが、今は改心し、ラビリ

ンスの復興に力を入れている。

せつな「ねえ瞬。本当にこの場所で合っているの？」

瞬「ああ。カードに書かれた地名と番地からみてここで間違いないはずだが」

せつな「隼人ならともかく瞬が言うなら間違いないはずよね」

隼人「そりやどどういう意味だ!？」

せつな「そのままの意味に決まってるでしょ・・・って、隼人は何してるの？」

隼人「あ?見て分かんか?ヒマだから釣りしてるんだ。せつかく来たのにこれじゃあ釣りするしかないだろう」

せつな「いや、そういうことじゃなくて・・・」

その時、隼人の持つ釣竿がピクツと糸を引いた。

隼人「む?かかったぞ」

隼人は自慢の筋肉を使って竿を上げたが、獲物は海面に姿を現さない。

隼人「大物だ!だが、絶対釣り上げてみせるぞ。うおおおおお おおおーつつつ!!!」

隼人がフルパワーで竿を上げ、遂に獲物がザバーツと海面に姿を現した。確かに大物だった。しかし、魚ではなかった。

隼人「うおっ!?な、なんだこれは!？」

隼人が思わずのぞけた瞬間、糸はブチツと切れた。しかし、獲物は逃げず、その大きな姿を人々に見せた。

海中から登場したのは宇宙船だった。しかも一隻だけでなく、二隻三隻と海中から姿を現していく。

鷹に似たシャープな形と透き通るような色で塗装されたボディ。

人々は、宇宙船の大きさと美しさにしばし見惚れ、声が出なかった。なぎさ「でつか・・・」

ようやくなぎさが声を出すと、ボディの側面から扉が開き、そこから陸橋が伸びてきて、宇宙船と防波堤を繋いだ。そして。

宇宙船「ミナサマ、ヨウコソイラッシャイマシタ。ワタクシガミナ

サマヲワンダー・プラネットへオツレシマス」

うらら「宇宙船がしゃべりました！」

宇宙船「ハイ。ワタクシノボディニハ、ジンコーチノウガトーサイ  
サレテイマス。ワタクシハスペースホークA。<sup>エース</sup>ウシロハ」<sup>ジャッククレーン</sup>とQデス。  
サア、ミナサマドーゾオノリクダサイ」

えりか「しゃべる宇宙船なんてチョー面白い！みんな入ろうよ」

えりかの言葉にみんなは三隻の宇宙船へと乗り込んだ。船内には階段があり、二階へと続いていた。二階へ上がると二十以上の席が並び、天井にはテレビがついていて、スペースホークがアニメのキヤラクターとなって出発時にはシートベルトを締めるお願いを呼びかけたり、緊急事態が起きた場合の対処法を紹介したりする映像が流されていた。プリキュアと妖精たちはそこに座ることになった。チヨッピ「あれ？ナッツそれは何チヨピ？」

チヨッピはナッツが背負っているリュックサックを指差した。

ナッツ「ナツ。これはナッツが作ったギャラクシーミラクルライトナツ。このボタンを押すと、奇跡の星が出てくるナツ」

ナッツがリュックサックを開けて一本のミラクルライトを取り出して説明し、ボタンを押して軽く横に振ると色とりどりの星々が出てきた。妖精たちは思わず感嘆の声をあげた。

フープ「きれいフプ。フープも振ってみたいフプ」

ナッツ「もうすぐ出発するから、今はダメナツ。ワンダー・プラネットに着いてから渡すナツ」

タルト「でもなんでそんなもん、持ってきたんや？」

ナッツ「フェアリーパークのことを覚えてるナツ？あの時、みんなダークフォールやドックゾーンの連中に襲われて危ない目に遭ったナツ。だから、またあいつらが現れてもみんなの身を守るように作ったんだナツ」

コフレ「それは凄いですう。それがあれば、もうあいつらなんか怖くなんかないですう」

つぼみ「みんな静かに。もうすぐ発射しますよ。早くシートベルト

をつけて」

つばみが注意すると、妖精たちは「はい」と返事してそれぞれ座席に着いた。

宇宙船「ソレデハ、マモナクハツシャシマス。カイテキナウチュウノタビヲ、ドーゾオタノシミクダサイ」

キイイインツと全員を乗せた三隻の宇宙船から波動が放たれ、海面が大きく揺らぐ。

防波堤を繋いでいた陸橋も戻され、扉がゆっくりと閉まり始めた。完全に閉まる瞬間、どこからか小さな白い光が猛スピードで飛んできて、ギリギリのところまで宇宙船の中に飛び込んだ。

やがて海面からゆっくりと離れると、宇宙船は機体を空に向けて傾き、次の瞬間、光速で空を突き抜け・・・消えた。

## 宇宙船（後書き）

全員集合だと書きやすいな。なんでだろう。次はワンダー・プラネット到着です。

## ワンダー・プラネット（前書き）

到着。そして彼女の登場です。

## ワンダー・プラネット

ラブ「うつわあゝ。見てみて、もう地球が見えてきたよ！」

のぞみ「すごいすごい！りんちゃん、星をこーんなに近くで見たの、私初めて！」

りん「そりや宇宙に来てるんだから、当たり前でしょ」

なぎさ「ねえねえ、ほのか。あのわっかがある星、土星だよね？」

ほのか「そうね。土星の環はね、単純な円盤じゃなくてね、本当は細く薄い環が何重も集まっているの。しかもその環は数センチメートルから数メートルのサイズの氷の粒でできていて、探査機ボイジャーとカッシーニの観測によって・・・」

「蒨蓄女王」と呼ばれるほのかの解説が始まった一方で、妖精たちも初めての宇宙に興奮していた。

ポルン「すごいポポ。きれいポポ」

フラッピ「ほんとラピ。手が届きそうラピ」

シロップ「シロップもこんなにきれいなところを飛んだことはないロポ。飛んでみたくなるロポ」

妖精たちが感動している一方で、かれんはなにやら難しい表情を  
して考え込んでいた。

こまち「かれん、どうしたの？」

かれん「不思議じゃない？宇宙に出たら、船内は無重力になるのよ。シートベルトをしているとはいえ、体が少しも軽く感じないわ」

宇宙船「オコタエシマス」

天井のテレビに再びアニメキャラのスペースホークが現れた。

宇宙船「ヒトノカラダハ、ムジュウリヨクタイケンスルト、カラダササエルキンニクトホネガスグニオトロエ、チジヨウニオリタトタン、スグタテナクナルホド、カラダガオモクカンジルヨウニナルノデス。ソノタメ、オキヤクサマニフジュウヲカケナイヨウ、カイギヨウシャハワタシノボディニ、ジュウリヨクアンテイカソウチ



モトーサイシマシタ。コノソウチハカンタンニイウト、ジンコージ  
ユウリヨクヲハツセイサセ、ウチユウクウカンデモ、センナイガ、  
ムジユウリヨクニナラナイヨウニシテアルノデス」

咲「へー。そうなんだ。でも、ちよつと残念だなあ。宇宙に来たん  
なら、無重力体験したかったよ」

宇宙船「ゴアンシンヲ。ワンダー・プラネットニハ、カラダニエイ  
キヨウモアタエナイ、ムジユウリヨクタイケンアトラクションモア  
リマス」

咲「本当？よかった」

宇宙船「トコロデミナサマ、オツカレサマデシタ。マモナクワンダ  
ー・プラネットニトウチャクイタシマス」

うらら「ええっ！？もう着くんですか？」

のぞみ「ちよつ、早すぎるよ」。もう少し外を見ていたかったのに  
」

宇宙船「ソレモゴアンシンヲ。ワンダー・プラネットノシユウイヲ  
タンケンスルアトラクションモアリマスノデ」

いつき「でも、ワンダー・プラネットって、星全体がアトラクショ  
ンで埋まっているんだよね？それらしい星なんて見えないよ」

いつきが窓を覗いていると、突然窓の外が深い霧へと変わった。  
つぼみ「な、なんなんですか？この霧は？」

つぼみが驚いた次の瞬間、霧を抜け、窓の外に巨大なテーマパー  
クが目に見え込んだ。

もの凄いアトラクションの数、数、数！それに負けないくらいの  
妖精や精霊たちの姿もあり、そのあまりの広さに数ヶ月前に行った  
フェアリーパークなど公園に見えてしまうくらいだった。

三隻の宇宙船はその上空を飛ぶと、やがて速度を降ろし始めた。  
そして入場門から少し離れた広場に無事着陸した。

宇宙船「ミナサマ、タダイマゴトウチャクイタシマシタ。シートベ  
ルトヲハズシ、オキヲツケテ、オオリクダサイ」

えりか「よっしゃ、着いたー！みんな、早く行こうよ！」

ゆり「ちよつと待ちなさい」

えりかがいの一番に部屋を出ようとした時、ゆりが声をかけ、テレビのスペースホークに振り向いた。

ゆり「ここは一応惑星よ。外に出るなら、宇宙服を着る必要はないの？」

宇宙船「ゴアンシンクダサイ。ワンダー・プラネット八、ホシゼンタイニジンコーサンソガタイリヨーニ、ホウシュツサレテイマス。ソトニオリテ、オナカイツパイ、シンコキユーシテモ、ナクナリマセンヨ」

えりか「ほら。だから大丈夫だつて。早く行こうよ！」

スペースホークの説明を聞くやいなや、えりかはすぐさま部屋を出て、宇宙船を降りた。えりかの後をプリキュアたちは次々と続くなぎさが最後に降りるとみんなは「うわあっ・・・！」と声を漏らした。

入場門には何百人ものの妖精と精霊たちが列を作つて並んでいた。入場門にはゲートが十あったが、どれもぎっしりと並んでいる。くるみ「こ、これ全部最初から並ぶの？」

瞬「ふむ。この数だと、僕たちがゲートを通れるのは・・・だいたい三時間後だな」

隼人「冗談じゃない！そんなに並んでられるかつ！！」

せつな「隼人、仕方ないじゃないの！割り込むわけにはいかないでしょ」

薫「咲、舞。私たちや他のみんなはともかく、みのりちゃんはずっと我慢できないわ。なんとかできないの？」

咲「ううん。なんとかしたいけど、どーすれば・・・」

咲が困つたように言った時、一本足に車輪が付き、警備員のような格好をしたロボットがみんなに近づいてきた。

ロボット「ミナサマハ、シヨウタイジヨウヲオモチノカタガタデスカ？ヨロシケレバ、カードヲハイケンイタダケマスカ？」

咲「え？は、はい・・・」

咲がカードを渡すと、ロボットはしばしそれを眺め、すぐにニコリと笑った。

ロボット「ヨウこそ、オイデクダサイマシタ。ゲートハコチラニナリマス」

咲「え、うそ？入れるの？やった。絶好調ナリ！」

ロボットについて行つて、みんなはゲートをくぐり、テーマパーク内へ入つていった。

中に入つた瞬間、みんなは言葉を失つた。まさにそこはアトラクションの山。ジェットコースターやメリーゴーランドはもちろん、ゴーカートにフライングマシンもあれば、空中を走る機関車や一番高い場所から宇宙が見える巨大観覧車まであつた。前方には、童話のお姫様が住んでいそうなお城も遠くに見える。

つばみ「す、すごいです・・・！」

つばみが言うと、みのりが薫の手を引っ張つた。

みのり「薫おねえさん、みのりあれ行きたい！あれ乗ろうよ」

みのりが指差したのは空を走る機関車だった。みのりは機関車が行く方向に向かつて走り出す。

咲「あ、みのり。ひとりじゃ危ないよ」

咲がみのりを追いかけようとしたが、薫が制した。

薫「咲、大丈夫。みのりちゃんは私が追いかけるから」

咲「薫？でも・・・」

満「咲、私も薫について行くから安心して。咲は咲でみんなと楽しんでいきなさいよ」

咲「そう？じゃあごめんね、ふたりとも」

満と薫はみのりを追いかけていった。一方で咲のクラスメイトの星野健太も何かお気に入りを見つけたようだった。

健太「お？なんだありや？面白そーじゃねえか。おい宮迫、あれに乗るぞ。おまえも来い！」

学「え？あれつて、おもいつきり絶叫系じゃ・・・つて、わわっ！？」

健太は親友の宮迫学と安藤加代、太田優子を連れて消えた。

隼人「おい瞬。あれドーナツじゃないか？今すぐ食べに行こう！」

瞬「僕はべつに食べたくないよ・・・って、うおっ！？」

せつな「！？・・・ちよつと、瞬！隼人！」

せつなが叫んだが、隼人は瞬を連れてあつという間に見えなくなつた。

一方でゆりが顔を少し赤めながらももかに声をかけようとしていた。

ゆり「ももか？」

ももか「ん？なに？ゆり？」

ゆり「あの、もしよかったら、一緒に・・・」

ふたりで回らない？と言おうとした時、「ももかさーん！」とえりかのファッション部のみんながいつせいにももかに押し寄せてきた。

ももか「な、なに？」

るみこ「あ、あの、お願いがあるんです」

ななみ「もしよかったら、一緒に回ってくれないか？」

としこ・なおみ「私たち、ももかさんと一緒に回りたいんです！」

彼女たちがももかにそう頼む理由は、ももかがカリスマモデルとして人気を博していたからだだった。彼女はファッション部にとって憧れの的となっていた。

ももかはしばし驚いていたが、すぐにすまして「いいわよ」と答えた。

ゆり「！・・・ももか！？」

ファッション部のみんな「やったーっ！！」

ももか「じゃあ、みんな。最初はあれに乗りましょ。早い者勝ちよ。それっ！」

ももかはフライングマシンを指差し、走り出した。その後にファッション部のみんなが続く。

ゆり「ももか、まだ話が」

ももか「ごめん、ゆり。あとでねー」

ももかは途中で振り返って言ったが、すぐに見えなくなった。ゆりは小さく「ももかのばか」と呟いた。

その後ブンビーとドーナツ国王たち、なぎさの弟・亮太とクラスメイトの清水莉奈と久保田志穂、美希の弟・和希も離れ、残ったのはプリキュアと妖精たちだけになった。

えりか「ああ、こんなにあるんじゃないか迷っちゃうよ。・・・よし、決めた！まずはジェットコースターに乗ろう！つばみ、いつき、行くよ！」

つばみ「えりかー、前見ないで走ると危ないですよ！」

つばみが注意した途端、どーんと、えりかは誰かにぶつかり、ひっくり返った。

つばみ「えりか！」

えりか「あたたた・・・ちよつと、どこ見て歩い・・・てんの・・・」

自分の不注意を棚に上げてえりかが文句を言いながら相手を見た瞬間、彼女は絶句した。

えりかがぶつかった相手は年上の、長い黒髪の少女だった。年齢はゆりと同じ十七くらいで、胸にリボンの付いた漆黒の制服を着ている。彼女の黒い瞳が何もかも見透かされているようなオーラを放っていて、えりかは思わずゾツとし、すぐさま土下座して何回も頭を下げた。

えりか「ごめんなさい、ごめんなさい。私の不注意でした！もう気をつけますから！」

つばみ「すみません。わざとじゃないので・・・」

少女「気をつけなさい・・・」

少女はそれだけ言うと、ふたりのそばを通り過ぎようとした。が、すぐに足を止めて再びふたりに振り向いた。

少女「あなたたち、見かけない顔ね。ワンダー・プラネットは初めて？」

つぼみ「え？は、はい。来たのはよかったですけど、あまりにも  
凄すぎて、まずどこに行けばいいのかわからなくて・・・」

少女「ふうん。よければ、私が案内してもいいけど。このテーマパ  
ークのおすすめなら、知り尽くしてるし」

つぼみ「え？もしかして何回も来たことがあるんですか？」

少女「ええ。あきるくらい」

えりか「わあほんと？ラッキー。おい、みんな！このおねえさん  
がおすすを案内してくれるってー」

ラブ「えー本当？」

つぼみ「はい。この・・・ええと、すみません、お名前は？」

少女「ああ、ごめんなさいね。私の名前は・・・」

少女はプリキュアたちの前に立った。

少女「雨牙真夜よ」

## ワンダー・プラネット（後書き）

次回、取材のため、ちよつと休みます。

## 友達

あまきまや  
雨牙真夜の案内で、プリキュアたちは彼女の言うおすすめのアトラクションを次々と体験していった。

「スペースコースター」。バーチャル仮想宇宙空間を高速で降下する人気アトラクション。

つぼみとえりかがこれに挑戦した。

えりか「うつわ。すごいドキドキしてきたよ」

つぼみ「えりか、私高い所ダメなんです。降ろしてくださいよ」

つぼみが弱気で言ったが、遅かった。コースターは発車し、数分後に勢いよく降下した。

えりか「ひゃっほーっ！」

つぼみ「ひえひえいややややややつつっ!!」

えりかは両手を上げて喜んだが、つぼみは目から涙を流してわけの分からない悲鳴をあげていた。乗車場所にに戻ってきた時にはつぼみは目をぐるぐる回していた。

「ドラゴンワールド」。恐竜の世界を翼竜ロボットで空を飛び、上空から見下ろすアドベンチャー・アトラクションだ。

これにはなぎさ、ほのか、ひかりの三人が乗り込んだ。

なぎさ「見てみて、ほのか、ひかり。トリケラトプスの群れだよ」

ほのか「本当ね。本物みたいだわ。ロボットとは思えない」

なぎさ「もう少し低い所から見てみよ。それっ」

なぎさは急降下して、トリケラトプスの群れを近くで観察した。

ほのか「なぎさ、そんなに近くで見たら、危ないわよ」

なぎさ「へーきへーき。ほのかとひかりもおいでよ。ほら恐竜がこんなに近くに……」

ひかり「!……なぎささんっ、前、前っ!!」



ひかりの声になぎさが前を向いた途端、ティラノサウルスの巨大な口が彼女に迫った。

なぎさ「うわわわわわっ！」

なぎさは急いで急上昇し、ティラノの口をギリギリかわした。

なぎさ「危なかったあゝ・・・」

なぎさは額の汗をぬぐい、「ほおっ」と息を吐いた。

ホラー・アドベンチャー「墓場星」。かつては高度な文明が栄えていた惑星だったが、戦争によって滅亡してしまい、その犠牲になった者たちが今も漂っているといわくつきのオバケ屋敷だ。参加者はふたり乗りのトロツコに乗って惑星を一周する。

これには咲と舞が挑んだ。

咲「・・・ねえ舞、やっぱり戻ろうか？」

舞「もう発車したわよ。戻れないわ」

咲「そうだけど、あゝ、なんで私こんなのに入ろうって言ったんだろ？」

舞「すぐに終わるわよ」

舞が言ったとき、すぐそばの十字架が刺さった地面の下から「ぐわあーっ」とゾンビ型のロボットが現れた。ふたりは「きゃーっ！」と悲鳴をあげてお互いに抱き合ったが、咲は本気で怯えているに比べ、舞はなぜか彼女と抱き合えたことが嬉しいと言うかのように笑っていた。

「リトル・スターウォーズ」。戦闘機型宇宙船に乗り、バーチャル仮想宇宙空間で敵の戦艦と戦うシュミレーションゲーム・アトラクション。

幼稚園児でも簡単にクリアできるレベル1から超難関の25まであるようだ。

これにはプリキュア5のメンバーが体験したが、りとかれん以外全員早くもゲームオーバーし、仕方なく近くの屋台のテーブルに座り、ジュースを飲みながらふたりを待っていた。ちなみに屋台

の商品も招待状のカードを見せたら、無料でくれた。本当にすごいサービスだ。

くるみ「もう本当に口惜しいわ。レベル7で負けちゃったんだから」  
うらら「え？くるみさん、レベル7まで行っただんですか？私はレベル5で負けちゃいました」

こまち「私も。レベルが上がることに難しくなるんですもの」

くるみ「でも、初体験で5まで行けたらたいしたものだね。ま、私にはとても及ばないけど。・・・で、のぞみは？どこまで行っただの？」

くるみが尋ねると、のぞみはギクツとなった。そしてちゅうつとジュースを飲み干すと、小さく答えた。

のぞみ「レベル1です・・・」

くるみ「はあっ！？幼稚園児でも簡単にクリアできるレベルをクリアできなかったって言うの？」

のぞみ「だってだって、ボタンが多すぎてどれがどれだかぜんぜん分かんなかったんだもんっ！」

逆ギレしたのぞみに、三人は彼女らしいといえば彼女らしいと思いながらも、やはり少々あきれずにはいらなかった。その時、ようやくりんとかれんがアトラクションから帰ってきた。

りん「お待たせ。あゝでも、惜しかったなあ。あと少しでボス倒せたのに」

かれん「私もよ。でも、レベル22まで行っただのは、最高記録だってみんな驚いてたわ」

のぞみ「うらら・こまち・くるみ「レ、レベル22!？」」

四人は驚いた。最終レベルまであと一歩というところだ。

うらら「さすが・・・としか言えませんか」

こまち「ふたりとも凄すぎるわ」

くるみ「本当。さすがの私もふたりには敵わないわ」

のぞみ「ほんと、ふたりが組んだら、最強コンビだよ」

四人がじつとりんとかれんをみつめると、ふたりは「えっ、なに

なに？」と不思議そうな顔をした。

一番高い所から宇宙が見えると言われる超巨大観覧車「メガ・マウンテン」。

祈里、せつな、いつきが乗り、ようやくその一番高い場所に来た時、三人は歓声をあげた。

祈里「見てみて、せつなちゃん、いつきちゃん！あの遠くにあるの、地球よね？」

せつな「ええ。なんて美しいの」

いつき「こんなに星が近くに見えるなんて、ボク感動だよ」

三人は地上に降りた後も感動していて、しばらく声が一言も出なかった。

銀河をプラネタリウムのように天井いっぱいスクリーンに映し出して、星座の伝説をCGを使って解説する「スター・レジェンド・シアター」。ちなみにCGは3Dで表現され、裸眼でも飛び出してくるように見える仕組みだ。

ラブと美希はここに来、天井に映った銀河を見ながら、解説を聞いていた。オリオン座の説明のところでもそのオリオンが剣を観客に向かって振り下ろしてきた時、ラブがあわてふためいた。

ラブ「うわあっ！ミキたん、剣が飛び出してきたよ！」

美希「当たり前でしょ。ここ3Dなんだから」

ラブ「あ、そっか」

しかし、次にサソリ座がハサミを振り下ろしてきた時には3Dと分かっていても、あまりの迫力にふたりともお互い抱きあがって震えあがるほどであった。

妖精たちも全員無重力体験アトラクション「フワフワ・パラダイス」に夢中になっていた。

シロップ「シロップはもともと飛べるから、体がフワフワ浮くのは

なんか変な感じだロブ」

フラッピ「でも、面白いラピ！」

チヨッピ「ほんとチヨッピー！」

シフォン「プリプー！」

もう、かれこれ一時間も遊んでいる。

一方でゆりはどのアトラクションにも入らず、屋台からコーヒーを無料でもらっていた。どこか座る場所はないかと探していると、すぐ目の前にベンチがあった。だが、そこにはもう誰かが座っていた。

雨牙真夜だった。プリキュアたちにおすすめだというアトラクションを次々と案内したが、彼女もゆり同様にどのアトラクションにも入らなかった。ストローを口にくわえ、ちゅうちゅうと飲み物を飲んでいる彼女がゆりの目に印象に映った。ゆりは彼女に近づくと、声をかけた。

ゆり「隣、座ってもいいかしら？」

真夜「どうぞ」

真夜はちらとだけゆりを見ると、答えた。ゆりは彼女の隣に腰を降ろした。

ゆり「ねえ、私もだけど、雨牙さんも全然アトラクションに入ろうとしないわね。どうしてなの？」

真夜「さっき言ったじゃないですか。私はあきるくらいここに来てるんです。今さら、もう遊ぶ気になれませんかよ」

ゆり「・・・それ最初に聞いたときから気になっていたんだけど、『あきるくらい来ている』って、どういうこと？ワンダー・プラネットはそう簡単には来れない場所じゃなかったかしら？」

真夜「ええ、そうですよ。ですが、実は私、ここの開業者の関係者なんです」

ゆり「え？」

真夜「つまり、開業者とは知り合いなんですよ。だからワンダー・

プラネットのことは開業前から知り尽くしています。私にとってこのアトラクションの数々は庭みたいなものです。なので、私はここをいつでも自由に行き来できるんですよ。納得してもらえましたか？」

ゆり「え．．．ええ」

真夜から説明を聞いても、ゆりは腑に落ちない気がしたが、もし真夜が本当に開業者と知り合いであれば、彼女がワンダー・プラネットを「あきるくらい」と言っても不思議ではないとも思った。ただ、ゆりは次に真夜にこう聞いた。

ゆり「だから、今日はそんなに笑えないの？」

真夜「！．．．」

真夜は初めてゆりに顔を向けた。

ゆり「気を悪くしたら、ごめんなさい。でも、最初から会った時からあなた全然笑わなくて。開業に少しだけ関わったのなら、こんなにお客さんが来てるのだから、ちょっとは笑ってもいいんじゃないかしら？」

真夜「．．．．．」

ゆり「何か笑えないわけがあるの？」

真夜「．．．．．」

ゆり「言いたくないなら、無理に聞かないけれど」

真夜「．．．．．」

ゆり「あなた、昔の私に似ているわ」

真夜「．．．は？」

真夜の反応を見て、ゆりは少しだけ微笑んだ。

ゆり「私も三年前にお父さんが行方不明になったうえに心がひどく傷ついて、心から笑えなくなったの。でも、あの子たちに会ってから．．．」

ゆりは次のアトラクションに入ろうとしているつばみとえりかに目を向けた。

ゆり「あの子たちに会ってから、少しずつだけど、私も心から笑え

るようになった。あの子たち、まだ子供で甘い考えを持っているけれど・・・一緒にいると、なんだか元気が湧いてくる気がするの。それにとっても楽しいって感じることも。少しだけうるさいと思うこともあるけど・・・」

ゆりは再び、真夜に顔を戻した。

ゆり「私はあの子たちのこと、嫌いじゃないわ。三つも年下だけど、大切な友達と思っている」

真夜「そう」

ゆり「雨牙さんは、友達はいる？」

真夜「友達？」

その言葉に真夜の記憶が呼び起こされた。中東の国にある貧しい村。その村の家は風雨をしのげず、医療も満足に行き届いていなかった。しかし、そこで暮らす人々は希望を捨てず、今日を生きていた。とりわけ、純真無垢な子供たちはサッカーが大好きで、よく真夜と会っては英語でサッカーしようと言ってきていた。子供たちとサッカーをした楽しい時間。彼らは真夜よりも年下だったが、友達に間違いなかった。

真夜「ええ。『いた』わ」

ゆり「そう。今日、ここには・・・」

真夜「ここにはいない」

ゆり「そうなの。残念ね」

ゆりがスプーンでコーヒーを少しかき回した時、ふたりを呼ぶ声が聞こえた。声がした方に振り向くと、つばみとえりかがこっちに走ってくる。

えりか「ゆりさん、真夜さん、一緒にアトラクションに乗りませんか？」

ゆり「え？私はべつに・・・」

真夜「私も」

えりか「なーに言ってるんですか！？せっかく来たのに一つも遊ばないなんて、もったいなさすぎるよ！さっき、すつごく面白そうな

の見たんで、一緒に行きましょーよ。ねえ、つぼみ？」

つぼみ「はい。というわけで、おふたりとも、ちよつと失礼します」  
そう言つて、つぼみはゆりの手を、えりかは真夜の手を取つた。

ふたりが「え？」と言つた瞬間、彼女たちはあつという間に強い力で手を引つ張られ、ふたりに連れていかれた。

四人がまず最初に乗つたのは「スライング・カート」。自動操縦で動くレースカーに乗り、カーブの多いコースを走るアトラクションだ。えりかと真夜は白いレースカーに、つぼみとゆりは黒いレースカーにそれぞれ乗り込んだ。

エンジンがかかり、高速のスピードでカーが走り始め、時々スピシしながらコースを進んでいく。

えりか「ひゅーっ！ たつのしいっ！」

つぼみ「怖いです！ 降ろしてくださいー！」

続いて四人が乗つたのは空中庭園にあるコーヒーカップ「コーヒーカップ・イン・スカイガーデン」。一つに四人が一気に乗り、これなら大丈夫だとつぼみは思ったが、えりかが「おらおら回れ回れーッ！」とハンドルを回しまくつたので、カップは高速で回転し、降りる頃にはつぼみとえりかは完全に目を回し、ゆりと真夜もすぐには立てなかった。

続いては透明コースターを走るジェットコースター「インビジブル・コースター」。コースターが全然見えないので、どこを走るのがも分からない二重の恐怖を味わう大人気アトラクションだ。しかし、高い所が大の苦手なつぼみはやっぱり最後には失神してしまつた。

その後も次々と四人はアトラクションに入り、楽しんだ。しかし、あちこちと走り回つたので、真夜の体がとうとう悲鳴をあげた。

真夜「はあっ、はあっ。ぜっ、ぜっ。待つ……で。少し……ぜっ……休ま……せて」

えりか「え？ あ、ごめんなさい、真夜さん」

えりかが手を放すと、真夜はしばらく肩で息をした。

真夜「ねえ、ひとつ聞いていいかしら？」

つぼみ「えりか「？・・・はい」

真夜「どうして私まで連れて行つたの？」

すると、つぼみとえりかは顔を見合わせ、くすつと笑った。

えりか「それはね、私たちが真夜さんと友達になりたいからだよ」

真夜「！・・・は？友達？」

つぼみ「そうです。私たち、真夜さんの顔を見て、凄くつまらなさそうに見えたんです。いくら何回も来ているとはいえ、こんなにたくさん妖精さんたちが笑顔になっている中で一人だけそういう顔をするのは少し寂しい気がしまして・・・」

えりか「それでさ、誘ってみようと思ったんだよね。みんなで遊べば、一人より何倍も楽しく感じられるから、きつといいよー」思っている私たちを助けてくれたし、すごくいいおすすめを教えてください、困れたし、いいひとなんだなってだんだん思えてきて」

つぼみ「私のおばあちゃんも言っていました。『一回会って話をしただけならただの他人、でも一緒に遊んだのならもう友達だ』って。

私たち、真夜さんと友達になりたいんです。真夜さん・・・」

つぼみは真夜の両手を握った。

つぼみ「私たちはもう、友達ですよね・・・？」

真夜「！・・・」

真夜は目を大きく開け、驚きの表情を見せた。しかし、すぐにつぼみから目をそらし、バツと彼女から両手を離れた。

つぼみ「？・・・真夜さん？」

真夜「ごめんなさい。私、また飲み物を持ってくる」

そう言つと、彼女は三人から離れ、すぐに見えなくなった。

えりか「？・・・なんか逃げたって感じだね？なんか気に障ったことでも言つたかな？」

つぼみ「えりかがあちこち連れて回したからじゃないですか？」



えりか「！・・・あははは。確かにちよーつとやりすぎたかも」  
そんなふたりのやり取りを見て、ゆりは小さく微笑んだ。

屋台で飲み物をもらおうと向かっていた真夜は途中でポケットの中の携帯が鳴っていることに気づいた。取り出して開け、耳に当てると「俺だ」と図太い声が聞こえ、彼女の目は瞬時に鋭くなった。声「どうだ？19人のプリキュアと会った感想は？」

真夜「一部勘が鋭いのもいますが、ほとんどが本当にプリキュアかと疑いたくなるくらい、のんきな連中ばかりです」

声「ほお、面白いな。俺もだいたいやつらのデータを集めた。そろそろ計画を動かす。おまえは俺のもとへ戻れ」

真夜「はい」

真夜は携帯を閉じると、飲み物をもらうはずだった屋台のそばを通り抜け、消えた。

プリキュアと妖精たちはそれぞれのアトラクションから戻って来た。た。

ラブ「ただいまー。あれ？雨牙さんは？」

つぼみ「それが飲み物をもらってくるって言ったきり、戻ってきてないんです。もう三十分です」

こまち「もしかしたら、道に迷ったんじゃないかしら？」

のぞみ「え？じゃあ迷子？そりゃ大変だ。従業員さんに知らせなきゃ」

りん「って、走り出したら、のぞみが迷子になるでしょー！」

ゆり「おかしいわね？彼女にとってここは庭みたいなものだから、道に迷うなんてことがあるとは思えないけど」

と、全員が真夜の行方を心配し始めたその時だ。

ヒュゥ・・・・・・ドン！ドンドンッ！

突然、上空に巨大な花火が打ちあがった。空がまだ青いため、輝きは発揮されていなかったが、それでもきれいなのは変わりなかった。

つぼみ「わあ、きれいです」

つぼみが一番に感想を漏らした次の瞬間、異変は起こった。

空中で飛び散り、本来ならすぐに消えるはずの火花が消えず、次々とそのいくつかが地上を直撃したのだ。そのうちの一つはプリキユアたちの目の前に撃墜し、炎と黒煙を發した。

つぼみ「な、なんなんですかー！？」

メップル「邪悪な気配がするメポ！」

その時、黒煙の中から何かが動いた。



## 襲撃（前書き）

ごめんなさい。長いので、戦闘は次にします。

## 襲撃

プリキュアたちが搭乗した三隻の宇宙船は全員を降ろした今はエンジン停止し、しばしの休憩に入っていた。

そのうちの一隻、スペースホークAのボディ<sup>エース</sup>にある扉がガタガタと小刻みに動いている。やがてわずかに扉が開き、小さな隙間から白い小さな光がころつと転がり出た。

白い光「はあ、はあ、やつと出られた口モ」

外に転がり出た途端、光は徐々に弱くなり、完全に消えたと思つたら、その中から白い子犬に似た外見の妖精が姿を現した。妖精は四つん這いになってしばらく呼吸を繰り返していたが、すぐに顔が青くなり、あわてて口を押さえた。

妖精「うつぶ。気持ち悪い口モ。やつぱり隠れて宇宙船の中をやり過ぎしたのは無茶だった口モ・・・」

白い妖精はしばらく口を押さえ、なんとか気を紛らわせようとその場を右往左往していたが、すぐに限界が来てパタツとまた四つん這いの状態で倒れた。しかし、次の瞬間、彼の耳が何かを察知してピーンと、直角に立ち、妖精はハツとなった表情をした。

妖精「これは・・・マヤちゃんの！」

妖精はテーマパークの方向に目を向け、大きく見開いた。

テーマパークは至る所に黒煙と炎が立ち、来場者の悲鳴も聞こえていた。外に出たばかりの彼でも、これはただ事ではないと直感できた。

妖精「うつぶ。何があったのか分からないし、まだ気持ち悪いけれど、あそこにマヤちゃんがいる口モ。行かなくちゃ口モ・・・」

妖精は立ち上がると、背中にある蝶のような羽を動かし、弱々しく飛びながらも、テーマパークへと向かった・・・。

ワンダー・プラネットはどこもここもパニックとなっていた。火

花はテーマパークの名物でもある超巨大観覧車「メガ・マウンテン」も直撃し、観覧車は炎に包まれながら倒壊し、一気に二十以上のアトラクションを下敷きにした。入場した妖精たち、まだゲートで並んでいた妖精たちもすぐさま異変に気づき、悲鳴をあげて逃げ惑う。その中には、当然プリキュアたちとともにワンダー・プラネットに來た仲間たちもいた。

警備ロボット「ミナサマ、コチラへヒナンシテクダサイ。アワテナイデ・・・グワッ！」

妖精たちを避難誘導していた警備員ロボットの頭が突如爆発し、倒れた。それを間近で見てしまったみのりは恐怖のあまり、薫に抱きついた。

みのり「薫おねえさん、怖いよお・・・」

薫「大丈夫、みのりちゃん。私の手をしっかり握ってついて来て」満「薫、ここは危ないわ。さつき地図で確認した避難所に行きましょう」

薫「ええ！」

満と薫はみのりの手をしっかりと握って、避難所へ走り出した。

一方でブンビーも妖精たちに混じって、逃げていた。しかし、目の前に火花が撃墜し、あわてて來た道を逆走した。

ブンビー「ひいいいいっ！なんでこーなるんだあっ！？今日は誰も連れてきてないのにいっ！！」

恐怖は火花の撃墜で終わらなかった。黒い煙の中からは何かがゆっくりと立ち上がり、ぬうつとその姿を妖精たちに見せたのである。

それは巨大な影の「亡霊」だった。亡霊といっても、足は二本あるし、腕には今でも飛びかからんかのように鋭い爪が伸びている。

しかし、顔は丸い、赤い両目と口で統一され、それはまるで生き物が魂を抜かれたかのような、ただ存在だけがこの世にあるだけと言わんばかりの恐ろしい表情をしており、まさに「亡霊」としか言えなかった。

影の亡霊「おおおおおおおっ！！」

影の亡霊は次々と黒煙の中から現れ、雄叫びをあげると、歩き出した。そして巨大な足でアトラクションを踏み潰し、逃げ惑う妖精たちを追う。

プリキュアたちは突然現れた影の亡霊たちに戸惑いを覚えながらも、すぐに互いに目を合わせたりして取るべき行動を取り始めた。

つぼみ「えりか、いつき、ゆりさん！」

えりか「やるつしゅ！」

いつき「うん！」

ゆり「ええ！」

なぎさ「ほのか、ひかり！」

ほのか「うん！」

ひかり「はい！」

咲「舞！」

舞「ええ！」

のぞみ「みんな！」

りん・うらら・こまち・かれん「Yes！」

くるみ「ええ！」

ラブ「みんな行くよ！」

祈里・せつな「うん！」

美希「オッケー！」

そしてメップル、ミップル、ポルン及びフラッピ、チョッピが変身アイテムへと姿を変えて、それぞれなぎさ、ほのか、ひかりそして咲と舞へと飛んでいく。シプレ、コフレ、ポプリもつぼみ、えりか、いつきのそばへと急いだ。そして全員が変身アイテムを手にし、いつせいに叫ぶ。

つぼみ・えりか・いつき・ゆり「プリキュア！オープン・マイ・ハート！」

なぎさ・ほのか「デュアル・オーロラ・ウェーブ！」

ひかり「ルミナス！シャイニングストリーム！」

咲・舞「デュアル・スピリチュアル・パワー！」

のぞみ・りん・うらら・こまち・かれん「プリキュア！メタモルフォーゼ！」

くるみ「スカイローズ・トランスレイト！」

ラブ・美希・祈里・せつな「チェインジ！プリキュア！ビート！アアーッブ！」

つぼみ、えりか、いつきはシプレ、コフレ、ポプリから、ゆりは大量のこころの種が入ったココロポットが弾けて飛び出したプリキュアの種を手にとった。そしてつぼみ、えりか、いつきは香水瓶の変身アイテムの中に、ゆりはココロポットの蓋を開けてその中にプリキュアの種をしまう。つぼみとえりかは互いにいつの間にか着ていたネグリジェのような光の衣に香水をかけあい、いつきは自分の手で身体に香水をかけ、ゆりは大量の花びらの中で優雅に回転し始めた。四人の身体に衣装が施される。つぼみは桃色を基調とした衣装に、膝まで伸びたブーツ。えりかは水色を基調とした衣装に、シヨートブーツとニーソックス。いつきは腹部の大きく開いた露出度の高い金色の衣装に、長いツインテール。ゆりはメガネが消え、藤色を基調とした衣装に、前から後ろにかけて徐々に長くなるスカートと左胸にあしらわれた青い薔薇<sup>バラ</sup>。四人は変身を終え、同時に地上に着地する。

つぼみ「大地に咲く一輪の花！キュアブロッサム！」

えりか「海風に揺れる一輪の花！キュアマリン！」

いつき「陽の光浴びる一輪の花！キュアサンシャイン！」

ゆり「月光に冴える一輪の花！キュアムーンライト！」

つぼみ・えりか・いつき・ゆり「ハートキャッチプリキュア！」

なぎさとほのかのふたりは上空から降り注いだ光に包まれ、その中を上昇していく。光がフリルのついた服へと変わっていく。なぎさは黒を基調とし、桃の装飾をあしらった短いスカートとスパッツ。ほのかは白を基調とし、青の装飾をあしらった膝丈のスカート。上空で変身したふたりはもの凄いスピードで降下し、地上へ着地する。なぎさ「光の使者、キュアブラック！」



ほのか「光の使者、キュアホワイト！」

なぎさ・ほのか「ふたりはプリキュア！」

ほのか「闇の力の僕たちよ！」

なぎさ「とつととおウチに、帰りなさい！」

ひかりもポルンが変身したアイテム・タッチコミュニケーションから放たれた光に包まれていく。光が消えた瞬間、ひかりの私服は鮮やかな桃の布地と金色の装飾を施した衣装へと変わった。そして手元には、桃色のハートの形をしたハーティエルボタンを持っている。

ひかり「輝く命、シャイニールミナス！光の心と光の意思、全てをひとつにするために！」

咲と舞のふたりも光に包まれ、天へ登った。

咲「花開け！大地に！」

舞「羽ばたけ！空に！」

咲は赤紫色を基調とした服とスパッツ。舞は銀白色を基調とした服とスカートへと変身し、ふたりは飛び降りるかのように地上に着地する。

咲「輝く金の花！キュアブルーム！」

舞「煌く銀の翼！キュアイーグレット！」

咲・舞「ふたりはプリキュア！」

舞「聖なる泉を汚す者よ！」

咲「アコギな真似はお止めなさい！」

プリキュア5のメンバーもそれぞれが光に包まれ、変身していく。襟の立った二の腕までの袖の服と短いスカート。その下にあるスパッツ。五人は光のカーテンを吹き飛ばすかのように掻き消し、ゆっくりと、しかし優雅に地上へ降りる。

のぞみ「大いなる希望の力！キュアドリーム！」

りん「情熱の赤い炎！キュアルージュ！」

うらら「はじけるレモンの香り！キュアレモネード！」

こまち「安らぎの緑の大地！キュアミント！」

かれん「知性の青き泉！キュアアクア！」

のぞみ・りん・うらら・こまち・かれん「希望の力と未来の光！華麗に羽ばたく5つの心！Yes！プリキュア5！」

くるみも変身のかげ声とともに、身体が青い光に包まれて、やはり同じように光は紫を基調とした服へと形を変えていく。そして胸には青い薔薇<sup>バラ</sup>のついたリボンが施された。

くるみ「青い薔薇<sup>バラ</sup>は秘密の印！ミルキローズ！」

ラブ・美希・祈里・せつな<sup>の</sup>四人も身体が光に包まれ、順に変身していく。フリフリの服とスカート、そして髪飾りにイヤリングにリストバンド。変身し終わった四人は上空から降りてきて、ブーツのかかとで、地面を、トントン、と小気味の良い音を立てて並んだ。ラブ「ピンクのハートは愛ある印！もぎたてフレッシュ！キュアピーチ！」

美希「ブルーのハートは希望の印！つみたてフレッシュ！キュアベリー！」

祈里「イエローハートは祈りの印！とれたてフレッシュ！キュアパイン！」

せつな「真っ赤なハートは幸せの証！熟れたてフレッシュ！キュアパッション！」

ラブ「レッツ！」

ラブ・美希・祈里・せつな「プリキュア！」

こうして19人のプリキュアがここに並んだ。

プリキュアたちはいっせいに影の亡霊たちに目を向けると、全員が即座に走り出した。

## 襲撃（後書き）

プリキュアたちの変身シーンには本当に骨が折れます。

## 戦い

ピーチ「やあっ！」

まずキュアピーチが一番近くにいた影の亡霊の腹部に弾丸のような一撃を与えた。亡霊はもろにその一撃を受け、バランスを崩したが、すぐに踏みとどまり、巨大な爪でピーチを襲う。

パッション「ピーチ！」

しかし、パッションがその爪を力を入れて蹴り飛ばす。と同時にピーチの背後からベリーとパインが高くジャンプして空中で宙返りをする。パインは右足を、ベリーは左足を伸ばしてそのまま亡霊に急降下し始めた。

ベリー・パイン「ダブル・プリキュア・キック！」

亡霊は頭部に二人分のプリキュアの強烈なキックのお見舞いを受け、今度こそ倒れた。

影の亡霊「おおおおおっ！」

だが、亡霊はすぐに立ち上がり、大きく赤い口を開けると、近くにいた亡霊二体をあつという間に呑み込んだのである。二体を呑み込んだ亡霊は次の瞬間、体がグニヤリと曲がったかと思うと、二倍、三倍と増大し、巨大化した。

ピーチたち四人は一瞬戸惑ったが、すぐに互いに顔を見合わせてうなずいた。自分たちも数々の戦いを経験してきた戦士である。言葉はなくてもすぐに取るべき行動を取っていた。

ピーチ「プリキュアフォーメーション！」

ピーチが叫び、スタンディングスタートの姿勢を取る。ピーチに続いて、ベリー、パイン、パッションも同じ姿勢を取った。瞬時に全員が準備を終えたことを確認し、もう一度ピーチが声をあげる。

ピーチ「レディ……ゴー！」

ピーチ、ベリー、パイン、パッションの順に走り出し、目の前にいる亡霊へ向かう。

パッション「ハピネスリーフ！セツト！」

パッションの手に赤色に光るハートが現れる。パッションは次に「パイン！」と叫んでそれを投げた。パインは走りながらそれを両手で受け取る。

パイン「プラスワン！フレアーリーフ！」

赤色のハートのすぐ横に黄色のハートができる。パインはそれを今度は「ベリー！」と投げた。ベリーは片手で受け取る。

ベリー「プラスワン！エスポワールリーフ！」

今度は青いハートができる。ベリーは最後に「ピーチ！」と叫んで投げた。ピーチはそれを受け取り、締めをくくる。

ピーチ「プラスワン！ラブリーリーフ！」

ピンクのハートができあがり、ハートは四葉のクローバーの形となった。ピーチは身体を回転させると、そのままクローバーを敵に投げる。するとクローバーは回転しながら巨大化し、それと同時に四人はジャンプしてそれぞれのハートの上に着地した。四人が乗ったクローバーは敵の頭上へと降下し、体ごと呑み込む。四人はいつせいに手を挙げた。

ピーチ・ベリー・パイン・パッション「ラッキークローバー！グラウンドファイナーレ！」

亡霊の体は透き通った宝石のような物体に包まれ、わずかに断末魔の声を漏らしながら、浄化されて消えた。四人の意思や呼吸が一致していないとできない、見事なチームワークだ。

だが、チームワークならプリキュアも負けていなかった。レモネードは一体の亡霊を蹴り倒した後、すぐ飛びかかろうとした別の亡霊に目を向け、腕を目の前で交差させる。その途端、胸の蝶と両手の甲の蝶が光を放った。

レモネード「プリキュア！プリズムチェーン！」

レモネードは無数の黄色い蝶が集まったチェーンを敵に放つ。チェーンは亡霊の足に絡まり、亡霊はバランスを崩して倒れた。倒れた亡霊の顔に向けて、ルージュが上空から渾身の一撃を叩き込む。

直撃を受けた亡霊は砂状になって消えた。

しかし、一体の亡霊を倒したルージュの周囲に四、五体の亡霊が取り囲んでいた。そしていつせいにルージュを襲おうとする。ルージュは高くジャンプしてもう一度上空に戻ると、腕を交差させた。ルージュ「プリキュア！ファイヤーストライク！」

ルージュは空中で炎のサッカーボールを五球も蹴り、亡霊たちを一気に始末した。

一方でミントも亡霊を五、六体相手にしていた。亡霊たちはとどめを刺そうと一気に飛び上がって彼女へと降下する。しかしそれぞれミントの狙いだった。

ミント「プリキュア！エメラルドソーサー！」

ミントは腕を交差させ、緑の円盤状の物体を生み出す。彼女はそれをさらに五倍程度に巨大化させ、盾にした。緑の盾にぶつかつた亡霊たちは逆に空に大きく弾き飛ばされる。そこを逃さず、アクアが腕を交差させた。

アクア「プリキュア！サファイアアロー！」

アクアは数本の水の矢を空中の亡霊たちに向け、放った。百発百中。矢は見事に亡霊たちに直撃し、消滅させた。

ドリームとローズも見事なコンビネーションを見せていた。相手はさらにとりわけ大きい体の持ち主だったが、ふたりは何も怯えることなく敵に向かって走り、ドリームは敵の右手を、ローズは左手を？んだ。

ドリーム「ローズ！」

ローズ「ええ！」

ふたりは互いに顔を見てうなずくと、次の瞬間、手に力を込め、亡霊を投げ飛ばしたのである。相手が巨大なため、その距離は短かったが、ダメージは十分与えていた。しかし、亡霊も簡単にはやられなかった。すぐさま起き上がり、爪を剥き出して反撃の準備をする。だが、ドリームとローズはすでに準備ができていた。ローズは変身アイテムでもあるミルキィパレットを取り出し、ドリームは腕

を交差する。

ローズ「邪悪な力を包み込む、薔薇<sup>バラ</sup>の吹雪を咲かせましょう！ミルキイローズ・ブリザード！」

ローズがミルキイパレットを振りかざした瞬間、亡霊の体を、一輪の巨大な青い薔薇<sup>バラ</sup>が包み込んだ。

ドリーム「プリキュア！シューティングスター！」

と同時にドリームが桃色の蝶の光とともに、宙を飛び、突進する。ドリームの必殺技は青い薔薇<sup>バラ</sup>に包まれた亡霊に激突し、浄化した。

ブルームとイーグレットのふたりも無数の亡霊を相手に奮戦していた。まずは中でも一番大きい亡霊に精霊の力を込めた一撃で吹き飛ばすと、地上に着地し、背中合わせとなる。そして互いに目の前の敵を睨みつけると、すぐにその場から離れて、攻撃へ移った。ブルームは精霊の力を込めたパンチ、イーグレットは精霊の力を借りたキックで敵を次々と吹き飛ばしていく。ふたりは敵を一ヶ所へ飛ばすと、互いに手を握り、目を閉じた。

ブルーム「大地の精霊よ……」

イーグレット「大空の精霊よ……」

ブルームは地面に、イーグレットは空に手を伸ばした。すると、呼応するかのように無数の光がふたりの手に集まっていく。ふたりは目を開けた。

イーグレット「今、プリキュアとともに！」

ブルーム「奇跡の力を解き放て！」

ブルーム・イーグレット「プリキュア！ツイン・ストリーム！スプラアッシュ！」

ふたりは前方に手を伸ばす。その瞬間、光が二つの水流のように混じり合い、一つの螺旋<sup>らせん</sup>を描く光線へ変わった。二つの光線はそのまま包み込むように敵を呑み込んでいく。亡霊たちは立ち上がる間もなく浄化された。

一方、妖精たちは二体の亡霊に追い詰められていた。後ろは壁。逃げられない。

しかし、ナッツがここで何かをひらめき、急いでリュックサックを降ろした。

ナッツ「みんな！このギャラクシーミラクルライトを使うナッツ！」

ナッツは数本のミラクルライトをみんなに渡すと、自分もミラクルライトを手にしてスイッチを入れた。その瞬間、ライトから色とりどりの星が出てきて、あまりのまぶしさに二体の亡霊はたじろいだ。

ルミナス「ルミナス！ハーティエル・アンクシオン！」

亡霊がたじろいだ瞬間、ルミナスがハーティエルバトンから虹色の光を浴びせた。亡霊は時が止まったかのように指の一本も動けなくなった。

ブラック・ホワイト「はあっ！」

すかさず、動けなくなった亡霊にブラックとホワイトが猛スピードで強烈な一撃を浴びせる。二体の亡霊は飛ばされ、地面に激突すると、やはり砂状になって消えた。

ブラックとホワイトが地面に着地すると、すぐにふたりの周りに五、六体ものの亡霊が取り囲んだ。ブラックとホワイトはそれぞれ一気に二、三体の亡霊を相手する。

ブラック「だだだだだだだだだっ！！！」

ホワイト「はああああああああっ！！！」

ブラックは拳で連続パンチを浴びせ、ホワイトは二体を回し蹴りで吹き飛ばすと、異常なスピードで身体を回転させ、最後の一体を大空へ投げ飛ばした。亡霊は次々と消え、最後にとりわけ巨大な亡霊が姿を現した。ふたりは顔を見合わせて、合図を送る。ふたりは手を繋ぎ、空へ向かって大きく腕をあげる。

ブラック「ブラック・サンダー！」

ホワイト「ホワイト・サンダー！」

その叫びと同時に、天から雷がふたりの手を直撃した。ブラックは黒い雷。ホワイトは白い雷。ふたりは雷に呼応するように虹色の光をまとう。



ホワイト「プリキュアの、美しき魂が！」

ブラック「邪悪な心を、打ち砕く！」

ギョツと、強く互いの手を握り合い、片方の雷のたまった手を前方へ突き出した。

ブラック・ホワイト「プリキュア！マーブルスクリュー！マックス！！」

たまりにたまった雷がふたりの手から放たれる。螺旋を描くように黒と白の雷が混じり合っていく。やがて螺旋は巨大な一つの雷となり、敵へと向かっていく。亡霊は直撃を受け、消えた。

キュアブロッサムたちも善戦していた。彼女たちも砂漠の使徒の襲撃を嫌というほど経験しているのだ。それなりの実力は持っている。

ブロッサム「はあっ！」

ブロッサムは亡霊の頭部を後ろから思いっきり蹴り飛ばした。亡霊は地面を勢いよく転がり、ボーリングのように他の亡霊たちも薙ぎ払っていく。

いける。ブロッサムはそう思った。亡霊たちは恐ろしい外見こそ持つが、砂漠の使徒が生み出すモンスター・デザトリアンよりも弱く感じた。マリンもおそらく同様に感じたのだろう。勢いよく無数のパンチを繰り出し、数体の亡霊を吹き飛ばしていた。サンシャインも変身者が武闘家とだけあって、苦戦することなく数体の亡霊たちと闘り合っていた。ムーンライトもブロッサムよりも先に砂漠の使徒と戦っていたとあって、次々と亡霊たちを消滅させる。

しかし、亡霊たちもやられてばかりではなかった。中でも体の大きい亡霊の口に数体の亡霊が自らの意思で飛び込み、飲み込まれていく。五、六体を飲み込んだ亡霊は体がさらに五倍、六倍と巨大化した。

だが、ブロッサムとマリンの顔に恐れはなかった。ふたりは胸に着けたエンブレムから武器のフラワータクトを取り出すと、必殺技の準備をし始めた。

ブロッサム・マリリン「集まれ！二つの花の力よ！」

ふたりはタクトを振ってフォルテシモ記号のような形をしたピンクとブルーのエネルギーを生み出して身をまとった。

ブロッサム・マリリン「プリキュア！フローラルパワー・フォルティシモ！」

ふたりが叫ぶと同時に身体が上昇し、猛スピードで敵に突撃する。亡霊はあつという間に体をハート型に貫かれた。

ブロッサム・マリリン「ハートキャッチ！」

地面に着地したふたりが叫び、互いにタクトを交差させると、亡霊は花卉の大爆発を起こした。最後にふたりがタクトにあるクリスタルドームを回転させ、エネルギーを送ると、亡霊は完全に浄化した。

残りの亡霊もプリキュアたちが次々と倒し、遂に全て消滅した。

プリキュアたちは歓声をあげ、お互いにガッツポーズを見せた。

ブラック「やった！」

マリリン「よっしゃあ！」

ブルーム「一丁上がり！」

しかし、中には突然の亡霊たちの登場に戸惑いを隠せないのも何人かいた。

ブロッサム「それにしても、今のは何だったんでしょう？」

ベリー「今まで見たこともない連中だったわ」

イーグレット「ええ……。なんだか、嫌な予感がするわ」

イーグレットが言ったその時だった。プリキュアたちの背後から凶太い男の声が聞こえたのは。

「???」ほお。19人もいるとはいえ、我が化身たちを苦戦することなく倒すとは、さすがに伝説の戦士プリキュアと言うだけはあるな……」

ハツとなり、全員が後ろを振り返った。プリキュアたちが振り返った瞬間、突如闇のカーテンが現れ、大空を覆い、さっきまで青かった空はまるで夜のように暗く変化した。

そしてプリキュアたちの目の前、アトラクションが倒壊してでき  
た瓦礫<sup>がれき</sup>の頂上に、誰かが足を組んで座っていた・・・。

## 戦い（後書き）

フレッシュ組及びブロッサムとマリンの合体必殺技を先に出したのももちろん理由があります。あと、キュアムーンライトの個人技も判明次第すぐに出しますので。

次回は、最凶の敵、遂に現る！

## 二つの闇（前書き）

いよいよ登場です！

## 二つの闇

瓦礫<sup>がれき</sup>の上に座っていたのは、身体が黒に統一されていた男だった。男といっても、体格は筋肉質になっており、手は鋭い鉤爪になっていて、白い両目は三日月のように釣り上がっている。口は顔の横にまで裂け、何でも噛み砕いてしまいそうな牙が数本も生えていた。そのあまりにも凶悪な姿、そして空を覆った漆黒のカーテンに、数々の戦いの経験からプリキュアたちはすぐに男がただ者ではないと感じ、臨戦態勢に入った。

ブルーム「誰よあんだ？」

男「我が名はアルティメット。全宇宙を支配する究極の闇だ」

アキラ「アルティメット？」

サンシャイン「全宇宙を支配する・・・？」

パッション「究極の闇・・・？」

アルティメット「そうだ。俺はおまえたちが暮らす地球を含め、全ての星の生命や文明を滅ぼし、無へ帰す。そしてゼロからもう一度、新たな生命と文明を生み出し、俺に従わせる統治者になるのだ」

ローズ「なんですって！？」

パイン「そんな！それじゃあ、地球の人たちや街や自然はどうなるの！？」

アルティメット「地球の人や自然だと・・・？フン、そんなカス、この偉大なる俺と比べたら、存在する価値もないわ」

その言葉にほとんど多くのプリキュアたちが怒りを覚えた時、「ジョーダンじゃない！」とブラックがいの一歩に叫んだ。

ブラック「みんな消しちゃったら、アカネさんのたこ焼き食べられなくなっちゃうじゃん！」

ブラックの言葉にほとんどが「へ？」という顔をしたが、ブラックに便乗してドリームとピーチも叫んだ。

ドリーム「そーだよ。みんな消えたら、もうセレブ堂のチョコレー

トだつて食べられなくなるじゃん！」

ピーチ「そーだよそーだよ。私もカオルちゃんのドーナツが食べられなくなるなんて、耐えられない！」

ホワイト「・・・三人とも、気持ちは分かるけど、説得力全然ないよ」  
ホワイトがややあきれながら言う、三人は「へっ？」といったせいに目が点となった。

アルティメット「くだらん。そんなくだらんもののためにおまえたちは戦ってきたというのか？だとしたら、確かに聞いたとおり、のんきな連中だな」

ムーンライト「（聞いたとおり？）」

ムーンライトがアルティメットの言葉に反応した時、「くだらなくありませんっ！」とブロッサムが叫んだ。

ブロッサム「そりやあなたにとつては、小さい存在かもしれませんが、私たちにとっては地球は全ての命が暮らす故郷ふるさとなんです！その地球を滅ぼすといううえにこのワンダー・プラネットまでメチャクチャにするなんて、私、堪忍袋の緒が切れましたーっ！」

マリン「ブロッサムの言うとおりだよ。あんたがどれだけ偉いか知らないけど、そんなこと許されるはずないよ！海より広いあたしの心もここらが我慢の限界よー！」

ブロッサムとマリンの言葉に、他のプリキュアたちもうんとうなずき、いつせいにアルティメットに目を向けた。

ミント「ブロッサムとマリンの言うとおりよ。どんな理由があろうとも、そんな横暴な権利、あなたにはないわ！」

ルミナス「みんなひとつひとつ小さいですけど、それでも必死で生きているんです。それを簡単に奪うなんて、許しません！」

ブルーム「それでも私たちの星を滅ぼし、宇宙を支配すると言うのなら、私たちが絶対に止めてみせる！」

全員がアルティメットを睨み、声を揃えて叫んだ。  
プリキュアたち「この宇宙は、私たちが守る……！」

その声に、全員の気迫がビリビリとアルティメットの体を伝わっ

た。先ほどは本気でくだらない連中だと思ったが、それでも数々の激戦を打ち勝ってきた戦士なのだと容易に感じる。油断はできないと思い直した。だが、アルティメットは次の瞬間、なぜか裂けた口で笑い出した。

アルティメット「くっ・・・ははははははは。おお怖い怖い。こいつはとんでもなく厄介なやつらに宣戦布告しちまったみてえだな。だが・・・、残念だが、おまえたちの相手をするのは俺じゃあない。おまえたちプリキュアの相手をするのは・・・・・・・・・プリキュアだ！」

ブロッサム「え？」

マリリン「どういうことよ？」

アルティメットの言葉にプリキュアたちが一瞬戸惑ったその時だった。

???「こういうことよ」

ふいにアルティメットの背後から誰かが現れた。その顔が明るくなり、プリキュアたちはみな驚きと戸惑いの表情を浮かべた。

雨牙真夜だった。彼女はアルティメットのそばを通り過ぎると、

瓦礫<sup>がれき</sup>を降り、地面に立った。

ブロッサム「ま、真夜さん!？」

マリリン「な、なんで、真夜さんがここに・・・？」

その時、どこからともなく一匹の黒いアゲハ蝶が飛んできて、真夜の手にとまった。とまった瞬間、クロアゲハは黒い小さな火に包まれ、口紅へ姿を変える。真夜はそれを握ると、キャップを開け、高く空へ捧げた。

真夜「プリキュア・ダークネス・エヴォリューション！」

その言葉に、プリキュアたちの間に動揺が走った。

ルージュ「なっ!？」

ブルーム「まさか!」

アキラ「そんな!？」

次の瞬間、真夜は目を閉じ、身体が漆黒の闇に包まれた。闇の中



で真夜の身体は落ちていく。落ちながら真夜は身体をうねらせた。その瞬間、大量のクロアゲハが彼女の身体に集まり、クロアゲハは衣装へと変わった。襟の立った二の腕までの袖の漆黒の服とその下にある無地の白いシャツ、首筋にぞんざいにかけられた、締まっていないネクタイ、腹部にはへビの目のような紋様が描かれ、その下に黒と白のチェックの短いスカートが施される。両手には肘まで届く手袋、両足には膝までの高さもあるブーツが施された。

最後に髪を掻きあげると、二つの黒いリボンが施され、ツインテールへと変わる。変身した真夜は驚きを隠せないプリキュアたちの前に静かに地面に着地すると、目を開けた。そして。

真夜「全てを無へ誘う漆黒の墮天使、キュアリベリオン！」

彼女が名乗りをあげた瞬間、彼女の背後で大量のクロアゲハが舞い踊った。

## 二つの闇（後書き）

次回、希望のプリキュアVS絶望のプリキュア。アレも登場します。  
性能の設定を少し変えましたけど。

## オールプリキュアVSキュアリベリオン（前書き）

最初に謝っておきます。プリキュアたちをいぢめすぎました（特にピーチ）。ごめんなさい。

## オールプリキュアVSキュアリベリオン

ブロッサム「キュア・・・リベリオン!？」

マリン「真夜さんが、プリキュア・・・!？」

プリキュアたちはみな驚愕の表情でその場に立ち尽くしていた。ついさっきまで彼女たちにワンダー・プラネットを案内し、ブロッサムとマリンにいたってはともに行動して、アトラクションで遊んだ少女がプリキュアとして現れたのだ。しかもたった今宣戦布告した敵の背後から現れ、光ではなく、暗黒の闇の中で変身を遂げたのだ。驚くのも無理はない。

プリキュアたちの反応を見たアルティメットは満足そうにニヤリと笑う。

アルティメット「そうだ。やつも見ての通りプリキュアだ。もつとも、『同じ』ではないがな」

ローズ「それ、どういう意味よ!」

アルティメット「おまえたちはみな、自らの意思で希望の光に触れてプリキュアになったのだろう?」

アルティメットは牙をガチガチ鳴らしながら確かめるようにプリキュアたちに尋ねると、リベリオンに目を降ろす。

アルティメット「だが、この雨牙真夜は違う。やつは自らの意思で絶望の闇に触れて誕生した、まさに最凶のプリキュアにして最悪の闇の戦士なのよ!」

プリキュアたち「ええっ!？」

ブロッサム「そ・・・そんな。嘘です。真夜さん、嘘って言うてください!」

ブロッサムが叫んだが、彼女は返事しなかった。リベリオンとなった真夜は声をあげて笑うでもなく、突き刺すような目線で睨むでもなく、ただ光の宿っていない黒い瞳でプリキュアたちに目を向けるだけだった。

アルティメット「さあ、自己紹介はもう終わりだ。キュアリベリオン、プリキュアを倒せ」

リベリオン「・・・はい」

リベリオンが返事して一歩踏み出した次の瞬間、彼女はプリキュアたちの視界から消えた。

ブラック「！・・・どこに！？」

プリキュアたちが戸惑い、すぐに周囲を見回したその時、ブラックとホワイトのすぐ目の前にリベリオンは現れた。

ブラック「なっ・・・！？」

ホワイト「いつの間に！？」

ふたりが動く前に、リベリオンは素早くふたりの腹部に両手をかざした。その途端、両手から強力な波動が放たれ、ふたりを後ろへと吹き飛ばした。

ブラック「うわああああああっ！！」

ホワイト「きゃああああああっ！！」

ブラックとホワイトは壁にめり込むほど激突し、指先すらピクリとしないほどすぐに身体が動かなくなっていた。

リベリオンは再び視界から消えると、今度はブロッサムの前に現れ、彼女の首筋に向かって強烈なキックを放った。間一髪。ブロッサムは左腕でリベリオンのキックをガードした。

ブロッサム「真夜さん、やめてください！私は真夜さんと戦いたくありません！」

リベリオン「ふうん、どうして？」

ブロッサム「どうしてって、そんなの・・・！」

リベリオン「友達だから？」

ブロッサム「！」

リベリオン「いい言葉よね。そんな日本語、ずいぶんと忘れていたわ。でも・・・」

リベリオンはキックした足を高く上げて、ブロッサムの肩に目がけてかかと落としを叩き込んだ。

ブロッサム「あうっ！」

激痛が走り、ブロッサムは肩を押さえて地面に膝を着けた。ブロッサムを冷たく見下ろしながらリベリオンは静かに言った。

リベリオン「私にとっては、もういらぬ言葉なのよ」

リベリオンはヒュッ、とブロッサムの首筋をチョップし、彼女を眠らせた。

そのリベリオンの背中に目掛けてサンシャインが拳の一撃を与えようと走り出す。しかし、リベリオンはサンシャインの拳をたやすくかわした。それでもサンシャインはあきらめずにパンチとキックの連続攻撃を浴びせようとした。だが、サンシャインの攻撃はひとつもリベリオンに当たらなかった。

リベリオン「へえ、いい動きしてるじゃない。だけど・・・」

リベリオンは拳を繰り出したサンシャインの手首を握り、次の瞬間、彼女の腹部に膝蹴りを食らわせた。

サンシャイン「かつ・・・は・・・っ」

リベリオン「おへそがガラ空き」

リベリオンはさらに腰をかめたサンシャインの首筋に強烈なエルボーを与え、サンシャインは地面に倒れた。

ムーンライト「はあっ！」

今度はムーンライトが強力なパンチを浴びせる。リベリオンは彼女の拳を両腕を交差させてガードした。

ムーンライト「私も、あなたが敵なんて信じたくないわ。でも、あなたがアルティメットとともに地球を滅ぼし、宇宙を支配するといふのなら容赦はしない。あなたを倒すまでよ！」

リベリオン「・・・そうですか。じゃあ、私も容赦はしません」

リベリオンはそう言うと、次の瞬間、プリキュアとしては信じられない、しかし悪としてはいかにも非情で反則な攻撃をムーンライトに与えた。ガツと、右手を獣の手のように開き、ムーンライトの右腕をひっかいたのである。

ムーンライト「ああっ！」

かすり傷程度の怪我だったが、この攻撃にはさすがのムーンライトもひるんだ。その隙をリベリオンは逃がしはしない。すぐさま隙だらけとなったムーンライトの胸に手をかざし、波動を放った。

ムーンライト「ああああああっ！！」

ムーンライトはもの凄いい力で吹き飛ばされ、地面に叩きつけられた。

ベリー「ムーンライト！あなたよくも！パイン！」

パイン「うん！」

ベリーはパインに合図を送り、変身アイテムであるリンクルンを取り出した。そしてリンクルンの中央に埋め込まれているボールを回転させる。すると、リンクルンから光が飛び出し、スティック状の武器・キュアスティックが現れた。ベリーとパインはそれぞれキュアスティックでスピードとダイヤの模様を目の前で描いていく。

ベリー「プリキュア！エスポワールシャワー！」

パイン「プリキュア！ヒーリングブレイアー！」

ベリー・パイン「フレエッシュュ！」

ベリーとパインは、目の前で出現させた模様をキュアスティックで力強く押し出す。すると、その模様は飛び出すかのように凄いいスピードでリベリオンへと向かっていった。

だが、リベリオンはふたりの攻撃から逃げようとはしなかった。

彼女は右手を高く掲げて誘うように呟いた。

リベリオン「ギガバトルナイザー……！！」

すると、彼女の右手に黒い炎が輪を描くように走り、2メートル程のロッド状の武器が出現した。両方の先端にはバズーカに似た砲身があり、青い光が灯っている。彼女はそれを両手で握り締める、と、ぐるん、ぐるんと、器用に振り回した。そして、その先端でベリーとパインの技を叩き落とすかのように弾いたのだ。

ベリー「なっ！？」

パイン「そんな！？」

ベリーとパインはとても信じられなかった。今のふたりの必殺技

は通常の敵ならばいとも簡単に浄化できるほどレベルが高いのだ。それをまるでシャボン玉を割るかのように瞬時に触れて破裂させ、粉々にしてしまうなんて……。ふたりは愕然としてしまい、身体が動かなかった。

それをリベリオンは見逃さない。三度目の瞬間移動をしてふたりの目の前に現れると、ギガバトルナイザーを振りかざした。ふたりがハッと気づいた時はもう遅かった。ギガバトルナイザーの先端はベリーの横腹を殴り、強い力に弾き飛ばされたベリーはすぐにパインを巻き込み、ふたりは仲良く近くの壁に叩きつけられた。パッション「ベリー！パイン！」

パッションの声にリベリオンは急いで振り返る。彼女の目にハープ状の武器がパッションの手に持たれているのが映った。すかさずリベリオンはパッションに先端を向ける。

リベリオン「リベリオン・ジェノサンダー」

その瞬間、先端から青色の強力な放電が放たれた。放電はパッションに直撃し、パッションは悲鳴をあげながら後ろへと撥ね飛ばされた。

ピーチ「パッション！」

ピーチが飛ばされたパッションに目を向けたが、すぐに前方へ振り返った。振り返った瞬間、リベリオンがギガバトルナイザーを振り上げて高くジャンプした。そしてそのまま降下し、ギガバトルナイザーをピーチへ思いっきり振り下ろす。ピーチはキュアスティックでかろうじてそれを受け止めた。

ピーチ「雨牙さん、お願い！やめて！私もあなたとは戦いたくない！」

リベリオン「あ、そう。じゃあお友達と仲良く永遠に眠りなさい」  
リベリオンは一旦、ギガバトルナイザーをキュアスティックから離すと、優雅に両手で振り回してピーチの膝を思いっきり殴った。  
ピーチ「あああっ！」

ピーチは思わず膝を抱えた。が、その途端、またもリベリオンが



次の攻撃を行おうとしているのが目に入った。ヤバい、と危機を感じた。ピーチは片方の足で地面を蹴って後ろに飛び、とにかくリベリオンから距離を置こうとした。だが。

リベリオン「リベリオン・ウィップ」

ギガバトルナイザーの先端から今度は白い放電が放たれ、ヘビのようにピーチの身体に巻きついたのだ。全身に電流が流れ、ピーチは動けなくなる。リベリオンはピーチを捕らえた先端を強く振り上げると、ピーチも高く振り上げられ、そのまま近くにあった壁に頭から激突した。

ピーチ「うつっ……ああっ……！」

地面に転がり、ようやく白い放電から解放されたが、今のピーチにすぐに起き上がる気力はなかった。

続いてアクア、ミント、マリンがリベリオンに向かった。アクアとミントはリベリオンを挟み撃ちになると、アクアは右に、ミントは左にとそれぞれ回っていく。そしてお互い合図を送って、ふたりはいつせいに両方の先端を両手で？んだ。リベリオンはすぐギガバトルナイザーをふたりから離そうとするが、ふたりとも腕に力を込めているらしく全然離さない。

リベリオン「くっ……！」

一体何の真似だと思っていると、アクアとミントは片方の腕を振り上げて、同時に手刀を繰り出してきた。とっさに片腕でガードすると、リベリオンに向かつてマリンが高くジャンプし、高速でキックを放った。リベリオンはハッと気づき、頭を下げてギリギリのところでマリンのキックをよける。

なるほど、一瞬でも身動きを止めた隙を突いて攻撃する作戦かとリベリオンは瞬時に理解する。もしかしたら、厄介なギガバトルナイザーを自分から離すように仕向ける二重の作戦なのかもしれないならば、とリベリオンがそう考えた時、マリンが走ってもう一度攻撃を仕掛けてくるのが見えた。リベリオンはギガバトルナイザーを握ったまま、手に力を込める。すると、両方の先端から、パッショ

ンを吹き飛ばした青い放電がフルパワーで放たれた。先端を？んでいたアクアとミントは当然放電を浴びて、悲鳴をあげて弾き飛ばされた。解放されたギガバトルナイザーを頭上で振り回し、リベリオンは身体を一回転させると、走ってきたマリンの胸に回し蹴りを食らわせた。

マリン「うわあーッ！」

マリンは背中から地面に激突した。

ローズ「このっ・・・！」

次にローズが彼女の背後から攻撃する。リベリオンはそれをよけると、ローズは素早く振り返り、彼女の腹部にパンチを浴びせようとした。だが、それすらもリベリオンはよける。リベリオンはペン回しのごとく両腕で器用にギガバトルナイザーを回転させると、先端の砲身をローズの胸に向けた。

ローズ「え・・・？」

リベリオン「リベリオン・ショット」

ローズ「きゃああああああっ！」

砲身が火を噴き、ローズは地面に叩きつけられた。幸い、かろうじて直撃は避けたが、そうとうなダメージを受けてしまった。

ローズが動かなくなったのを見届けた瞬間、ギガバトルナイザーに黄色のチェーンが二重に絡みついた。急いで振り返ると、レモネードの両手にそのチェーンが握られていた。

レモネード「捕らえました！」

ルージュ「でかしたレモネード！」

ルージュも片方のプリズムチェーンを握り、ふたりして力いっぱい引っ張る。ふたりの力でギガバトルナイザーを取り上げるつもりだ。

リベリオン「バーカ」

しかし、リベリオンは片足を上げてプリズムチェーンを踏むと、ギガバトルナイザーの先端を向けて力強く押し潰した。パキン、と音を立てプリズムチェーンはあっけなく切れた。

レモネード「そんな！」

そしてふたりに向かってリベリオン・ジェノサンダーを放つ。  
ルミナス「はあっ！！」

しかし、ルミナスが胸のリボンにつけたハーティエル・ブローチ  
エから発した虹色のバリアで青い放電を弾き、ふたりを守った。瞬  
時にこれはジェノサンダーでは破れないかとリベリオンは直感する。  
なら、とリベリオンはもう一度握った手に力を込めた。その瞬間、  
両方の先端に赤い光が灯り、リベリオンはそれを思いっきり振り下  
ろした。

リベリオン「リベリオン・デスサイズ」

次の瞬間、先端から巨大な赤色の鎌状の光弾が飛ばされた。鎌状  
の光弾はバリアに触れた瞬間、今まで破られたことがなかったルミ  
ナスのバリアが初めて斬り裂かれ、中にいた三人に直撃した。

レモネード・ルミナス「きゃあああああっ！」

ルージュ「あああああっ！」

ルージュ、レモネード、ルミナスが高く吹き飛ばされる。三人が  
地面に到達するのを確認する間もなく、リベリオンは前方へ振り向  
いた。目の前には、ドリームが立っていた。仲間が次々と倒されて  
いくのを生目で見たためか、彼女は強い目でリベリオンを捕らえて  
いた。

ドリーム「雨牙さん、私もあなたとは戦いたくなかった。でも、こ  
れ以上みんなを傷つけるといふのなら、私は……あなたを倒  
す！」

リベリオン「……来なさいよ」

ドリームはかけ声とともにリベリオンに飛びかかった。そしてパ  
ンチやキック、エルボーとあらゆる攻撃とスピードでリベリオンを  
追い詰めようとする。しかし、どれもリベリオンには全く届かなか  
った。痺れを切らしたのか、ドリームは腕を交差する。

ドリーム「プリキュア！シューティングスター！」

ドリームは光をまとい、リベリオンに必殺技を浴びせようと突進

した。リベリオンはギガバトルナイザーを片手で回転させ、盾とした。ドリームの技とギガバトルナイザーの盾がぶつかり、ふたりの周囲に電撃と衝撃波が走る。ドリームはさらに力を込めたが、盾は破れなかった。リベリオンはもう片方の手でギガバトルナイザーを強く握り締めた。

リベリオン「はあっ！」

次の瞬間、ギガバトルナイザー全体から風圧のような強力なパワーが放たれ、そのパワーを受けたドリームは高く撥ね飛ばされた。ドリーム「う・・・あっ！」

天高く飛ばされたドリームに向かってリベリオンが足に力を込めて飛び上がった。そしてそのままドリームの目の前へと飛来する。ハッとした瞬間、ドリームは胸にリベリオンのキックを受け、そのまま地面へ撃墜した。

ドリーム「あっ・・・ぐ！」

リベリオンはそのままぐりぐりとブーツのヒールでドリームの胸を踏みにじる。撃墜のダメージをもろに受けたドリームにもすぐに立ち上がる気力は残っていなかった。

リベリオンはしばらくドリームを踏みにじっていたが、すぐに背後に気配を感じ、振り返った。すると、ブルームとイーグレットが風のような速さでリベリオンに攻撃を仕掛けてきた。とっさによけ、ああそういえばまだいたねと思い出す。と同時に即座にギガバトルナイザーの砲身向け、リベリオン・ショットを放った。だが、ブルームとイーグレットはジャンプし、空へ逃げた。さらに空中で精霊の力を借りて二段ジャンプをし、天高く舞い上がった。ふたりは空中で手を繋ぎ、もう片方の手をかざす。ふたりはそこから必殺技を放つ用意をした。だが、空から地上にいるリベリオンを見下ろした瞬間、ふたりは目を疑った。

ふた리를目で追っていたリベリオンは先端をトン、と地面に触れさせた。その瞬間、彼女の足元が黒く液体化し、そこから何かが数本生えてきた。

それは巨大な「手」だった。その「手」は全て黒く、時折黒い炎が輪を描いて噴きあがる。指先は全てを引き裂いてしまいそうに鋭く、その異様さは「悪魔」を容易に想像させるものだった。

悪魔の手は手首をねじらせると、いつせいにブルームとイーグレッツトに向かって伸びてきた。

ブルーム「うわわわわっ！何これ！？」

ブルームとイーグレッツトは無数の悪魔の手から逃れようとしたが無駄だった。すぐに捕まり、悲鳴をあげながら地上へと高速で降下していく。そして地上まであと数メートルと迫った時、ふたりは悪魔の手に思いつきり地面に叩きつけられた。地面に亀裂が走り、ブルームとイーグレッツトの身体はピクリとも動かなかった。

戦いを一部始終見ていた妖精たちはみな愕然とした。自分たちの知るプリキュアたちが全員倒されたのだ。しかも19人が、たったひとりの闇から生まれたプリキュアによって。その圧倒的な強さにプリキュアたちが全く歯が立たなかったことに妖精たちはただただ立ち尽くすばかりだった。

ココ「お、恐ろしい力だココ・・・！」

シロップ「プ、プリキュアたちが負けた・・・ロプ！？」

タルト「あのリベリオンちゅうやつ、なんてパワーなんや！？」

シプレ、コフレ、ポプリが倒れているブロッサム、マリン、サンシャイン、ムーンライトのそばへ飛び、それぞれに声をかける。

シプレ「ブロッサム、起きてくださいですう」

コフレ「マリン、寝てる場合じゃないですう」

ポプリ「サンシャイン、ムーンライト、起きるでしゅ。このままじゃ、大変なことになるでしゅ」

だが、マリン、サンシャイン、ムーンライトは地面に顔を伏せたまま、起き上がる気配はなかった。シプレたちが絶望を身近に感じる。その時だった。

ピクッ、ピクッ、とブロッサムの小指がわずかに動いた。シプレがそのわずかな動きに気がついた次の瞬間、両腕を震わせながら、

ゆっくりとブロッサムが起き上がった。

オールプリキュアVSキュアリベリオン（後書き）

次回、第一部終了（の予定）。

## 守りたい（前書き）

ごめんなさい。第一部終了は次回にします（なんか私、謝ってばかりだな）。



## 守りたい

ブロッサムは肩を押さえ、足をガクガク震わせながら、なんとか立ち上がった。そして周囲を見渡し、愕然となった。

ブロッサム「あ・・ああ・・・」

自分以外のプリキュアは誰も立っていなかった。何人かは指や腕を微動させていたが、激痛が身体中に走るうえにリベリオンの圧倒的な強さを肌で感じたために、立ち上がらないと、思いながらも身体をうまく動かせないのだ。

ブロッサムはリベリオンを見た。そして、心の芯からゾツとした。氷のように冷たく、微動だにしない無表情と、まるでこの世に光があることを知らない闇<sup>くら</sup>すぎる瞳。地面から生えた数本の黒い手に囲まれて立つリベリオンの姿は、それだけで人に異様な恐怖を伝える。まるで悪魔か魔王のイメージを強烈に与える。ただそこに立っているだけなのに、ブロッサムは心の底から怖いと感じた。

しかし、ブロッサムは逃げなかった。怖かったが、まだ残っている勇気を振り絞って叫んだ。

ブロッサム「真夜さん、どうしてこんなことするんですか!？」

リベリオン「・・・・・」

ブロッサム「自分が何をやっているのか分かっているんですか? あなたの手で地球を滅ぼすことになるかもしれないんですよ? それなのに、どうして私たちと戦うんですか!？」

リベリオン「・・キュアブロッサム、ひとつ教えてあげようか? 世界ってのはね、あなたが思っているほど単純で美しくできているんじゃないのよ。世界って本当はくだらないことで人と人が争って、だまして、嘘をついて、それでいて成り上がっていく、醜くて腐りに腐っていくようにできているの。あなたは世界をひとつしか見えないから気づかないのよ。そんな世界が未来永劫続いていくっていうのなら・・・一度滅びたほうがいいのよ、あんな地球<sup>ホシ</sup>!」

その言葉にブロッサムは思わず後ろへたじろいた。リベリオンの顔は無表情のままだったが、今の言葉にブロッサムは彼女から、かすかだが怒りと失望、そして憎しみを確かに感じ取ったのだ。リベリオンは本気で地球が滅びてもいいと思っている。一体、何が彼女にそのような感情を持たせたのか。それは分らない。だが、ブロッサムは彼女から感じた強烈なマイナスの感情に圧倒されてさらに恐怖を抱き、残りの勇気も消えかけ、肌に震えを感じ始めていた。

しかしその時、「ふざけるなっ！」と後ろから叫びが聞こえた。振り返ると、ブラックとホワイトが怒りの表情を現し、両手に力を込めて、身体がめり込んだ壁の中から這い上がろうとしていた。ブラック「何が滅んだほうがいい、よ！？今のはマジでアツタマに来たんだから！」

ホワイト「あなたにとってはどうでもよくても、私たちには命に代えてでも守りたいものだから！」

ブラックとホワイトは足に力を込めて地面を蹴り、壁から脱出した。続いてブルームとイーグレットも両腕を支えにして立ち上がるうとする。

ブルーム「地球はあんたのものじゃない！みんなのものだから！」  
イーグレット「私達は何があっても、絶対に守ってみせる！」

ドリームとピーチも上半身をゆっくり起こし、強い目でリベリオンを見る。

ドリーム「たとえどんなに苦しくても、あきらめなければ未来はきっと輝いていると信じているから！」

ピーチ「私たちは、絶対みんなで幸せゲットだよって思えるの！」

ドリームとピーチに続いて、アクア、ミント、ローズ、ルージュ、レモネード、パッション、ベリー、パイン、ルミナスが目を開けて立ち上がる。マリン、サンシャイン、ムーンライトも立ち上がり、マリンは弱々しく歩きながらもブロッサムのそばへと来て、キツとした目つきでリベリオンを睨みつけた。

マリン「それに世界をひとつしか見ていなくて、何が悪いの？その

世界が大好きでなくならんかなから、私たちは戦ってるんじゃない！なんでもかんでも消すと言うあんたなんかブロッサムを責める資格なんかないよ！私たちの世界を守るためにも、私たちは地球を守ってみせるんだからっ！！」

ブロッサム「マリン・・・」

ブロッサムは一瞬驚いた後、マリンに微笑み、強い瞳でリベリオンを見る。その顔に先ほどの恐怖はもうなかった。

そうだ。私には守りたいものがある。大好きなお父さんとお母さんに、おばあちゃん。そして植物園の花たち。学校だって、えりかやいつき、ファッシュン部のみんなと出会ってからだんだん楽しくなってきた。私はみんながいるあの街が大好き。それを消せはしない。

プリキュアたちの力強い目を見たリベリオンはまだ根性が残っていたかと思った。守りたいものがある。だからあきらめない。そこそが数々の激戦を勝利してきたプリキュアたちの強さの秘密なのだ。リベリオンは少しだけ、彼女たちがうらやましいと感じる。プリキュアたちには守りたいものがはっきりとある。しかし、自分には・・・。

いやいや、余計なことを考えてしまったとふとリベリオンは気づき、頭を振った。もう関係ないのだ。今は戦いに集中するのみともう一度プリキュアたちに目を向ける。

リベリオン「ひとつ忠告。無理はしないほうがいいと思うよ。あなたたち、もうボロボロで立つのがやっとなじゃない。今度は十秒以内で寝かせるよ」

ブルーム「なにおうっ！」

リベリオンの言葉に触発して、ブルームがイーグレットの手を握って、必殺技を放とうと行動に出る。しかし、ベリーがブルームの手を止めた。

ベリー「待って、ブルームも見たでしょ。あいつに技は効かないわ。あの黒い武器でまた弾かれる」

ブルーム「くっ……。でも、このままじゃ……。また……。」  
ブロッサム「私も真夜さんを攻撃するのは反対です。真夜さんも私たちと同じ人間なんです。万が一、真夜さんに攻撃が当たって死んでしまったら、私たちはもうプリキュアを名乗る資格はありません！」

ルージュ「ブロッサム、言ってることは分かるけど、でも……。」  
ピーチ「私もブロッサムの言うとおриだと思っ。せめて動きを封じることができたら、話を聞いて、心を入れ替えてくれるかも」  
レモネード「でも、一体どうすれば……。？」

ブロッサムたちの話を聞いていたムーンライトは前を向いてリベリオンを見た。それから次にある方向へ視線を変える。

ムーンライト「……みんな、一か八かだけど……。」

全員がムーンライトを見た。

ムーンライト「私に考えがあるの。乗る？」

## 守りたい（後書き）

ムーンライトの作戦は功を成すか？次回、第一部今度こそ終了。

## 作戦

リベリオンはあいもかわらず、無表情でプリキュアたちを眺めていたが、彼女たちが何をしていようと、とんと興味はなかった。だからプリキュアたちが自分をほっぽり出して話し合いを始めても、たいして気にもしなかったが、ムーンライトが他のプリキュアに話をし終わった次の瞬間、全員が再びリベリオンに目を向け、彼女はプリキュアたちに臨戦用意の意識だけは持った。

よく見ると、ブラック、ホワイト、ムーンライト以外全員が武器を所持していた。ルミナスはハーティエルバトン、ブルームとイーグレットはそれぞれ中心部分がハート型になっているベルト状とブレス状の形をしたプリキュア・スパイラル・リング、プリキュア5は剣のような形状をした五色に光るキュアフルーレ、ローズはミルキィパレットが変化したミルキィミラー、ピーチ、ベリー、パインはキュアスティック、パッションはパッションハープ、プロツサムとマリンはフラワータクト、サンシャインはタンバリンの形状をしたシャイニータンバリン。

プリキュアたちはそれぞれの武器を構えると、必殺技の準備をした。

全員で必殺技を放ち、自分を葬るつもりかと予測し、リベリオンもギガバトルナイザーを構える。相手は19人だ。いくらギガバトルナイザーが防御力にも優れていようと、大多数の必殺技を弾く力まであるかは正直自信はない。だが、プリキュアたちは知らなくて彼女が知っていることがあった。

ギガバトルナイザー。真夜がキュアリベリオンになった一年前に彼女はその武器を与えられ、最大限にまで使いこなせるようになっていた。だから、リベリオンはギガバトルナイザーの性能を知り尽くしている。そしてそのうちのひとつの性能はプリキュアたちの全員の必殺技に匹敵するものだった。もしプリキュアたちが私に向か

つて必殺技を放つたら、その能力を使用するのみだ。リベリオンはそう考え、いつでも来いと言うふう<sup>ふう</sup>にギガバトルナイザーを持って待ち構えた。

リベリオンの思惑など知るよしもなくプリキュアたちは次々と準備し、必殺技を発動させる。

ブラックとホワイトはルミナスのハーティエルボタンから放たれた虹色の光線<sup>虹色の光線</sup>に身体が包まれると、両腕を振り回し、一定方向で動きを止める。

ブラック「みなぎる勇氣！」

ホワイト「溢れる希望！」

ルミナス「光り輝く絆とともに！」

ダアン！とブラックとホワイトが片方の足を前方に出して勢いよく踏み出すと、ふたりの目の前に巨大な虹色のハートが出現した。ふたりはすかさず片手を前へ差し出す。

ブラック・ホワイト「エキストリーム！」

ルミナス「ルミナリオ！」

次の瞬間、巨大ハートから溢れ出るかのように黄金の光線が発射された。

ブルームとイーグレットは目を閉じ、それぞれ付随<sup>ふずい</sup>していたふたつのリングをカシャ、カシャ、と小気味の良い音を立ててハート型の中心部分に装着し、優しく撫でるように中心部分を回転させた。

途端、どこからか溢れ出てくるように大量の光が中心部分に集まってくる。ふたりは目を開けて叫んだ。

イーグレット「精霊の光よ！命の輝きよ！」

ブルーム「希望へ導け！ふたつの心！」

ブルーム・イーグレット「プリキュア！スパイラル・ハート！」

かけ声とともに、ふたつの螺旋状<sup>らせんじょう</sup>の水流が目の前で混ざり合っていく。

ブルーム・イーグレット「スプラアアッシュ！」

ふたりが強く前方に両手を突き出すと、混ざり合った水流は光線

へ変わり、噴き出すように放たれた。

プリキュア5は全員がフルーレの先端を重ね合わせる。

ドリーム「五つの光に！」

ルージュ・レモネード・ミント・アクア「勇気を見せて！」

ドリーム・ルージュ・レモネード・ミント・アクア「プリキュア！  
レインボー・ローズ・エクスプロージョン！」

全員がそれぞれのキュアフルーレを持ち、同じ姿勢、同じ速度で先端を敵に向け、前へ強く突き出す。その瞬間、桃、赤、黄、緑、青の薔薇が出現して突進していく。五色の薔薇は途中で融合して巨大な虹色の薔薇へと変わり、さらにスピードを増した。

ローズはミルキイミラーを振りかざす。すると、彼女のすぐ目の前に巨大な銀の薔薇が出現した。

ローズ「邪悪な力を包み込む、煌く薔薇を咲かせましょう！ミルキイローズ・メタルブリザード！」

ローズがミルキイミラーを目の前で大きく振った瞬間、銀の薔薇は前方へと飛び散っていった。

ピーチ「プリキュア！ラブサンシャイン！」

ピーチは先端にハートがついたキュアスティック・ピーチロッドでハートの模様を描いていく。ベリーとパインもそれぞれベリーソードとパインフルートを使って、同じ行動を取った。

ベリー「プリキュア！エスポワールシャワー！」

パイン「プリキュア！ヒーリングブレアー！」

ピーチ・ベリー・パイン「フレエエッシュ！」

三人はそれぞれ描いた模様を敵に向けて放った。

パッションは唯一キュアスティックでない、パッションハープを優雅に奏でる。

パッション「吹き荒れよ！幸せの嵐！」

その言葉とともに、ハープを空へ高く掲げる。

パッション「プリキュア！ハピネスハリケーン！」

その状態で回転を始め、徐々にハープを下ろしていく。何度回転



したか、胸元までハーブが降りてきた瞬間、彼女の回転は方向を変え、敵の方向へと突き出した。すると、小さなハートの群れがパッションハーブから大量に放出した。

ブロッサムとマリンはそれぞれ武器であるフラワータクト・ブロッサムタクトとマリインタクトを握ると、叫びながら、大きく振りかざした。

ブロッサム「花よ輝け！プリキュア！ピンクフォルテウェイブ！」  
マリン「花よ煌<sup>きよう</sup>け！プリキュア！ブルーフォルテウェイブ！」

そしてその先端を敵の方角へと向ける。すると、ブロッサムタクトからはピンクの花の形をした巨大なエネルギー弾、マリインタクトからはブルーの花の形をした巨大エネルギー弾が飛ばされた。

サンシャインはシャイニータンバリンを軽快に踊りながら響きよく叩く。

サンシャイン「花よ舞い踊れ！プリキュア！ゴールドフォルテバースト！」

シャイニータンバリンより、無数のひまわり型のエネルギー光弾が流星のごとく発射された。

プリキュアたちが放った必殺技は全てひとつに融合し、巨大な虹色の光線へと変わる。光線はまっすぐにリベリオンの方角へと突き進み……彼女の頭上を通り過ぎていった。

リベリオン「……なにっ!？」

さすがのリベリオンもこれは予想しておらず、急いで振り返り、ハッと気づいた。

リベリオン「狙いは、これか！」

虹色の光線は瓦礫<sup>がれき</sup>の上に座り、様子を見ていたアルティメットへと突進していた。

これがムーンライトの立てた作戦だった。ムーンライトはリベリオンがアルティメットに忠誠を誓っていることを突いて、リベリオンではなくアルティメットに全員分の必殺技を浴びせることを考えたのだ。もしリベリオンに全員分の必殺技を放つても、おそらく

彼女はギガバトルナイザーで弾いたかもしれないし、弾がなくても得意の瞬間移動でまたプリキュアたちを惑わしていたかもしれない。いずれにせよ、失敗する可能性が高かった。

しかし、彼女が忠誠を誓うアルティメットに放ったら、どうだろう。さしものリベリオンはおるか、アルティメットもこれは予想外のはずだ。リベリオンは絶対自分に攻撃してくると思っていて油断、アルティメットはリベリオンが戦っている間は絶対自分には攻撃をしないと思っていて油断が命取りとさせたのだ。忠誠を誓えば誓うほど、主を失った時の家臣の喪失感（あへじ）は大きい。アルティメットを葬った直後は、虚を突かれて隙ができたリベリオンを全員でいっせいに飛びかかり、動きを封じる予定だった。

だが、ムーンライトはこの作戦にふたつの不安があった。ひとつはアルティメット。プリキュアたちはアルティメットのことを全然知らない。もしかしたら予想もできないような強大な力を持っている可能性が十分ありえる。直撃しても倒せるかどうかは分からなかった。

もうひとつはリベリオンだ。相手はプリキュアたち19人を圧倒させる力の持ち主。武器のギガバトルナイザーも含めて秘めたる力を發揮して光線がアルティメットに直撃する直前、その力で光線を掻き消してしまう可能性も捨て切れなかった。

しかし、もっかのところ、この作戦以外に思いつかなかったのも事実だ。ムーンライト自身も本当はリベリオンはできれば倒したくなかったのである。だが、リベリオンはプリキュアたちを倒す気は満々だし、実際にプリキュアたちはリベリオンに全く歯が立たなかったのだ。このままでは本当に全員リベリオンに倒されてしまうのも時間の問題だろう。不安要素はあれど、リベリオンを倒さずに戦いに勝つにはこの一か八かの作戦に賭けるしかなかった。

だが、プリキュアたちの作戦は成功しなかった。ムーンライトが恐れていたもうひとつの不安が当たってしまったのだ。

リベリオンは急いで瞬間移動を行い、アルティメットの前に現れ



その瞬間、プリキュアたちの周囲から強力な風が吹き上げ、砲身へと吸い込まれていく。それと同時にプリキュアたちの身体が虹色に輝き、彼女たちから次々と光が離れ始めた。

ブロッサム「くっ……ああっ！」

マリン「力が……消えていく……！」

そして全員の身体から光が吸い込まれると、プリキュアたちはゆっくりと地面に倒れた。倒れた瞬間、プリキュアたちは変身が解け、元の姿に戻ってしまった。メップル、ミップル、ポルン、フラッピ、チョッピもアイテムからの変身が解け、ぐったりと動かなくなった。アルティメット「ははははははははっ！これでプリキュアの力は全部俺のものとなった。キュアリベリオン、もうこいつらは用済みだ。始末しておけ」

リベリオン「はい」

リベリオンはギガバトルナイザーを空高く掲げた。そしてゆっくりと先端を回し始める。やがて黒い旋風が先端に集まってきて、徐々に加速する。変身が解けたプリキュアたちはリベリオンの行動を見、それが相当な攻撃力と破壊力を持つと直感しながらも、疲労で身体が重く感じ、立ち上がることができなかった。

ココ「やめるココ！もうこれ以上、プリキュアを傷つけるなココ！」  
ナッツ「これ以上やったら、みんな本当に死んでしまうナッツ！」

ルルン「プリキュアをいぢめないでルル！」

タルト「そやで！あんさん、もう十分やないか！やめてつかあさい！」

見ていられなくなり、妖精たちがプリキュアたちの前に立ち、次々と叫ぶ。だが、リベリオンはちらと妖精たちを見たものの、手を止めず、ギガバトルナイザーを振り回し続けた。ギガバトルナイザーに集まった旋風はどんどん加速し、威力も増大する。

のぞみ「ココ……ダメ……」

いつき「ボクたちのことはいいいから……早く逃げて」

舞「早く逃げないと……危ないわ」

何人かが妖精たちに逃げるように言ったが、妖精たちは逃げなかった。身体に震えが来ていたが、強い目でリベリオンに向き、両手を広げてプリキュアたちを守るように立ち尽くしていた。

リベリオンはギガバトルナイザーを回し続け、威力を増大させていく。何度も何度も回転させていくうちに、パワーが遂に最大限に達した。

リベリオン「リベリオン・トルネード！」

と叫び、ギガバトルナイザーをプリキュアに向け、振り下ろそうとしたその時だった。

???「真夜ちゃん！やめて！」

突然、上空から白い小さな光が飛んできて、プリキュアたちの前で停止すると、中から子犬のような外見を持ち、背中に蝶のような羽が生えた妖精が現れた。

リベリオン「！？ロモモ！」

リベリオンは初めて驚きの表情を見せて叫んだが、すでに手は先端を振り下ろしていた。

ゴオツ！と、ギガバトルナイザーは漆黒の巨大竜巻を起こし、勢いを増してプリキュアと妖精たちを巻き込んだ。

プリキュアたち「きゃああああああああっっ！！！」

妖精たち「うわああああああああっっ！！！」

それはまさに龍が暴れているような光景だった。巨大竜巻は周辺のアトラクションも巻き込んで破壊していき、雷雨を発生させながらもの凄い勢いで天へと昇っていく。巨大竜巻は空を覆う闇の力ーテンに激突すると、そのまま吸い込まれていくように消滅した。跡には、巨大竜巻が巻き込んだアトラクションの瓦礫や破片が飛び散っていくばかり。そして・・・リベリオンの目の前に、プリキュアたちの姿はどこにもなかった。

アルティメット「ははははは。伝説の戦士プリキュア敗れたり。もはややつらは生きてはいないだろう。仮に生きていたとしても、プリキュアの力を失った以上、何もできやしない。俺の邪魔をする

やつはいなくなつたわけだ。行くぞ、キュアリベリオン」

アルティメットはリベリオンにそう声をかけたが、聞こえなかったのか、彼女は前を向いたまま立ち尽くしていた。

アルティメット「聞こえなかったのかキュアリベリオン？行くぞ」  
リベリオン「え？は、はい」

リベリオンは一、二回その場を振り返っていたが、すぐにアルティメットのあとに続き、闇の中へ姿を消した。

## 作戦（後書き）

第一部終了。次回、オリキャラ紹介した後、小休止します。

## キャラクター紹介？

### 雨牙真夜

プリキュアたちの前に現れた少女で、悪のプリキュア・キュアリベリオンに変身する。17歳。常に漆黒の制服を着ているが、どこの高校に通っているのか、そもそも通学しているのかは不明。三年前までは、闇から世界を守ってきたプリキュアだったが、戦いが終わった後は国際医療団体の一員である父母とともに世界中を旅し、ボランティアとして多くの人を支援していくようになる。しかし、中東に位置するアフラート共和国にある村で滞在していたところを何者かの襲撃を受け、家族と友達を失い、自分が守ってきた世界の実態を知り、怒りと悲しみのあまり絶望する。その後、アルティメットと出会い、闇の力を手に入れてキュアリベリオンとして彼の忠臣となり、世界を滅ぼすのに手を貸すことを決意する。キュアリベリオンに変身する前は笑顔が耐えない、明るい少女だったが、変身以後は何に関しても無表情・無関心となり、笑わなくなった。

### キュアリベリオン

雨牙真夜が変身する漆黒のプリキュア。プリキュア5の劇場版1やハートキャッチのTV本編に登場するダークプリキュアとは違い、プリキュアたちと同じように普通の人間が変身するという意味では初めての悪のプリキュアである。ギガバトルナイザーを武器にし、棍棒やバズーカのように扱って応戦する他、「リベリオン・ジェノサンダー」「リベリオン・ショット」「リベリオン・ウィップ」「リベリオン・デスサイズ」そして最大必殺技「リベリオン・トルネード」を放つ。さらには「リベリオン・ダークネス・ホール」でプ



リキュアたちの最大必殺技だけでなく、全員を変身解除に追い込んでしまうほどプリキュアの力を吸収してエネルギーにする能力もあり、他にも地面を液体化してそこから数本の悪魔の手を生やして操る等隠された性能が秘められている。格闘技においても長けており、たったひとりで19人のプリキュアを圧倒して立ち上がれなくしてしまうほど強い。

## ロモモ

蝶のような羽を背中につけ、子犬に似た外見を持つ白い妖精でかつてプリキュアとして闇と戦っていた真夜のパートナー。三年前、闇の脅威から世界を守るための切り札としてプリキュアを探し、真夜と出会い、彼女をプリキュアに変身させた。真夜が変身する時はペンドラントに似た音叉型の変身アイテムに姿を変える。戦いが終わった後も真夜とともに暮らし、平和な毎日を送っていたが、真夜がアルティメットとともに消えてからは一年間も彼女を探していた。そしてようやく知り合いの精霊からワンダー・プラネットで真夜を見たという情報を聞き、彼女に会うために宇宙船に乗り込む。男の子の妖精でまだ子供だが、大きな勇気の持ち主で、ロモモ本人すらも知らない強大な力も秘められている。

## アルティメット

自身を「究極の闇」と称する凶悪な姿をした怪人。全宇宙を全て無にし、最初から新しい星々を生み出しては支配することを目標としており、そのために強大な力を秘めるプリキュアの力に目をつけ、<sup>ターゲット</sup>標的にする。真夜を闇へ誘い、キュアリベリオンに変貌させ、彼女にギガバトルナイザーを与えた張本人だが、実は……………。

圧倒的な闇の力を隠し持っており、プリキュアたちを罠にはめて追  
い詰める。

## キャラクター紹介？（後書き）

以降、二週間程度の休止します。もしかしたら、早く執筆再開するかもしれませんが、第二部を期待して、しばらくお待ちください。

## 悪夢（前書き）

お待ちせ！執筆再開です！第一部も多少改訂しましたのでもう一度最初から読み直してもいいかも。

## 悪夢

ここは・・・・・・・・どこ口モ？

真つ暗だ口モ。何も見えない口モ。怖い口モ・・・・・・・・。  
ここから出たい口モ。誰かいない口モ？

・・・・・・・・・・・・・・・・真夜ちゃん。

・・・・・・・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・。

あれ？あそこにいるのは、誰口モ？

あ・・・・・・・・ああ・・・・・・・・、間違いない口モ。真夜ちゃん口モ！

真夜ちゃん！

よかった口モ。やっと会えた口モ。口モモ、ずっと真夜ちゃんを  
探してたんだ口モ。もう離れない口モ。

・・・・・・・・あれ？

真夜ちゃん、どうしてそんなに冷たい目をしてる口モ？なんだか・

・怖い口モ。真夜ちゃん、口モモ、何かした口モ？

すると、真夜ちゃんは、ゆつくりと口を開いた。

真夜「ごめんね、口モモ。でも・・・」

そして、真夜ちゃんの服装が変わっていく。

漆黒の衣装に、お腹に描かれたへびみたいな目。黒いリボンで結  
ばれたツインテール。手には黒くて長い、棒のようなモノが握られ  
た。

完全に姿を変えた真夜ちゃんは口モモに冷たい目で見ながら、も  
う一度口を開いた。

真夜「あなたの知っている雨牙真夜は、一年前に死んだのよ・・・

・・・・・・・・！」

そう言つと、真夜ちゃんは手に持っていた黒い棒を高く振りかざ  
した。

真夜ちゃん、何する口モ。やめて口モ。

誰か、助けて口モーツ！！

次の瞬間、真夜ちゃんは口モモに向けて勢いよく棒を振り下ろしてきた……………。

つぼみ「大丈夫ですか？落ち着いてください！」

つぼみは腕の中でうなりながら眠っている白い妖精に急いで声をかけた。妖精はハツと目を覚ますと、はあはあと、荒い呼吸を繰り返した。

つぼみ「うなされてましたよ。怖い夢でも見たんですか？」

つぼみの声に、妖精は彼女のほうを向いた。そしてキョロキョロと目を左右に動かした後、彼女に尋ねた。

妖精「ここは…………どこ口モ？」

つぼみ「ここも、ワンダー・プラネットです。私たち、竜巻に巻き込まれたんですけど、みんな運良くあのプールに落ちたんですよ」

つぼみが指を指した方向にはウォータースライダー用の広いプールがあり、そこには水が深く溜まっていた。そしてそのプールの周辺には、プリキュアと妖精たちが座り込んでいた。

ギガバトルナイザーが起こした巨大竜巻に巻き込まれた彼女たちだったが、竜巻が消滅する寸前に全員外へ弾き出され、運良くまだ破壊されずに水が残っていたプールに墜落し、助かったのだ。

あの竜巻にもろに呑み込まれておきながらも全員が同じ方向と同じ場所に吐き出されて助かったのはまさしく奇跡としかいえないよう。これも伝説の戦士と呼ばれるプリキュアの、秘めたる力なのだろうか。

だが、みなさすがに無事とはいえなかった。幸い、重傷こそはなかったものの、ほとんどが身体に激痛が走るほどの怪我を負っていた。くるみにいたっては、そうとうのダメージを受け、ミルクの姿に戻っている。

完全な敗北だった。

キュアリベリオン一人に対し、プリキュアたちは全く手も足も出なかった。それどころか、プリキュアの力を吸い尽くされた。変身アイテムはあれど、もはやそれはただの飾りにすぎない。敵の圧倒的な力を肌で体験した彼女たちはどうしていけないのか分からず、ただ妖精たちを心配そうに抱いたまま、座り込むしかなかった。

ラブ「シフォン、大丈夫？」

シフォン「プリ……」

ラブはシフォンに声をかけながら二度頭を撫でた。幸い、シフォンに怪我はなかったが、さすがにいつもの元気は出ない様子だった。妖精「真夜ちゃんは？真夜ちゃんはどこ口モ？」

妖精がつぼみに聞くと、つぼみは小さく驚き、確かめるように尋ねた。

つぼみ「真夜ちゃんって、もしかして雨牙真夜さんのことですか？」

すると、妖精は背中の中の羽を動かしてつぼみの腕の中から出てきた。妖精「そう口モ。真夜ちゃんはどこにいる口モ？」

つぼみ「……真夜さんは……」

メップル「待つメポ。その前におまえ誰メポ？」

突然、メップルが眉間にしわを寄せた表情で妖精に尋ねた。メップルの後ろにミップルも心配そうな表情で立つ。

メップル「メップルたちはおまえのことを知らないメポ。一体何者メポ？」

ミップル「そうミポ。あの娘とはどういう関係ミポ？」

それはメップルとミップルに限らず、全員が答えを知りたがっていた質問だった。数多くの知り合いを持つ妖精たちも目の前にいる白い妖精は初対面であった。白い妖精は羽をパタパタ動かして、メップルとミップルに向き合うと小さな声で答えた。

妖精「口モモの名前は口モモだ口モ。口モモは……真夜ちゃんのパートナーだ口モ」

えりか「えっ？あんだ、キュアリベリオンのパートナーなの！？」

ロモモ「キュアリベリオン……？何それロモ？」

えりか「何それって、あんたも見たんじゃないの？真夜さんが変身したあの黒いプリキュア」

ロモモ「ち・・違うロモ！あれは、真夜ちゃんだけど真夜ちゃんじゃないロモ！」

つばみ「どういうことですか？」

ロモモ「真夜ちゃんは本当は優しい人なんだロモ。今から三年前、真夜ちゃんはプリキュアとして闇から世界を守ったんだロモ！」

えりか「ええっ、キュアリベリオンが！？」

ロモモ「だから違うロモ！あれは確かに真夜ちゃんだけど、真夜ちゃんじゃないんだロモ！」

舞「もしかして、こういうことじゃないかしら？」

突然、舞が声をあげ、全員が彼女に振り向いた。

舞「つまり、雨牙さんは三年前、キュアリベリオンとは違うプリキュアに変身して、私たちと同じように世界を守っていた。そういう意味じゃないかしら？」

ロモモ「そうロモ！その通りだロモ！」

なぎさ「雨牙さんが私たちと同じ光のプリキュア？ありえない……」

美希「私も。とても信じられないわ」

うらら「そうですね……」

フープ「あんなひどいことをする娘が世界を守っていたなんてフープは信じられないフープ」

ムープ「ムープもそう思うムープ」

タルト「そやな……」

ロモモから話を聞いても、ほとんどが信じられない気分だった。無理もない。三年前は知らないが、今の真夜は闇の手先となって、逆に世界を滅ぼそうとしているのだ。そのために彼女はプリキュアたちを痛みつけたうえに大多数がまだ子供の妖精たちをも巻き込み、本気で殺そうとした。そんな非情さを持つ彼女がかつて世界を守つ



たプリキュアと聞いてそう簡単に信じられようか。

つぼみ「ロモモ・・・でしたっけ？もしあなたの言うことが本当だったら、どうして真夜さんはあんなふうになってしまったんですか？」

ロモモ「それは・・・」

ロモモは思わず目をそらした。彼の行為を見て、つぼみは確信した。

つぼみ「知ってるんですね？話してくれませんか、真夜さんに何があったのかを」

つぼみが言うと、ロモモはしばらく視線を下に向けていたが、やがて小さくうなずいた。

ロモモ「分かったロモ。あれは一年前のことロモ・・・」

## 悪夢（後書き）

次回、真夜の過去が明かされる！

## 雨牙真夜の過去

一年前。アフラート共和国ゴザドック村。

アフラート共和国は中東に位置するどの国よりも貧困差の激しい場所であった。砂漠化が進み、各地では宗教や政治的問題による内乱も激しく、無関係の人が巻き込まれて命を落とすことは日常茶飯事だった。

ゴザドック村は国内で最も貧困差が激しい地域で、住宅のほとんどはもとに風雨をしのげず（もつとも雨が降ること自体は極度に少ないが）、電気はおろか水道も通っていない。当然医療など満足にいき渡っているはずがなかった。

その村に真夜をはじめ、国際医療団体の一員である父母と数人のスタッフは滞在し、住人たちを治療したりして支援をしていた。

真夜が父母らとともにボランティアとして数多くの国で支援活動を行っていくことに、最初は両親は反対した。離れた場所で活動を行うとはいえ、紛争がやまない国やいつまた巨大地震が起こるかも分からない地域に愛娘を連れて行きたくなかったのだ。自分たちは覚悟はできているが、それよりも娘を失うほうがずっと怖いのだらう。

しかし、真夜は自分も父と母のような世界各地で困っている人たちを助けていく人になりたい、そのために父と母の仕事を間近で見たいといって少しも譲らなかった。とうとう両親は折れ、短期間という条件付きで真夜を連れて行くことに決めた。真夜は父母らと世界各地を巡り、人災や天災の被害に遭った人たちを支援しながら、父母やスタッフの仕事振りをその目で見てはノートにメモをしておくことと勤勉さを一日も忘れなかった。そしてアフラート共和国のゴザドック村が真夜の最後の活動場所となっていた。

ゴザドック村に来て十日目、真夜は手に多くの薬草を持ちながら、周囲に干ばつが広がる一本道を歩いていた。

太陽はサンサンと照らし、周囲は熱気が漂っている。はつきり言っ  
て超暑い。たぶん気温は40 を超えているだろう。一応帽子をかぶっているが、時々  
は休んで水分を補わないと熱中症で倒れてしまう。

薬草を運んでいたのは、母に頼まれたからだ。もとは薬剤師だった母は村に着いてすぐに村の周辺に様々な薬草が生えているのに気づいた。その薬草から調合して、傷薬や風邪薬など多くの薬品を作  
って、無料で村人たちに施している。真夜は村から少し離れた場所  
で頼まれた薬草を手に入れ、戻る途中だったのだ。

真夜がひとりで歩いていると、彼女の首に掛けられていた白いペ  
ンダントが突然、ポン！と煙を発して中からロモモが現れた。

真夜「ロモモ！」

ロモモ「真夜ちゃん、そんなにたくさんの薬草持って大丈夫ロモ？  
ロモモも少し持ってあげるロモ！」

真夜「大丈夫よ。べつに重たくないわ。それよりダメでしょ、突然  
出てきちゃ。誰かに見られたらどうするの」

ロモモ「大丈夫ロモ。今は真夜ちゃんしかないロモ」

???「ヘーイ、マヤーツ!!」

後ろのほうから何人かの声が聞こえて、ロモモはあわててペンダ  
ントの姿に戻り、真夜は振り返った。見ると、七、八歳くらいのゴ  
ザドック村の子供たちが走ってきて、真夜の周囲を取り囲んだ。

真夜「何？みんな、どうしたの？」

イワン「マヤ、かくれんぼやろうよ！」

エラ「お手玉もう一回教えて！」

アイビィ「マヤ、この折り紙でヒコーキ作って！」

キイス「マヤ、また日本のお話して！」

真夜「ちょ、ちょっと待ってみんな。私早く母に薬草を持ってい  
かないと・・・」

アイビィ「え、そんなのあとでいいじゃん。遊んでよ」

「??? おいおまえら! マヤが困っているだろ。ワガママ言うな」

子供たちの背後に十二歳くらいの少年が現れ、彼らを叱った。片手にはサッカーボールが持たれている。少年はテッドという名前で、村にいる子供たちの中では最年長だった。

テッド「マヤたちは俺たちだけじゃない、村のみんなも助けに来てくれたんだぞ。こうしてる間にも誰かが病気が怪我で苦しんでるかもしれないじゃんか。俺たちのせいでマヤが薬草を届けるのに時間がかかって、みんなに迷惑かけたらどうするんだよ。マヤの邪魔をするんじゃない！」

「イワン・エラ・アイビィ・キイスはいい……ごめんなさい……」

子供たちは真夜に頭を下げた。

真夜「いいのよ。私もごめんね。薬草を届けたら、遊んであげるから」

「イワン、ほんと？」

真夜「約束する」

エラ「やったっ！じゃあ、先に行つて、待つてゐるからね！」

子供たちは村のほうへ走っていった。真夜はテッドに振り向くと、微笑んだ。

真夜「テッド、ありがとう。助かったわ」

テッド「いやいいんだ。マヤの役に立てて。．．．その薬草、俺が持とうか？」

真夜「いいの。重くないから。でも、ありがとう」

ふたりは並んで歩き始めた。やがて村が遠くに見え始めた時、テッドが声をあげた。

テッド「そうだ！俺、マヤに見てもらいたいのがあるんだ」

真夜「何？」

テッド「俺さ、少しサッカー上手くなったんだ。マヤ、ちょっとでいいから見てくれる？」

真夜「いいわよ。見せて」

テッドはサッカーボールを手から離すと、まずは右足で軽く二回蹴った。次に左足で一回目は軽く、二回目は少しだけ強く蹴ると、ボールは頭上へと跳んだ。そのままトン、トン、と二回軽くヘディングすると、ボールはまた右足へ行き、最後にポーンと目の前まで蹴り上げると、テッドはそれを両手でキャッチした。

真夜「すごい。上手くなったわね」

テッド「だろ？ずっと練習してさ、一番にマヤに見せたかったんだ」

真夜「このまま練習を続けてたら、もっと上手くなるわ」

テッド「サンキュー、マヤ。……俺、マヤたちには本当に感謝してる」

真夜「テッド？」

テッド「俺さ、ずっと前に戦争で父さんと母さんを亡くしてさ、この村に逃げてきたんだけど、ずっと生きてる気がしなかったんだ。死にたいと思ってても結局怖くて死にきれなくて……。でも、マヤたちが来て、俺たちにサッカーとか折り紙とか教えてくれてさ、それがすごく楽しくなってきた、おかげでみんな元氣を取り戻せたんだ。マヤたちが来てくれなかったら、たぶんみんな元氣がないまま死ぬのを待つだけになってたかもしれない」

真夜「テッド……」

テッドはここで目を閉じ、軽く深呼吸をした。そして目を開け、真夜に真剣な眼差しを向けた。

テッド「マヤ、俺、なりたいものができたんだ」

真夜「ん？何？」

テッド「俺、サッカー選手になりたい！そしていつかアフライト代表として試合にも出たいんだ」

真夜「……そっか。テッドは努力家だから、きつとなれるよ」

テッド「うん。俺、もっと練習する。そして絶対日本にも試合に来るよ。それでさ……。もしその日が来たらさ、その……マヤを迎えに行ってもいい？」

真夜「?・・・いいけど」

テッド「本当!？」

真夜「ええ」

テッド「やったあつ！俺、もつと練習するよ。そして絶対日本に来るよ。それまで待つてくれよマヤ！」

そう言つと、嬉しそうにはしゃぎながらテッドは村へと走り出し、見えなくなった。真夜が少しばかりとテッドを見送っていると、再びペンダントが煙を發して、ロコモが現れた。

ロコモ「へへへーっ。真夜ちゃん、告白されちゃったロコモねー」

真夜「告白？」

ロコモ「今テッド君にされたロコモ。迎えに行くつて」

真夜「うん。でも、迎えに行くつてどういうことなんだろう？」

ロコモ「へっ？ひょっとして真夜ちゃん、意味が分からずに返事したロコモ？」

真夜「うん。迎えに行くつてことは、会いに来ることよね？べつにサッカー選手になって日本に来なくても、会う方法はたくさんあると思うけど」

ロコモ「はあ、真夜ちゃんも鈍いロコモね。これじゃ、とてもお嫁に行くのは難しいロコモ」

真夜「は？なんでそこで嫁が出てくるの？」

ロコモ「だから・・・」

と、ロコモがそこまで言つた時だった。

ドーンッ！と、突然村のほうから爆発音が轟き、炎と黒煙がキノコの形となつて、空に上がった。村からは多くの悲鳴や絶叫も聞こえる。

ロコモ「な、何ロコモ!？」

真夜「!・・・あそこにはお父さんとお母さんが！みんなが！」

真夜は急いで走り出し、ロコモもあとに続いた。

村は騒然となっていた。あちこちで爆発が起こり、炎と黒煙の柱が上がり、誰もが血走った目で逃げ惑う。真夜は逃げる村人の中からテッドを見つけた。

真夜「テッド！」

テッド「マヤ！」

真夜「テッド、何があつたの！？」

テッド「分らないんだ。突然向こうから何人かがあわてて走ってきたと思ったら、突然ドカーンで、地面から爆発が起きてその人たちを消しちゃったんだ！まさか、どこかの戦争で戦っていた兵士たちが攻めてきたんじゃない……！」

真夜「そんな……そんなはずはないわ。ここはどの内戦から遠く離れているから安全だと聞いているはず……」

その時、ドーンッ！と、ふたりの目の前で地面が爆発した。瞬時に炎と黒煙が発生し……。その黒煙の中から人の形をしたシルエットが浮かび上がった。

黒煙の中から現れたシルエット……。おそらく男だろう。体格はどう見ても女のものではない。ただ、黒煙の中に存在するため、どの誰かどころかこの国の人間かも判別できない。しかし、その男の顔に浮かび上がった目を見て真夜は思わず絶句した。

男の目は長く釣り上がり、真っ赤に統一されていた。その目はまるで悪魔のような、ひと睨みしただけで全ての生き物を金縛りにさせてしまう恐怖感を与え、男の前に立つ真夜とテッドはまさにへびに睨まれたカエルのごとく身体が震えて指先を動かすことすらできなかった。両目の赤い男は黒煙の中でゆっくりと片手を上げた。そしてそのままふたりに方向を向ける。

真夜の父「やめろ！娘に手を出すな！」

真夜の母「真夜！早く逃げなさい！」

逃げ惑う人たちの中から真夜の両親が現れ、真夜に急いで叫んだ。すると、男は真夜とテッドに向けた片手を両親へと方向を変え、バツ、と大きく開いた。ボンッ！と音がして両親は足元で起きた爆発



に吞まれ、ふたりの身体は花火のように瞬時に消えた。

真夜「え．．．？お父さん、お母さん．．．．．？」

真夜は一瞬何があったのか分からなかった。しかし、すぐにふたりに何が起きたのか理解できた。

真夜「嘘．．．。嘘でしょ。お父さん、お母さんがこんなあつさり．．．．！」

真夜は呆然とした。あんなにも長くそばにいて多くの人たちの治療をして命を救ってきた両親が蠟燭の火を吹き消すかのようにこんな簡単に命が消えるなんて信じられなかったのだ。できれば今目の前で起きたことは本当に嘘か冗談と思っていたかった。

だが、現実は何れでもかと言うほど彼女の目に焼きつけた。両目の赤い男は次々と片手を上げて人々の命を奪う。その中には両親とともに医療活動を行っていたスタッツたちとさつき真夜が会った子供たちも含まれていた。次に両足が動かないおばあさん。その次に先日結婚したばかりの新婚夫婦。その次に赤ちゃんを腕に抱えながら逃げていたお母さん。真夜の目には全てがスローモーションのように見えていた。逃げる人々、爆発に巻き込まれる人々、破壊される家、空に上がり続ける炎と黒煙。どれもこれもが映画のワンシーンのように真夜の目に留まったのである。

おおかたの人数の命を奪った両目の赤い男は真夜とテッドに気づくと、再び片手を上げ、ふたりに向けた。

ドガンッ！と、ふたりのすぐ目の前で爆発が起こり、爆風によつてふたりはうしろへ吹き飛ばされた。

真夜「きゃああああああああつっ！！！」

吹き飛ばされた真夜はそのまま壁に叩きつけられて頭を打ち．．．  
．．．．．気を失った。

．．．．．  
．．．．．真夜ちゃん．．．．．

真夜ちゃん、真夜ちゃん、真夜ちゃん！

真夜「ん．．．．？」

真夜は目を目を開いた。すぐ目の前に心配そうに見つめるロモモの顔があった。

真夜「ロモモ．．．．？」

ロモモ「真夜ちゃん、よかったロモ。ごめんロモ。ロモモ、怖くなつてつい隠れて．．．」

真夜は上体を起こし、ロモモを優しく抱いた。そしてそのまま目を瞑る。

ロモモ「真夜ちゃん？」

真夜「よかった．．．。全部夢だったんだね。本当に怖かった。お父さんもお母さんも村の人たちも子供たちもみんな死んじゃって、私何もできなくて．．．でも夢でよかった。私、疲れているのかな。熱中症になったのかも」

ロモモ「．．．．．真夜ちゃん」

真夜は再びロモモを見た。ロモモは何の言葉を発せず、しばらく真夜に顔を向けていると、やがて目を伏せた。

真夜「ロモモ．．．どうしたの？」

真夜がそう尋ねた瞬間、彼女は周囲を見渡し．．．．．気づいた。真夜の周囲にあったもの．．．．．それは変わり果てた村人たちの姿だった。全員が目を閉じてピクリとも動かない。その中には真夜と仲が良かった子供たちに医療スタッフ．．．そして両親の姿もあった。

真夜「あ．．ああ．．あ．．．！」

真夜は全てを理解した。夢だと思ったことは、全部現実だったことに。

そして彼女のすぐ目の前．．．真夜の目に映ったのは、両目を閉じて永遠の眠りに着いたテッドの姿だった。

真夜「あ．．あああ．．あああああ！」

真夜は両手で自らの顔をくしゃくしゃに？み、涙が溢れた。

真夜「あああああああああああああああああああああああ  
ああつつつつつ！！！！！！」

真夜はその日多くの人々が永遠に眠る中を泣きながら一夜を過  
した。

泣き崩れた後は真夜自身命を絶とうとしたが、ロモモが身を挺し  
てなんとかまぬがれた。

真夜が怒りと悲しみを超えて世界に憎しみを抱き、アルティメッ  
トと出会って、彼とともに闇の中へ消えたのはそれから三日後のこ  
とだった・・・。

## 雨牙真夜の過去（後書き）

シリアスすぎたかな。一応残酷描写は抑えたつもりだけど。次回、プリキュアたちが（と言うよりホワイト家族が）ワンダー・プラネットの秘密に迫ります。

## 推理、そして決意

ロモモの口から真夜の過去を聞いたプリキュアたちは沈黙した。  
沈黙せざるをえなかった。

なんという壮絶な過去。一年前にそんな目に遭ったら、誰だって  
絶望するに違いない。

つぼみは父と母、そして祖母のことを思った。彼女にとって三人  
は一番好きな人たち。その三人が突然あっけなく命を奪われたら、  
つぼみだって世界を憎んだかもしれない。

『・・・キュアブロッサム、ひとつ教えてあげようか？世界つてのは  
ね、あなたが思っているほど単純で美しくできているんじゃないの  
よ。世界って本当はくだらないことで人と人が争って、だまして、  
嘘をついて、それでいて成り上がっていく、醜くて腐りに腐ってい  
くようにできているの。あなたは世界をひとつしか見てないから気  
づかないのよ。そんな世界が未来永劫続いていくっていうのなら・

・・・一度滅びたほうがいいのよ、あんな地球！<sup>ホシ</sup>』

キュアリベリオンになった真夜の言葉がひとつひとつつぼみの耳  
に繰り返し響く。

あの時、かすかに感じた怒りと失望、そして憎しみはその悲劇に  
遭遇したからかと理解できた。

ゆりも父と母のことを思っていた。三年前、こころの大樹を探し  
に行くとき出かけたとき、父は行方知れずになってしまったが、まだ  
彼女には母がいる。それに父もひょっとしたら生きているかもしれ  
ないと希望はあった。だが、真夜にはもう希望はない。どんなに願  
っても、彼女の両親と友達は今もう帰ってこないのだ。彼女と比べた  
ら、自分の不幸などまだ些細なものなのだろうなとゆりは思った。  
ロモモ「真夜ちゃんが消えてから、ロモモはずっと探してたんだ口  
モ。でも世界中を回っても真夜ちゃんの気配すら？めなくて・・・。  
そんな時、たまたまワンダー・プラネットに行った友達の精霊から

テーマパークの中で真夜ちゃんらしき女の子を見たって聞いて、それでロモモはワンダー・プラネットの情報を集めて、今日宇宙船に乗り込んだんだロモ」

かれん「ちよつと待って」

ここでかれんが口をはさんだ。

かれん「あなたの友達の話からすると、つまり雨牙さんは今日だけでなく、『それ以前』にもワンダー・プラネットに来ていたってことよね？雨牙さんがアルティメットと会ったのも、このワンダー・プラネットが開業したのも一年前・・・これって偶然なのかしら？」

ミルク「かれん、どうということミル？」

かれん「招待状が来た時からずっと気になっていたのよ。いくら記念だからって、一枚で無料で何人も入場可能なんてどう考えても優遇が良すぎるわ」

美希「うん。それは私も怪しいと思ってた」

かれん「しかも招待状が届いたのは全員プリキュアなのよ。そして到着してすぐに雨牙さんと謎の敵の登場……。なんだか、まるで私たちが来るのを待っていた気がするのよ。もしこれが全て偶然じゃなく、最初から仕組まれていたとしたら・・・・・・・・」

こまち「かれん、まさか・・・」

かれん「そう。ワンダー・プラネットの開業者はおそらくアルティメット。そしてその目的は私たちを誘き寄せるため」

のぞみ「ええっ、なんでそんなことを！？」

かれん「それは・・・」

ゆり「プリキュアの力を手に入れるため、でしょうね」

かれんの言葉をゆりが継いだ。

ゆり「本人が言っていたでしょう。目的はもうひとつあった、それはプリキュアの力を手に入れること、とね。アルティメットは宇宙を支配するために力を欲しがっていて、私たちプリキュアの力に目をつけた。そして私たちを誘き出すために宇宙にワンダー・プラネットを作った。・・・事実、私たちは来たし、プリキュアの力を奪

われたわ」

りん「でも、私たちを誘き出さなくても、そっちのほうから来れば、もっと早く手に入ったんじゃない……なんて一年もの手間を？」  
ナッツ「……推測だけど、その時まだアルティメットの力はそんなに強くなかったと思うナツ。闇の力は強大だけど、プリキュアの手も負けないくらいの強さを誇るナツ。下手したら、即座に浄化されるのをアルティメットは恐れたとナッツは思うナツ。たぶん、あの娘もきつと最初は強くなかったと思うナツ。いくら前はプリキュアだったとしても、常人が闇の力を使いこなすのはかなりの負担と時間がかかったはずナツ。アルティメットはそれまでどうすればプリキュアの力を手に入れるかを考えて、ワンダー・プラネットを開業し、一年目になって招待状を届けて罫を仕掛けたんだナツ」

いつき「でも、招待状が来たからって、みんな来るとは限らないと思うよ。ボクだって最初は怪しく感じて行こうとする気はなかったんだから」

ほのか「たぶん、みんな来なくてもよかったと思うよ。プリキュアだったら、たとえひとりでもよかったと思う。私となぎさだって以前はふたりだけで戦っていたけど、ポルンやクイーンの力を借りていたとはいえ、ドックゾーンの支配者・ジャアクキングを二回も倒したパワーを持っているもの。まさか本当に全員来るとは思っていなかったかもしれないけど、私たちふたりだけの力でもきつと強い滅びの力へ変えられたと思うよ」

いつき「そうか。なるほど」

ほのか「それに一年も営業していたのは、来た妖精たちに評判を広めてもらうためでもあったんじゃないかな？多くの妖精たちから好評を得れば、やがて噂を通じてプリキュアのそばにいる妖精にも伝わる。現に私たちはメップルから話を聞いて行く気になったわ。みんなもそうじゃない？」

ほのかの言うとおりだった。全員、タルトやシプレなどの妖精たちからワンダー・プラネットの話を聞いて、行くのを決意したのだ。

せつな「つまり、全て計算だったというわけね・・・」

せつなの言葉にみんなは再び沈黙した。

その通り。全てが罠だったのだ。アルティメットにとってはプリキュアがひとりでも宇宙船に乗ってワンダー・プラネットに来れば、あとは思いのままだったのだ。招待状が来た時点で胡散臭さを深く感じていれば防げたかもしれないのに、プリキュアたちはそんなに深刻に考えず全員が来てしまい、その結果戦いに敗れて力を吸い尽くされてしまった。

多少胡散臭さを感じていたとはいえ、いつもそばにいる妖精から評判を聞いて信じてしまったのだから、仕方ないと言えば仕方ないと言えよう。だが、それでも全員口惜しい思いを捨てずにいられなかった。

ロモモ「あの・・・みなさんにロモモからお願いがありますロモ」  
つぼみ「？何ですか？」

沈黙を破ったロモモにプリキュアと妖精たちは顔を向けた。

ロモモ「どうか・・・どうか、真夜ちゃんを助けて欲しいロモ！」  
プリキュアたち「ええっ!？」

ロモモ「確かに真夜ちゃんがやったことは許せないロモ。でも、それでもロモモは前の真夜ちゃんに戻ってほしいんだロモ。もしこのままほついたら、真夜ちゃんは本当に地球を滅ぼしてしまうロモ。それだけは絶対にやめさせなくちゃいけないロモ！お願いロモ。真夜ちゃんを助けてロモ。ロモモは・・・あんな真夜ちゃんはもう見たくないんだロモ！」

ロモモは最後に頭を下げてプリキュアたちにお願いをした。プリキュアたちはほとんどが困ったように顔を合わせあう。できればロモモの願いは聞いてあげたいのだが、変身ができない彼女たちにとどまって真夜を助ければいいのか分からなかった。しかも相手は壮絶な過去の持ち主だ。たとえロモモの願いを伝えたとしても、たぶん聞く耳持たないだろう。  
のぞみ「分かった!」



しかし、ここでのぞみが笑顔で答え、全員が驚きの声をあげた。

祈里「のぞみちゃん!？」

のぞみ「安心して口モモ。私たちがきつと雨牙さんをもとに戻してあげる」

りん「ちょ、ちよつとのぞみ。簡単に言うけど、何か考えでもあるの？」

のぞみ「ぜーんぜんっ!」

りん「やつぱり……。あのねえ、私たちプリキュアに変身できないだよ。それなのにどうやってキュアリベリオンと戦うの？」

のぞみ「じゃあ、りんちゃんはどうするの？」

りん「へっ?」

のぞみ「このまま地球が滅びるのを指くわえて見ているの？」

りん「いやっ……。でも……」

のぞみ「確かに雨牙さんの気持ちは分かるよ。でも、それでも雨牙さんがやるうしていることは間違ってるよ。悪い人たちもたくさんいるけど、私それでも地球のことが好きなんだもん。地球は命だけじゃない。私たちの未来や希望も背負っているの。だから、それを……。それを消せはしない!」

りん「のぞみ……」

のぞみ「それに、プリキュアの力だって永遠に失われたわけじゃないでしょ?あのギガバトルナイザーっていう武器に吸い込まれたままなら、あれを手に入れば取り戻せるんじゃないかな?そうすれば、また力を奪われることもないし」

のぞみの言葉にプリキュアたちは「あっ」と言った。確かに力を吸い込んだギガバトルナイザーを手に入れば、プリキュアの力が戻るかもしれないし、もう吸い取られる心配もない。のぞみの提案は実に単純明快だが、成功すれば希望はまだある。

つばみ「私、行きます!」

つばみが勇気を出して言った。

つばみ「私も真夜さんを助けたいです。たとえ変身できなくても、

私がつくと真夜さんを闇から救ってみせます！」

つばみの言葉を聞いて、他のプリキュアや妖精たちも顔を見合わせてうんとうなずいた。

なぎさ「ま、私もやられっぱなしっていうのも、気が引けるしね」

美希「私も。このまま完璧にかたが付かないと気が済まないわ」

りん「やれやれ。でも、私もそれ同感」

えりか「つばみがそう言っちゃあ、私もやるっきゃないっしょ！」

ひかり「私も、何ができるか分かりませんが、一生懸命戦います！」

シプレ「つばみが行くなら、シプレも行くですう」

コフレ「コフレもがんばるですう」

ポプリ「ポプリだってやるでしゅ」

ポルン「ポルンも行くポポ」

ルルン「ルルンも行くルル」

タルト「よっしゃあ！ほんならみんなで行くでえーっ！」

シフォン「キュアキュア」。プリプー！」

全員が次々と言葉を発し、立ち上がった。まだ身体に痛みが走るが、みな強い目をしていた。

ロモモはぱあつと満面の笑みを浮かべて何度もありがとうとお礼の言葉を繰り返した。

プリキュアたちはそんなロモモにふつと微笑みかけていたが、すぐにまた強い目で互いの顔を見、うなずき合った。

私たちは負けない。絶対に地球を守ってみせる。

その思いだけを胸に刻んで。

その頃、アルティメットは変身を解いた真夜からギガバトルナイザーを借りて、ある場所へと飛んでいた。ようやくその場所に到着し、アルティメットは地面に降りる。

アルティメットの目の前には、草一本も生えていない黒い大地が広がり、周囲には漆黒の闇のカーテンがなびいていた。

アルティメットがいるその場所は、かつてプリキュアたちが戦って敗れていった歴代の怪人たちが眠る「怪人墓場」と呼ばれていた。それは次元の闇や暗い海の底にも通じているという。怪人墓場は百以上の怪人たちが地面の下にしているとあってか、地上に漂う邪気はアルティメットの想像を超えるものであった。

アルティメット「凄まじい……。なるほど、フュージョンやボトムの野郎が来たのも分かるぜ。おうおまえら、まだ暴れ足りないのか？なら、俺について来い。うんと暴れさせてやるぜ！」

そう言くと、アルティメットは手に持っていたギガバトルナイザーを高く掲げる。そしてそのままプリキュアの力が溜まった先端を下へ振り下ろした。

アルティメット「蘇れ！怪人どもよ！」

先端が地面に触れた途端、墓場全体に赤い大きな波紋が広がり、大きく揺れた。揺れは徐々に大きくなっていき、しばらくして墓場の中央からドツクゾーンの幹部たちが地面を突き破り、次々と赤く発光しながら出現した。次にダークフォール、ナイトメア、エターナル、ラビリス、そしてザケンナー、ウザイナー、コワイナー、ホシイナー、ナケワメーケ、ナキサケーベ、ソレワターセ。

怪人たちはいつせいに大地に立つと、再び赤く発光して人魂のような姿に変え、そのままギガバトルナイザーの先端へと飛び込んでいった。膨大な数の怪人たちがギガバトルナイザーに吸い込まれていく。最後の一人が吸い込まれると、アルティメットはギガバトルナイザーを空へと掲げ、高く笑い声をあげた……。

## 推理、そして決意（後書き）

このストーリーを考えた時ほど、プリキュアに一組にひとり知性派がいてよかったなあと思ったことはありません。ホワイト家族って便利だね（ゆりさんはどうかわかりませんが）。次回、ワンダー・プラネットが大変なことになる！

## 滅びの力

ワンダー・プラネットのもうひとつの名物である巨大城。キャッスル

この城の一階と二階は初級から上級までの四次元迷路に挑戦するアクションとして公開されていたが、三階以降は関係者以外立入禁止となっており、階段やエレベーターは入場者には簡単に見つからない仕組みになっていた。それもそのはず、三階以降はアルティメットの指令部、すなわちアジトとなっていたのだ。特に最上階は監視室となっており、テーマパーク内に仕掛けられた五百以上のカメラを通して隅々まで見ることができる。もともと、今はテーマパークのどこもここもが影の亡霊たちやギガバトルナイザーによる巨大竜巻で破壊尽くされ、来場者の妖精たちは全員避難所に逃げたので、電源はOFFにしてあるが。

最上階の真下は大浴場となっており、天井には蠟燭の灯った巨大なシャンデリアが、白い大理石造りの浴室をやわらかく照らしている。窓には真っ白な長いカーテンがかけられ、浴室の隅にはフワフワの白いタオルが山のように積まれていた。

アルティメットが出かけた今、真夜はそのプールのように広い浴槽の湯の中で身体を沈ませていた。

浴槽は大きい、底は浅く、両足を折り曲げて座っても肩から上は出る。真夜は一旦息を吸って湯の中に潜ると、すぐにザバツと水面から顔を出し、首をゆっくりと左右に動かして髪を振り払った。水滴がひとつひとつ、真夜の長い黒髪を伝って湯の中へ戻っていく。真夜は、ぽた、ぽた、とその水滴の音を聞きながらプリキュアたちとの戦いを思い出していた。特に最大必殺技を放つ直前に現れたあの白い妖精……。

一瞬だけだったが、あれは口モモに間違いなかった。かつて自分がプリキュアとして世界を守っていた時のパートナー。一年前にアルティメットと手を組むのを選択した時、彼と別れ、ずっと会って

いなかったが、真夜はロモモのことを今も鮮明に記憶していた。

なぜロモモがここに？と疑問も湧いたが、それ以上の気がかりが真夜の胸中を支配した。それは言うまでもなく、その彼をプリキュアと妖精ともども巨大竜巻で吹き飛ばしてしまったことだった。父と母、そしてテッドやゴザドック村の人たちを失った真夜にとって、はロモモだけが残された家族であり友達でもあった。

その彼を、自分は手をかけた……。それを思うと真夜は少しだけ罪悪感を感じたが、すぐに両目を閉じて頭を振り、それを消し去った。

ロモモに手をかけようがかけまいが、もう自分は後には引けないのだ。たとえ冷徹、非情と言われようと自らを完全な状態におかない限り、真夜の望む優しい世界は完成しない。そのためにもロモモも含めて全ての生き物の命を根絶やしにする。そんなことは一年前に決めたはずだ。何を今さら怖気づいていようか。

ただ……。万が一ロモモが助かっていたとして、すぐそばにプリキュアが一人でもいたら？ロモモは自分の過去を知っている。プリキュアに尋ねられて、べらべら話してしまっている可能性は十分にあるだろう。真夜は今度はそれが心配になった。連中のことだ。また会えればの話だが、きつとひとり残らず、自分に同情の眼差しを向けてくるだろう。特にあのつぼみという子は。同情してほしくなんかない。自分たちには家族も友達もまだ健在なくせに。真夜はそう考えると、プリキュアたちが本当に星になつてくれればいいけどなど本気で願った。

その時、キンコンと、鐘の音が浴場に響き渡り、真夜は目を開けた。

やれやれ、ご主人様がお戻りになられたかと真夜は急いで浴槽から上がってバスタオルをまとうと、脱衣所へ向かった。

真夜は城の最上階へ急ぎ、全ての窓を開けた。最後の窓を開けた

途端、カーテンが大きく翻り、何かが外から飛び込んできた。

アルティメットだった。左手にギガバトルナイザーを握り締めた彼は満足げな笑みを浮かべながら真夜に振り返った。

真夜「一体どこ行つてたの？」

主従関係のはずだが、それにしても無礼な口の利き方で真夜はアルティメットに尋ねた。アルティメットは彼女の言い方をたいして気にもとめず、牙をガチガチ鳴らして凶悪な笑みを浮かべたまま答えた。

アルティメット「怪人墓場だ」

真夜「怪人墓場？」

アルティメット「怪人墓場つてのは、その名の通り、これまでプリキュアと戦い、敗れてきた全ての怪人どもが永遠の眠りに着く場所だ。ちよつと前に俺の知り合いにフュージョンとボトムというやつがいて、過去にその場所で怪人どもを復活させて手下にしようとしたんだが、両方ともまだ力が足りなかったためにフュージョンはザコ、ボトムは幹部クラスだったもののたった十人ぐらいいしか蘇らせなくて、結果、怪人ともどもプリキュアに消滅されやがった。はん・・、無計画に事を進めようとするからだ。だが、俺は違う」

アルティメットはギガバトルナイザーの先端を眺めた。ギガバトルナイザーからはついさつき吸い込んだ怪人たちの邪気や息吹が濃厚に感じられ、時折赤く発光した。

アルティメット「闇の力をもしのぐプリキュアの力を手に入れ、俺は百もの怪人を僕にした。さすがにラスボス級のやつらまでは復活させられなかったが、まあいい。これも一年も我慢してテーマパークなんてくだらんものを続けた甲斐あつてのことよ。これでたとえ今後俺の邪魔をするやつが現れても、怪人を召喚して蹴散らしてやるわ。おまえももしもの時は使え」

真夜「いけないよ、一度負けたやつらなんか。それより、本当にプリキュアと闇の力で全宇宙を無にすることができるの？」

アルティメット「ああ？おう、プリキュアの力は今もこのギガバト

ルナイザーの中で徐々に滅びの力に変わりつつある。疑うのなら見せてやるう」

そう言つて、アルティメットは部屋の窓からバルコニーに出た。仕方なく真夜も続く。

外に出たアルティメットは目の前に広がるアトラクションの数々を眺めていたが、すぐにギガバトルナイザーを持つ手を上空に伸ばした。空は闇のカーテンに未だ覆われ、光は一筋も射していなかった。

アルティメット「滅びの力よ！」

アルティメットはそう叫び、先端を空へ向けたままゆつくりと回し始めた。するとどうだろう。触れてもいないのに上空のカーテンがギガバトルナイザーに掻き混ぜられるかのように渦を巻き始めたのだ。それだけではない。城全体に地震のような揺れが起こり、城壁が瓦礫がれきの雪崩と化して崩れ始めた。当然屋根も崩壊し始め、その中から別の建物が盛り上がるかのように大量の瓦礫がれきをばら撒きながら出現した。

真夜「なっ、これは!？」

気がついた時、真夜はアルティメットともに塔の頂上に立っていた。地上からの高さはおそらく100メートルを超えているだろう。外壁は黒く塗り潰され、窓はひとつもない。ただ、塔はひとつではなくツインタワー様式にすぐ隣にもうひとつ建ち、こちらは高さは80メートルぐらいあった。屋上にはコロセウムだろうか、巨大な闘技場と、闘技場を通して陸橋がふたりのいるこの塔に架けられているのが真夜の位置から見えた。これもギガバトルナイザーの力なのかそれともアルティメットが一年も隠していたのかは分からないが、アルティメットが本気を出したことは容易に理解できた。その証拠にまたもや驚くべき出来事が真夜の目の前で起こったのだ。

アトラクションが、宙に浮いたのである。それもひとつではなく、次々と浮上し、上空の渦に吸い込まれ始めたのだ。あれだけ山のようであったアトラクションが崩壊しながらあつという間に黒い空へ



と消えていく。アトラクションが消えた後は鬼の角のような形状をした岩塊が続々と地面を突き破って出現し、ワンダー・プラネットはゴーストタウンから荒野へと変わろうとしていた。

真夜「これが・・・滅びの力・・・!!」

真夜の肌に戦慄が走る。テーマパークが荒野に変わるまで、その間たったの五分。この力ならば全宇宙を無にしてしまうなど一日もかからないに違いない。

ワンダー・プラネットを荒野へ変えたアルティメットはようやく手を止めた。同時に上空の黒い渦も動きを止め、徐々に消えていく。アルティメットはさらに凶悪な笑みを浮かべると、次の瞬間両腕を大きく広げ、高笑いをあげた。

真夜はその様子を凄いと正直に感じながらも、なぜか胸騒ぎを覚え始めていた。

ワンダー・プラネットの異変は、当然プリキュアと妖精たちも気づいていた。

目の前にあったウォータースライダーが崩壊しながら、上空の渦へ吸い込まれ、周囲に岩塊が次々と出現する。

咲「何？一体何が起こってるの、これ!？」

うらら「アトラクションが、次々と吸い込まれていきます!」

ゆり「アルティメットが遂に計画を動かしたのよ。敵はおそらくあそこよ!」

ゆりが指差した方向には黒い二つの塔が高くそびえていた。

祈里「このままじゃ地球が大変なことになっちゃう!」

ラブ「うん。早く急がないと・・・!!」

プリキュアたちは塔に向かって歩き出そうとした。しかし、タルトが前に来て彼女たちを止めた。

タルト「ちよつと待ってつかあさい!いくら時間がないかてプリキュアにならんで行くんはさすがに無茶やで。ここはわいが助っ人を

呼んでくるさかい、少し待っててくれや」

のぞみ「え？助っ人？」

せつな「タルト、助っ人って？」

タルト「決まっとるがな。あいつらのことや」

タルトが得意そうに言って指を立てると、ココとナッツ、ムーブとフープが途端に得心がいったように顔を合わせて笑みを浮かべた。ムーブ「それなら、ムーブも行くムーブ！」

フープ「フープもついていくフープ！」

ココ「ココたちも行ってくるココ！」

ナッツ「すぐ戻るからみんなはここで待つナツ。シロップ、ナッツたちを乗せるナツ」

シロップ「分かったロブ！」

そう言くと、シロップはポン！と煙を発して、巨大な鳥に姿を変えた。そのシロップの背中にココとナッツ、ムーブとフープ、そしてタルトとシフォンが乗り込む。

ラブ「みんな大丈夫？気をつけてね」

ココ「まかせるココ。みんなこそ無理をしないでここで待ってるココ」

シロップ「行くロブーッ！」

シロップは巨大な翼を羽ばたかせて飛び上がった。シロップの姿はみるみる小さくなり、すぐに見えなくなった。

美希「で、どうする？タルトたちの言うとおりにしてここでしばらく待つ？」

美希の言葉にプリキュアたちはお互いに顔を合わせた。誰もが澄み切った強い目をしている。その顔に迷いはなかった。

かれん「待っている時間はないわ。行きましょう！」

祈里「こうしている間にも、地球が危ないもんね！」

のぞみ「ココたちには悪いけど、早く行かなくちゃ！」

ミルク「ミルクもココ様ナッツ様の命令に背くのは嫌ミル。でも・・」

ポン！と煙を発し、ミルクはくるみに変身した。  
くるみ「間に合わなかったら、元も子もないわ！」  
なぎさ「行こう、みんな！」

そう言ってなぎさが先頭を歩き出し、プリキュアたちは塔へ向かった。

テーマパークを崩壊したアルティメットと真夜は階段を降り、監視室へ戻った。監視室に足を踏み入れた途端、天井に取り付けていたサイレンが鳴り出し、部屋を真っ赤に照らした。

アルティメット「何だ？」

アルティメットはすぐさま壁に取り付けていた大画面モニターのスイッチを押し、画像を映した。

次の瞬間、画像に移っていたのは19人のプリキュアたちだった。もちろん変身はしていないが、全員挑むような鋭い目をしてふたりのいるこの塔へ走ってきていた。

真夜「プリ・キュア・・・？」

アルティメット「ほお。生きていたのか。だが、バカなやつらだ。変身できないくせによっぽど死にたいらしい。ここは我が化身にまかすでしょう」

プリキュアたちの後には妖精たちの姿もあった。真夜はそこからロモモの姿を見つけた。

真夜「（ロモモ・・・！）」

生きていてくれたと、真夜は思わずほっと息を吐いた。

息を吐いた途端、真夜はいつのまにか自分が仲間が生きてくれて安堵していたことに気づき、驚いた。

プリキュアたちは塔まであと数メートルの位置まで来て、足を止めた。

目の前には荒れ果てた大地が広がり、その上に二つの塔がそびえ立つ。プリキュアたちはあはあと呼吸を何回か繰り返した後、ごくりと生唾を飲んだ。

なぎさ「よし、みんな。このまま一気に・・・」

走ろうと言おうとした時、二つの塔の頂上から数弾の火花が発射され、下に降下していった。火花はプリキュアたちの目の前に次々と撃墜していき、炎と黒煙の中から無数の影の亡霊が立ち上がった。なぎさ「あいつらは!？」

ほのか「どうやら、気づかれたみたいね」

くるみ「みんな、どうする？」

ゆり「ひとりでもいい。あの塔の中に入れば、チャンスはあるわ」  
舞「そうね。とにかく塔の中に入ることを考えましょう」

咲「よし!じゃあ行くよーっ!」

咲の声にプリキュアと妖精たちはいっせいに走り出した。同時に亡霊たちも走り出す。

運動神経抜群のなぎさ、咲、りんは捕まえようとした亡霊の手をジャンプするなり足と足の間をスライディングするなりと次々と亡霊たちの間を抜け、塔へと走った。この調子で行けば、なんとか到着できる。三人がそう思った時、後ろから悲鳴が聞こえ、振り返った。見ると、ほのか、舞、のぞみが亡霊の手に捕まり、持ち上げられているではないか。

なぎさ「ほのか!」

咲「舞!」

りん「のぞみ!」

ほのか「なぎさ!私たちのことはいいいから、早く行って!」

ほのかが叫んだ瞬間、亡霊が力を振り絞って三人を空へ投げ飛ばした。三人の絶叫がこだまする。まずい、と思ったなぎさ、咲、りんは急いでダッシュし、三人が投げ飛ばされた地点へ向かった。まさに間一髪。激突寸前でなぎさはほのかを、咲は舞を、りんはのぞみを両腕で抱きかかえた。

咲「舞！大丈夫！？」

舞「ええ！ありがとう咲！」

のぞみ「えへへへ。りんちゃん、ありがとう！」

りん「まったくのぞみは。しょっぱなしからヒヤヒヤさせないでよ」

しかし、ほつしたのも束の間、六人はあつという間に多くの亡霊たちに周囲を囲まれた。ハツとした次の瞬間、六人は亡霊の繰り出した拳に弾かれ、悲鳴をあげながら後ろへ飛ばされた。

ゆり「はっ！」

ゆりは目の前にいた亡霊の拳を両腕でガードした。しかし、亡霊は力が強く、ゆりの身体が押し戻される。プリキュアに変身できればてんで弱い亡霊だが、変身できなければとんでもない強敵だ。

ゆり「（プリキュアに変身できない今の私じゃ、これが限界ね・・・！）」

ゆりはとうとうガードが破られ、亡霊に弾き飛ばされた。

えりか「うわああああああああっっっ！！」

えりかは数人の亡霊たちに追われ、必死に逃げていた。しかし運の悪いことに石につまづいて前に倒れてしまった。急いで上体を起こし、後ろを振り返ると、亡霊たちがジャンプしてえりかに襲いかかるうとしていた。

もうダメだとえりかが思った瞬間、つぼみが急いでえりかの身体を抱えて走り、えりかは亡霊たちの下敷きにならずにすんだ。

つぼみ「えりか、大丈夫ですか？」

えりか「ありがとうつぼみ！」

しかし、そのふたりに向かって巨大な亡霊が片足を上げた。ハツとすると、亡霊の巨大な足が高速でふたりに向かってきた。いつき「はあっ！」

だが、いつきが高く跳んで亡霊の足に蹴りを入れ、ふたりを助けた。バランスを崩した亡霊は後ろざまに倒れた。

いつき「ふたりとも、大丈夫？」

えりか「ありがとういつき！」

しかし、あっという間に三人は亡霊たちに周囲を囲まれた。そしていつせいに巨大なパンチを受ける。三人は悲鳴をあげて後ろへ吹き飛ばされた。

他のプリキュアたちもなんとか亡霊たちの間を通り抜けようと試みたが、いずれもダメだった。すぐに捕まり、後ろへ弾き返される。塔まであと一歩なのに亡霊たちが壁のように立ち並んで侵入を阻止していた。

このままでは地球が……。一体どうすれば……。……。……。プリキュアたちがそう思った時だった。

???「そこまでよ！」

と声が聞こえ、プリキュアたちの目の前に誰かが空から降りてきた。

滅びの力（後書き）

次回、あの人たちが遂に参戦！

## 助っ人参上！

ラブ「あなたたちは・・・！」

咲「満！」

舞「薫さん！」

咲と舞は思わず歓声をあげた。

プリキュアたちの前に現れたのは、戦闘服を身にまとった満と薫だった。しかも戦闘服はダークフォールの一員だった時の灰色の衣装ではなく、黒幕・ゴヤーンとの最終決戦で精霊たちの力を借りた衣装だ。満は月の力を得た黄緑色の羽衣。薫は風の力を得た空色の羽衣。ふたりは大地に立つとプリキュアたちに振り向いた。

咲「ふたりとも来てくれたんだね！」

咲が感激の声で言うと、ふたりは小さく微笑んでうんとうなずいた。

満「咲、舞。話はムーブとフープから聞いたわ」

薫「私たちが道をつくるから早く行って」

ふたりが言うと、咲と舞は強くうなずいた。それを確認し、満と薫は前方の敵へ目を向け、構えを取る。

???「俺たちもいるぞーっ！」

だが、満と薫が戦闘に入ろうとした瞬間、今度は背後から男の轟く声が聞こえた。急いで振り返ると、今度はラブ、美希、祈里、せつなの四人が歓声をあげた。

声の主は隼人だった。隣には瞬もいる。ふたりはラビリンスの一員としてウエスター、サウラーと名乗っていた時の衣装を着ている。だが、敵だった時の黒い服ではなく、改心した時の白を基調とした服だ。ふたりは瞬間移動をしてプリキュアたちの前に現れると、満と薫と同じように構えを取った。

隼人「プリキュア！俺たちも話は兄弟から聞いた！俺たちも手伝うぞ！」



瞬「ここは僕たちに任せて早く行くんだ！」

せつな「ありがとう、ふたりとも！」

せつなが感激して礼を言くと、彼女たちの上空を何かが横切るのが見えた。

シロップだった。シロップは煙を發して巨大な鳥の姿からもとの姿に戻ると、彼の背中に乗っていたココとナッツ、ムーブとフープ、タルトとシフォンともども地上へと着地した。

シロップ「まったく。もとの場所にいなかったから、あわてて来たロプ。間に合ってよかったロプ」

ラブ「ごめんね、シロップ。でも・・・」

ラブは敵を目の前にして戦闘体勢に入っている四人の背中を、目を潤ませながら眺めた。

ラブ「とっても心強いよ。ありがとう」

それはラブだけにとどまらず、全員がそうだった。助っ人の登場にみんなの心に希望の光が灯った。

プリキュアたちは両足に力を込めて立ち上がり、四人の背後から再び塔へ目を向けた。

満「行くわよ！」

満が叫び、四人は影の亡霊たちに向かって走り出した。そのあとに遅れないようにプリキュアたちが続く。

満「はああああああっ！」

満は一番に襲いかかってきた亡霊の腹部に無数の拳を繰り出して吹き飛ばすと、次の亡霊の攻撃をジャンプしてかわし、片手に力を込めた。

満「月の光よ！」

満は手から黄緑色のエネルギー光球を飛ばし、亡霊に直撃させた。亡霊は一瞬にして砂と化する。

薫「天空の風よ！」

薫も両手に力を込め、濃いピンク色の大爆風を起こし、前にいた亡霊たちを一気に三、四体も吹き飛ばした。吹き飛ばされた亡霊た

ちは地上にいた他の亡霊たちの上に撃墜し、さらに七、八体が消滅した。

隼人「うおりゃああああああああっっっ!!」

瞬「はあっ!」

隼人と瞬も満と薫に負けじと奮闘していた。プリキュアたちを襲おうとしていた亡霊たちを拳や鋭いキックで防ぎ、次々と倒していく。四人の活躍のおかげでプリキュアと妖精たちは苦勞することなく徐々に塔へと進んでいった。

ひかり「きゃあっ!」

だが、途中でひかりが亡霊の手に捕まった。なぎさが「ひかり!」と叫び、みんなは足を止めた。満と薫、隼人と瞬も気づいたが、目の前の敵に集中するのが精一杯で助けに行けない様子だった。ぎりぎりとしかりを握る亡霊の手が強くなり、ひかりは悲鳴をあげ苦痛の表情を浮かべた。

???「ドナ!」

その時、どこからか青い光球が放たれ、亡霊に直撃した。亡霊はひるみ、ひかりを離れた。

なぎさ「ひかり!」

なぎさ、いつき、ゆりが走り、それぞれ両腕を伸ばしてひかりを受け止めた。

ひかり「ありがとうございます」

???「怪我はないドナ?」

声が足元から聞こえ、ひかりは下に目を向けた。そこには王冠を頭にかぶり、マントを身につけ、髭を生やした青い妖精が立っていた。その姿を見て、プリキュア5のメンバーは驚きの声をあげた。のぞみ・りん・うらら・こまち・かれん・くるみ「ドーナツ国王!」

すぐそばにはババロア女王、クレープ女王、モンブラン国王もいた。四人の国王はのぞみたちに向き直ると、口を開いた。ドーナツ国王「さ、ここは我々に任せて早く行くドナ!」

クレープ王女「ココリンたちも早く行くクク！」

こまち「えっ、だけど・・・」

ババロア女王「大丈夫口口。わらわたちも国王の端くれ。そう簡単にやられたりはしない口口」

モンブラン国王「行くモモ。そして世界を救うモモ」

のぞみ「・・・分かった。ありがとう、みんな」

そう言つてのぞみたちは前を向いて走り出そうとした。しかしその途端、亡霊の巨大な手が前方から迫り、のぞみを捕らえようとした。

のぞみ「うわあああああつ！」

のぞみをはじめ、メンバーが四方に逃げ出そうとした次の瞬間、突然上空からクリスタルのような巨大な針が亡霊に激突し、砂と化した。のぞみたちが急いで上を見やると、ハチの怪人に姿を変えたブンビーが空中に浮いていた。

のぞみ「ブンビーさん！」

ブンビー「プリキュアッ！私も来たぞーっ！ここは私に任せて早く行けえーっ！！」

のぞみ「ありがとーっ！」

のぞみはブンビーに聞こえるように大きな声で叫ぶと、再び前を向いて走り出した。

数多くの助っ人たちのおかげでプリキュアたちは塔に辿り着くことができた。入り口の扉を探して開け、急いで全員中へ入った。

ブンビーは地上へ降りると、左腕のガトリングから細い針を連射して亡霊たちを次々と消滅させていった。

ブンビー「覚悟しろよおまえら。今日の私は楽しんでいたところを邪魔されて虫の居所が悪いんだ」

しかし、前方の敵ばかりを狙って攻撃していたので、背後に巨大な亡霊が近づいていることに気がつかなかった。ハッと気がついた時にはブンビーは巨大な拳を受けて吹き飛ばされ、地面に叩きつけられた。

ブンビー「あいたたたた……ん？つて、うわっ！？」

ブンビーが背中をさすりながら上体を起こして周囲を見回すと、数多くの亡霊がブンビーに目を向けていた。ブンビーの顔から血の気が引いた次の瞬間、亡霊たちはいっせいに両腕を伸ばしてブンビーに襲いかかった。

ブンビー「うわっひゃあっ！誰か、助けてえーっ！」

ブンビーが両腕で頭を押さえ、目を閉じて叫んだその時だった。

突然、無数のピンクの花びらが周囲に舞った。

「え？」と思つて、ブンビーが目を開けて辺りを見ると、すぐそばに書生服を着た青年が立っていることに気づいた。青年はメガネをかけ、首にマフラーを巻いて、優しい微笑みをしていた。ブンビーが呆然としていると、青年は片腕を上げ、亡霊たちに向けて振り払うかのように伸ばした。すると次の瞬間、ピンクの花びらとともに強い旋風が起き、亡霊たちを吹き飛ばした。

ブンビー「え……えーっ！？」

ブンビーが啞然としている間にも青年は旋風で次々と周囲の亡霊たちを吹き飛ばしていく。最後の一体が吹き飛ばされると、青年はブンビーに顔を向けた。その顔は変わらず微笑みを浮かべていた。

ブンビー「あつ、これはこれは、危ないところをどうも……」

ブンビーがかしこまったような口調で礼を言つと、青年は今度は上空に手を向けた。途端、青年の周囲にピンクの竜巻が起こつて空へ伸び、青年は姿を消した。

あまりの出来事にブンビーはわけも分からず、ただ呆然としていたが、これだけは口にした。

ブンビー「イ・イケメン。若い頃の私にそっくり……」

その頃、つぼみの祖母・薫子は植物園内で椅子に腰掛け、緑茶を飲んでいた。

両目を閉じ、一口すすっていると、ふと何かの気配を感じ、薫子

は目を開けて横の方へと動かしだした。そこには数枚の花びらとともに書生服の青年が立っていた。

薫子「戻ってきたのね・・・」

薫子が言っていると、青年は微笑んだままわずかにうなずいた。

薫子「ありがとう。空さん・・・ううん、コッペ」

薫子は一旦亡き夫の名を口にしたが、すぐに自身がキュアフラワ―だった時のパートナーの妖精の名に言い直した。青年の姿に扮していたコッペはもとの巨大な姿に戻ると、そのまま微動だにしなくなった。

薫子はそんなパートナーの様子を見て、優しく微笑んでいた。

アルティメット「まさか、プリキュアの他にも仲間がいたとはな・・・」

監視室で戦いの様子を見ていたアルティメットは面白くなさそうに腕を組んだ。そのそばに真夜が立つ。

アルティメット「だが、やつらはあとだ。まずはプリキュアだ・・・」

アルティメットは別の画面に目を向けた。そこには塔の内部に侵入し、螺旋階段を上っていくプリキュアたちが映っていた。アルティメットは思わず「ちっ」と舌を打つ。

アルティメット「仕方ない。とつととやつらを始末して来い、キュアリベリオン」

真夜「・・・はい」

そう言っていると、真夜はギガバトルナイザーに手を伸ばした。

触れた瞬間、闇に身体を包まれ、真夜はキュアリベリオンに再び変身を遂げていた・・・。

満と薫、瞬と隼人、四人の国王とプリンビーの活躍によって亡霊は

次々と消滅していった。そしてようやく最後の亡霊を倒し、全員は塔へ目を向けた。

満「行こう薫。咲たちが待っている」

薫「うん」

満と薫は一番に走り出して塔へ向かおうとした。

瞬「待ちたまえ」

しかし、瞬がふたりを止めた。満と薫は足を止め、彼に振り向いた。

薫「何？」

瞬「僕はもう一度避難所に戻ったほうがいいと思う」

隼人「何を言うんだ、瞬!？」

満「そうよ。プリキュアたちは今变身できないのよ。何を考えているの？」

瞬「べつに無理にとは言わないよ。どうしても行きたいのなら行けばいい。でも考えてもみてくれ。ワンダー・プラネットがこうなった今、もう安全な場所なんてない。万が一、今の怪物たちが避難所にいる来場者たちを襲ってきたら、誰が彼らを守るんだ？」

瞬の言葉に、満も薫も隼人も「うっ」と言葉に詰まった。

満「でも・・・、プリキュアもほうっておけないわ!」

瞬「気持ちは分かる。僕もできればそうしたいさ。だが、行ったところでおそらく彼女たちはこう言うだろう。自分たちのことはいいから、避難所にいる人たちを守ってとね」

ドーナツ国王「ふむ。我輩も彼の意見に賛成ドナ。ここは戻って、人々を守ったほうがプリキュアたちも安心すると思うドナ」

隼人「し、しかしだな・・・」

瞬「プリキュアならきつと大丈夫だ。これまでもピンチはあったが、みんなそれ乗り越えてきたんだろう？僕は彼女たちを信じている。变身できなくても、奇跡を起こしてくれるさ」

瞬の言葉に、全員はしばし沈黙した。しばらくして、薫が口を開いた。

薫「分かった。戻ろう」

満「薫!？」

薫「満、助けに行ったところで咲もこう言つと思う。私たちのことはいいから、みのりたちをお願いって……。みのりちゃんにもしものがあつたら、私は咲たちと合わす顔がない……!」

満「薫……。分かったわ。薫がそこまで言うなら。でも……!」

満は瞬に鋭い目で睨んだ。

満「プリキュアにもしものがあつたら、私はあなたのことを一生許さないから!」

瞬「もちろんだ」

隼人「(こいつ、女の子なのにおっかねえな)」

ブンビー「(あゝよかった)。これ以上戦いに巻き込まれたら、私の身が持たん)」

満と薫、瞬と隼人、ブンビーと国王たちはその場を離れ、避難所へ向かった。

助っ人参上！（後書き）

えっ、もう満と薫、南西の出番終わり？と思ったみなさん、ごめんなさい。彼らはあくまでゲストなんです。  
次回、キュアリベリオン再び！



## 再会

助っ人たちのおかげで塔の中に入ることに成功したプリキュアたちは下から見上げただけでめまいがしてしまいそうながい螺旋階<sup>らせん</sup>段を上り続けていた。

一段一段と駆け足で上るが、出口はまだ見えない。息を切らし、一番最後を走っていたつぼみが遂にバテた。

つぼみ「みなさん待ってください。早すぎますっ」

えりか「つぼみ大丈夫？しっかりして」

えりかがつぼみに振り返し、彼女のいる位置に戻って手を貸し、なんとか立ち上がらせた。

つぼみ「えりか」。この塔エレベーターないんですかあ？」

えりか「そんなこと言ってる場合じゃないって。早くしないと置いていかれちゃうよ。さ、ほら。私も手伝うからさ」

つぼみ「ふえええええ……」

つぼみはえりかの手を握って再び走り始めた。が、三分もしないうちにもう息が苦しくなり、足が重く感じるようになった。このままでは真夜に会う前に倒れてしまうと、つぼみがそう思った時、先頭を走っていたなぎさが声をあげた。

なぎさ「みんな見て！出口だよ！」

なぎさが指を指した方向には扉があった。扉はほんのちよつとだけ開いており、隙間からわずかに光が漏れている。確かにあれは出口に違いない。プリキュアたちは全員急ぎ足となって出口に駆け込み、外に出た。

つぼみ「よ……よかった。やっと出られました……」

つぼみはぜは〜ぜは〜と呼吸を繰り返していたが、他のプリキュアたちは目の前に広がる風景に、しばしぼかんとしていた。

なぎさ「何……これ？」

ほのか「たぶん……闘技場ね」

ほのかの言うとおり、プリキュアたちがいたのは巨大な闘技場だった。周囲には人っ子一人もない観客席が広がり、その上にライトがハイビームのように強い光で場内を照らしている。屋根は開き上には黒い空が広がっていた。出口を出た矢先にこんなものが登場して、彼女たちは多少の戸惑いを覚えていた。

かれん「あれを見て！あれって陸橋じゃないかしら？」

しかし、かれんがここで叫んで前方を指したので、プリキュアたちの戸惑いは一瞬にして消えた。

かれんの言うとおり、プリキュアたちのいる位置からずっと向こうに入退場口があり、さらにその先に陸橋が伸びていた。陸橋はもうひとつの高い塔に架けられている。敵はきつとそっちにいるに違いない。

のぞみ「急ごう、みんな！」

と、今度はのぞみが先頭に立ち、駆け出そうとしたその時だった。突然、のぞみの足元が黒く液体化し始めた。ハツとのぞみが気がついた次の瞬間、彼女の周囲に二本の巨大な悪魔の手が生え、鋭く尖った十本の指でのぞみを捕らえようとした。

りん「のぞみ！危ない！」

りんが叫び、のぞみはあわてて戻って悪魔の手から逃れた。獲物を獲り損ねた悪魔の両手は一旦手首をねじらせると、互いに指と指の間に滑らせてガツシリと合わせた。すると次に悪魔の両手は花を咲かせるような形に開いて、その中から真夜、いやキュアリベリオンが姿を現した。片手にはギガバトルナイザーが握り締められている。彼女の登場に、プリキュアたちは思わず身構えた。

リベリオン「よくここまで来たわね・・・と言いたいけど、バカじゃないの？変身もできないくせに、全員気でも狂ったの？」

プリキュアたちは何も答えなかった。代わりに彼女たちの背後に立っていた口モモが前に出て、悲しそうに眉根を寄せた表情で叫んだ。

口モモ「真夜ちゃん！もうやめて口モ！」

リベリオン「！ロモモ・・・」

彼女がロモモに気がついた瞬間、今度はつばみが叫んだ。

つばみ「真夜さん！ご家族やお友達の方々は本当に残念でした。でも、こんなことはもうやめてください！」

リベリオン「！・・・そう。やっぱりロモモから全部聞いたのね。だったらもう理解できたはずよね？私がどれほど世界に絶望し、闇の力を手に入れてこの姿になったか」

つばみ「真夜さんの気持ちは分かります！でも・・・」

リベリオン「私の気持ちが分かる・・・？」

リベリオンは突然ふふつと小さく笑った。しばし笑った後、リベリオンは侮蔑の表情を見せて言い、ギガバトルナイザーの先端を地面にトン、と触れさせた。

リベリオン「どの口がそんなことを言うの？」

次の瞬間、プリキュアたちの周囲に数十本の悪魔の手が現れ、彼女たちを素早く捕らえた。プリキュアたちは悲鳴をあげ、全員悪魔の手に身体を持ち上げられた。

ココ「やめるココ！プリキュアを離すココ！」

はなから戦力外と思ったのか、リベリオンは妖精たちは悪魔の手で捕らえなかった。妖精たちは口々にやめると喚くものの、リベリオンは全く耳を貸さない。妖精たちはできれば何かしらの行動を起こしたかったが、周囲を悪魔の手に囲まれ、身動きできる状態ではなかった。リベリオンは妖精たちの声を無視し、プリキュアたちを見た。

リベリオン「プリキュア、私も最初は世界に希望と未来を託していたのよ。たとえどんなに醜い戦争や差別、そして環境破壊が続いていようと、ひとりひとりが力を合わせて叫べば、きっとその声は届く。何年かかっても、あきらめなければみんな必ず分かってくれるって。お父さんもお母さんも、私も、そう信じてずっと戦ってきたの。でも、どんなに人々が反対の声をあげても戦争も環境破壊も結局は始まるし、また無駄に多くの命が失われていく。あまつさえに

はそんな活動を疎ましく思った人によってリーダーが暗殺されることすら起きたのよ・・・！」

リベリオンは唇を噛んだ。

リベリオン「おかしいでしょ。なんで正しいことをしている私たちが嘲笑われ、石を投げられるの？どうして自分たちがやっていることが自分の首を絞めていることだと分かっている人もいるのに、やめないの？どうしてプライドや欲望とかに変にこだわって争いを始めて、人命を尊重しないの？・・・私は世界中を巡って様々な現実を見てきたわ。でも、それでも希望は捨てなかった。お父さんとお母さんがこんな世界を変えるためにがんばっていたから、私もあきらめなかった。でも、お父さんとお母さんが死んだあの日、私は気づいたのよ。どんなにがんばっても、人の心に最初から持っている欲望や偏見がなくならない限り、世界は変わらないって。だから・・・」

リベリオンはまるで愛しい者を慈しむような目で再び笑みを浮かべた。

リベリオン「だから私は今の世界を消して、新しい世界をつくらうと考えたのよ。全ての命を消して、変な欲望もプライドも偏見も持たない、互いに助け合って分かち合える心だけを持つ新しい人間を生み出せば、もう争いも不安もない調和の取れた平和で優しい世界ができるって・・・」

つぼみ・えりか「それは違う！」

と、つぼみとえりかがここで叫んだ。リベリオンは言葉を切り、悪魔の手に握り締められているふたりに目を向けた。

つぼみ「真夜さんが言う新しい世界は、優しい世界ではありません。それは、優しさを強要した世界です！」

リベリオン「・・・なに？」

つぼみ「確かに戦争も差別もない平和な世界になったら、どんなに素晴らしいかと思います。でも、困っているところを差し伸べるだけが優しさではありません。見守る優しさだって必要です！」

リベリオン「見守る優しさ？」

えりか「そうだよ。時には見守らないと、人は自分の力でがんばろうとしないし、自分で自分の悪いところに気づかないじゃん。自分で気づくからこそ、どうすれば直せるかを考えられるし、そのために行動することもできるし、そうすることで人はもつと成長することができるんだよ！なのに、助けたり助けられっぱなしの世界じゃ、誰も自分の悪いところを見つけて直すことができないじゃん。私はそんな世界なんか住みたくないよ！」

リベリオン「でも、今の世界でもどうしてこんな単純なことが分からないのかと思うほど、最後まで過ちに気づかない人間もいる。そいつが気づくまで悠長に待っていたら、また多くの罪のない命が失うわ！」

えりか「確かに、待つだけではなくその人が自分で気づけるように時には訴えて戦うこともあると思うよ。でも間違いに自分で気づいてやり直すことは、人間にとつてとてもいいところなんだよ！その人たちのためにも、もう少しチャンスをあげてもいいじゃん！」

リベリオン「黙れ……。戦争や環境破壊を起こし続ける人間が自分で過ちに気づくなど絶対に来ない。人間の心に自己中心的闇が支配している限り、世界は変わらない」

つぼみ「いいえ！いつか必ず来ます！歴史を振り返ってみてください。日本が平和憲法を作り、二度と戦争はしないと決めたのも、過去に戦争に負けて戦争の恐ろしさと悲しさ、そして愚かさを十分知ったからでしょう！世界各地で肌が黒い人への差別が年を重ねるごとに著しく減っていったのも、誰かがおかしいと気づいて反対運動を長く続けたからでしょう！近年、世界中の人たちが環境対策に乗り出したのも、人が環境を破壊しすぎてこのままではいけないとようやく気づいたからでしょう！時間はかかったうえに多くの命が失われましたけど、それでも世界は少しずつ良い方向へ進んでいるんです！どうして真夜さんは悪いところばかり見るんですかっ！？」

リベリオン「だ・黙れ」

リベリオンの口調に少しだけ語気が強まった。語気だけでなく、ギガバトルナイザーを握る手にも力が入り、震えが来る。自分が語った優しい世界を否定されたうえに説教の一言一言に彼女の中で怒りが湧きあがっているのだ。

つぼみ「世界をひとつしか見ていないのは、真夜さんのほうでしょう！」

リベリオン「黙れ」

つぼみ「あなたはただ、ご家族とお友達を失った怒りと悲しみを世界にぶつけているだけなんです！」

リベリオン「黙れえーッ！」

リベリオンは遂にキレ、怒気を込めた叫びをあげた。と同時に、つぼみとえりかを捕らえていた悪魔の手に力が入る。締めつけられたつぼみとえりかは苦痛の表情を浮かべ、悲鳴をあげた。  
シプレ・コフレ「つぼみ！えりか！」

プリキュアと妖精たちがふたりに注目する。両方とも二人を助けたかったが、プリキュアたちも同様に悪魔の手に身体を握り締められ、妖精たちは悪魔の手に囲まれて身動きひとつもできなかった。  
リベリオン「どうせみんなここで死ぬのよ。まずあなたたちから始末してやるわ！」

リベリオンは目を鋭くし、ギガバトルナイザーにさらに力を込めた。つぼみとえりかの絶叫が闘技場内に大きく響き渡る。

ロモモ「真夜ちゃん、やめるロモッ！」

その時、ふたりの様子を見かねたロモモが背中中の羽を動かして飛び上がった。ロモモは捕まえようとした数本の悪魔の手をかわすと、一直線にリベリオンに向かい、彼女の顔面に貼りついた。

リベリオン「なっ!？」

リベリオンは驚き、急いでロモモを顔から引き離そうとした。しかし、どんなに強く引っ張ってもロモモは離れない。リベリオンがロモモに悪戦苦闘している間、ギガバトルナイザーに込めている力がゆるみ、同時につぼみとえりかを握り締めていた悪魔の手の手も

ゆるんだ。

その頃、カメラを通して様子を見ていたアルティメットはあきれたように片手を目にやった。

なにやってるんだ、あいつは。

とつとと始末して来いと言ったのに、モタモタとした挙句、まだ子供の妖精なんぞに苦戦してとんだ醜態を見せるとは。

もう潮時かもしれねえな。

アルティメットはそう思うと、目から手を離した。

その一瞬、白い両目が赤く灯り、消えた。

リベリオン「離せロモモ。真っ先に逃げた臆病者が！」

ロモモ「そうロモ。ロモモはあの時怖くなって一番に逃げて隠れてしまったロモ。ロモモはそれをずっと後悔していたロモ。だから今度は逃げないロモ。真夜ちゃん、もうやめてロモ。こんなことやっても真夜ちゃんのお父さんもお母さんもテッド君も誰も喜ばないロモ！」

リベリオン「死んだ人間の気持ちなんて知らないわよ！私は人間の心なんてものは、一年前に捨てたわ！」

ロモモ「そんなはずないロモ！真夜ちゃん、もとに戻ってロモ！」

リベリオン「うるさい！とつとと離せ。このっ・・・！」

と、遂にリベリオンはロモモを顔から無理やり引きはがした。そして怒りにまかせ、彼女はロモモを強い力で投げ飛ばした。

ロモモ「ロモッ！？」

投げられたロモモはそのまま地面に頭から叩きつけられた。

プリキュアたち「ああっ・・・！！！」

リベリオン「あっ・・・！！！」

プリキュアと妖精たち、そして投げつけた張本人であるリベリオ

ンも両目を大きく見開いた。

フラッピ「ロモモ、大丈夫ラピ!？」

ロモモ「大丈夫・・・ロモ」

ロモモは両腕を支えにして一旦は立ち上がったが、すぐにころつと地面に突っ伏した。小さな身体だけにそうとうなダメージを受けたようだ。

えりか「あんたよくも・・・!」

つぼみ「許しません・・・っ!」

ロモモへの仕打ちを見たつぼみとえりかの中にわなわなと怒りがマグマのように沸騰し始めた。特につぼみは同時にもとパートナーでもある妖精にそんなひどい仕打ちをしてまでもそんなに世界を滅ぼしたいのかとリベリオンに対して情けなさも込みあがり、目頭に涙が溜まった。

つぼみ「ロモモは真夜さんが消えてから一年もの長い間真夜さんを探していたんです。そして今日、必死の思いで真夜さんに会いに来たんです。それなのに・・・」

えりか「あんたはそんなロモモの思いや訴えに聞く耳を持たなかった拳句、ロモモを傷つけた。こんな小さな子まで傷つけてもあんたは平気だつて言うの? だったら・・・」

つぼみ「私、私・・・!」

次の瞬間、ふたりはいっせいに叫んだ。

つぼみ「私、堪忍袋の緒が切れましたーっ!!!」

えりか「海より広いあたしの心もここらが我慢の限界よっ!!!」

その時だった。

ギガバトルナイザーの両方の先端が虹色に輝き始めたのだ。輝き始めると同時にギガバトルナイザーはカタカタと震え始め、震えはさらに大きくなった。

リベリオン「(なに・・・?)」

リベリオンは両手で? むが、震えはおさまらない。それどころか、さらに大きくなっていく。



リベリオン「（抑えきれない・・・！）」

リベリオンとギガバトルナイザーの様子を見ていた妖精たちは一瞬何が起きたのか分からなかった。しかし、すぐに理解し、互いに顔を見合わせた。

シプレ「あれはきっとプリキュアの力ですう」

コフレ「ギガバトルナイザーの中にまだ残っているプリキュアの力がつぼみとえりかの思いに応えて共鳴を起こしているんですう」

ポプリ「もう少しでしゅ」。がんばれでしゅ」

つぼみとえりかは互いに顔を見、うんと強くうなずくと、次の瞬間声を揃えて大きく叫んだ。

つぼみ・えりか「プリキュアの力よ！私たちに力を貸して！！」

ふたりが叫んだ瞬間、先端から桃色の光と青い光が飛び出した。ふたつの光は高速で一直線にふたりに向かうと、次の瞬間、光はふたりに直撃した。つぼみは桃色の光を。えりかは青い光を。ふたりが光をまとうと、ふたりを捕らえていた悪魔の手が塵となって徐々に消滅し始めた。

自由となったつぼみとえりかは驚愕の表情をして目を見開いている他のプリキュアと妖精たち、そしてキュアリベリオンの目の前でゆっくりと地上へ降りていく。そして地上に着地した瞬間、光はふたりの身体から消えた。

光が消えた瞬間、そこに立っていたのはつぼみとえりかではなく、キュアブロッサムとキュアマリンのプリキュアの姿だった。

両者は驚きを隠せない状態のキュアリベリオンに目を向けると、さっと身構えた。

再会（後書き）

次回、反撃開始。

## 反撃

真夜はキュアリベリオンとして初めての戸惑いを覚えていた。

自分の目の前でプリキュアが復活したのである。たったふたりとはいえ、まさかこのような事態になるとは思ってもいなかった。

失態だ、とりべりオンは思った。早く始末して来いと主に言われたのに、優しい世界と今の世界の存在意義について言い負かされたうえにプリキュアを復活させてしまったとあっては、もはや責任は逃れられないだろう。これ以上の失態が起きる前に素早く收拾をしなければならぬ。リベリオンはギガバトルナイザーを構え、ブロッサム、マリンと対峙した。プリキュアと妖精たちはその様子をじっと見守る。ロモモも両腕を立てて上体を起こした状態で三人の様子を見つめ続けていた。

ざざざつ、と三人の周囲に風が吹く。

・・・・・・・・・・・・・・・・  
・・・・・・・・・・・・・・・・  
・・・・・・・・・・・・・・・・

風が止んだ瞬間、三人は同時に動いた。

ブロッサム「はあっ！」

まず、ブロッサムがリベリオンに拳を放った。リベリオンはそれをギガバトルナイザーで防ぐ。すると、背後からマリンがキックを仕掛けた。

リベリオン「ふんっ！」

だがリベリオンはそれをかわすと、マリンの胸に手をかざし、波動を放った。マリンは悲鳴をあげながら高速で後ろに弾き飛ばされ、壁に叩きつけられた。

ブロッサム「マリン！」

リベリオン「どこ見てるの」

リベリオンの声にハッと振り返った瞬間、ブロッサムは腹部をギ

ガバトルナイザーの先端で殴打され、同様に壁に激突した。だが、今度はふたりとも眠りに着きはしなかった。手と足に力を込めてすぐに立ち上がると、ブロッサムは前から、マリンは後ろから声をあげながら駆け出し、リベリオンに迫った。

リベリオン「はっ！」

だが、リベリオンはギガバトルナイザーを両腕で回転させると周囲を先端で素早く振り払った。その瞬間、強力な衝撃波が発生し、大量の破片と飛礫が飛び散る。衝撃波を受けたブロッサムとマリンは両腕で顔をガードし、足に力を込めて踏ん張ったが、すぐに耐えられなくなつて再び吹き飛ばされ、もとの壁に叩きつけられた。苦痛に顔を歪ませるブロッサムを見て、リベリオンは蔑むように言った。

リベリオン「無駄よ。あなたたちがどんなにがんばったところで、私には勝てない」

ブロッサム「っ、強い・・・！」

マリン「一体、どうすれば・・・」

ブロッサムとマリンは思わず唇を噛んだ。口惜しいが、リベリオンは本当に強い。せっかく復活できたのに、このままではまた無残に負け、力を吸い取られてしまう。

シプレ・コフレ「ブロッサム！マリン！これを使うですうー！」

その時、シプレとコフレがブロッサムのほうへ飛んできた。そして多くのこころの種が入ったココロポットを差し出した。

ブロッサム「！これは・・・」

ブロッサムは悪魔の手に捕らわれたままのゆりに振り向いた。ゆりもブロッサムに目を向き、それを使いなさいと言うふうに小さくうなずいた。その瞬間、ブロッサムは全てを理解した。ふたりがりベリオンと戦っている間にゆりはなんとか自身の変身アイテムでもあるココロポットをシプレとコフレに渡し、シプレとコフレも悪魔の手の中を通り抜けてブロッサムとマリんに託したのだ。

ブロッサム「ゆりさん、ありがとうございます！」

ブロッサムはココロポットを手にとった。途端にココロポットからふたつの赤い種が飛び出す。ブロッサムはそれを指でキャッチした。

リベリオン「何をする気？リベリオン・ウィップ」

その様子を見て勘付いたリベリオンが先端をブロッサムに向け、白い放電を飛ばした。シプレとコフレはあわてて逃げ、ブロッサムも急いでその場を離れると、放電は彼女のいた壁に直撃した。リベリオンは先端を横に振り払うと、放電もそれに合わせて横ざまに動いて壁を切り刻み、大量の破片を降らせた。放電は逃げるブロッサムに背後から徐々に近づいていく。そして遂に放電が彼女の身体に巻きつこうとした次の瞬間、ブロッサムは高くジャンプし、放電をかわした。

リベリオン「なに！？」

ブロッサム「マリリン！」

ブロッサムはマリリンに向かって片方の赤い種を飛ばした。

マリリン「オッケー！」

マリリンは種をキャッチし、ブロッサムが着地するのを確認すると、変身アイテムの香水瓶の中にしまった。

ブロッサム・マリリン「レッドの種の聖なるパフューム！シュシュツと気分でスピードアップ！」

ふたりは赤い香水を全身にかけると、次の瞬間身体が赤く発光した。

リベリオン「何なの！？」

わけが分からずリベリオンが戸惑っていると、ブロッサムとマリリンは彼女の視界から姿を消した。

リベリオン「なっ・・・！？」

リベリオンは突然の出来事に驚いた。だが次の瞬間はさらに彼女を驚かせた。ブロッサムがすぐ目の前に現れたのである。リベリオンが大きく目を開くと、ブロッサムは拳を硬く握り締めて振り上げた。リベリオンは急いでギガバトルナイザーで防ぐ。しかし今度は

ブロッサムに隣にマリリンが現れ、身体を一回転させると、リベリオンに鋭い蹴りを繰り出した。リベリオンは思わず片手で受け止めたが、あまりの攻撃力に弾かれ、五歩も後退した。

リベリオン「（私が押されている・・・！？）」

信じられない気持ちで前を見ると、ブロッサムとマリリンは再び彼女の視界から消えていた。またもや驚き、左右を見渡したその時、背後に気配を感じて急いで振り返った。振り返った途端、リベリオンの目にブロッサムとマリリンの顔が映った。

リベリオン「（速い・・・！）」

リベリオンがそう思った瞬間、ブロッサムとマリリンが素早く彼女の腹部に手をかざし、桃色の光と青の光を発生させた。

ブロッサム・マリリン「プリキュア！ダブル・シュート！」

次の瞬間、ブロッサムとマリリン、そしてリベリオンの間で爆発が起こり、煙が四方へ広がった。リベリオンは初めて悲鳴をあげて、背中から地面に激突した。

リベリオン「（バカな！？）」

ギガバトルナイザーを支えに立ち上がった瞬間、またもや目前にブロッサムとマリリンが現れ、拳を振り上げた。まずい、と思ったりリベリオンは瞬間移動をして二人の背後に回ると、ギガバトルナイザーを高く振りかざした。だがギガバトルナイザーは空を斬った。リベリオンの目が再び見開いた瞬間、彼女はすぐ後ろに現れたブロッサムとマリリンに背中を殴られ、地面に倒れた。

リベリオンは攻撃力こそ強いが、動きが素早い相手に対しての鍛錬は行っていなかったようだ。さっきまでの強さが嘘のように、ブロッサムとマリリンのふたりにコテンパンにされていく。自身も瞬間移動をして相手を惑わすのが得意だが、ブロッサムとマリリンのほうがさらにスピードが上だった。

リベリオン「（くっ・・・。そっちがその気なら、こっちにも考えがある）」

だが、リベリオンもいつまでもやられっぱなしでいなかった。ギ

ガバトルナイザーを振り上げ、再び周囲に衝撃波を発生させる。リベリオンに攻撃を仕掛けようとしたブロッサムとマリンはまたもや衝撃波を受けて撥ね飛ばされ、壁に叩きつけられた。

今だ、と思い、リベリオンは先端を地面に触れさせた。途端にふたりの目の前に巨大な悪魔の両腕が生える。ふたりは急いで逃れようとしたが、悪魔の両腕はそれよりも早くふたりを捕らえ、身体を締めつけた。

マリン「くっ……」

ブロッサム「あああっ！」

ふたりの悲鳴が再び場内をこだまする。ふたりの様子を見て、リベリオンは第三者が見たら瞬時に凍てついてしまいそんな冷笑を浮かべた。

リベリオン「どんなに速く動けても、捕らえられたら意味ないですよ……今、とどめを刺してあげるよ……」

そう言つと、リベリオンはギガバトルナイザーを空に高く掲げ、ゆっくりと振り回した。振り回すと同時に黒い旋風が集まり、加速し始める。

こまち「あれは……！」

なぎさ「や、やめろぉっ！」

捕らわれていたプリキュアたちが気づいて口々に叫んだが、リベリオンは聞く耳持たない。遂にパワーが最高潮に達し、彼女は先端を素早く振り下ろした。

リベリオン「リベリオン・トルネード！」

ゴオッ！という音と同時に黒い巨大竜巻が発生し、凄い勢いで悪魔の両腕に捕らわれていたブロッサムとマリンに接近し、あっという間にふたりを呑み込んだ。

プリキュアと妖精たち「ああっ……」

ロモモ「ロモッ……」

巨大竜巻は高速で回転しながら上空へと伸びていく。竜巻が消えた時にはもうふたりの姿は影も形もなくなっているだろう。リベリ

オンはそう確信し、笑みを浮かべ続けていた。これで收拾がつく。そう確信して。だが竜巻が消滅した瞬間、彼女の邪悪な笑みは一瞬で消えた。

ふたりは、生きていたのだ。ブロッサムとマリンは全身傷だらけになっていたものの、互いに手を繋いで体勢を低くし、足に力を入れて地面に這い蹲り、巨大竜巻の中を乗り切ったのである。

リベリオン「まさか・・・あれを耐え切ったって言うの!？」  
リベリオンはただただ驚くばかりだった。一体、このふたりのどこにそんな力があるというのか。

ブロッサムとマリンは体勢を起こし、前を見ると、声を揃えて叫んだ。

ブロッサム・マリン「私たちは、絶対に負けない!!」

言い終えると同時にふたりはエンブレムからフラワータクトを召喚し、手に取った。

ブロッサム・マリン「集まれ!二つの花の力よ!」

タクトを振り、フォルテシモ記号を周囲に描いてピンクとブルーのエネルギーを身にまとう。

ブロッサム・マリン「プリキュア!フローラルパワー・フォルテシモ!」

ふたりは身体を上昇させると、高速でリベリオンに突撃した。

リベリオン「くっっ・・・!」

リベリオンは両腕でギガバトルナイザーを回転させ、ふたりの技を防いだ。周囲にドリームの技とぶつかった時以上の電撃と衝撃波が発生する。リベリオンはギガバトルナイザーに力を込めてふたりを吹き飛ばそうとするが、ふたりの技の力も強くて弾き返せない。

ブロッサムとマリンもそれは同様に感じていた。プリキュアの技を簡単に弾き返すギガバトルナイザーの力は強大だ。だが負けてはならない、負けたくないという思いがふたりの中を駆け巡り、ブロッサムとマリンは声を大きくあげた。

ブロッサム・マリン「はあああああああ・・・はあっ!!」



リベリオン「なっ!？」

次の瞬間、再び三人の間で爆発が起きた。煙と爆風、電撃が周囲に飛び散る。そして・・・、高く吹き飛ばされたのはリベリオンのほうだった。

リベリオン「ああっ!」

リベリオンは壁に亀裂が入るほど強く叩きつけられると、そのままずずつとその場に座り込んだ。同様に吹き飛ばされたギガバトルナイザーも地面に垂直に突き刺さる。その瞬間であった。

再び、両方の先端が虹色に輝き始め、光が次々と飛び出した。光は捕らわれているプリキュアたちに次々と直撃し、彼女たちは光に包まれ、全ての悪魔の手を塵と化しながらゆつくりと地上に降り始めていく。全員が着地した途端、彼女たちはみなプリキュアの姿に変身していた。メップル、ミップル、ポルン、フラッピ、チョッピも変身アイテムに姿を変え、それぞれブラック、ホワイト、ルミナス、ブルーム、イーグレットの身体に装着した。

ブロッサム「みなさん! みなさんも変身できたんですね!」

ブルーム「うん! ありがとう、ブロッサム! マリン!」

ルージュ「やゝ、一時はどうなるかと思ったよ」

レモネード「でも、これでまた戦えます!」

ピーチ「よかったね!」

プリキュアたちはお互いに顔を見合わせ、笑顔で喜び合った。

プリキュアたちが喜び合っている一方で、リベリオンは地面に目を向けたまま、何もない虚空を見つめ続けていた。

負けた。この私が・・・。

無言のまま、全身にショックが広がり始める。

嘘だ。絶対的な闇の力を手に入れた私が負けるはずがない。

でも、このままだとやられる。やられる。やられる・・・。ならば・・・。

やられるまえにやれ。やられるまえにやれ。やられるまえにやれ。やられるまえにやれ。やられるまえにやれ。やられるまえにやれ。やられるまえにやれ。やられるまえにやれ。

やられるまえにやれ。 やられるまえにやれ。 やられるまえにやれ。  
やられるまえにやれ。 やられるまえにやれ。 やられるまえにやれ。  
やられるまえにやれ。 やられるまえにやれ。 やられるまえにやれ。  
やられるまえにやれ。 やられるまえにやれ。 やられるまえにやれ。  
やられるまえにやれ。 やられるまえにやれ。 やられるまえにやれ。

殺<sup>や</sup>られる前に殺<sup>や</sup>れ！

その時、リベリオンの全身から黒い炎のようなものが上がった。  
プリキユアたちが彼女の異変に気がついた瞬間、リベリオンが音  
もなくゆっくりと立ち上がり始めた・・・。

反撃（後書き）

次回、決着！？

## 絶望の闇、希望の光（前書き）

キュアムーンライトの変身バンクが想像と少し違っていたので彼女の部分だけ改訂しました。

## 絶望の闇、希望の光

リベリオンの異変に、まずパッションが気づいた。他のプリキュアたちも気づき、彼女に振り返る。

リベリオンは頭を垂れたまま、一言も漏らさず、静かに地上に立ち上がった。ふいに彼女の全身を包んでいた黒い炎のようなものが消える。そして彼女がゆつくりと頭を上げた瞬間、プリキュアたちは思わず息を呑んだ。

彼女の両目に瞳はなかった。それどころか異常なほど真っ赤に染まっていたのである。明らかに人間の眼ではない。例えるならエサの取り合いで野獣同士が敵意を向け合う眼だった。

ブロッサム「真夜・・・さん？」

リベリオンの様子を見て、ブロッサムの全身に、震えが走った。リベリオンの身体から思わず息が詰まるほどの邪悪さが放たれる。その威力に、ブロッサムだけでなく他のプリキュアたちも思わず一歩後退した。そして次の瞬間、リベリオンの姿が彼女たちの視界から消えた。

「え？」と思った途端、ブロッサムは背中強い衝撃を受けた。リベリオンの背後に現れ、ブロッサムに鋭い蹴りを放ったのだ。ブロッサムは「ああっ！」と叫んで前に倒れると、リベリオンは近くに立っていたアクア、ドリーム、ルミナス、パインを一気に強力な波動で吹き飛ばした。

ブラック「くっ・・・！」

なんとか暴走を止めようとブラックとホワイトが彼女の両腕を？み、抑えようとする。だがリベリオンは力づくで両腕を振り切ると、回転してふたりを蹴り飛ばした。

サンシャイン「プリキュア！ゴールドフォルテバースト！」

力づくでダメならサンシャインがシャイニータンバリンを取り出して無数の光弾を発射する。光弾でリベリオンの動きを止め、抑

えるつもりなのだ。だがリベリオンはサンシャインの技を瞬間移動でかわすと、彼女の顔に目がけて拳を繰り出した。サンシャインは片腕でガードしたが、あまりの威力に身体が撥ね飛ばされた。

リベリオンはその後ブルーム、イーグレット、ローズを波動で弾き飛ばし、ルージュ、レモネード、ミント、ピーチ、ベリー、パツシオン、マリン、ムーンライトを瞬間移動で惑わすと不意打ちで彼女たちを次々と地面に叩きつけた。全員を倒したりリベリオンは両腕を震わせながらもなお立ち上がるうとするブロッサムに気がつく

と、彼女の前へと歩き、右手をガツと開いて彼女の首を？んだ。  
ブロッサム「くっ・・・あっ・・・！」

首を？むリベリオンの手に力が入り、ブロッサムの身体が宙に上がる。ブロッサムは歯を食いしばり、リベリオンの手に両手を重ねて外そうとしたが、敵わなかった。

ブロッサム「真夜・・・さん、やめ・・・て・・・くだ・・・さい・・・」

かすかに目を開け、リベリオンに声をかけるブロッサム。だが、両目を真っ赤にし、本能だけで動いている彼女にブロッサムの声は届いていなかった。呼吸が困難になり、徐々にブロッサムの意識が遠のいていく。

リベリオンの突然の異変に妖精たちも理解できずに驚き、ただ見ていることしかできなかった。

ルルン「このままだとブロッサムが危ないルル！」

ムープ「でも、あの娘に一体何が起こったムープ？」

ここで状況を観察していたナッツの頭の中にひとつの考えが浮かんだ。

ナッツ「闇の力ナッツ！キュアリベリオンの中にあつた闇の力が暴れだして制御できなくなつたんだナツ。今のキュアリベリオンは完全に闇の力に乗っ取られているナツ。このままだとプリキュアが倒されるばかりか、あの娘ももとに戻らなくなるナツ！」

口モモ「そんな、真夜ちゃんが・・・！？」

ロコモはリベリオンを再び見た。もはや闇に意識を取り込まれたリベリオンの表情には残酷な笑みさえ見え隠れしていた。このままでは真夜はキュアリベリオンでもない、完全に知らない人間に変貌してしまう。

ロコモ「真夜ちゃん、やめて・・・やめるロモーツ!!」

ロコモは唇を噛んでギュツと目を瞑り、絶叫した。その時だった。ロコモの全身からまばゆい白い光が炸裂した。もの凄い光だった。彼から発せられた光はそのまま場内の隅々まで行き渡り、全てを包み込む。

当然プリキュアと妖精たち、そしてキュアリベリオンも光に覆われ、あまりのまぶしさにリベリオンはブロッサム首を絞めていた手を離れた。

リベリオン「うっ・・・ああ・・・っ!」

全身を光に包まれ、彼女の中を支配していた闇が悲鳴をあげた。急いで身体の外に飛び出し退散しようとするが、すでにまばゆい光を大量に浴びて闇は消滅した。

リベリオン「う・・・。私は、私は・・・?」

リベリオンは意識を取り戻した。真っ赤な両目がもとの黒い瞳に戻った。と同時に光も消え始め、全てロコモの中に戻っていった。

ロコモは光を自分の中に抑え込むと、リベリオンの前へ飛んだ。

リベリオン「ロコモ・・・」

ロコモ「真夜ちゃん、周りを見るロモ・・・」

悲しそうに眉根を寄せた表情のままロコモが言った。ロコモに言われ、リベリオンは周囲を見渡す。そしてハッと息を呑んだ。

彼女の周囲には19人のプリキュアが座り込んでいた。全員至る所に怪我をしている。ある者は腕を、ある者は肩を、ある者は腹部に手をやり、苦痛あるいは事の成り行きを見守るような表情で彼女に目を向けていた。

ロコモ「これ全部真夜ちゃんがやったんだロモ」

リベリオン「私・・・が?覚えていない」

口モモ「真夜ちゃんは闇の力に操られていたんだ口モ。真夜ちゃん、もう気づく口モ。怒りや憎しみに我を忘れたら、もう真夜ちゃんは真夜ちゃんじゃなくなってしまう口モ。自分を忘れて、たくさんの人たちを死なせてしまったら、真夜ちゃんはお父さんとお母さん、テッド君や村のみんなを殺したあいつと同じになってしまう口モ！」

その言葉に、激しい心の揺れが真夜を襲った。息が止まりそうになった。

リベリオン「そ．．．そんな、違う。私は、私は．．．．．ううん、違う．．．．．」

リベリオンは遂に認めた。彼女はやつと気づいた。自分がやろうとしていること、それは大切な人を突如奪われた理不尽さから生まれた怒りと悲しみ、そして憎しみによる復讐心に操られたものであり、彼女はそれを正しい行為と認識していたが、所詮はただもともと不満を抱いていた世界に対して八つ当たりをしているだけだったのだ。彼女のやろうとしていることは、誰が見ても理不尽極まりない。それでは両親やゴザドック村の人々を殺した両目の赤い男と大差なかった。

足の力が抜けた。リベリオンはその場にしゃがみこんだ。

もはや限界だった。彼女の目から涙が溢れ出した。

リベリオン「うううううう．．．ひつく．．．うええ．．．」

涙の粒がひとつひとつ地面にこぼれていく。彼女は両手で目頭を覆った。

リベリオン「．．．本当は、本当は、心のどこかで気づいていた。自分がやっていることは間違っているんじゃないかって。こんなことをしても優しい世界なんて作れないんじゃないかって．．．。でも、でも、どうしても許せなかった。世界が不安定じゃなかったら．．．せめて戦争さえなかったら、お父さんもお母さんもみんなも死なずに済んだかもしれないって．．．。私、私．．．．．」

泣きじゃくるリベリオンを見て、ピーチが立ち上がり、前に出た。ピーチ「雨牙さん．．．ううん、真夜さん、私ね、スペースホークに



乗って宇宙に出た時、窓から地球を見たの」

リベリオンは目から両手を離して、彼女を見た。

ピーチ「地球はね、とつてもきれいだっただよ。もう本当に戦争や環境破壊が続いているのかって思っちゃうくらいきれいだった。でも、こうも思っただ。戦争や環境破壊が起きてても、まだ地球はこんなにきれいなんだ、だったら今からでも十分間に合うかもって。真夜さんも同じなんじゃない？」

リベリオン「……え？」

リベリオンがちよつと目を丸くすると、他のプリキュアたちも微笑みを浮かべながら続々と立ち上がり、彼女のほうへ歩き出した。ブルーム「そうだよ。真夜さんも今からでも間に合うよ」

イーグレット「私たちと一緒に戦いましょう！」

リベリオン「……何言ってるの、光を捨て闇を選んだ私がもうもとに戻るわけが……」

ドリーム「だーいじょうぶだよ！だって、真夜さんはまだ何もやってないんだもんっ！」

リベリオン「……え？」

ルージュ「そうそう。だって真夜さん、地球を滅ぼそうとしたけど、まだ滅ぼしてないじゃん」

レモネード「私たちに怪我はさせましたけど、その程度です」

ミント「私たちはもう気にしてないわ」

アクア「あなたなら、きつと光に戻るわよ」

ローズ「正直危ないと思ったこともあったけど、許すわ」

ブラック「もし、ひとりじゃできないって言うなら、私たちも手伝うよ！」

ホワイト「あなたは、もうひとりじゃないわ」

ルミナス「私もできることがあれば、手伝います！」

ベリー「大丈夫。あなたならできる。完璧な私が言うんだもん。少しは自分を信じなさいよ」

パイン「真夜さんならきつともとに戻るって、私信じてる！」

パッション「ひとつひとつ、精いっぱいがんばってやり直していいよ」

マリ「ほら真夜さん、早く立って立って！」

サンシャイン「私も一緒に、その心の闇を晴らしてあげるから」

ムーンライト「私も一緒に戦い続けるわ。あなたの全ての心が満ちるまで……」

真夜は両目を大きく見開いた。

信じられなかった。あんなにも痛みつけ、本気で殺そうとさえしたのに、どうして彼女たちは敵に微笑んでくれるのか。どうして励ましの言葉をかけてくれるのか。

リベリオン「どう……して？どうして、私にそんな……」

ブロッサム「決まってるじゃないですか」

リベリオンの言葉を切り、彼女たちを代表してブロッサムが一番前に出た。

ブロッサム「私たちは、友達だからです」

リベリオン「！友達……？」

ブロッサム「そうです。真夜さんは、もう私たちの友達です。友達を助け、力になるのは当然じゃないですか」

そう言って、ブロッサムは彼女に手を差し伸べ、にこつと微笑んだ。

リベリオンは感じた。強い。この娘は誰よりも強すぎる、と。

絶対にあきらめない心と、ひとに救いの手を差し伸べる優しさ。

両方とも彼女にとって欠けていたものだった。だが、目の前にいるこの娘は何よりも未来を信じて溢れんばかりの希望を持ち続けている。その大きさは自分のと比べたら、一目瞭然だ。そんな彼女に自分が勝てるはずがない。勝負は最初から決まっていたのだ。

ロモモ「真夜ちゃん、ロモモも手伝うロモ。だから、立つロモ」

ロモモが横から声をかけた。リベリオンは一度ロモモを見、再びブロッサムの差し出した手を見つめた。

本当にまだ間に合うのなら………。

リベリオンはブロッサムの手に分自分の手を伸ばし、彼女の手に触れようとした。

だが、世の中そうは問屋が卸おろさなかった。

???「何している、キュアリベリオン・・・」

突然、図太い男の声が場内に響いた。

プリキュアたちもリベリオンもハッと気づき、声がした方向に振り返ると、アルティメットが片手にギガバトルナイザーを握って立っていた。

プリキュアたち「アルティメット！」

アルティメット「キュアリベリオン、俺はとっとプリキュアを始末して来いと言ったはずだぞ。なのに、なに仲良しごっこをしているんだ？」

リベリオン「うつ・・・あ・・・」

リベリオンはアルティメットから目をそらした。彼女の代わりにブロッサムがアルティメットを睨み、答えた。

ブロッサム「真夜さんはもう世界を滅ぼすのはやめたんです。もうあなたの命令は聞きません！」

アルティメット「何を言う。今の世界を滅ぼし、優しい世界を作るのではなかったのか？おまえは今の世界なんかなくなってしまえばいいと言っただろう？それなのに、やめただと？デタラメだろう、そんなことは・・・どうなんだ？答えろ、キュアリベリオン」

アルティメットの声に、リベリオンはようやく彼のほうに目を向けた。その表情には迷いと申し訳なさが混じり合っていたが、彼女はゆっくりと口を開き、しかしはっきり答えた。

リベリオン「私は・・・もういいと思う」

ブロッサム「真夜さん・・・！」

彼女の返事にプリキュアと妖精たちの間に安堵感が広がった。リベリオンの返事を聞いたアルティメットは「そうか・・・」と呟くと、次の瞬間こう叫んだ。

アルティメット「なら、あの父親母親と同じようにあの世に逝くが

いい！」

リベリオン「え・・・？」

アルティメットはギガバトルナイザーの先端をプリキュアたちに向け、青い放電を放った。放電が空を切り裂き、リベリオンに向かう。だが、素早くサンシャインがサンフラワー・イージスを、ミントがエメラルドソーサーを張り、放電を弾いた。サンシャイン「いきなり何をするの！」

リベリオン「待って！アルティメット、今なんて言った？『あの父親母親と同じように』ってどういうこと？あなた、お父さんとお母さんを知っているの？」

リベリオンの指摘にアルティメットは一瞬「あ・・・」と声を漏らしたが、すぐにガチガチと牙を鳴らしておぞましい笑みを浮かべた。アルティメット「いけね。俺としたことがつい口を滑らしちゃったか・・・。だが、まあいい。教えてやろう。キュアリベリオン、この目に見覚えがないか？」

そう言うと、アルティメットは白い両目に片手をかざし、すぐに離れた。離れた瞬間、白かったアルティメットの両目に真っ赤な光が灯った。それを見た途端、リベリオンは再び息が止まりそうになった。あの忌まわしい記憶が蘇った。

一年前、突然の炎と黒煙の中から現れ、父親と母親、そしてゴザドック村の人々の命を次々と奪った両目の赤い男・・・・・・・・・・。

リベリオン「ま、まさか・・・」

リベリオンは声が震えた。彼女の反応を見て今さら気がついたかと言うふうにアルティメットは笑みを浮かべたままこう言い放った。アルティメット「そうよ。一年前、おまえの父親母親、そして村の連中を殺していったのは、この俺よ！」

言い終わった途端、その場にいる全員の目が大きく見開いた。

絶望の闇、希望の光（後書き）

次回、真相が明らかになる！

## 真実

そうよ。一年前、おまえの父親母親、そして村の連中を殺していったのは、この俺よ！

あの日、俺はプリキュアの情報を聞きつけて視察するために地球に降り立ったのさ。そして隙あらば闇討ちしてしまおうと考えたのよ。

妖精の気配を感じ、ちつぽけな村の中に降りた俺は誰かに見つかるやべえから、一旦姿を隠すつもりだった。だが俺が隠れる前に村の連中の一人が俺を見ちまいやがった。そして驚いて悪魔だとかうるさくほざきやがったもんだから、俺も面倒になってそいつを爆破させて口封じしちまったわけよ。

ところがどっこい、爆発音を聞いた村の連中が次々と家から飛び出して俺を見るなり悪魔悪魔と喚いて逃げるもんだから、俺もいい加減頭に来て次々と殺し始めたのさ。

俺を見たやつは誰だろうと生かしちゃおけねえ。たとえそれが女の子供であろうとな。俺は村の中を歩き、連中を次々と爆破させて二度と俺を見ることができないようにしていった。そして雨牙真夜、おまえに会ったわけよ。ま、もつとも、その時おまえは戦いを終えていたようだし、俺も人を爆破していく快楽に酔いしれていて妖精の気配なんぞ感じなかったから、おまえがプリキュアと気づかないまままずおまえの父親母親を先に片付け、そしておまえも俺の姿を見た者として始末しようとしたのよ。まさか、生きていたとは思わなかったがな。村の連中をひとり残らず始末した俺は結局プリキュアも妖精の気配も感じなかったから、仕方なく次元に存在する闇の中に入り、その間に映る映像を通してプリキュアを探すことに決めたのよ。

三日後に次元の間から砂漠の中を歩くおまえの映像を見つけた時は驚いたぜ。最初は分からなかったが、顔を見てすぐおまえと気が

ついた。生きていやがったのかと思ったよ。だが、次におまえのすぐそばに白い妖精が現れたのを見た時、俺は確信した。そうか、あいつはプリキュアだったのかと。だったらこれはチャンスだ。やつは砂漠の中を歩き回って、完全に弱っている。まだ力があまり強くない俺でも殺<sup>や</sup>れる。そう考えた俺はおまえを始末しようと近づいたよ。

だが、その時おまえが叫んだのさ。こんな世界はいらない、なくなってしまういいとな。さすがの俺も最初は耳を疑ったぜ。世界を守るはずのプリキュアがそんなことを言うかってな。だが、おまえの目に宿っていた怒り、そして憎しみを見て俺は本気だと感じたよ。そして俺は考えたのさ。世界を本気で憎んでいるおまえを利用できないかとな。もし、もとプリキュアでもあるおまえを闇の中に招き入れ、最凶のプリキュアとして生み出してしまえば、俺のために働き、俺の邪魔をするプリキュアどもを蹴散らしてくれるんじゃないかと。

俺は特徴的な赤い両目を白目に変えておまえの前に現れた。そしておまえを闇の中へ誘ったのだ。もちろん、もとは光のプリキユアであるおまえが簡単に应じるかと思つたよ。だが、おまえはあつさりと应じて俺の手を握つた。よつぽどおまえの心は絶望で埋め尽くされていたみてえだな。

もう分かっただろう？ おまえは親の仇である俺に一年も仕えていたんだよ。とんだ皮肉だな。

[illegible]

アルティメットから全てを聞いたりベリオンは声を失ったままだった。その目は瞳孔が開いたように焦点が合わず、ただ虚空に向けた。

られている。リベリオンには何も見えていなかった。何も聞こえていなかった。頭の中で、多くの言葉が、ぐるぐると回り続けている。アルティメットが、お父さんとお母さん、テッドに村のみんなを殺した両目の赤い男……？

じゃあ私は、私は……みんなを殺したやつにずっと動かされていたの？

みんなを殺したやつだとずっと気づかないまま……命令を聞き、思うように操られていたの？

しかも一年も、一年も、一年も……？

いつの間にか、リベリオンの手が小刻みに震えていた。胸がカーツと熱くなった。唇を噛み、黒い瞳に涙みが増す。

次の瞬間、リベリオンは吠えた。

リベリオン「アルティメット……きつさまあああああああああああああああつっ！！！」

リベリオンは走り出した。プリキュアたちが気づいて次々と叫んだが、彼女の耳に届いていなかった。リベリオンは拳に渾身の力を溜め、アルティメットに向けて振り上げる。だがアルティメットは邪悪な笑みを浮かべたままリベリオンの繰り出した拳をかわすと、ギガバトルナイザーの先端を彼女の腹部にかざした。リベリオンがハッとした途端、アルティメットは口を開いた。

アルティメット「アルティメット・ジェノサンダー！」

リベリオン「あああああああああああああつっ！！！」

瞬間、リベリオンの全身に青い強力な放電がほとばしる。アルティメットはリベリオンに散々放電を浴びせた後、ブーン！と先端を強く振り払い、リベリオンの身体を高く投げ飛ばした。リベリオンは悲鳴をあげながらプリキュアと妖精たちの頭上を超えると、誰もいない観客席に激突した。激しい音と同時に煙が発し、破片と残骸が飛ぶ。強く叩きつけられたリベリオンは苦痛の表情を浮かべ、その場から動こうとしなかった。そのリベリオンに向かって、アルティメットが先端を向け、追い討ちをかけるように言う。



アルティメット「今までごくろうだった、キュアリベリオン。ゆつくりと休むがいい。アルティメット・ダークネス・ホール！」

砲身が風を吸い込み始めた。それと同時にリベリオンの周囲にも風が凄い勢いで吹き上げ、リベリオンは身体が黒く染まった。

リベリオン「うっ・・・ああああああっ！」

リベリオンの身体から全ての闇の力が吸い出されていく。彼女は上体を起こし、わずかな抵抗をしたが、無駄に終わった。全ての闇の力を吸い尽くされたリベリオンは変身が解かれ、黒の制服を着ている真夜の姿に戻った。真夜はぐったりと倒れると、無念の表情で目を閉じた。

マリン「真夜さん！あんたよくも・・・！」

ブロッサム「絶対許しませんっ！」

プリキュアたちは怒りをあらわにしてアルティメットを睨みつけると、全員走り出した。

アルティメット「アルティメット・デスサイズ！」

しかし、アルティメットはギガバトルナイザーから赤い鎌状の光弾を飛ばす。サンシャインがサンフラワー・イージスを、ミントがエメラルドソーサーを、ブルームとイーグレットが精霊の力を借りたバリアを張ったが、光弾はそれらを全て斬り裂き、彼女たちは全員弾き返された。

ブロッサム「くっ・・・」

アルティメット「無駄だ。もうボロボロのおまえらが俺に勝てるものか。あきらめてもう一度力を吸い取られる！」

ブロッサム「あきらめませんっ！」

ブロッサムが足腰に力を入れ、ふらふらになりながらも立ち上がった。強く、あきらめない目でアルティメットを捉えている。

ブロッサム「真夜さんからご家族とお友達の方々を奪い、拳句の果てに真夜さんを利用したあなたを、私は絶対に許しませんっ！真夜さんのためにも、私は、あなたを絶対に倒します！」

アルティメット「・・・面白い。やれるものならやってみろ。アルテ

イメット・ジェノサンダー！」

アルティメットが先端をブロッサムに向け、青い放電を飛ばした。放電は猛スピードでブロッサムに突き進んでいく。ブロッサムはよけようとしたが、全身に激痛が走り身体が動かなかった。放電がブロッサムの目前まで迫る。倒れていたプリキュアたちも妖精たちも誰もが危ないと思った次の瞬間だった。

誰かがブロッサムの前に立ち、両腕を広げた。その瞬間、青い放電はその誰かに直撃した。ブロッサムがハッとなって目を見張る。

真夜だった。ブロッサムの身代わりに放電を浴びた彼女は絶叫をあげた。放電が止むと、真夜はふらつきながら前へ二歩歩いたが、すぐに膝を着いて地面に倒れ伏した。その場にいる全員の視界に、倒れた真夜の姿が映り込む。

ブロッサム「真夜さん！」

ロモモ「真夜ちゃんっ！」

駆け寄るブロッサムとロモモ。ブロッサムは彼女の身体を両腕で抱き起こした……。

真実（後書き）

次回、キュアリベリオン・・・。

## 墮天使、無念

ブロッサム「真夜さん！しっかりしてくださいっ！」

ブロッサムは放電をまともに浴びて腕の中で目を閉じている真夜に懸命に声をかけた。口モモも真夜の耳に届くように大声で叫ぶ。

プリキュアたちも立ち上がり、妖精たちとともにブロッサムの背後から真夜を愕然とした面持で見つめていた。ブロッサムが何回か真夜の名を呼び、身体を揺さぶると、真夜はかすかに目を開け、ブロッサムに瞳を向けた。

ブロッサム「真夜さん、どうしてですか！？どうして私を・・・？」

助けたの？と聞こうとした時、真夜の口が弱々しく開いて言った。

真夜「友達・・・だから」

ブロッサム「！真夜さん・・・」

真夜「私は、一度友達を目の前で失った。・・・だから、もう友達をなくしたくなかった。つばみ・・・」

真夜が初めて、「つばみ」と名前と呼んだ。

真夜「あなたたちとアトラクションで一緒に遊んだ時、ほんのちょっとだけしか感じなかったけど、楽しかった・・・。それにあなたから友達と言われた時、本当はとても嬉しかったわ・・・。あなたたちのおかげで、私はやっと私に・・・もとの雨牙真夜に戻れた・・・」

だんだんと、真夜の意識が遠のいていく。

口モモ「真夜ちゃん！」

真夜「口モモ・・・。ごめんね。ずっと寂しい思いをさせてしまって・・・。それどころか、ひどいことまでしちゃって・・・」

真夜の目に再び涙が溜まる。口モモも涙を流して真夜の身体に抱きついた。

口モモ「もういい口モ。真夜ちゃんが戻ってきてくれたから、口モモは許す口モ。だから真夜ちゃん、死なないで口モッ！」

真夜「・・・ごめん、ロモモ。私・・・最後までひどい女ね。・・・つぼみ」

真夜はブロッサムに再び目を向けた。ブロッサムも涙を流して真夜に顔を向けている。

真夜「ありがとう・・・。あなたたちとは、もつと早く・・・会いた・・・かった・・・」

ブロッサム「!・・・真夜さん？真夜さん!？」

真夜はゆっくりと再び目を閉じた。ブロッサムの腕の中で、彼女の全身から力が抜けていく。今度は耳元で叫んでも、身体を激しく揺さぶっても、彼女はもう目を開けなかった。

ブロッサム「いやっ・・・いや・・・いやああああああああああああっっっ!!!」

ブロッサムの絶叫が場内に大きく響く。ロモモも真夜の身体に抱きつきながら大声で泣いた。プリキュアと妖精たちも、ある者は両手を顔にやり、ある者は唇を噛み締め、ある者はこれ以上見ていられずに目をそらした。

アルティメット「ふん、命拾いしたな・・・」

アルティメットが言い、ブロッサムは泣くのをやめて彼に目を向けた。プリキュアと妖精たちもアルティメットに目を向ける。

アルティメット「だが本当にバカなやつよ、キュアリベリオンは。

何も知らずに俺に従っていればよかったものを・・・」

ブロッサム「黙りなさい・・・!!」

アルティメットの言葉を切り、真夜の身体を地面に降ろすと、ブロッサムは静かに体勢を起こして立ち上がった。彼女の目は激しい怒りに燃え、握った拳がブルブルと震えていた。真夜を目の前で失ったことで、彼女の中の怒りが遂に限界を超えたのだ。それはブロッサムに限らず、他のプリキュアや妖精たちも同じだった。全員が燃えるような目でアルティメットを捉えている。ブロッサムはアルティメットを見、全身の毛が逆立つほど冷静すぎる声で言った。ブロッサム「もう私・・・堪忍袋の緒が完全にねじ切れました。ア

ルティメット、今からあなたを本気で倒します。覚悟してください。  
・・・！」

アルティメット「俺を倒すだと？なに寝ぼけたことを・・・」

その時だった。アルティメットの腹部にブロッサムの強烈なエルボーが炸裂した。

アルティメット「なっ・・・！！？」

一瞬、アルティメットは何が起きたのか分からなかった。だが次の瞬間、今度はマリンが顔に目掛けてキックを命中させた。

アルティメット「がっ・・・！！」

ひるんだ途端、今度はサンシャインとムーンライトが拳に力を込めて胸に強力なパンチを与えた。二人分のパンチをもろに受けたアルティメットは身体が後ろに吹き飛び、壁に激突し、衝撃で巨大なクレーターが一瞬でできた。大ダメージを受けたアルティメットにさらに追い討ちをかけるようにブラックとホワイトが高く跳び上がり、上空からマッハで接近して渾身の一撃を放った。

アルティメット「ぐああああああああっ！！」

アルティメットの身体は凄い速さで壁の中にめり込んでいき、同時にクレーターからさらに亀裂が大きく走って、観客席にまで到達した。そして次の瞬間、アルティメットがめり込んでいった闘技場の壁は崩壊し、アルティメットは壁ともども塔の外へ放り出された。アルティメット「ぬあっ！」

アルティメットは空中でなんとか体勢を整え、荒野に降り立つと、次々と撃墜してきた壁の残骸をよけて、撃墜する心配はない少し離れた場所へ移動した。移動して顔を空へあげると、塔の崩壊した場所からプリキュアたちも飛び降りてくるのが見えた。

アルティメット「バカめ。格好の的だぞ」

アルティメットが降りてくるプリキュアたちに向かって、ギガバトルナイザーの先端を向け、青い放電を発射した。放電は徐々にプリキュアたちに接近する。だが直前になって、先頭を仕切っていたルミナスが虹色のバリアを張って放電から全員を守った。

アルティメット「なあっ!？」

プリキュアたちは次々と荒野に着地し、アルティメットに向かって走る。

ピーチ「プリキュア!ラブサンシャイン!」

ベリー「プリキュア!エスポワールシャワー!」

パイン「プリキュア!ヒーリングブレアー!」

ピーチ・ベリー・パイン「フレエッシュ!」

パッション「プリキュア!ハピネスハリケーン!」

ピーチ、ベリー、パインはキュアスティックを、パッションはパッションハープを起動させ、それぞれアルティメットに向かって技を飛ばした。

アルティメット「そんなもんが効くかあああっ!」

アルティメットはギガバトルナイザーを振って、四人の技を弾き消す。だが、それが四人の狙いだった。

レモネード「プリキュア!プリズムチェーン!」

弾いた瞬間、アルティメットは背後から黄色い蝶の鎖で身体を強く縛られた。アルティメットが驚き、首を動かして後ろを見やるとレモネードの両手に鎖が握られていた。しまった、先ほどの四人の技は背後から動きを封じるのを気づかせないための策だったかとアルティメットが気づいた次の瞬間、彼の身体は大きく宙を飛び、地面に強く叩きつけられた。彼が叩きつけられた場所の上空をルージュ、アクア、ミントが飛来する。三人は同時に腕を交差させた。

ルージュ「プリキュア!ファイヤーストライク!」

アクア「プリキュア!サファイアアロー!」

ミント「プリキュア!エメラルドソーサー!」

ルージュとアクアは連射、ミントは巨大な緑の円盤状の物体を倒れているアルティメットに放った。アルティメットが大きく絶叫する。しかし、アルティメットはまだ死んではいなかった。全身に傷を負い、ふらふらになりながらもなんとか腕と足に力を入れ、立ち上がる。だが前を見た途端、ミルキイミラーを構えているローズの

姿が彼の目に映った。

ローズ「ミルキイローズ・メタルブリザード！」

ローズは素早く大量の銀の薔薇<sup>バラ</sup>の花びらを飛ばした。ヤバいと思  
い、アルティメットはあわててギガバトルナイザーで技を防ごうと  
する。だが、プリキュアたちから多くの攻撃をまともに受け、体力  
が消耗していたために、アルティメットはギガバトルナイザーを振  
りかざすのが一瞬遅れた。

アルティメット「ぐああああああああっ！！！」

巨大な銀の薔薇<sup>バラ</sup>の中にアルティメットは身体を包まれ、またもや  
動きを封じられる。その状態のアルティメットに向かって、ドリー  
ムが走り出し、ブルームとイーグレットが高く天へ跳んだ。精霊の  
力でさらに三段ジャンプして天へ来たブルームとイーグレットはそ  
こで手に力を込めて全身を光で包んだ。光が消えた途端、ブルーム  
とイーグレットの衣装が変わる。ブルームは輝くような黄色の衣装。  
イーグレットは煌<sup>め</sup>くような空色の衣装。ふたりは月の力と風の力を  
得たキュアブライトとキュアウィンディに変身したのだ。

ウィンディ「風よ！」

ブライト「光よ！」

ウィンディは両手からピンクの旋風を飛ばし、ブライトは巨大な  
黄緑の光球を両腕から発射する。光球と旋風は途中で融合し、威力  
を増して地上にいるアルティメットに向かった。一方でドリームは  
走りながら腕を交差させた。そして光を身にまとう。

ドリーム「プリキュア！ シューティングスター！」

光を身に包んだドリームはアルティメットに目掛けて超高速で突  
進した。ローズの技で動きを封じられているアルティメットに前か  
らドリームの技が、頭上からブライトとウィンディの技が同時に激  
突した。アルティメットは身体を煙に包まれながら高く吹き飛ばさ  
れ、岩塊に頭から激突した。

ブロッサム「とどめです、マリン！」

マリン「やるっしゅ！」



ブロッサムとマリンはフラワータクトを振り、光を身にまとった。そして身体を上昇させ、弱りきっているアルティメットに向かって高速で突き進んでいく。

ブロッサム・マリِنْ「プリキュア！フローラルパワー・フォルティシモ！」

アルティメット「ぬおっ！？」

次の瞬間、巨大な爆発が起こった。煙が分散し、周辺に閃光と衝撃波が走る。

ブロッサムとマリンは着地した。そして他のプリキュアたちとともに固唾<sup>かたず</sup>を飲んで見守る。だがすぐに煙の中から青い放電が彼女たちに目掛けて宙を走り、足元に爆発を起こした。

プリキュアたち「きゃああああああああっっ！！」

プリキュアたちは全員地面に倒れた。急いで上体を起こし前を見ると、煙の中からぬうつと黒い身体が現れた。

アルティメットだった。彼は真つ赤な両目をギラギラとさせ、牙をガチガチと鳴らし、完全に怒りの表情で立っていた。

アルティメット「おまえら……。よくもやってくれやがったな。調子に乗るんじゃないっ！」

アルティメットの咆哮に空間が震える。プリキュアたちはあれほどの攻撃を耐えたアルティメットの頑丈さに信じられない思いを抱きつつも、それでも負けるわけにはいかないとあきらめのない目で立ち上がった。

アルティメット「ほう……。まだ戦うつもりか。いいだろう。なら、どこまでがんばれるか試してやる」

アルティメットはギガバトルナイザーを上空へ掲げた。掲げた瞬間、両方の先端が赤く発光し始める。アルティメットはそれを確認すると、こう叫んだ。

アルティメット「行け！我が闇<sup>し</sup>の僕たちよ！」

次の瞬間、両方の先端から無数の赤い人魂のようなものが飛び出した。人魂のようなものは次々と先端から出てきて、プリキュアた

ちの周囲を飛び回る。プリキュアたちがそれらを「何？」と思いつながらも臨戦態勢に入って両手を構えていると、人魂のようなものは彼女たちの周囲に続々と降り始めた。降りた途端、人魂は徐々に形を変えていく。そして完全に形を変えた瞬間、彼女たちの何人かが驚きの声をあげた。

人魂が形を変えたのは、これまでプリキュアたちが戦い、倒してきた歴代の怪人たちだった。

ドックゾーンからはピーサード、ゲキドラゴ、ポイズニー、イルクーポ、ジュナ、レギーネ、ベルゼイ・ガートルード、サーキュラス、ウラガノス、ビブリス。

ダークフォールからはカレハーン、モエルンバ、ドロドロン、ミズシタターレ、キントレスキー。

ナイトメアからはギリンマ、ガマオ、アラクネア、ハデーニャ、ブラッディ、カワリーノ。

エターナルからはスコルプ、ネバタコス、シビレッタ、イソーギン、ヤドカーン、ムカーディア、アナコンディ。

ラビリンスからはノーザ、クライン。

そして総勢百を超えるザケンナー、ウザイナー、コワイナー、ホシイナー、ナケワメーケ、ナキサケーベ、ソレワターセ。

ある者は喚き、ある者は怖い顔で睨み、ある者は笑いを浮かべて怪人たちは数え切れない数でプリキュアたちを取り囲んでいた・・・。

## 墮天使、無念（後書き）

ゴーちゃんも黒幕じゃなかったら出したかったです。  
次回、プリキュアVS怪人軍団。あいつも登場するぞ、プレッシャーッ！

## 決戦！怪人軍団！（前書き）

実際に『ウルトラ銀河伝説』の大怪獣軍団との戦いのシーンを観て参考になりました。大変でした。

## 決戦！怪人軍団！

周囲を包囲する怪人たちの姿に彼女たちのほとんどが愕然となった。

何度も戦い、倒したはずの怪人がまたもや目の前で復活したのもそうだが、何よりも軽く百を超えるその数！いかにプリキュアが19人もいようと、対抗するにはあまりにも反則すぎる。

ブラック「あ、あ、ありえなーいつ！」

マリリン「こんなにたくさん・・・っ！？」

ブライト「これ全部相手にするの！？」

無数の怪人たちを目の前にしてプリキュアたちは一応両腕で構えを取っていたものの、何人かは幾分表情に緊張が走っていた。彼女たちも敵の大軍を相手にしたことは何度かあるが、これほどの数は初めてだ。一瞬でも気がゆるんだら、隙を突かれてやられると思いがあろう。しかし、気を引き締めたところではたしてこれほどの数に勝てるのか。

アクア「みんな見て！ギガバトルナイザーよ！」

その時、アクアが叫んで前方に立つ怪人たちの背後にいるアルティメットの持っているギガバトルナイザーを指した。

アクア「みんなも見たでしょ？ナイトメアやエターナルたちはあのギガバトルナイザーによって生み出されて操られているのよ。だとしたら、あれを破壊すれば、全員ギガバトルナイザーの力から解放されて消えてしまっんじゃない？」

ベリー「そうか！ギガバトルナイザーに全員の命が宿られているとしたら・・・」

パッション「あれを壊せば、勝機はあるわ！」

ブロッサム「じゃあ、私が行きます！」

ブロッサムが拳手した。プリキュアたちは全員彼女に振り向いた。ブロッサム「私がきつとギガバトルナイザーを壊してみせます！」

マリリン「私も行くよ！私もブロッサムと一緒にアルティメットに立ち向かう！」

ドリーム「分かった。じゃあ頼んだよ、ブロッサム、マリン、サンシャイン！」

三人は返事をする、前方の怪人たちに目を向け、走り出した。

アルティメット「行け！プリキュアを倒せ！」

同時にアルティメットもギガバトルナイザーを頭上に上げ、戦闘開始の合図を送った。怪人たちは両手を広げ、前から、後ろから、右から、左からいつせいにプリキュアたちに向かって襲いかかり始めた。

ザケンナー「ザケンナアアッ！」

ミズシタターレ「おーっほほほほほほほほほほ！」

[illegible]

ホシイナー「ホシイナアツ！」

ナケワメーケ「ナケワメエケツ！」

ソレワターセ「ソレワタアセツ！」

「プレッシャアアアッ！」

一人、どの組織にも属さない怪人（？）が紛れ込んでいたが、プリキュアたちはおるか、一緒に走っている怪人たちも気づかずにいた。

ブロッサム、マリン、サンシャインは一旦足を止めると、それぞれ武器のフラワータクトとシャイニータンバリンを手に持った。そして急いで起動させ、必殺技の準備を始める。

サンシャイン「プリキュア！ゴールドフォルテバースト！」

ブロッサム・マリン「プリキュア！フローラルパワー・フォルティシモ！」

サンシャインはシャイニータンバリンを頭上に上げると、途端に太陽のような灼熱の輝きを放つ光のゲートを作り出した。その光のゲートに向かって光を身にまとったブロッサムとマリンが激突する。激突した瞬間、ブロッサムとマリンの身体が黄金に輝き始め、ゲートを突破した瞬間、ふたりの光速技はさらに増強した。

サンシャイン「プリキュア！シャイニング！」

ブロッサム・マリン「フォルティシモ！」

身体を黄金の光に包まれたブロッサムとマリンの突撃は、一気に五体のソレワターセの体を貫き、撃破した。

ブラックは一番に襲ってきたコワイナーの腹部に強力な蹴りを食らわせて吹き飛ばすと、ホワイトと背中合わせになつて周囲に立つ怪人たちを見渡した。そしてふたり同時に走り出して何人もの怪人たちを相手に拳を交え始めた。

ムーンライトは背後から襲ってきたカレハーンの横腹に一撃を与えると高く跳んだ。

ムーンライト「集まれ！花のパワー！ムーンタクト！」

ムーンライトはエンブレムから武器のムーンタクトを取り出すと、技を起動させた。

ムーンライト「花よ輝け！プリキュア！シルバーフォルテウェイブ！」

タクトを構えて大きく振ると、ムーンライトはシルバーの花の形

をした巨大エネルギー弾を怪人たちに向けて飛ばした。ムーンライ  
トが飛ばした技は互いに身体が合体したイソーギンとヤドカーンに  
直撃した。直撃を受けたイソーギンとヤドカーンの身体が徐々に赤  
く発光し始める。

ヤドカーン「出番、もう終わり？」

イソーギン「出番、もう終わり」

イソーギン・ヤドカーン「そんなあゝ！」

イソーギンとヤドカーンは花火のように爆散して消滅した。

ブロッサムとマリンとともに合体必殺技を放ったサンシャインは  
ザケンナーの繰り出した拳をかわし、クラインの顔にキックを入れ  
ると、振り返ってハデーニヤの横腹に強力なパンチを叩き込んだ。  
そしてすぐさま回転してガマ才の横顔に回し蹴りを炸裂させる。「  
ふぎやっ！」とガマ才は宙を一回転して地面に倒れると、やはり赤  
く発光して爆散し、消滅した。

一方でパッションはハピネスハリケーンでホシイナー、ナケワメ  
ーケ、ナキサケーベの三体を撃破すると、襲いかかってきたポイズ  
ニーと戦っていた。ポイズニーは長い髪を自由自在に伸ばして攻撃  
する。パッションはそれをかわしながら左右から来たウザイナーと  
コワイナーを蹴り飛ばすと、隙を突いてポイズニーの腹部に強烈な  
パンチを叩き入れ、ひるませた。

ブロッサムは襲いかかってくるザケンナーやウザイナーたちを次  
々と撃破し、アルティメットに近づこうと急いだ。しかし、後ろか  
らマリンの悲鳴が聞こえ、振り返った。見るとマリンは計十体もの  
のザケンナー、コワイナー、ホシイナー、ナケワメーケに包囲され  
ているではないか。マリンはザケンナーの放ったパンチをかわし、  
逆にその腕を？んで力一杯投げ飛ばそうとしたが、途端に背中にコ  
ワイナーが伸ばした手の一撃を受けて地面に倒れた。倒れたマリ  
ンを見てチャンスとばかりにザケンナーたちがいつせいにのしかか  
つて、彼女を下敷きにする。

ブロッサム「マリン！」



このままだとマリリンが危ない。そう考えたブロッサムは彼女を助けに向かった。だが心配無用だった。

マリリン「マリリン・ダイナマイト！」

マリリンは自身を青い光で包むと、それを増強させ、ペシャンコにしようとしてきたザケンナーたち十体を全て吹き飛ばして消滅させた。よかった、とほっと息を吐いて安堵するブロッサムにマリリンはビシッと親指を立てて笑った。

レモネードはプリズムチェーンでピーサードを捕らえた。そしてまだポイズニーと戦っているパッションにアイコンタクトを送る。レモネードと目が合ったパッションは瞬時に理解すると、高く宙返りをした。ポイズニーがパッションの宙返りに目を向けた瞬間、レモネードのプリズムチェーンによる強い力で投げられたピーサードに激突し、さらにはアラクネアも巻き込んで、三人は仲良く岩塊に衝突して爆散した。

ブライトとウィンディはそれぞれホシイナーやソレワターセの攻撃をかわし、光弾と旋風で撃破すると、腹部と腕に装着し、中心部分の星の形に変わったプリキュア・スパイラル・リングを起動させ、手に大量の精霊たちの光を集め始めた。

ブライト・ウィンディ「プリキュア！スパイラル・スター！」

ふたりは前方にいるサーキュラス、カレハーン、ドロドロンに目を向けた。サーキュラスは怪訝な表情をしていたが、ふたりと戦ったことのあるカレハーンとドロドロンはぎよっとなった。

ブライト・ウィンディ「スプラアアッシュ！」

ブルーム、イーグレットの時よりも威力の高い光線がふたりの両腕から発射され、三人に向かっていく。サーキュラスはとっさにかわしたが、カレハーンとドロドロンは光線を浴び、浄化された。

ホワイトがザケンナーの腹部にキックを放ち、ひるんだ隙を突いて腕を？んで大空へ投げ飛ばした一方でムーンライトはイルクーポとスコルプに両腕を？まれ、一瞬身動きが取れない状態に追い詰められたが、すぐに力ずくで振りほどくと、目の前で拳を振り上げた

ジユナの胸に素早くパンチを炸裂させた。さらに再びムーンタクトで技を直撃させて撃破した。だが振り返った瞬間、ムカーディアの蹴りを腹部に受け、ひるんだ途端にカワリーノの強力な尾の攻撃に弾き飛ばされ、岩塊に激突した。苦痛の表情をしてすぐには立てないムーンライトに向かって怪人たちがとどめを刺そうと駆け出す。

ルミナス「ルミナス！ハーティエルアंकション！」

アクア「プリキュア！サファイアアロー！」

ルージュ「プリキュア！ファイヤーストライク！」

だがムーンライトの危機をルミナス、アクア、ルージュの三人が救った。ルミナスがハーティエルアंकションで怪人たちの動きを止めると、アクアとルージュは腕を交差させ、それぞれ連射技を放つ。ふたりの技で計八体のウザイナー、ホシイナー、ソレワターセとゲキドラーゴ、レギーネ、ネバタコス、そしてプレッシャー星人が爆散して消滅した。

ルミナス「大丈夫ですか？」

ムーンライト「ええ。ありがとう。助かったわ」

ムーンライトは立ち上がると、三人とともに怪人たちに向かって走り出した。

ローズはソレワターセのパンチをかわし逆にエルボーを与えて吹き飛ばすと、背後から襲ってきたノーザの鋭い爪をギリギリでかわす。かわした途端、今度はキントレスキーとベルゼイの攻撃を両腕でガードし、ベルゼイのパンチを腹部に受けるも、すぐに力を込めた拳を繰り出して弾き返す。ベルゼイを吹き飛ばしたローズは高く跳び、真下にいたザケンナーを急降下キックで撃破した。

ミントはエメラルドソーサーを飛ばし、計七体ものコワイナーやナキサケーベを続々と消滅させていく。ミントは最後に前方にいたシビレッタに向かって三倍もの大きさを持つエメラルドソーサーを飛ばしたが、シビレッタは巨大なキノコ頭を盾にミントの技を弾いた。ニヤツと笑ってシビレッタが顔を上げたその瞬間、今度はピンクの光に身を包んだドリームの突進が目前に迫っていた。驚いたシ

ビレッタはドリームの技を弾くこともなくかわすこともできずに爆散した。

一方、ピーチはウザイナー二体を撃破すると、背後から近づいてきたギリンマに鎌で両腕を抑えられてしまった。力づくで離そうとするが、ギリンマは離さない。しかし、ピーチの危機に気づいたパインがギリンマの背中をキックし、ひるんだギリンマはピーチの両腕を解放した。ピーチはその隙を突いて、ピーチロッドの先端を向け、技を発射した。

ピーチ「プリキュア！ラブサンシャイン！」

ピーチを離してしまい、しまったと表情をするギリンマの顔に大量の冷や汗が流れる。

ピーチ「フレエッシュュ！」

技は直撃し、ギリンマは浄化された。

ピーチを助けたパインはベリーと背中合わせになった。ふたりの周囲には計六体のザケンナー、ウザイナー、ホシイナーが包囲している。ふたりはまずホシイナーの拳をかわすと、ベリーはジャンプして一気に二体のウザイナーを蹴り上げ、消滅させる。パインはホシナーの腹部にエルボーを与えて撃破すると次に攻撃してきたザケンナーの顔にキックを放って爆散させた。そして残り二体に向かってふたりはそれぞれベリーソードとパインフルートの先端を向けて技を飛ばし、浄化した。

プリキュアたちは奮戦して次々と怪人たちを倒していくが、まだ数は圧倒的に多く、いつ勝敗が逆転してもおかしくない状況だ。早くアルティメットのいる場所へ行かなければとブロッサムとマリンは怪人たちの攻撃をなんとかかわしながら走り続けていた。

闘技場では妖精たちが壁が崩壊した場所から真下を見下ろし、怪人軍団と戦うプリキュアたちを見守っていた。しばらくして状況を観察していたナッツが顔に冷や汗を垂らしながら声をあげた。

ナツツ「このままだとまずいナツ」

シロップ「ナツツ？」

ナツツ「このまま長引けば、みんな体力が消耗してきてやられてしまうナツ・・・！」

ココ「そんな！ココたちに何かできることはないココ！？」

ナツツ「残念だけど、ナツツたちには見守ることしか・・・」

コフレ「そんな・・・あきらめたらダメですう！きつとプリキュアたちを助ける方法があるですう！それをみんなで考えるですう！」  
タルト「そやけど、こんな状況でプリキュアはんたちを助ける方法なんていいにはとても思いつけへん・・・」

タルトが頭を悩ましていた一方でロモモは目を閉じている真夜の身体に抱きついて泣き続けていた。涙はとうに涸れていたが、それでも彼は真夜の身体に顔を押しつけ、目をギュツと瞑り、わあわあと声を漏らしていた。

ロモモ「真夜ちゃん・・・嫌ロモ。死んじゃ嫌ロモ。お願いだから目を開けてロモ・・・！」

しかし、ロモモも気づいていた。真夜はもう目を開けないだろうと。だが、それを認めると本当に真夜は帰ってこない気がして、ロモモはそれが怖くて泣き続けた。泣いていれば、まだ真夜がロモモのそばにいる気がしていて、彼はずっと泣き続けるつもりだった。そんな彼を心配そうにシフォンとポプリが後ろから見つめていた。

ロモモ「真夜ちゃん、真夜ちゃん、真夜ちゃん・・・！！」

ロモモは真夜の胸部に小さな身体を乗せ、彼女の胸に顔を埋めた。

とくん・・・。

ロモモ「え？今の音・・・？」

ロモモは泣くのをやめ、真夜の胸に耳を当てた。  
とくんとくんとくん・・・。

確かに音が聞こえる。この音は・・・。

ロモモ「もしかして・・・真夜ちゃんの心臓の音？」

ロモモは真夜の顔を見た。真夜は目を閉じたまま眉すらも微動だにしなかったが、胸に耳を当てると確かに心臓の鼓動する音が伝わっていた。

真夜ちゃんは、生きている・・・！！

ロモモは笑った。表情に希望が満ち始めた。だが真夜は目を覚まさない。ロモモはそれだけが気がかりだった。

ひょっとして真夜の中で何か彼女が目覚ますのを止めようとしているのではないだろうか。ふと、ロモモにそんな考えが浮かんだ。

ロモモ「・・・真夜ちゃん」

ロモモは胸部から降りて、真夜の手に触れた。もしそうだとしたら何が彼女を止めているのか、どうすれば彼女は目を開けてくれるのか・・・。。知りたい！

ロモモは自身を白く発光させた。彼が発した光にシフォンとポップリ、そして戦いを見守っていた妖精たちも驚き始める。先ほど彼が発した光と比べてそんなに強いものではなかったが、近くで凝視したら目をやられそうなまぶしさだった。

ロモモ「真夜ちゃん・・・今行くロモ」

ロモモは全身で精神集中力を高めた。

すると急に視界が狭くなり、目の前が真っ暗になった。

ロモモはその暗闇に真夜の心の中に飛び込んだ。

**決戦！怪人軍団！（後書き）**

ブロッサム、マリン、サンシャインの合体必殺技がカッコよかったので登場させました。

次回、真夜の心の中に飛び込んだロモモが見たものとは！？

## 立ちあがれ

そこは黒い闇が広がっていた。

一筋の光も差しておらず、ゾツとするほど冷たかった。

闇はねつとりと絡みつくようで気持ち悪かった。気が重くなり、息が詰まりそうだった。

ロコモ「これが・・・真夜ちゃんの心の中・・・?」

ロコモは戸惑いながら、闇の中を飛んでいた。しばらく飛んでいると、闇の向こうに何かが見え、ロコモは近づいた。

それは巨大な鳥籠<sup>とりかご</sup>だった。そしてその鳥籠の中に真夜がポツンと座っていた。

ロコモ「真夜ちゃん!」

真夜「・・・ロコモ?」

真夜はゆっくりとロコモを見た。

ロコモ「真夜ちゃん、ここは・・・?」

すると、真夜はロコモから目をそらし、低い声で言った。

真夜「・・・嫌なところでしょ? 私もここが嫌いよ。もう逃げ出したいくらい嫌い・・・!」

この真夜は、真夜本人も知らない、心の奥底の、もうひとりの自分だ。彼女の言う言葉ひとつひとつが今の自分の心情を表している。喜びも、嬉しさも、怒りも、悲しみも・・・。

真夜「でも無理なの。私はここにいて当然のことをしたものだ。全て私が悪いから・・・」

その言葉に、ロコモは胸がズキンと痛んだ。

真夜「私、バカよね。悲劇のヒロインぶっちゃって、憎しみに我を忘れ、利用されているとも知らないまま友達を散々傷つけて、拳句にそれは正しいことだとさえ本気で思い込んでいたなんて・・・。なんて自分勝手なの、私・・・!」

真夜の目から涙が溢れた。彼女は両手で顔を覆い、激しく身体を



揺さぶった。

真夜「私は嫌なの！こんな自分が嫌なのっ！もう消えてしまいたいっ！！」

口モモ「真夜ちゃん・・・っ！」

口モモの目からも涙が流れた。

見上げた頭上に広がる暗くて深い、凍るような冷たい闇。

口モモは全身が痺れ、それでいて寒くて、自分で自分の身体を抱いた。ようやく彼女の心臓が動いていながらも、真夜が目を覚ますのを止めている何かが分かった。

真夜は自分が許せないのだ。自分がやったこと全てが。

キュアリベリオンとなり、プリキュアと妖精たちを痛みつけた自分。

地球から全ての命を滅ぼし、新しい世界を作ろうと考えた自分。

絶望に負け、希望を捨てた自分。

過去の自分が真夜を苦しめ、彼女の心は奥底まで傷が深く入っているのだ。

過去の自分は様々な過ちを犯した。だから自分がどうしても嫌いで、許せなくて、真夜は再び絶望の中で立ち上がることができなかった。

真夜「ごめん。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい・・・っ」

口モモ「真夜ちゃん・・・」

口モモは涙をこぼし、謝り続ける真夜を見つめ続けていた。口モモにも、彼女の気持ちは本当に痛いほど伝わった。理解できたからこそ、彼は涙を止めて一旦目を閉じ、すぐに開けると、決意の表情を固めた。

口モモ「真夜ちゃん。真夜ちゃんの気持ちは口モモにもとても伝わった口モモ。でも、いつまでも泣いて謝っていたって真夜ちゃんがますます傷つくだけ口モモ。自分を許したいのなら、今こそ立ち上がって許せるところまでやり直す口モモ！」

真夜「やり直す・・・？」

ロモモ「そうロモ！間違いを犯しても、生きていればやり直すチャンスはいくらでもあるロモ。真夜ちゃんもそれは例外じゃないはずロモ！」

真夜「・・・ごめん、ロモモ。私にはもう、立ち上がる力さえも・・・」

ロモモ「ああ、もうっ！真夜ちゃん、これを見ても立ち上がれないと言うロモ！？」

真夜の態度にイラついたロモモは片手に小さな光を灯した。光は次第に大きくなり、闇の中に映像を映し出した。光に映った映像を見て、真夜はハッと息を呑んだ。

映像にはプリキュアたちが映し出されていた。全員、無数の怪人たちと戦い、ボロボロに傷ついても、あきらめのない目で戦っている。

数々の怪人たちの攻撃をかわして着々とアルティメットのいる場所へ走るブロッサムとマリン。

ザケンナーを蹴飛ばすブラック。

精霊の力を込めたパンチでウザイナーを吹き飛ばすブライト。

自身を光で包んでコワイナーに突撃するドリーム。

ピーチロッドから技を飛ばし、ナケワメーケを浄化するピーチ。

そして数々のプリキュアたちの戦う姿が真夜の目に飛び込んだ。

真夜「どうして・・・？どうして、みんな、これだけの数と戦えるの？」

ロモモ「真夜ちゃん。みんなはね、地球を守るためにも戦っているけど、真夜ちゃんのためにも戦っているんだロモ」

真夜「私のため・・・？」

ロモモ「そうロモ。みんな真夜ちゃんをひどい目に遭わせたアルティメットに怒って戦っているんだロモ。真夜ちゃんのためにも、みんなあきらめずにいるんだロモ。真夜ちゃんが、友達だから・・・」

真夜「友達・・・」

ロモモ「でも、このままだとみんな危ないロモ。真夜ちゃん、みんな

なを助けるためにも、立ち上がる口モ。そして過去じゃなく未来の自分に向かつていく口モ」

真夜「未来の自分・・・？」

口モモ「そう口モ。過去の自分が許せないくらいひどいことをしたのなら、これから先、ひとつひとつやり直して少しずつ未来へ進んでいく口モ。そうすれば、きっといつか、大好きな自分になれるはず口モ！」

真夜「・・・・・・・・・・・・・・・・」

口モモ「真夜ちゃん、口モモも力を貸す口モ。だから立ち上がって、みんなを助ける口モ！」

真夜「うん・・・！」

真夜はゆっくりと立ち上がった。その瞬間、彼女を閉じ込めていた鳥籠とりかごが静かに崩壊し始めた。崩壊した鳥籠とりかごから闇の中へ踏み出した真夜に口モモは手を差し伸べた。

口モモ「行こう、真夜ちゃん。少しずつでいいから、変わっていく口モ」

未来の自分へ。

なりたかった本当の自分へ。

真夜「うん！！」

真夜は口モモの手を握った。しっかりと握り合った手から、ぬくもりが伝わり、全身に広がっていく。

真夜と口モモは手を繋ぎあったまま前へ進み始めた。歩き始めた途端、前方の闇にまぶしい光が差し込んだ。

口モモ「出口口モ！」

光の向こうは、希望に満ち溢れていた。

立ちあがれ（後書き）

次回、遂に！！

## 最後の希望

プリキュアたちは無数の怪人たちを相手に奮闘し、次々と撃破していった。

だが怪人たちもいつまでもやられてばかりではなかった。圧倒的な数で攻めかかり、遂に数人が苦戦する彼女たちの隙を狙って、反撃を仕掛けた。

ザケンナーとホシイナーに挟み撃ちにされるブラック。ブラックは拳を繰り出そうとしたザケンナーに向き直り、構えを取ったが、次の瞬間真横から乱入してきたウラガノスに巨体で体当たりされた。ブラック「うわああああああああつ！」

ホワイト・ルミナス「ブラック！」

ノーザ「余所見をするな！」

ホワイト・ルミナス「きゃああああああああつ！」

吹き飛ばされたブラックに振り返ったホワイトとルミナスも、次の瞬間植物のツルのようなノーザの触手に身体を弾き飛ばされ、三人は地面に撃墜した。

キントレスキー「いやあつ！」

アクア「きゃああああああつ！」

キントレスキーが強烈な拳を炸裂させ、アクアを吹き飛ばす。吹き飛ばされたアクアは岩塊に激突した。

ミント「アクア！」

ミントが振り返ってアクアのもとに駆け出そうとするが、目前にイルクーポが現れた。ハッとミントが立ち止まった途端、イルクーポは素早く手を彼女の腹部にかざし、強力な衝撃波を放った。

ミント「あああああああつ！」

ミントも岩塊に激突し、全身に痛みが走ってしばらく立てなかった。

ローズは必殺技のメタルブリザードをカワリーノに向けて飛ばし

た。しかし、カワリーノは自慢の長い尾を回転させてローズの技を弾くと、ニヤリと笑った。

カワリーノ「効きませんよ、そんなものは」

ローズ「くっ・・・！」

カワリーノは尾を再び回転させると、ローズに向けて高速で振り飛ばした。

ローズ「なっ！？」

ローズはカワリーノの尾の一撃を受け、高く吹き飛ばされた。

ローズ「あああっ！」

ルージュ・レモネード「ローズ！」

ルージュとレモネードが天高く飛ばされたローズに振り返ったが、ふたりもその瞬間を突かれてソレワターセの攻撃を受け、悲鳴をあげながら地面に叩きつけられた。

ドリームはザケンナーを一体撃破した途端、猛烈な疲労に襲われた。はあはあ、と息を吐き一旦目を真下に向ける。だが彼女に休息の時間はなく、すぐ目の前にビブリスが姿を現した。一瞬驚いたドリームはすぐに顔を引き締めてビブリスに拳を放つ。だが、ビブリスは瞬間移動して拳をかわし、ドリームの背後に移動すると、彼女の背中に強い膝蹴りを食らわせた。

ドリーム「あっ・・・！」

ドリームがひるんだ瞬間、ビブリスは再び瞬間移動をして彼女の前に立つと、その胸に強烈なエルボーを炸裂させた。

ドリーム「うわあああああああっ！」

ドリームも吹き飛び、岩塊に衝突して、苦痛に顔を歪めたままぐったりとなった。

ムーンライトも応戦していたが、体力が消耗し始めていた。ナキサケーベを吹き飛ばし、思わず肩で息をする。だがその瞬間、目の前にサーキュラスが現れた。ハッとした瞬間、鋭い拳が彼女の腹部に叩き込まれる。「かはっ」と声を漏らしたムーンライトはさらに強烈なキックを受け、後ろに吹き飛ばされた。

サンシャインも複数のザケンナーやウザイナーを相手にサンフラワー・イージスを張って身を守っていたが、ザケンナーの繰り出す連続パンチに防御技の中心から亀裂が入り始めた。

サンシャイン「（このままだと、持たない・・・！）」

次の瞬間、亀裂が全体に広がり、遂にサンフラワー・イージスが破壊された。

サンシャイン「わああああああああっ！」

サンシャインはザケンナーの拳を受けて弾き飛ばされた。

ブライトとウィンディは再びスパイラル・リングを起動させ、ハデーニヤに向けて必殺技を飛ばした。だがハデーニヤは数枚の赤い羽毛を残して瞬間移動してかわすと、ふたりの背後に現れた。ハツとふたりが振り返ると、ハデーニヤは両手に力を込めて拳を炸裂し、ふたりを吹き飛ばした。

ブライト「うわああああああああっ！」

ウィンディ「きゃああああああっ！」

ブライトとウィンディも地面に撃墜し、あまりのダメージに身体が動かなかった。

ピーチはホシイナーを三体浄化させ、さらにジャンプしてザケンナーを蹴り飛ばしたが、着地した瞬間、ミズシタターレの飛ばした巨大な水球に直撃した。直撃を受けたピーチは悲鳴をあげながら飛ばされ、五体ものコワイナーやナケワメーケを相手にしていたパツシヨンに衝突し、ふたりは強い力で地面に倒れた。

ベリーとパインもそれぞれ体力に限界を感じながらも前方にいるザケンナーたちにキュアスティックを向ける。だが向けた途端、目の前にブラッディが突然現れた。ハツとふたりが驚くと、ブラッディはコウモリのような翼を翻し、突風を起こした。

ベリー・パイン「くっっ・・・！」

ふたりは最初耐えていたが、すぐに足が地面から離れ、パインは地面に、ベリーは岩塊に叩きつけられた。

怪人たちの反撃に次々とプリキュアが倒れていく。しかし、彼女

たちは何度地面に倒れても、腕や足に力を込めて、立ち上がろうと  
していた。その様子を離れた場所で腰を降ろして見ていたアルティ  
メットはすくつと立ち上がった。

アルティメット「・・・もうあきた」

アルティメットはそう一言呟くと、ギガバトルナイザーの先端を  
プリキュアたちに向け、青い放電と鎌状の赤光弾を飛ばした。アル  
ティメットが放った二つの技はとどめを刺そうと包囲していた複数  
のザケンナーやウザイナーたちを爆散してプリキュアたちに次々と  
直撃した。

プリキュアたち「きゃああああああああああああああっつ  
！！」

再び地面や岩塊に叩きつけられるプリキュアたち。ボロボロのう  
えに強烈な攻撃を受け、彼女たちにはもう立ち上がる力が出なかつ  
た。

ブロッサム「みなさん！？・・・くっ！」

マリ「アルティメット！よくも！」

ブロッサムとマリは足に力を入れて高く跳び、前から襲いかか  
ってきた怪人たちの頭上を越えて一気にアルティメットのいる場所  
に降り立った。ふたりの降りた場所から数メートルの位置にアルテ  
イメットが立つ。ブロッサムとマリはアルティメットを目で捉え  
ると、いっせいに走り出した。

ブロッサム「はああっ！」

ブロッサムがアルティメットに向かって拳を振り上げ、その顔に  
目がけて放った。だがアルティメットは余裕の表情でさっとかわし、  
ギガバトルナイザーの先端で彼女の腹部を殴り飛ばした。

ブロッサム「あああっ！」

マリ「ブロッサ・・・ああっ！」

高く殴り飛ばされたブロッサムを見たマリもギガバトルナイザ  
ーで殴られ、その力にふたりは一気にプリキュアたちのいる場所に  
まで弾き戻された。



[illegible]

アルティメットは大声で笑うと、前へと歩いた。同時にプリキュアたちを追い詰めていた怪人たちがゆっくりと後退し始め、間を空けてアルティメットに道を作った。その道を通り、プリキュアたちの前へ来たアルティメットは彼女たちにギガバトルナイザーの先端を向ける。

アルティメット「さよならだな、プリキュア。力尽きる前に全部吸い取ってやるぜ」

プリキュアたちは全員唇を噛み、口惜しげな表情でアルティメットを睨む。だが、疲労と激痛で身体を動かすことができない。アルティメットの笑みがさらに凶悪化した。

もうここまでなのか。ブロッサムが思ったその時だ。

塔の頂上にある闘技場が突然溢れんばかりの白い閃光を発し、プリキュアたちも、アルティメットと怪人たちも目を向けた。

とても強い輝きだった。それはまるで流星が衝突したようで、上空に存在する暗黒のカーテンは光を浴びて揺らぎ始めていた。

次の瞬間、白い光が塔の頂上から尾を引いて飛び出し、噴水のよ  
うに空へ上った。光は黒い空で大きなカーブを描くと、プリキュア  
と怪人軍団に目がけて凄いいスピードで接近してきた。アルティメッ  
トと怪人たちが思わず一歩後退すると、プリキュアたちの前にもの  
凄いい光がほとばしった。あまりのまぶしさに全員が一旦目を瞑り、  
少しずつ開けていくと、徐々に光は弱くなり、消え始めた。完全に  
光が消えた瞬間、プリキュアたちの前に誰かが立ち、彼女たちは全  
員驚きの声をあげた。

プリキュアたち「真夜さん!？」

光の中から現れたのは真夜だった。アルティメットの攻撃を受け永遠の眠りに着いたと思われていた真夜は首をちよつと動かしてブリキユアたちにふつと微笑みかけると、すぐにキリツと目を鋭くして同様に驚いているアルティメットに顔を戻した。その彼女のすぐ

横にロコモが降りる。真夜はロコモに目を向け、合図を送った。

真夜「行くよ、ロコモ！」

ロコモ「オツケーロコモ！」

ロコモは煙を発してペンダント状のアイテムに姿を変えた。彼女は右手で持つと、左手の人差し指で弾いた。チリーンと響きのいい音が空間を震わせ伝わる。真夜はそれを頭上へ掲げ、叫んだ。

真夜「プリキュア！セイント・リバーズ！」

次の瞬間、ペンダントが白く発光し、彼女を包んだ。光の中で目を閉じた真夜は身体を上昇させた。身体を上昇させていくうちに真夜の背中に妖精のようなシャープで透明な六枚の長い翅<sup>はね</sup>が施される。やがて広い光のガーデンに降りた真夜は微笑みを浮かべながら舞い踊るようにスキップし始めた。スキップすることに彼女の身体に大量の白い羽毛が集まり、衣装へ変わっていく。二の腕までの袖の純白の服に天女のような肩飾り、花が開くような形に裾が広がったスカート、両腕には天使の翼のような形状をしたリストレット、両足にはショートブーツとオーバーニーソックス。胸には丈の長いリボンが施され、中央に白い薔薇<sup>バラ</sup>があしらわれた。そして黒い長髪が銀に染まっていき、水色のカチューシャが装着され、さらにその上に短くて薄い透明なベールが覆われた。

最後に真夜は変身アイテムのペンダントを首に掛けると、六枚の翅<sup>はね</sup>を広げて光のガーデンから舞い降りた。そしてゆっくりと地上に降りていく。変身した真夜はさらに驚いているプリキュアと怪人軍団の間で優雅に着地し、翅<sup>はね</sup>を閉じた。

アルティメット「キュアリベリオンじゃない。誰だ、おまえは!？」

アルティメットが戸惑いながら尋ねると、真夜は静かに目を開けた。そして。

真夜「セイバー……………。全てを希望へ導く救世の光！キュアセイバー!!!」

そう名乗った瞬間、彼女の背後に神々しい光<sup>めいみ</sup>が煌いた。

## 最後の希望（後書き）

次回、キュアセイバーVSアルティメット&怪人軍団！

## 救世主

光の中で変身を遂げ、プリキュアになった真夜の姿は塔にいる妖精たちの位置からもよく見えていた。

身体から光が滝のように溢れてもの凄いうえにとても綺麗だ。キユアリベリオンが世界を破滅に追い込む悪魔が魔王だとしたら、キユアセイバーはその世界を救うために地上に降臨した救世主のようだった。その威光のある姿に、妖精たちは思わず感嘆のため息を吐いた。

フープ「すごくきれいフプ・・・」

シロップ「ほんとロプ。あの娘が光のプリキュアに変身したロプ！」

ナッツ「いや、正確には『戻った』んだナツ。あれがロモモの言っていた三年前に世界を守った、真夜の本来のプリキュアの姿ナツ！」  
タルト「けど、真夜はんがプリキュアに戻ったところで、あんなぎょーさんな数に勝てるんか？」

ナッツ「それは・・・」

その時、ココが決意を固めた表情で後ろを振り返り、闘技場の出口に向かって走り出した。

ナッツ「ココ！どこ行くナツ!？」

ココ「決まってるココ！プリキュアの所ココ！」

タルト「なんやて!？」

ココ「ココたちにもきつと何かできることはあるはずココ！こんな所で見ているくらいなら、例え小さな力だとしても、ココはプリキュアを助けるココ！」

ココはそう言つと、出口の扉の隙間から入って闘技場を出ていった。タタタ、と階段を降りていくココの足音が小さくなっていく。  
ナッツ「ココ・・・」

ナッツはしばらくためらった顔で立ち尽くしていたが、やがて彼も意を決した表情で走り出し、ココを追った。

タルト「ああ〜！もうこうなったらヤケクソや〜！」

ナッツに続き、妖精たちも全員走り出して闘技場を出ていった。

アルティメット「キュアセイバーだとお！？」

アルティメットの驚愕の声が荒野に響き渡った。当然だ。自らの手で葬ったはずの雨牙真夜が目の前で生還したうえに光の中でプリキュアに変身したのだ。アルティメットだけでなく、彼が操る怪人たちも突然の新プリキュアの登場に驚いた様子で立ち尽くしていた。プリキュアたちも全員口を開けて驚いていたが、次第に口元がゆるんで笑顔になった。

ブロッサム「真夜さん・・・いえ、キュアセイバー・・・！！」

ブロッサムは感激して言った。真夜が帰ってきたこと。そして光を取り戻したこと。この奇跡に彼女は心の底から喜んだ。

アルティメット「そうか・・・。それがおまえの本来のプリキュアとしての姿か。だが、一人増えたところで変わらんわ！行け！怪人ども！」

ようやく状況を理解したアルティメットがギガバトルナイザーを掲げて再び戦闘開始の合図を送った。合図と同時に怪人たちは声をあげていつせいに走り出し、セイバーは瞬時に目を細めた。

セイバー「これ以上、私の友達を傷つけはさせない！」

セイバーは怪人たちに向かって走り出すと、高く跳び上がった。

そして背中の翅<sup>はね</sup>を広げて怪人たちの頭上を飛行する。怪人たちを飛び越えたセイバーはアルティメットの背後にそびえていた岩塊の頂上に降り立った。

ハデーニヤ「それで逃げたつもりかい？」

岩塊の上に立つセイバーに向かって、ハデーニヤ、ブラッディ、ビブリスが高速で飛行して迫った。セイバーは翅<sup>はね</sup>を閉じると、首に掛けていた変身道具のペンダントを右手で？み、再び左手の人差し指で弾いてチリーンと、鳴らした。すると、ペンダントから白い光

球が二つ飛び出し、それぞれ彼女の両手の上に降りた。降りた途端、光が弾け、中から直径30センチ、幅3センチ程度と小さいが妙に厚い銀色に輝くシンバルが現れた。

セイバー「鳴らせ、福音の奏を！リリフシンバル！<sup>かなで</sup>」

セイバーはリリフシンバルを手に取ると、今にも猛スピードで迫ってきているハデーニヤたちに向かって両腕を伸ばした。

セイバー「セイバー！サウンド・ウェイブ！」

そしてそのままシンバルをジャン！と鳴らす。鳴った瞬間、シンバルから強力な音波が放たれ、空間を大きく震わせた。空間の波はセイバーに向かってきていたハデーニヤ、ブラッディ、ビブリスに押し寄せ、その波動の威力に三人は絶叫をあげて宙を回転しながら、地上に墜落した。

セイバー「はっ！」

三人を吹き飛ばしたセイバーは岩塊から荒野へ降りた。降りた瞬間、複数の幹部が瞬間移動して彼女を取り囲んで襲いかかる。セイバーは構えを取り、幹部と戦闘に入った。

それは「戦っている」と言うよりも「踊っている」と言ったほうが適切だった。

セイバーは背後から迫ったノーザの爪を華麗にかわして逆に腹部にエルボーを与えてひるませると、<sup>おほ</sup>翅を翻し、身体を舞うように回転させながらサーキュラスの足を薙ぎ払い、横様に倒れさせた。そしてムカーディアの腹部に素早く鋭い蹴りを放つと、ジャンプし、光のカケラを撒き散らして空中を三回転しながら、真下に立っていたキントレスキーの顔に思いっきりキックを炸裂させた。

キントレスキーが吹き飛んで岩塊に激突するのを見届けずに優雅に着地したセイバーはスコルプのパンチをかわし、逆に胸にエルボーを食らわせてひるませ、さらにその顔を目がけて右足を垂直に振り上げ、爪先で後ろざまに倒した。そして再び背後から迫り、ガツと右肩を？んだノーザの手を振り払って腹部にもう一度拳を叩き込む。ノーザはひるみながらも爪で攻撃しようとした横様に振り払ったが、

セイバーはそれもさつとかわして腹部に三度目の拳を放って吹き飛ばした。そしてそのまま再び身体を回転させてベルゼイの顔に拳を炸裂させる。吹き飛ばされたベルゼイは地面に叩きつけられ、勢いよく地面を転がって岩塊に衝突し、爆散した。

ベルゼイを撃破したセイバーは前方から迫ってきていたアナコンデイの足を蹴り倒すと、次に猛烈な勢いで再び襲ってきたハデーニヤの首筋を狙って回し蹴りした後、急いで振り返った。そして翅<sup>はね</sup>を広げて今度は低飛行し、離れた場所から技を飛ばして攻撃しようとしていたモエルンバとイルクーポに目がけて両腕を左右に広げて強烈なラリアットを炸裂し、ふたりを地面に倒した。地上に着地し、翅<sup>はね</sup>を閉じたセイバーに今度はカワリーノがムチのような長くて太い尾の一撃を叩き込む。だがセイバーは攻撃をかわし、高く跳んでカワリーノの左肩に着地した。驚いて左肩に振り向いた瞬間、カワリーノは顔に強力な膝蹴りを受け、後ろ向きに倒れた。

カワリーノが倒れる寸前に地面に降りたセイバーは走り出し、ウラガノスの前で止まると、彼の横腹に目がけて強烈な蹴りを叩き込んだ。

セイバー「はあああああああつ！」

しかも四回。あまりの威力にウラガノスは苦痛に顔を歪めながら耐えていたが、四回目のキックが終わった途端、セイバーがジャンプして宙で一回転しながら彼の横顔にこれでもかと爪先キックを叩きのめした。

ウラガノス「ぐわあああああああああつ！」

ウラガノスは遂に耐え切れず、赤く発光しながら地面に倒れ、爆散した。

セイバーはここで一旦、後ろ向きに高く跳び、怪人たちから離れた場所に降りると、再びリイフシンバルを手についた。そしてジヤーンジヤーンジヤーン！と三回鳴らす。すると、今度は銀色の光の環が三つ飛び出し、彼女の周囲を飛び交った。

セイバー「セイバー！リカヴァリング・アレスト！」

そしてシンバルを一際高くジャーン！と鳴らす。するとそれが合図だったのか、三つの光の環は怪人たちに飛び交いながら高速で向かい、モエルンバ、スコルプ、アナコンディ、クラインの四人に直撃した。

スコルプ「何だこれは！？ぐっ・あああああああつ！」

直撃した四人は光の環に身体を縛られたと思つたら、次の瞬間、光の環は溢れんばかりの強い光を発揮して四人を光の中に包み込んだ。四人は絶叫をあげながら、光に包まれていき、その中で溶けていくように消滅した。

幹部を一気に四人も葬ったセイバーだったが、ハッと気がつくと、周囲にいつの間にか残りのザケンナーやウザイナー、ホシイナーたちが包囲していた。ザケンナーたちはいつせいにセイバーを睨むと同時に駆け出して飛びかかった。

だがセイバーは慌てず、シンバルを頭上に上げてジャーン！とまた鳴らした。

セイバー「セイバー！セイクレッド・フラッシュ！」

叫び終わった途端、シンバルから白い閃光が発生し、周囲をまるで朝日が昇ったようにまぶしく照らし出した。

ザケンナー「ザケン・ナアッ！？」

コワイナー「コワイナ〜！？」

ナケワメーケ「ナアケワメエケッ！？」

ソレワターセ「ソオレワタアセッ！？」

閃光を浴びて、苦しみだすザケンナーたち。しばらくすると、彼らの体が黒い塵のように消滅し始めていき、やがて全員が完全に塵と化して消えた。

ピーチ「す、凄い！」

戦いの様子を見ていたピーチが正直な感想を漏らした。それは他のプリキュアたちも同じだった。あれだけの数を、しかも中には強敵が数人も混じっているのに、セイバーたった一人が次々と撃破していく。考えてみれば、彼女は三年前たったひとりで闇の脅威から



世界を守った人物なのだ。想像以上のパワーを秘めていても、おかしくはない。

セイバーは残り十体の幹部たちに向かって走り出した。一步一步地面に足を降ろす度に彼女の速度が加速する。幹部たちの目前にまで来ていたセイバーの身体は白く輝き、速度は光速をも超えるほどになっていた。

セイバー「はあああああああああつ！」

まさに瞬速。セイバーは目にもとまらぬ速さで怪人たちを翻弄し、リリースシンバルから放った光で次々と銀の光の中に包み込む。全員を光の中に封じ込めたセイバーは再び一際大きくシンバルを鳴らすと光の威力を増強させ、イルクープ、サーキュラス、ビブリス、ミズシタターレ、キントレスキー、ハデーニヤ、ブラッディ、カワリーノ、ムカーディア、ノーザを断末魔の声をあげる間もなく、一気に消滅させた。

アルティメット「バ、バカなあつ！」

アルティメットは愕然した。あれだけいた怪人たちがたったひとりのプリキュアによって全員倒されたのだ。ザコどもはともかく、幹部クラスのやつらまでもが手も足も出なかったことに彼は目の前で起きたことがとても信じられなかった。

ココ「みんな！大丈夫ココ！」

その時、ココの声が聞こえ、プリキュアたちは全員振り返った。すると、塔にいた妖精たちが彼女たちに走ってきていた。

ドリーム「ココ？」

パイン「シフォンちゃんやタルトちゃんもいる！」

ウィンディ「みんな、どうしたの？」

タルト「あんさんらを助けにきたんや！」

ブラック「私たちを？」

ポプリ「例え力が小さくても、ポプリもプリキュアを助けるでしゅ！プリキュアはポプリたちにとって大事な友達なんでしゅ！だから、みんなで力を合わせて守るでしゅ！」

シフォン「キュアキュア」！

サンシャイン「ポプリ・・・」

ピーチ「シフォン・・・」

マリリン「みんな・・・ありがとう。でも大丈夫だよ。ね、ブロッサム？」

ブロッサム「はい。もうすぐ終わりますから・・・！」

そう言ってブロッサムは立ち上がった。他のプリキュアも続々と立ち上がっていく。

そう。ブロッサムの言うとおり、戦いは終盤に入っていた。残るはアルティメットただ一人。逆転され、追い詰められたアルティメットはギガバトルナイザーを構えていたものの、額から大量の汗が流れ始めていた。

ブロッサム「アルティメット！あとはあなただけです！観念しなさい！」

アルティメット「むう・・・！」

ブロッサムがアルティメットに人差し指で指し、彼にかかろうとした瞬間、セイバーが彼女の前に出て止めた。

セイバー「待って！」

ブロッサム「！・・・セイバー？」

セイバー「あいつは私にやらせて」

ブロッサム「え？ですが・・・」

セイバー「お願い、ブロッサム」

ブロッサムはセイバーの目を見た。彼女の目はどこまでも強く、そして澄み切っていた。そして全てを任せてほしいと言つかのような表情にブロッサムも強い表情でうなずいた。

ブロッサム「分かりました。みなさんも、よろしいですね？」

プリキュアたち「うん！！！」

セイバー「ありがとう。・・・アルティメット、あなたの相手は、私よ！」

アルティメット「・・・ほう」

さっきまで追い詰められていたアルティメットだったが、対峙するのはセイバーのみと分かった途端、ニヤリと口角を上げて歪んだ笑いを浮かべた。

荒れ果てた荒野を背景に、キュアセイバーとアルティメットが向き合う。セイバーはリリイフシナル、アルティメットはギガバトルナイザーを斜めに構えた。プリキュアと妖精たちはふたりの位置から離れた場所でセイバーを見守る。

セイバー「・・・あなただけは、絶対許さないっ！」

アルティメット「ほざけ！今すぐ立てないようにしてやるわ！」

そして次の瞬間、ふたりは同時に駆け出した。ガキンツ！と音がしてリリイフシナルとギガバトルナイザーが交わる。ふたりは一旦、互いの武器を離すと、セイバーは身体を一回転させて回し蹴りを飛ばしたが、アルティメットは頭を下げてかわした。蹴りをかわされたセイバーは隙を狙って今度は腹部に膝蹴りを食らわせようとしたが、彼女の膝蹴りはギガバトルナイザーに防がれた。

セイバー「くっ・・・！」

アルティメット「疲れてきているみてえだな。はあっ！」

今度はアルティメットが反撃に出た。ギガバトルナイザーでセイバーの足を振り払おうとするが、彼女はジャンプしてかわした。だがかわした隙を狙って、アルティメットは彼女の腹部に鋭い蹴りを炸裂させた。

セイバー「ああっ！」

ブロッサム「セイバー!？」

後ろに飛び、セイバーの身体が地面に叩きつけられる。アルティメットはニヤツと笑うと、先端を上空に向け、ゆっくりと回し始めた。その途端、先端に黒い旋風が集まり、加速していく。

ブロッサム「あれは・・・!？」

ブロッサムが技を見定めた時、セイバーの身体が起き上がった。だが疲労と激痛のダメージのせいか、ふらふらと足が定まっておらず、今にも倒れそうな状態だ。セイバーの状態を見たアルティメッ

トはさらに笑みが凶悪化し、彼女に目がけて威力が最大限に達した先端を振り下ろし、必殺技を放った。

アルティメット「アルティメット・トルネード！」

ゴオオオオオオオツツ！！！！

黒い巨大竜巻がマツハのスピードで迫っていく。だが、セイバーは動かない。彼女はふらふらになりながらも挑むような目で巨大竜巻を見ていた。竜巻は爆風や雷雨を周囲にも発生させて上空へ伸びていく。その威力にプリキュアたちは飛ばされまいと両足に力を込め、目を閉じながら立っていた。妖精たちも飛ばされないように互いに手を繋いで支え合っている。そして巨大竜巻は次の瞬間、セイバーを呑み込んだ。

プリキュアたち「セイバー！！！！」

全員が叫んだ。巨大竜巻は勢いを消さないどころかさらに威力を増して黒い空へ伸びていく。勝利を確信したアルティメットはガチガチと牙を鳴らし、大口を開けて笑おうとした。その時だった。

ジャーンツツツ！！と、音が轟いた。すると、今の今まで勢いを増していた巨大竜巻が突然大きくねじれたかと思うと、次の瞬間水滴が弾けるように消滅したのだ。アルティメットは笑おうとした大口をあぐりと開けた。

セイバーは生きていた。彼女は竜巻の中でシンバルを鳴らして技を発し、アルティメットの最大必殺技を消滅させたのである。思わずプリキュアと妖精たちから歓声があがる。両腕を降ろしたセイバーは大口を開けたままのアルティメットをひと睨みして言った。

セイバー「まだ分からないみたいね。あなたより私の力のほうが上ということに……」

そして両腕を大きく広げてセイバーはシンバルを鳴らした。鳴らした瞬間、シンバルから無数の白い光の粒が弾け、彼女の周囲に集まる。ある程度鳴らして光の粒を発生させたセイバーはシンバルを頭上に上げた。

セイバー「セイバー！ホーリー・アタック！」

セイバーは頭上でシンバルを大きく鳴らした。すると、彼女に集まっていた光の粒が尾を引き、光速で次々とアルティメットに向かって発射した。アルティメットはハツとしてギガバトルナイザーを構えようとしたが、もう遅い。光の粒は凄いい勢いで続々とアルティメットの顔に、肩に、胸に、腹部に、腕に、足に衝突していく。

アルティメット「ぐおおおおおおおおおおおっ！」

無数の光の衝突に遂にアルティメットは腕に直撃した衝撃でギガバトルナイザーを手放し、飛ばされたギガバトルナイザーは地面に突き刺さった。

マリン「やったあっ！」

アルティメット「おのれ！」

ギガバトルナイザーを手放したアルティメットは爪を剥き出しにしてセイバーに飛びかかった。

セイバー「はっ！」

だがセイバーはアルティメットの爪をかわすと振り返り、彼の横腹を狙ってキックを放った。しかし、アルティメットも彼女に急いで振り返り、キックしようとした片足を両手で捕らえた。ならばと考え、セイバーはもう片方の足に力を込めてジャンプし、アルティメットの顔を狙って放つ。まさかもう片方の足で攻撃を仕掛けてくるとは思っていなかったアルティメットは頭を下げて辛うじてかわしたが、その瞬間捕らえていたセイバーの足をつい離してしまった。着地したセイバーは隙ができた胸に目掛けて強烈なパンチを叩き込んだ。

アルティメット「ぐああああああああああっ！」

アルティメットは凄いい勢いで押し飛ばされたが、岩塊に激突寸前でなんとか足に踏ん切りをつけて体勢を整えた。

アルティメット「こんなはずはない！究極である俺が、たかが人間に負けるはずがない！ぬああああああああっ！つつ！

アルティメットは両腕を大きく広げて高く跳び上がり、勢いをつ

けてセイバーに飛びかかった。

だがセイバーも準備ができていた。両足に力を込め、彼女も高く跳び上がる。そしてアルティメットに目掛けて白く輝きを増して増強させた右足を勢いよく伸ばした。

セイバー「はあああああ．．はあっ！！！」

次の瞬間、セイバーの光のキックがアルティメットの胸に直撃した。直撃した途端、胸に白い閃光が走り、アルティメットは地面に強く撃墜した。だが強大なダメージを受けておきながらも、それでもよると立ち上がる。セイバーはそんなアルティメットの様子を見ながら着地すると、リリースシンバルを手についた。

セイバー「これでとどめよ！」

セイバーはシンバルを上空へ向けて投げ飛ばした。すると投げられたシンバルは意思を持ったかのようにジャンジャン！と音を鳴らしながら飛び交い、互いにカーブを描きながら持ち主のところへ戻ってくる。シンバルはセイバーの目前で垂直に空中で停止すると、輪を描くように高速で回転し始めた。回転と同時に銀の環が発生し始め、やがて光の粒を集め始める。大量の光の粒がシンバルが生んだ銀の環に集まっていき、彼女は環の中心部に両腕を勢いよく伸ばした。

セイバー「プリキュア！スターライトチャージ！」

そして渾身の力を込めて叫んだ。

セイバー「クラアアアツシュ！！！」

次の瞬間、環の中心部から強力な銀の光線が発射された。銀の光線は一直線にアルティメットに直撃し、アルティメットは光線を受けながらそのまま後ろの方角へ吹き飛ばされ始めた。

アルティメット「ぐ．．おお．．ぐおおおおおおおっ  
っ！！！」

アルティメットは塔の方角へぐんぐん弾き飛ばされていく。そして遂にアルティメットは塔の黒壁に激突し、壁に礫の状態のまま銀の光線を受け続けた。

アルティメット「が・・・あ・・・あああああああああああああ  
あああつつつ！！！」

アルティメットが一際大きい絶叫をあげた瞬間、彼の黒い身体が火を噴いた。次の瞬間、アルティメットは爆発し、ツインタワーはあつという間に炎に包まれた。亀裂が地上にまで到達し、崩壊を始める。100メートルの高さを誇っていた塔は積み木が崩れていくがごとく、大量の破片を撒き散らしながら炎とともに地上へ崩れていった。爆風と黒煙が周辺に押し寄せる。だが、それもしばらく経って消えると、荒野は静寂に包まれた。

ブラック「た、倒したの？」

ホワイト「みたいね」

ルージュ「・・・ということは！」

ミント「私たち・・・！」

アクア「遂にやったのよ！」

アクアの声に他のプリキュアたちも目を輝かせて顔を合わせあった。

プリキュアたち「やったあーっ！！！」

プリキュアと妖精たちは歓声をあげ、互いに抱き合ったり、跳び上がったりに喜んで。

マリ「勝った！勝ったんだよ、私たち！遂に勝ったんだ！！」

ブロッサム「はい！やりました！！」

ブロッサムとマリも手を叩きあつて喜んでいる。すると、その二人に向かってセイバーが微笑みを浮かべて近づいた。

ブロッサム「！！・・・セイバー！ありがとうございます、先ほどは助けてくれて」

セイバー「ううん。礼を言うのは私のほうよ。あなたたちのおかげで私はこうしてまたキュアセイバーになれたんだから」

すると、セイバーの首に掛けられていたペンダントがポン！と煙を発して口モモが出てきた。

口モモ「セイバー、それはない口モ。真夜ちゃんをセイバーに復活

させたのはこのロモモだロモ。それを忘れちゃだロモ」

セイバー「あ、そうだったね。ごめんね、ロモモ。ありがとう」

セイバーはちよっぴり頬を膨らませているロモモに笑って礼を言った。

ブライト「でも、これで一件落着だね。アルティメットも滅んだし、あとは帰るだけ・・・」

フラッピ「まだラピ！」

その時、ブライトの衣装に装着されているポーチからフラッピが飛び出してきた。フラッピに続いてメップル、ミップル、ポルン、チヨッピも飛び出す。

フラッピ「まだ終わってないラピ！」

チヨッピ「邪悪な気配を感じるチヨピ！」

ポルン「なにポポ？怖いポポ・・・」

ルミナス「ポルン・・・？」

その時だった。荒野中にうめき声が轟き、プリキュアたちは辺りを見回した。すると、荒野のあちこちから無数の赤い人魂のようなものが飛び出し、今は残骸となった塔に次々と集結していく。

セイバー「（あれは、怪人たち・・・）」

無数の人魂のようなものは塔の瓦礫がれきの周辺をしばらく漂っていると、突然ふっといっせいに消え始めた。最後のひとつが消えた途端、突如激しい揺れがプリキュアたちを襲った。

ベリー「な、何！？」

レモネード「じ、地震ですか！？」

セイバー「ううん、違う！これは・・・！」

その時突然、塔の残骸が大きく盛り上がり、巨大な何かの姿を現した。



## 救世主（後書き）

次回、ばかでかいやつ登場！

## 百体魔獣アモン現る

「それ」は、まさしく悪魔の二文字にふさわしい姿をしていた。体長は崩壊したツインタワーをも超える巨体を誇り、背中には巨大で鋭角な翼が暗黒の空を覆うかのように広がっていた。頭部には二本の角が伸び、さらには双方に分かれた長い尾が大地を叩いて震わす。腕には何でも引き裂いてしまいそうな鋭い指が生え、そして顔には釣り上がった赤い両目がプリキュアたちを見据え、怪物は数千本もありそうな牙の生えた巨大な口で空間を激震するほどの雄叫びをあげた。

その巨体だけでも十分驚くが、何よりも彼女たちを驚かせたのはその怪物の体だった。怪物の体は数百体もの怪人たちで形成されていた。ドックゾーンからラビリンスまでの幹部他、無数のザケンナーやナケワメーケ、さらには最初に出現した影の亡霊たちもが磁石のように体をくっつけ合うなり埋もれたりして融合している。離れて見ると怪物は全身を黒に統一しているように見えるが、接近すると即座にありとあらゆる怪人たちがうめき声をあげながら怪物の一部となっているのが判明するのだ。

ブラック「あああああああ・ありえなーいっつっ！！」

ピーチ「あれとこれとそれと・って、いろんなのが合体してるーっ！」

レモネード「あれを見てください！」

レモネードが怪物の頭部を指差した。レモネードが指差した方向を見ると、怪物の頭部の中心にアルティメットが下半身を埋めてプリキュアたちを見据えていた。

セイバー「なっ・アルティメット!？」

アルティメット「これでおまえたちの伝説も終わりだ！おまえたちがこの俺に勝つ可能性など、万に一つもない！行け！我が究極形態アモンよ!!!」

アルティメットが命令すると、怪物・アモンは絶叫をあげてその圧倒的巨体を前へ進め始めた。速度は遅いが、アモンが一步步進む度に立つてられなくなるほど大地が波打ち、震動する。プリキュアたちは大地の揺れと戦っていたが、すぐにバランスが崩れて座り込んだ。

セイバー「くっ……。アルティメットめ、あんな切り札を用意していたなんて！」

ドリーム「このままだと、地球が危ない……。！」

ブロッサム「私たちで、なんとか食い止めないと！」

ローズ「でも、どうやって!?」

ピーチ「とにかく攻撃してみよう!みんな!」

パッション「そうね。やれるだけやってみましょう!」

ピーチとパッションの言葉に、全員うんとうなずいた。そして両足に力を込めて、震える大地になんとか立ち上がり、徐々に迫ってくるアモンを見据えた。

ブライト「行くよ!ウィンディ!」

ウィンディ「ええ!ブライト!」

まずブライトとウィンディが身体を上昇させて飛行し、アモンの周囲を飛び交う。アモンは巨大な両腕を振り回したが、速度が遅いのでふたりは難なくかわせた。アモンの背後に回ったブライトが両腕にエネルギーを込める。

ブライト「光よ!」

ブライトは巨大な黄緑の光球を飛ばした。光球はアモンの背中に直撃し、閃光と爆発が起きたが、アモンには全く効いていないように傷ひとつもできなかった。

ウィンディ「風よ!」

今度はアモンの右肩に着地したウィンディが両腕に力を込めて通常よりも強力なピンクの爆風を起こす。爆風はアモンの首に衝突したが、首に体を埋めていた何体かの怪人が叫んだ程度でアモン自身は痛くもかゆくもなさそうだった。

もう一度爆風を放とうと両腕に力を溜めたその時、ウィンディは両足をぐいと引つ張られた。バランスを崩しそうになって彼女が急いで両足を見やると、なんと融合していた怪人たちの手がウィンディの両足を？んでアモンの体の中へ引きずり込もうとしているではないか。右足はミズシタターレ、左足はアナコンディが握ってアモンの中へとぐいぐい引つ張っていき、ウィンディは悲鳴をあげた。ブライト「ウィンディ！」

ウィンディの悲鳴を聞いて駆けつけたブライトが光球を彼女の足元へ飛ばした。光球を受けたミズシタターレとアナコンディは両足を離し、ウィンディは急いでジャンプして空中に飛んだ。

ブライト「ウィンディ、大丈夫？」

ウィンディ「ええ！ありがとうブライト！」

だがほっとしたのも束の間だった。次の瞬間、アモンの右肩にいる数人の怪人たちがブライトとウィンディを狙って強力な電撃を浴びせたのだ。

ブライト「うわああああああああああっっ！」

ウィンディ「きゃああああああああああっっ！」

電撃を浴びたブライトとウィンディは弾かれ、地上に撃墜した。

ブラック「今度は数人で行くよ！」

ピーチ・ベリー「うん！」

アクア「ええ！」

セイバー・ムーンライト「了解！」

ブラックのかけ声に、ピーチとベリー、アクア、セイバーとムーンライトが返事し、六人は高く跳び上がった。そして宙で身体を素早く三回転させると、声をあげながらアモンの胸に目掛けて強烈な拳と蹴りを炸裂させる。

アルティメット「なめるなあっ！」

だが、六人分の打撃攻撃にもアモンはびくともしなかった。逆に胸に埋め込まれていた怪人たちの光線を浴び、六人は悲鳴をあげて地面に激突した。

サンシャイン「プリキュア！シャイニング！」

ブロッサム・マリリン「フォルティシモ！！」

打撃技が効かないのならば、ブロッサム、マリリン、サンシャインが合体必殺技を起動させる。サンシャインが作った光のゲートを突破し、身体を黄金に輝かせたブロッサムとマリリンがアモンの腹部に飛び込んだが、飛び込んだ途端にふたりは弾かれて地面に叩きつけられた。

サンシャイン「ブロッサム！マリリン！」

サンシャインが急いで駆けつけ、ふたりを起こすが、アモンは反撃の準備をさせる間もなく巨大な手で三人を弾き飛ばした。

ブロッサム・マリリン・サンシャイン「きゃあああああああああ  
あっ！」

ドリーム「ブロッサム！マリリン！サンシャイン！」

弾き飛ばされた三人をドリーム、ローズ、ミントが両腕で受け止めた。だが受け止めたドリームたちも次の瞬間、アモンの腹部から放たれた光線を浴びて吹き飛ばされた。

あらゆるプリキュアの攻撃をはね返し、圧倒的強さを見せるアモン。アルティメットは次々とアモンに倒れていくプリキュアたちを見て、せせら笑った。

アルティメット「おまえたちにとどめを刺してやる。食らえ！」

アルティメットが叫ぶと、アモンの全身が真っ赤に染まった。次の瞬間、真紅となったアモンの全身から無数の光弾が炸裂し、地上にいるプリキュアたちに浴びせた。

プリキュアたち「きゃあああああああああああ  
つつつつ！！！」

荒れ果てた大地のあちこちに爆発と閃光が走り、炎が燃え盛る。

プリキュアたちは全員地面に叩きつけられ、全身がしびれるほどの激痛を受け取った。あまりの威力に妖精たちも危うく上空へ吹き飛ばされそうになった。

ブロッサム「くっ・・・」

マリィ「うう・・・」

激痛に顔を歪ませ、誰一人立てないプリキュアたち。アルティメットはそんな彼女たちの様子を見ると、大声で笑った。

アルティメット「はあっははははははっ！見たか、俺の究極の力を！おまえらがどんなに力を合わせても無駄だ！あきらめて力を渡せ！そして何もできずに絶望の中で彷徨<sup>さまよ</sup>ったまま宇宙とともに滅びる！」

その声はプリキュアたちの耳に届いていたが、彼女たちはそれでも立てなかった。全身に走る激痛とアモンの壮大な力を前にして、立ち上がる気力がとても湧いてこなかった。立ち上がらなくちゃと思いつながらも、指一本も動かせない。もはや本当にここまでなのかとあきらめに似た絶望が彼女たちを取り囲み始めた。

セイバー「ふざけ・・・ないで・・・！！」

だがたつたひとりだけ、左肩に手をやり、両足をガクガクさせながらセイバーがよろよろと上体を起こし、立ち上がり始めた。立ち上がったセイバーはキツとした目つきでアモン、いやアルティメットを睨むと、強い口調で言った。

セイバー「たとえどんなに強くても、私一人だけになったとしても私は絶対にあきらめないわ！あなたに降参するくらいなら、最後まで戦って死んだほうがよっぽどマシよ！」

ブロッサム・マリィ「・・・セイバー・・・」

アルティメット「はん、よく言うぜ。一度絶望に負けたやつが笑わせるんじゃない！」

セイバー「確かに私は一度絶望に負けて、あなたの言うことを聞き、地球を滅ぼそうとしたわ。でも今は違う。私はもうひとりじゃない！お父さんとお母さんはいなくても、私にはまだこんなに友達がいる！私は、ここにいる友達のためにも、大切な世界を守っていききたいの！」

ブラック・ホワイト・ブライィ・ウィンディィ「セイバー・・・」

セイバーの言葉を聞き、上体を起こし出すプリキュアたち。

アルティメット「なーにが友達だ？そんなくだらんもん、支配者となる俺には必要ない！」

セイバー「確かにあなたには必要ないでしょうね。あなたが支配者になれば、自由気ままに私みたいな駒を動かしていけばいいんだから……。でもアルティメット、友達のいる私と、いないあなたとは明らかな違いがあるわ！」

アルティメット「……。何？」

セイバー「それは『孤独』よ！全てを手に入れたあなたにどんなに忠実な家来が何万人もできたとしても、あなたが権力を振りかざしてさらに欲望を求めていく限り、あなたに本心をさらけ出して話し合える人は一生できないわ！私は、ここにいる友達のおかげでようやく絶望の孤独から抜け出せた。みんながいたから、私はもう一度希望を持てたの！」

ドリーム・ローズ・ピーチ・パッション「セイバー……。！」

セイバーの言葉ひとつひとつに心に希望が灯るプリキュアたち。

逆に顔をしかめるアルティメット。

セイバー「だから！私はもうあきらめない！希望は最後の最後まで絶対に捨てないっ！」

アルティメット「……。綺麗事をぬかすな。だったら、おまえから先に潰してやるわ！」

アモンが大きく口を開いた。牙が数千本も生えたのどの奥から赤い光が漏れ始める。アモンがセイバーに狙いを定めて、口から光線を発射しようとしたその時だった。

ビカーッ！！！！

突然ナツツの背負っていたリュックサックの中の数本のギヤラクシーミラクルライトがいつせいに輝きだした。

## 百体魔獣アモン現る（後書き）

次回、プリキュアに何かが起こる！



## 奇跡（前書き）

ハートキャッチ組はTV本編よりも先に登場させちゃいました。

## 奇跡

ギャラクシーミラクルライトの光に気づいたナッツは急いでリュックサックを背中から降ろして中を開けた。すると、中に入っている全てのミラクルライトが光を放っていた。

ナッツ「これは・・・！」

ナッツは一本のミラクルライトを手にとった。他の妖精たちも気がつき、ミラクルライトをじっと見つめた。

ミッブル「ミラクルライトが何かに反応しているミポ」

ココ「何かって、何ココ？どうしてミラクルライトが突然光りだしたココ？」

ここでロモモが「あっ」と気づいた。

ロモモ「セイバーロモ！セイバーの最後まであきらめない心に、ミラクルライトが共鳴を起こしたんだロモ！」

すると、ミラクルライトはロモモの声に応えたかのようにさらに輝きを増した。輝きが増すと同時に色とりどりの星がライトから飛び出す。それを見たナッツは次第に口元がゆるんで笑顔になると、即座にミラクルライトを全部取り出して妖精たちに渡した。

ナッツ「ココ！ナッツたちにもできることがあったナッツ！」

ココ「ココ？」

ナッツ「みんなでミラクルライトを振るナッツ！みんなの思いをひとつにすれば、このミラクルライトがプリキュアに力を与えてくれるナッツ！」

コフレ「そうですね！みんなの思いでプリキュアにパワーを送るですう！」

シプレ「シプレたちの力も加えて、アルティメットをやっつけるですう！」

シロップ「よし！やるロプ！」

タルト「みんなでプリキュアを助けるんや！」

シフォン「プリープー！」

妖精たちはみなミラクルライトを上空へ向けると、左右に振り、声を揃えて叫び始めた。

妖精たち「プリキュアに、力をーっ！」

妖精たちは同じ台詞を何度も繰り返して叫び、ミラクルライトを振り続ける。ロモモもミラクルライトを振りながら、羽を動かして、天高く飛び上がり、叫んだ。

ロモモ「みんな！ロモモが力を貸すロモ！だからみんなもミラクルライトを振って、プリキュアを助けるロモーツー！」

叫んだ瞬間、ロモモの身体が白く、そして強い輝きを放った。ロモモは身体を発光させたまま、ミラクルライトを天に向けて高く振り上げる。すると、ミラクルライトからいくつもの虹色の光が飛び出して、一定方向へと進んでいった。

虹の光が飛んでいった方向には避難所があった。避難所にはプリキュアたちとともにワンダー・プラネットに来た人たちを含め、数多くの妖精と精霊たちが待機している。避難所の位置からもアモンの巨体は見え、彼らのほとんどは恐怖に震えていたが、ミラクルライトから飛び出した虹の光がこっちに向かってくるのを目にすると、全員「何？」という表情になり、恐怖はどこかに行ってしまった。虹の光は避難所に向かって徐々に降下すると、まず最初に怖くて薫に抱きついていたみのりの手に降りた。

みのり「えっ？」

みのりが驚くと、虹の光は消え、代わりにミラクルライトがしっかりと彼女の手に握られていた。持っているだけでなんだか温かく、勇気が湧いてきた。

虹の光は次々と避難所の妖精たちの手に降り、ミラクルライトへと変わる。もちろん、満と薫、瞬と隼人、ブンビーにドーナツ国王たち、そしてプリキュアたちとともにワンダー・プラネットに遊びに来たみんなの手にもミラクルライトがしっかりと握られていた。みのりはミラクルライトをじっと見据えると、その手を高く振り上

げて大声で叫んだ。

みのり「プリキュアに、力を！」

みのりの声が続いて、避難所にいる全員がミラクルライトを高く振り、叫び始めた。

「プリキュアに、力を！！！」

さらに全員が振ったミラクルライトからこれでもかとはかりの多くの虹の光が発射し、無数の光は一直線に黒き天に向かって伸びていき、漆黒のカーテンに続々と飛び込んでいく。光はそのまま闇の中でスピードを増して突破し、宇宙に到達した。だがそれで終わりではなく、無数の虹の光はある方向に定めると、光速で次々と向かっていき、銀河を駆け出した。

光が進んだ方向にあったのは………地球だった。

虹の光はそのまま大気圏に突入すると、さらに分裂し、地上へと降下していく。光はやがて速度を低くし、光に気づいて空を見上げた世界各地の人たちの手にふわりと降りて、ミラクルライトに形を変えた。都会を悠々と歩く大人から貧困差が激しい村で生きる子供たちまで、人々は突然手にしたミラクルライトに最初は戸惑いを覚えていたが、握っているだけでなぜか希望が湧いてくる気がした。ミラクルライトを通して、ワンダー・プラネットでプリキュアを応援する者たちのかけ声を聞いた人々は、次第に自分たちもと思い始めていつせいにライトを空に向けて叫んだ。

「プリキュアに、力をーっっっ！！！！！」

人々の声は、握ったミラクルライトに伝わり、色とりどりの星々を空に目いっぱい弾け出した。

ココ「ココ？あれは……？」

妖精たちとともにミラクルライトを振っていたココは、星の见えない黒い空の向こうに極彩色の光が輝いていることに気づいた。それはまるで夜空を照らすダイヤモンドカラットのように、まぶしくも見えた。ロモモも気づき、歓声をあげた。

ロモモ「あれは地球の人たちロモ！地球にいるみんなが、プリキュ

アを応援しているんだ口モ！」

ナッツ「みんな！もう少しナツ！もつと声をあげて叫ぶナツ！」

ナッツが言うと、妖精たち、避難者たち、そして地球の全ての人々がミラクルライトを左右に振って、声を張り上げて叫んだ。

「プリキュアに、力をーつつつ！……！！！」

すると、荒れ果てた大地が黄金に輝き始め、その輝きはさらに増した。プリキュアたちは最初は驚いていたが、すぐに口角を上げて笑みが広がりだした。やがて大地のあちこちから、光が孢子となってふわりと浮き始める。

アルティメット「何だ！？この光は！？」

突然の光の発生に驚くアルティメット。アモンもセイバーを狙って口から吐こうとした光線を飲み込み、首を少しだけ動かして周囲を見渡した。

そして次の瞬間、20人のプリキュアの身体が、ふわつと高く上昇し始めた。それを見た妖精たちは渾身を込めて高く叫びをあげた。妖精たち「プリキュアに、力をーつつつ！……！！！」

すると、ミラクルライトは妖精たちの声に反応したかのように炸裂し、天高く上昇したプリキュアたちを包み始めた。プリキュアたちもその光を抗うことなく受け止める。

その光は、彼女たちに力を与える光。20人のプリキュアは、その優しい光の中で互いに手を繋いで円を作った。

セイバー「力が、溢れてくる……！！！」

やがて光を受け取ったプリキュアたちは目を閉じて、新たに姿を変えていく。

ブラック・ホワイト・ルミナスは、鳳凰の火と力を受け取ったスーパープリキュア。

ブライト・ウィンディは、花鳥風月の力を得たブライティブルームとウィンディイーグレット。

ドリームは、真っ白な翼を広げてスカートが増量し、衣装も赤みがかかった桃から白桃色に変わったシャイニングドリーム。

ルージュ・レモネード・ミント・アクア・ローズも翼は小さいが同様にスカートが増量して衣装の色が淡くなったキュアレインボー。ピーチ・ベリー・パイン・パッションは、背中に白い翼が生えて優しい光を放つ天使の姿をしたキュアエンジェル。

ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライトは、背中に天女の羽衣のようなハートが付け加わり、衣装の色が淡くなってスカートの先もとがったハートキャッチプリキュア・スーパースルエツト。

そしてセイバーは、背中の翅はねが巨大な二枚の鋭角なものになり、カチューシャが色とりどりの宝石を嵌めたティアラに変わったうえに衣装の色も純白から煌きらめくようなシルバーに変化したセイバー・ハynes。

新しい姿に変わったプリキュアたちは光が消えると同時にゆっくりと閉じていた目を開け、目の前に立ちはだかるアモンを見据えた。

セイバー「私たちの、みなぎる希望の力！」

プリキュアたち「受けてみなさい！！！！！！」

アルティメット「おおのおねええええプリキュアアアアアアッ  
ツツツ！！！！！」

光の中で新たな姿に変身を遂げたプリキュアたちに、アルティメットは本心から呪いの言葉を浴びせた。アモンも巨体をねじらせて空間を激震させるほどのうなり声をあげる。だがプリキュアたちに恐れは少しもなかった。全員、アモンに強い目を向けて改めて臨戦態勢の構えを取り始める。

希望の光と絶望の闇。善と悪。

今ここに、最終決戦の火蓋が切られようとしていた……。

奇跡（後書き）

次回、いよいよ！

## 最終決戦

アモンは一際大きく吠えたと、初めて巨大な両翼を上下に動かし、巨体をふわりと宙に浮かした。そしてそのまま速度を増し、顔を上げて暗黒の空へと飛ぶ。アモンを追い、プリキュアたちも虹色の光の粒子を撒きながら次々と闇の中へ突入していく。

先頭をセイバーが飛び、自らを輝かせ、光速で闇を切り裂く。やがて光が見え、全員が突破すると、広大な銀河が目の前に広がった。プリキュアたちはアモンを追いかけて、ワンダー・プラネットから宇宙に飛び出したのだ。これもミラクルライトの力なのか、宇宙空間でも呼吸ができ、身体も軽く感じなかった。

とうとう宇宙にまで追いかけてきたプリキュアたちに、アモンはようやく向き合い、口から赤い光線を発射した。プリキュアたちはそれぞれ銀河を背景に四方八方に飛散してかわすと、一気に自らを光の塊と化せ、アモンに突撃する。だがアモンも簡単に攻撃を受けたりはしない。自身も巨体を活かして体当たりしようとスピードを増して彼女たちに迫りだす。同時に怪人たちを操ってあちこちから複数の光線と電撃を飛ばした。

全員で一気に突撃を試みようとしたプリキュアたちだったが、アモンの体当たりと体中の光線から再び四方へと飛んでかわす。アモンは逃げだしたプリキュアたちを狙って光線と電撃を体中から続々と放ったが、彼女たちは背中の翼をうまく活用させて華麗にかわした。

だがこのままでは埒が明かなかった。なにしろ、相手は体の内部にまで百を超える怪人たちを埋めているのだ。攻撃する隙がない。しかしそれでも、と数人が合体して巨大な光の塊となつて、流星のように凄い勢いでアモンの頭部を狙い、突入を試みた。だがアモンは片腕を高く振り上げると、それを強くはね返し、口から光線を浴びせた。一度弾き飛ばされたプリキュアたちだが、すぐに体勢を整



え、光線をかわす。

マリッ「くっ……。ダメだ。隙が全然ないよ！」

セイバー「あきらめちゃダメよ。体中が怪人だらけでも、きつとどこかに付け入る隙があるはずだわ」

ブロッサム「そうです。どんな相手にもきつと弱点はあります。みんなで探しましょう！」

プリキュアたち「うん！！！！！」

プリキュアたちはうなずくと、アモンの周囲を飛び交い、光線と電撃をかわしながら急所を急いで探し始めた。

アモンとプリキュアたちの戦いの様子は、ワンダー・プラネットに残っている妖精たちにも伝わっていた。敵も味方も宇宙に飛び出したので妖精たちの位置からは両方の姿は見えない。しかし、黒い空を時折輝かせる強い閃光と轟音、アモンの咆哮が聞こえ、戦いがどれほど熾烈を繰り返しているかが容易に想像できた。

メップル「ナッツ、パワーアップしても、プリキュアは苦戦しているメポ。他にプリキュアを助ける方法はないメポ？」

ナッツ「そう言われてもナッツ……」

その時、ココの目に何かが映った。よく目を凝らして見ると、それは地面に突き刺さったままの状態のギガバトルナイザーだった。ギガバトルナイザーは誰も触れていない状態にもかかわらず、砲身に青い光が灯っていた。

ココ「ギガバトルナイザー……」

待てよ、とココは考えた。アルティメットはギガバトルナイザーを使って怪人たちを操っていたはず。それはギガバトルナイザーに強大な闇の力が宿っているからだ。だが、今アモンと合体しているアルティメットはギガバトルナイザーを持っていない。それなのに、どうして未だに怪人たちを操ってプリキュアと戦えるのだろうか。

ココ「そうか！分かったココ！」

シロップ「ココ？」

ココ「みんな！ミラクルライトの光をギガバトルナイザーに向ける

ココ！そうすれば、怪人たちは苦しみだすココ！」

ロモモ「どういうことロモ？」

ココ「ギガバトルナイザーは、もともと込められていた闇の力にプリキュアの力が加わって怪人たちを復活させたんだココ。でもプリキュアの力がなくなっただけで、ギガバトルナイザーの中にあるのは闇の力だけココ。きっとアルティメットは、残った闇の力を遠隔操作してるんだココ。だから、ギガバトルナイザーに触れなくても、怪人たちを操れるんだココ」

ナッツ「そうか！だったら、ギガバトルナイザーに残っている闇の力に光を当てて追い出せば、怪人たちは拒否反応を起こしていつせいに苦しみだすナツ！」

ミツプル「じゃあ、みんなでミラクルライトの光を当てるミポ！」

妖精たちはみなミラクルライトを点灯し、全員分の光をいっせいにギガバトルナイザーに向けて直撃させた。ココの予想は的中する。極彩色の強い光を浴びたギガバトルナイザーは瞬時にガタガタと激しく震動し始めた。

怪人たち「ぎゃああああああああああああああっつつ

！！！」

それと同時に宇宙空間でプリキュアたちと戦っていたアモンの体中にいる怪人たちが全員悲鳴をあげてバタバタと激しく手足を動かして暴れた。

アルティメット「ぐ・・ああああああっ！や、やめるおーつつ！」

アルティメットも絶叫し、首を激しく左右に動かした。当然、アモンも大きく吠えて苦しみだす。

ブラック「な、何が起こったの！？」

ホワイト「怪人たちがみんな苦しんでいるわ！」

パイン「でも、どうして突然・・・？」

ドリーム「ココたちだよ！」

ドリームの声に、全員が振り返った。

ドリーム「きつと私たちを助けようと、ココたちがやってくれたん

だよ！みんな、今ならあいつを倒せるよ！」

ドリームの言うとおりである。今、相手はほぼ戦闘不能のところまで追い込まれている。反撃するなら、チャンスは今しかない。

セイバー「行くよ！みんな！」

プリキュアたち「うん！！！！！」

プリキュアたちは全員高く飛び、アモンの真上まで飛来した。そしてそのままスピードを増して急降下し、自分たちを巨大な虹の光球へと包んでいく。巨大な光球に変化したプリキュアたちはさらに加速して、アモンの頭部に向かって降りていく。アルティメットがハッと真上を見上げた瞬間、光球はアモンの頭部に激突した。

アルティメット「ぐあああああーっ！」

直撃を受けたアモンはあまりのダメージに両翼が巨体を浮かせるのに耐え切れなくなり、遂に落下し始めた。アモンはそのままワンダー・プラネットに落ちていく。宇宙から闇の空に突入したアモンは、隕石のような速さで急降下していき、妖精たちの見ている前でもとの荒野の大地に激突した。もの凄い砂煙が周辺に広がっていく。アモンを再び追って、プリキュアたちも荒野に降りた。

だがアモンはまだ生きていた。急いで起き上がり、絶叫を荒野中に轟かせる。だが、妖精たちがギガバトルナイザーにミラクルライトの光を当てたままなので、アルティメットも怪人たちも苦しんだままだった。

アルティメット「や、やめろおおおおおっ！」

シプレ「プリキュア！今ですうー！」

プリキュアたちはシプレの声にうんとうなずき、再び空に飛び上がった。ブロッサムがセイバーの隣に飛来して、声をかける。

ブロッサム「セイバー、私たちが援護します。あなたが決めてください！」

セイバー「分かった！」

そして全員がアモンを取り囲み、それぞれ最終必殺技の準備を始める。

スーパーキュアブラック、スーパーキュアホワイト、スーパーシヤニールミナスはアモンの背後に回ると、ブラックとホワイトは片腕にスパークルブレスを装備し、ルミナスの放った光を浴びて、両腕を勢いよく回転させて一定方向に向けて止める。

ブラック「みなぎる勇氣！」

ホワイト「溢れる希望！」

ルミナス「光り輝く絆とともに！」

ブラック・ホワイト「エキストリーム！」

ルミナス「ルミナリオ！」

ブラック・ホワイト「マックス！！」

ブラック・ホワイト・ルミナスが発射した強力な光は、アモンの背中に直撃した。

ブライティブルームとウィンディイーグレットもアモンの背後に飛び、プリキュア・スパイラル・リングを起動させ、精霊の光を集め始める。

イーグレット「精霊の光よ！命の輝きよ！」

ブルーム「希望へ導け！全ての心！」

ブルーム・イーグレット「プリキュア！スパイラル・ハート！」

そして両腕を強く前方へ伸ばした。

ブルーム・イーグレット「スプラッシュ・スターツ！！」

強力に混ざり合った螺旋状らせんの光線が飛ばされ、同様にアモンの背中に浴びせられた。

シャイニングドリームおよびキュアレインボーたちはキュアフルーレを構えたまま地上に降り、アモンの前に立つ。ローズもミルキイミラーが変化した剣を構えた。

ドリーム・ルージュ・レモネード・ミント・アクア「希望の赤い薔薇バラ！」

ローズ「奇跡の青い薔薇バラ！」

ドリーム・ルージュ・レモネード・ミント・アクア・ローズ「プリキュア！ミルキイローズ・フローラル・エクスプロージョン！！」

全員が先端を敵に向けて同時に前方へ強く突き出す。すると巨大な五つの赤い薔薇バラと一つの青い薔薇バラが六人の前に出現してアモンに向かって突進し始めた。赤と青の薔薇バラは途中で融合してさらに巨大な虹の薔薇バラとなって勢いを増し、アモンの腹部に衝突した。

キュアエンジェルたちは六人の真上を飛来して空中で停止すると、それぞれ両手でハートの形を作りだす。

ピーチ・ベリー・パイン・パッション「想いよ届け！プリキュア！ラビング・トゥルー・ハート！」

すると、四人の両手が白く輝きだし、その光は徐々に強くなっていった。

ピーチ・ベリー・パイン・パッション「フレエツシュー！」

次の瞬間、四人の両手からハートの形をした強くて白い光が飛び出して融合し、さらに強い輝きとなってアモンの胸に浴びせられた。ハートキャッチプリキュア・スーパースィルエットの四人はさらにその上を飛び、それぞれフラワータクトとシャイニータンバリンを用意する。そして順に武器を起動させていった。

ブロッサム・マリン・サンシャイン・ムーンライト「花よ咲き誇れ！プリキュア！ハートキャッチ・オーケストラ！」

そして溢れ出てくるような猛威のあるエネルギー弾をアモンに向け、力を込めて飛ばした。四人の飛ばしたエネルギー弾はアモンの首に真正面からぶつかり、炸裂した。

数々の必殺技を受け、悲鳴をあげるアモン。最後にセイバー・ハインズがリリイシンバルを両手に持ち、両翼を広げて誰よりも空へ高く舞い上がる。セイバーはある程度飛んで停止すると、アモンの頭部に目掛けて身体を傾けて超高速で急降下した。と同時にリリイシンバルが二倍、三倍、四倍、五倍と巨大化していき、銀色の輝きを増すとともに灼熱の炎をまとう。セイバーは頭部の中心にいるアルティメットに接近すると、巨大シンバルを持った両腕を大きく広げて叫んだ。

セイバー「プリキュア！ヴォルケーノ・シャウト！」

そしてアルティメットを叩き潰そうと巨大シンバルを思いつき  
左右から繰り出す。だが、アルティメットは顔を歪めながらも最後  
の力を振り絞って両腕を伸ばして巨大シンバルの猛攻を防いだ。

アルティメット「ぬう……。まだ終わらんぞ。全宇宙を暗黒の闇で  
沈めてやるのだ！」

セイバー「その野望、私が打ち砕く！はあああっ！！」

セイバーはさらに両腕に力を込めた。するとシンバルがさらに輝  
きを強くし、炎が燃え盛っていく。強烈な光を浴びたアルティメッ  
トはさらに苦しそうにうめき、シンバルを抑えていた両腕がどんど  
ろに溶け始めた。

アルティメット「ぎゃああああっ！腕が、腕があーッ！一体なぜだ  
？なぜ究極を超えた俺が、完全でない人間のおまえらに敗れるのだ  
！？」

ブラック「私たち、ひとりひとりは完全じゃなくても！」

ブルーム「力を合わせれば、その力は大きくなるの！」

ドリーム「私たちはみんな、一緒に力を合わせて全部乗り越えてき  
た！」

ピーチ「だから、この先どんな困難が待ち受けていたって！」

ブロッサム「私たちは、これからも力を合わせて戦っていきます！」

セイバー「力を合わせて助け合い、乗り越えあう……。それが仲間で  
あり友達なのよ！あなたは人間というものを理解していない。人は  
一人だと弱いけど、たくさんの人と強い絆を作るとどんなことにも  
立ち向かっていけるのよ！そして何よりもあきらめない強さと希望  
が、人を突き動かしていくんだからあーっ！！！」

ジャーントツツ！！！！！！

荒野中にシンバルの音が空間を響かせ、大きく伝わっていく。腕  
が完全に溶け、アルティメットは顔を左右から渾身の力で叩き潰さ  
れた。

アルティメット「お……。おお……。おおおおおっ！」

やがてアルティメットは全身が銀の炎に包まれ、溶けていく。炎

はアモンの全身にも瞬く間に広がり、怪人たちも悲鳴をあげながら、身体が塵のように変化しだしていった。

アルティメット「ぐ・あ・ぐあああああああああ  
ああつつつ！！！！！！」

アルティメットが断末魔の絶叫をあげた次の瞬間、アモンの全身が真紅に染まり、爆散した。炎と、塵となった怪人たちが周囲に散つていき、徐々に消滅していく。同時に地面に突き刺さっていたギガバトルナイザーも爆発を起こして炎に包まれた。やがて黒い塵と化し、消え始める。プリキユアと妖精たちはその爆発に巻き込まれないよう、急いで離れ、地上に降りた。やがてアモンは完全に炎に吞まれ、最期の咆哮をあげて消滅した。炎が消えた跡には、もう何もいない。アルティメットも、怪人たちも姿は影も形も見えなかった。

ブロッサム「こ、今度こそやっただけですか？」

セイバー「ええ。空を見てみなさい」

セイバーが上空を指差した。するとどうだろう。空を覆っていた漆黒のカーテンが春の淡雪のごとく、すっと消え始め、一筋の光が差し込んだのだ。やがて青い空が広がり、太陽が姿を見せだす。闇は、今度こそ完全に消滅したのだ。

プリキュア「やったあっ！！！！！！」

プリキュアたちは全員笑顔が弾けてジャンプし、妖精たちも喜び合った。

ブロッサム「勝った！今度こそ勝ったんですね！私たち！」

セイバー「ええ！夢じゃない。本当に私たちは勝ったのよ！」

ブロッサムとセイバーは笑顔で手を繋いでくると回転しだす。それを見てマリンも「ああゝ！ずるい！私も！」と、ふたりの間に割り込もうとした。他のプリキュアたちも思わず声を出して笑い出す。

今度こそ全てが終わった。誰もがそう確信していた。

……だが、まだ終わりではなかった。

「またもや地面が激しく揺れ始めたのだ。プリキュアたちはバランスを崩しかけたが、なんとか体勢を整えた。揺れは今度は強くならなかったが、その代わり長く続き、まだ収まらなかった。」

「アクア「な、なに!？」」

「パイン「ま、まさか、また怪物が!？」」

「セイバー「そんなバカな!？アルティメットも、今度こそ倒したはず!？」」

「???「ところが、そうはいかねえんだよ・・・」」

「背後から、図太い男の声が聞こえ、まさかとプリキュアたちは振り返る。そこには、黒いどろどろとした液状の身体を持ち、赤い両目が釣り上がった怪人が立っていた。」

「ムーンライト「まさか、アルティメットなの!？」」

「アルティメット「そうよ。だがもう俺は死ぬ。だからその前におまえらにいいことを教えてやるぜ」」

「イーグレット「いいこと?」」

「アルティメット「この星は俺が作った。だから、万が一俺が敗れたら、この星は自動で動き出して『ある星』に向かって衝突するように仕掛けてある」」

「マリン「『ある星』って、まさか・・・!」」

「アルティメット「そうだ。地球だ。この星はあと十五分で地球に衝突する!」」

「ブロッサム「十五分!？」」

「アルティメット「俺も死ぬが、おまえらも全員終わりだ。全宇宙を無にすることができないのは残念だが、おまえらも地球も消えてしまえば、邪魔者はなく、いずれ次の闇の者が新しい世界を作って支配する。全宇宙は、完全に闇に呑み込まれるのだ!」」

「セイバー「アルティメット・・・あなたという人は・・・!」」

「アルティメット「先に地獄で待つてるぜ、プリキュア。・・・ぐっ・・・あああああつつつつ!」」

「アルティメットは次の瞬間、完全に液体と化して身体が崩れ落ち



た。そしてそのまま地面に吸い込まれていき、今度こそ永遠に消滅した・・・。

## 最終決戦（後書き）

次回、地球の危機をどうやって救うのか！？そして・・・！！  
！

## 想いをひとつに

ワンダー・プラネットは、進路を地球に定めたまま徐々に加速しだした。加速と同時に強い圧力が星に残る者たちを襲う。

薫「みのりちゃん！」

異変を素早く感じた薫がみのりを抱きしめて守った。アモンの最期を見届け、一度は歓声をあげた避難者たちだが、ワンダー・プラネットが地球に迫りだすと、即座に強い揺れと圧力に苦しみ始めた。満「くっ……。このままじゃ、みんなが……。」

薫「咲、舞……。お願い、早く……。」

ブンビー「く、苦しいっ……。もうダメ……。」

隼人「あきらめるな、おっさん！」

瞬「そうだ。みんな、プリキュアたちを信じるんだ」

瞬と隼人が大地に膝を着きながらも避難者たちに声をかけ、懸命に励ます。ドーナツ国王たちもふたりに負けまいと必死で声を張り上げて妖精や精霊たちを元気づけた。

ワンダー・プラネットの進撃は、地球でも世界各国で報道されていた。ワンダー・プラネットは周囲をシールドで張って、人の目には簡単に見つからないようになっていたが、星が加速し始めたことにより重圧に耐えられなくなって遂に破れたのだ。途端に各国の衛星が突如現れた巨大流星を観測し、瞬時に地球に伝わる。一応ワンダー・プラネットは月と同じように地球の4分の1の大きさなのだが、それでも衝突すれば、瞬時に地球を炎で包み、数分で死の星にしてしまうほど威力を持つ。人々はこの報道に衝撃を受け、大パニックを起こして逃げ惑った。

プリキュアたちは、大地の震動と強い圧力と戦いながら、なんとか立っていた。しかし、十五分後にはこの星は地球に衝突してしまう。そうなれば、全ての命が消滅の危機にさらされるのだ。

ブラック「どうしようどうしようどうしよう！どうすればいいのよ

「っ！！」

ホワイ「落ち着いてブラック！」

ブルーム「そうだ！もう一度宇宙に出てさ、ワンダー・プラネットを壊しちゃえばいいんじゃない？」

イーグレット「ダメよ。ここにはみのりちゃんや満さんと薫さんの他にもたくさんの人たちがいるのよ」

ブルーム「あ……。じゃ、じゃあさ、みんなを避難させてから壊せば……」

イーグレット「十五分であれだけの数を避難させるなんて無理に決まっているでしょっ！」

ブルーム「あゝもうっ！じゃあ、どうすんのよっ！？」

ミント「みんな落ち着いて！考え方を変えるのよ！」

ムーンライト「焦っていたって、時間は止まらないわ！みんなで助かる方法を考えるのよ！」

マリ「でも、たった十五分で思いつけるかどうか……」

ベリ「ダメよ、あきらめちゃ！とにかく、最後の最後までみんなで考えるのよ！」

ブロッサム「そうです！最後まで希望を簡単に捨てちゃいけませんわっ！？」

ブロッサムが揺れに身体のバランスを崩して倒れたが、セイバーが両肩を？んで助けた。

ブロッサム「あ……。ありがとうございます」

セイバー「いいえ。それにしても、アルティメットのやつ、まだこんな最後の手段を仕掛けていたなんて……」

セイバーはバランスを保ちながら、目を細めて周囲を見渡した。

滅びの力によって荒れ果てた大地には草木はほとんど生えておらず、岩塊も強く拳を叩き込めれば、即座に崩壊して砂と化してしまいそうだった。やがてセイバーは意を決して、プリキュアたちに言った。セイバー「みんな、ちょっと思ったんだけど、この星を受け止められないかしら？」

プリキュアたち「ええっ!？」

ルージュ「う、受け止めるって、この星を!？」

セイバー「そう。みんなで力を合わせて、この星を止めるのよ。時間はないうえに壊すこともできないなら、力づくで止めるしかない  
と私は思うの」

プリキュアたち「……………」

セイバー「無茶苦茶かもしれないのは分かっている。でも、私はみんなのことも地球のことも守りたいの。だからお願い、力を貸して……………」

セイバーは深々と頭を下げた。彼女の表情と態度を見て、最初は驚いていた彼女たちだったが、やがて自分たちもキツとした表情となり、覚悟を決めた。

ピーチ「分かった。やろう!」

ローズ「もう時間もないしね!」

パッション「力を合わせて精いっぱいやるだけのことよ!」

ブロッサム「行きましょう!みなさん!」

プリキュアたち「うん!!!!!!」

そう言くと、プリキュアたちはいつせいに天高く上昇しだした。

ココ「みんな!気をつけるココ!」

ドリーム「ココ、大丈夫だよ!絶対戻ってくるから!」

最後にドリームが、見送りながら叫んだココに笑顔で元気よく答えると、さらに高く飛び、次第に小さくなって消えた。

20人のプリキュアは、光速で再び宇宙に飛び出し、急いで地球へ向かう。そして地球を背に全員が並び、前方から勢いを増して飛来してくるワンダー・プラネットに向き直った。全員ワンダー・プラネットを強い目で捉えると、両腕に力を込め始めた。すると、プリキュアたちの身体が極彩色に輝き始め、周囲を強い光でほとばしらせた。強力な光をまとったプリキュアたちは、全員いつせいにワンダー・プラネットを見据えながら声を張り上げて叫んだ。

プリキュアたち「溢れる希望に勇気を乗せて!みんなの想いで地球<sup>ほし</sup>

の未来を守れ！」

次の台詞で渾身の光と力を含めた両腕を前方へ向け始める。

プリキュアたち「プリキュア！ギャラクシーソウル！」

そして一気に強く突き出した。

プリキュアたち「ジェネレーションズ!!!!!!」

その瞬間、全員の両腕から極彩色の強力な光が融合して発射された。

その光は邪悪なものを浄化する光ではなく、勢いを増して向かってくる相手を抑える光。光は星全体をあつという間に覆っていく。強い光だが優しく温もりが伝わり、地面の揺れと圧力に耐えていた妖精たちも避難者たちも、ふっと気持ちが悪くなった。

だが星は速度を衰えたりはしなかった。強力な光を浴びながらも突き進み、プリキユアたちに迫っていく。

プリキュアたち「くっ……うっうっうっうっ」!

全員渾身の力を込めて光を飛ばしていたが、星は光の中をどんどん進撃し、遂に光を突き抜けて彼女たちの指先に触れ、圧力で押し込んだ。

プリキュアたち「くっ・ああああああっ!!」

限界に近いパワーを発揮しながらも、やはり歴然の差に少しずつ後退していくプリキユアたち。しかし、その両腕を引つ込めるわけにはいかない。全員歯を食い縛って最後の最後まであきらめないという星を全力で押していく。

だが、もう限界が来ていた。全員の目がかすみ、足にも手にもしびれが来て、意識が薄れていく。

「プリキュアに、力をーっ！」

だがその時、大勢の叫ぶ声が彼女たちの耳に響いた。

妖精たちだった。彼らは力を持たない代わりに再びミラクルライトを振って全力でプリキュアたちを応援していた。

「プリキュアに、力をーっ！！！！」

妖精たちにつき、避難者たちもミラクルライトを振って応援した

した。特に圧力の苦しみから解放されたみのりは、笑顔で元気よくライトを振り続けた。

「プリキュアに、力をーっ！！！！！！」

パニックになっていた地球の人たちも、正気を取り戻してもう一度ミラクルライトを左右に振った。そしてありったけの声でプリキュアを応援する。再び地球はミラクルライトの光で覆われ、強い輝きを放った。

そして全てのミラクルライトの光がプリキュアたちに注がれ始める。

彼女たちに注がれたものは、想いの力。

全ての生きとし生けるものたちが想いをひとつにしてプリキュアたちに力を与え、託したのだ。

その想いの光を受けたプリキュアたちは次第にゆっくりと口元に笑みを浮かべ、そしてもう一度両腕に力を込めていく。その目には、もう一切の恐れも迷いもなかった。

ワンダー・プラネットは圧倒的なパワーでプリキュアたちを押ししたが、もう彼女たちは少しも後退しなかった。むしろ星のほうに逆にそれ以上の力を受けて、スピードがゆるみだす。それを感じたプリキュアたちはさらに手に力を込めてまばゆい輝きを放った。輝きはあつという間にひとつの光の塊となり、さらに大きさを増していく。やがて地球よりもはるかに大きく成長した光の塊が、星を隅々まで包み込んでいった。そして、完全に光に吞まれた星は、そのままブレーキをかけたように停止し、動かなくなった……。

……  
……  
……

目前に存在するワンダー・プラネットはもう突進してこない。試しに人差し指でツンツンと触れてみたが、微動だにもしなかった。

ブラック「や……」

ブルーム「やった……」

ドリーム「やった・・！」

ピーチ「やったあーっ！」

プリキュアたちは三度目の歓喜の声をあげた。妖精たちも、避難者たちも、そして地球の人々も抱き合うなり手を合わせてジャンプするなりして世界中に歓喜の渦を巻き起こした。やがて全ての命を慈しみ、育む、強いけれど暖かで温もりのある太陽の光が、地球とワンダー・プラネットの大地を照らしていく。

マリンがぼつりと呟いた。

マリン「終わったんだね・・・」

ブロッサム「はい。終わりました。・・・みんなの力で終わらせたいです」

ブロッサムは、横にいるセイバーの、その満足そうに地球を眺める笑顔をじつと見つめていた。



想いをひとつに（後書き）

次回、最終回！

## また会える

窓ガラスの向こうには多くの飛行機が待機している。その中にはスピードを加速し、青空へ飛び立とうとしているものもあった。第1ターミナルの発ロビーには無数の人が賑やかに行き交ったり、ベンチに腰を降ろしていたり、売店に入っていたりしていた。

その人込みの中、真夜は、19人のプリキュアたちと向き合っていた。

つばみ「やつぱり行くんですか？」

真夜「うん。パスポートもチケットも届いたしね・・・」

真夜は私服を着ていた。白い英文字が書かれた短い袖の黒シャツに灰色のデニムのスカート。スカートにはポーチが取り付けられ、中に口モモが少しだけ顔を出していた。側には大きなアタッシュケースが置いてある。

ワンダー・プラネットでの戦いから三週間が経過していた。

来場者たちはみな地球に帰り、それぞれ自分たちの国や故郷に戻っていった。真夜も一年ぶりに地球の地に降り、しばらくつばみとえりかの家で厄介になることになったが、そこで彼女は携帯で両親が在籍していた、ニューヨークに本部を置く国際医療団体の組織に連絡を取った。突然の真夜からの電話に団体の職員たちは驚いたが、彼女からだいたい事情を聞くと（もちろん、自ら悪のプリキュアになり、地球を滅ぼそうとしたことは黙っていたが）、理解してくれて、即座にパスポートと空港のチケットを手配して送ってくれた。真夜はその二つで日本を離れ、ニューヨーク行き便で父と母がいた組織に戻るのを決意したのだ。そして今日、彼女は日本を発つ。真夜を見送ろうと、プリキュアたちも全員来てくれていた。

なぎさ「でも、大丈夫なの？ニューヨークにひとりで行って・・・」  
真夜「大丈夫よ。空港に着いたら、団体の人たちが迎えに行くって手紙に書いてあったし、組織には私みたいな親のいない子供が暮ら

せる施設も複数あるわ。そもそも私、英語は得意だから会話にも困らないし、それに・・・」

ロモモ「ロモモもいるロモ！」

ポーチからちよこんとロモモが顔を出して笑顔で言った。ロモモを見て、真夜もすましたように微笑んだ。

真夜「そういうこと。だから、私はひとりじゃないわ。でもロモモ、手荷物検査の時はちゃんとペンダントに変身しておいてよ」

ロモモ「分かってるロモ」

ひかり「でも、少し寂しくなりますね・・・」

ほのか「真夜さんは、ニューヨークでもう一度勉強し直すの？」

真夜「・・・うん。私、将来多くの人を助ける人間になるために、もう一度お父さんとお母さんがやっていた仕事を間近で見たいの。今の世界を変え、本当に優しい世界を作るためにもね・・・」

ゆり「それが、あなたの夢なのね」

真夜「うん。もちろん、いろいろと大変だろうけど・・・」

のぞみ「だーいじょうぶだよ！真夜さんなら、きっとできるよ！だって、私たち、一回世界を変えたじゃん！」

真夜「え？」

咲「そーだよ！あの戦いで私たちの想いが人々に届いたから、みんな私たちを応援してくれたんだよ！」

舞「短い時間だったけど、あの時、世界は確かに変わったわ」

いつき「みんなの声があったから、辛くてもボクたちは勝つことができたんだよ」

ラブ「そうだね。だから、真夜さんも今度は最後まで負けないで！そしてみんなで幸せゲットしておいでよ！」

美希「もしどうしても辛いことがあったら、電話しなさいよ。完璧な私が相談に乗ってあげるから」

こまち「私たちもできるだけ協力するわ」

かれん「私も、将来医者を目指しているから、もし役に立つことがあったら、いつでも電話して」

くるみ「私も、ぜひ聞きたいって言うなら、アドバイスしてもいいわ」

りん「まあ、私はあまりアドバイスはできないかもしれないけれど、せめて真夜さんがいつでもがんばれるように花を贈るよ」

うらら「私も、今度CDができたなら、真夜さんにも贈りますので。

何回も聞いて、元気を出してください」

真夜「みんな・・・」

祈里「真夜さんの夢、きつといつか叶うって、私信じてる！」

せつな「私たちも、精いっぱい真夜さんの夢を応援するわ」

えりか「真夜さん！真夜さんには私たちがついてるから！困った時はいつでも電話して。私たちはいつだって、地球の裏側からでも飛んでくるから！」

つぼみ「えりか、それは難しいと思います」

つぼみが言うのと、みな声を出して笑った。すると、アナウンスがニューヨーク行きの便の出発を告げた。

アナウンスの声「JALから、ご出発のお客様にご案内いたします。出発準備が整いました。ただいまよりご利用のお客様をご案内いたしますので、搭乗口にお越しく下さい・・・」

真夜「時間・・・ね」

真夜はアッシュケースを手にとると、踵きびすを返し、搭乗口に向かうとした。

つぼみ「真夜さん！」

しかし、つぼみが真夜を止め、彼女は振り返った。つぼみは真夜の顔を窺うと、確認するように言った。

つぼみ「私たちは、また会えますよね・・・？」

その問いを聞いた真夜はしばし黙っていたが、やがてまぶしそうな無邪気な笑顔を見せてこう言った。

真夜「つぼみ、私たちは、友達でしょ」

つぼみ「！・・・は、はい！」

つぼみもみるみるうちに笑顔が弾け、元気に言った。

私たちは、友達。それだけで十分だった。

友達だから、また会える。みなまで言わなくても彼女はそう信じて、つぼみの問いに笑顔で答えることができたのだ。

真夜「じゃ、またね」

つぼみ「はい。また・・・」

会いましょう、とつぼみは心の中で真夜に言った。

やがて搭乗口に向かって歩きだした真夜の背中が人込みに紛れて見えなくなる。

寂しい気持ちも少しする。

けれど、誰の胸にも、それを上回る希望に満ち溢れていた。

## エピソード

今や不毛の地となったワンダー・プラネットに、在りし日の面影はなかった。滅びの力を受け、黒い大地には花も草も生えておらず、ただただ今にも崩れそうな岩塊の数々と崩壊した塔の残骸が存在しているだけだった。

しかし、この不毛の星をもう一度みんなが楽しめるテーマパークにしたいと多くの妖精と精霊たちが立ち上がり、遂にニュー・ワンダー・プラネットとして復興計画が着々と進み始めていた。ニュー・ワンダー・プラネットは開業したら、地球の人たちも招待できるようにするつもりで、近々復興作業も行われる予定だ。

そんな希望も灯り始めているワンダー・プラネットで、崩壊した塔の残骸の中に、一個の小さな口紅が転がっていた。

口紅には傷はひとつもついておらず、まだ新品のようだった。その口紅に、どこからともなく一匹の黒いアゲハ蝶がとまった。すると、クロアゲハは瞬時に黒い炎と化していき、小さな渦を起こして口紅を呑み込み始めた。口紅を呑み込んだ黒い炎の渦は次第に人間大にまで大きくなり、勢いを増していく。やがて炎は周囲に弾けるように飛散して消滅すると、中から一人の少女が現れた。

黒い衣装を着、髪をツインテールに結び、両目を閉じた少女はそのままゆっくりと大地に降り立つと、地球の方向へと顔を向けた。

少女「あまき・・・まや・・・」

少女はそう一言呟くと、閉じていた両目をゆっくりと開いた。

少女の右目に瞳はなく、流血したかのように真紅に染まっていた・・・。

(完)

## キャラクター紹介？

### キュアセイバー

アルティメットが生み出した怪人軍団の前に現れ、奇跡の生還を果たした雨牙真夜が変身した純白の衣装を身にまとったプリキュア。この姿が、三年前に闇の脅威から世界を守った、真夜の本来のプリキュアとしての姿である。変身する際には妖精パートナーのロコモが姿を変えたペンダント状の音叉型変身アイテムを使用する。武器はリリィフシンバルで、「セイバー・サウンド・ウェイブ」「セイバー・リカヴァリング・アレスト」「セイバー・セイクレッド・フラッシュ」「セイバー・ホーリィ・アタック」そして最大必殺技「プリキュア・スターライトチャージ・クラッシュ」を放つ他、ギガバトルナイザーが起こす巨大竜巻を一瞬で消滅させる威力も発揮する。戦闘力もかなり高く、真夜が変身するまである程度数が減っていたとはいえ、アルティメットの怪人軍団をあつという間に全滅させ（しかもイルクーポやキントレスキー、カワリーノやノーザといった、歴代のプリキュアたちを苦しめた強豪を一瞬で倒している）、プリキュアたちが束になっても倒せなかったアルティメットとも互角以上に渡り合い、圧倒的強さを見せる。

### セイバー・ハynes

ギヤラクシーミラクルライトの光と力を受けたキュアセイバーがさらに姿を変えた強化形態。強さはキュアセイバー時の千倍を超え、

パワーだけでなくスピードもアップする。武器のリリィフシンバルを強化させてとどめを刺す「プリキュア・ヴォルケーノ・シャウト」が最終必殺技で、強敵・アモンをこれで倒した。ただ相手を倒すだけでなく、相手をおとなくさせるための鎮静技も持ち、他のプリキュアたちと力を合わせることでさらに効果を発揮することができ。他にも多くの隠された力があり、世界を救うために天から使わされたような外見と中身を持つ、まさに救世主<sup>メシア</sup>として君臨した最強の戦士である。

## アモン

アルティメットと怪人たちの亡霊が合体して誕生した超巨大生物で、怪人たちが積み重なってその全身のひとつひとつを形成している。異名は「百体魔獣」だが、実際にはそれ以上の怪人が合体しており、体内にまで埋め尽くされている。そのため、本来の総数は測定不能、頭部にはアルティメット自らが頭脳となつて下半身を埋めており、キュアセイバーとの激戦の際に手放したギガバトルナイザーの中に残っていた闇の力を遠隔操作して無数の怪人たちの怨念をまとめあげ、操っている。合体している怪人たちにも意思があり、近づくプリキュアにしがみつくなど攻撃する。本文では技名は出なかったが、全身を赤に染めて全怪人の力を解き放つて広範囲に放つ無数の光弾「アモン・インフェルノ」が必殺技。プリキュアたちの打撃攻撃や必殺技さえものとしないう巨体と、彼女たちが強化形態になった姿でも少々苦戦させる圧倒的なパワーで最終決戦に臨む。



## キャラクター紹介？（後書き）

これにて本編は終了となります。最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

これもみなさんの応援のおかげです。特に、よく感想を送ってくださいましたT・REXさんとABCさんには心から感謝します。みなさんの応援がなければ、本作は途中で頓挫していたかもしれません。

なお本編は終了いたしますが、私桔梗はもう少し連載を続け、キュアリベリオンの外伝スピンオフを書こうと思っていますのでそちらも楽しみにしてください。

ではもう一度改めて、みなさん、本当にありがとうございました。

外伝    ZERO    { Cur Rebellion's birthday }

本編では明らかにならなかった謎がここに！

真夜は目を開けた。

目の前には部屋が広がっていた。窓はなく、光は差していない。床も壁も灰色で何も置いてなく、こんな所に住んでいたら五分で退屈になりそうなくらい質素だった。

真夜「ここ・・・は？」

???「俺のアジトの中の一室だ」

背後から図太い男の声が聞こえ、真夜は振り返った。するとそこには身体を黒に統一し、白い両目が釣り上がった怪人が数本もある牙が生えた口をニヤリとさせて立っていた。

真夜「あなたは・・・」

???「アルティメットだ。覚えているか？」

アルティメットのその言葉に、真夜はハッとなり、同時に頭の中で記憶が逆流し始めた。

そうだ。私は、三日前に両目の赤い男にお父さんとお母さん、そしてゴザドック村の人たちを殺されて、それで砂漠の中を歩いていたらこのアルティメットというやつに会って、こいつの手を握ったら突然目の前が真っ暗になって・・・。

アルティメット「思い出したみてえだな。じゃあ今度は俺の番だ。

おまえの名は？」

真夜「言う必要があるの？」

アルティメット「俺は名乗ったんだ。おまえも名乗るべきだろう」

真夜「・・・雨牙<sup>あまぎまや</sup>真夜。・・・ここは、どこなの？」

アルティメット「今言っただろう。俺のアジトの・・・」

真夜「そうじゃなくて、このアジトがある場所がどこだって聞いているの」

アルティメット「ああ、そういうことか。ここは・・・そうだな、俺が作った惑星と云えばいいかな」

真夜「・・・は？今なんて言った？」

アルティメット「だから、俺が作った惑星なんだよ、ここは。おまえがいた地球じゃない」

真夜「ふざけたことを・・・」

アルティメット「信じられんか？しょーがねえな。これを見る」

アルティメットが右手の壁を指差すと、突然壁の中央が卍文字に開いて四角い穴が登場したと思ったら、その穴に映像が映し出された。

銀河の中で美しい青を輝かせる地球。その地球から離れた距離に存在する不毛の惑星。その惑星の地で早送りで建設されていくテーマパークのアトラクションの数々。童話に登場しそうな巨大な城・・・。

画像はゆつくりと移動し、開いた窓から城の中へ入っていく。監視室。大入浴場。さらに真下の階に進む。そしてやがて見えてくる灰色の扉。真夜の目が思わず見張る。画面の中の扉がゆつくりと開いた。画面いっぱいに広がる灰色の何もない部屋・・・・。映像はそこで途切れた。

アルティメット「これで信じる気になったか？」

アルティメットが確認するように聞くと、真夜はしばし黙っていたが、やがて彼のほうに振り向かないまま静かにうなずいた。

真夜「・・・なんで遊園地なんて作ってるの？」

アルティメット「ん？ああ・・・まあ、そこはおいおい話してやるぜ。ただ、まもなく完成してオープンする予定だ」

真夜「・・・地球を滅ぼすのに必要なの？」

アルティメット「ああ。うまくいけばの話だな。どうした？故郷ふるさとが恋しくなったか？」

アルティメットが意地悪く聞いたが、真夜は答えず、ようやく彼のほうに向き直ると、こう言った。

真夜「で、私は何をすればいいの？」

突如の彼女の問いにアルティメットは一瞬面食らった表情をした

が、すぐに顔をもとに戻すと数本の牙が無言で再び右手の壁を指差した。振り返ると、さっき映像を映した穴から何かが転がってきて、真夜は近づいた。

口紅だった。漆塗りのように漆黒で統一され、それでいて美しい輝きを仄かに放っている。真夜は手を触れなくなつた。腕を伸ばし、指先を近づける。そして人差し指がちゃんと触れた瞬間だった。

ゾッとするような冷気が真夜を襲つた。真夜は自分の息が胸の中に無理矢理押し戻された気がした。寒気が真夜の身体の中に深く潜っていく。胸の中へ、そして彼女の心臓の中へ……。

真夜は目の前がまた暗くなつた。何も見えない。真夜は冷気におぼれていた。寒くて身体が凍えそうで、下へ下へと引きずりこまれていく。うなりがだんだん大きくなる……。

すると、どこか遠くから叫び声が聞こえた。と思つたら、次は憎しみを込めた絶叫が耳に響いた。さらに次は恐怖に怯える声。哀願を訴える声。泣き叫ぶ声……。多くのマイナスの声が真夜の身体の中に次々と押し込まれていき、真夜は耐え切れなくなつて悲鳴をあげた。

真夜「わあああああああああああつっつ！！！」

真夜は床に倒れた。その瞬間、声は聞こえなくなつた。はあはあ息が荒くなり、吐き気がする。額に手をやると、汗が大量に流れていた。

アルティメット「よう。大丈夫か？」

アルティメットが上から覗き込んだ。真夜はしばらく呼吸を繰り返した後、なんとか立ち上がった。そして穴の中の口紅を急いで見やつた。

真夜「あ、あれは何なの……？」

アルティメット「あれは強力な闇の力を持つ『怨恨口紅』だ。それを手にした者は一気に世界を消滅させるほどの力を手に入れることができる。だが、あまりにも多くの者たちの命を奪つたためにその者たちの恨みや怒りが染みつき、次に手を触れた者を呪うという噂

が流れたシロモノだ。今では誰もが触れるのを恐れ、使いこなすことができないらしい」

真夜「・・・まさか、あれを私が使いこなせと言っんじゃないでしょうね」

アルティメット「そのまさか、だ」

アルティメットは上から目線で答えた。

真夜「無茶言わないでよ！あんなの、私に扱えるわけが・・・」

アルティメット「だが、おまえは今の世界を消したいんだらう？」

真夜「！」

アルティメット「そいつに認められれば、おまえは世界を滅ぼす力を一気に手に入れられる。時間はたっぷりあるから、ま、せいぜいがんばってみろ。おまえはもと・・・」

プリキュアだからな、と言っ言葉<sup>グラッジ・ルージュ</sup>を危うく抑え、「じゃ、俺は他にやることあるんでな」とアルティメットは後ろの扉を開けて出て行った。

真夜は黙って再び怨恨<sup>グラッジ・ルージュ</sup>口紅に顔を向けた。

多くの命を奪い、怨恨が込められたあのマイナスの声々。今思出すだけでまた全身が寒くなって震えが来、口を押さえなくなるほど吐き気がする。あんなの耐え切れるレベルのものではない。例えるなら風邪を引き、しかも大音量で黒板をひっかく音を聞きながらの状態でジェットコースターに乗るようなものだ。そんなもの誰が耐えられるというのか。しかもまかり間違えれば、口紅に染みついた亡者たちに呪い殺されてしまいかもしれないではないか。

しかし、これを使いこなさなければ、世界を滅ぼす力を手に入れることはできない。自分が望む優しい世界を作ることとはできない・・・。

やるしかないのか。真夜は緊張の面持で再び口紅に手を伸ばし、指先が触れた。

触れた途端、再び数多くのマイナスの声々が真夜の全身を襲いかけ、彼女は鼓膜が破れんほどの絶叫をあげた。

真夜の絶叫は、城のバルコニーに出たアルティメットの耳にもかすかに届いていた。だが彼は真夜を助ける気は全くなかった。

ブラッジー・ルージュ  
怨恨口紅はこれまでも多くの者が強大な闇の力を求めて触れたと聞く。だが誰もがマイナスの声々に耐えられず、気が狂った者が次々と続出したらしい。いくら真夜がもとプリキュアとはいえ、やはり光の戦士に闇の力は適性が合わないのではないだろうか。

それだったら、所詮あいつの憎しみはそこまでだったてことだけだ。

アルティメットはそう考え、バルコニーから地上を見下ろした。地上はアルティメットの化身である影の亡霊たちが着々とテーマパークの完成を進めていた。

真夜の神経は極限状態にまで達していた。

あれから何度でも触れてみたものの、やはりあのマイナスの声々を耐えることはできない。全ての亡者たちの叫びが真夜を襲い、気を狂わせようとしているのだ。このまま続ければ、闇の力を手に入る前にノイローゼになりかねない。

なんで私ばかりがこんな目に遭うのよ。

真夜はだんだんと怒りが込み上げてきた。

思えば、全ての原因は世界が不安定だったからだ。

嘘。犯罪。差別。戦争。環境破壊。

それらが安定していた世界を狂わせ、両親と友達が巻き込まれて犠牲になった。自分がかつてキュアセイバーと名乗るプリキュアとして激しく戦い、闇の脅威から世界を守ってきたのに、それなのになぜ世界は理不尽にも自分の愛する人たちを奪い、今も苦めるのか。考えれば考えるほど、真夜は怒りと憎しみが抑えられなかった。

自分の中のマイナスの感情を抑えられない状態のまま、真夜はま

た怨恨口紅の前に立った。そしてそれを素早く右手で握り締めた。瞬間に数多くのマイナスの声々が真夜の全身をこれでもかと凄いいで駆け巡っていく。真夜は思わず舌を噛みそうになった。だがギリギリのところ歯を食い縛り、一度ぎゅっと瞑った両目をうつすらと開き始めた。黒い闇の中で無数の亡者たちが叫び続けている。

真夜は亡者たちに向かって、思いつきり叫んだ。

真夜「あなたたちの恨み憎しみがどれほど凄まじいものか、よく分かったわ。だったら・・・その感情、私に預けなさいっ！あなたたちの分まで私が晴らしてやるよ！！」

その声に、言葉に、全ての亡者たちがビクン！とひるんだ。声が一瞬にして消えた。真夜は闇の中の亡者たちを睨み、両目を凄まじくしていく。亡者たちはやがてあらずさるようになり始めた。やがて亡者たちは見えなくなり、次の瞬間目の前の闇が崩壊するように掻き消されていき、徐々にもとの灰色の部屋が見えてきた。

亡者たち「ならば、おまえに預けよう。必ず我々の思いを晴らせ・・・」

亡者たちの声が聞こえ、真夜はハッと上を見上げた。すると、そこには小さな闇の塊が天井近くにまで飛び、やがて形を変えて一匹の黒いアゲハ蝶に変身した。そしてそのままクロアゲハは羽を動かして真夜の手へ降りていく。降りた途端、クロアゲハは黒い火に包まれて、怨恨口紅に姿を変えた。

あれ？これさっき右手で強く握り締めたはず・・・そう思った瞬間、真夜の中で何かが起こった。

真夜は自分の意思とは無関係に無言で口紅のキャップを外し、先端を頭上へと向けた。そして次の瞬間、真夜の意思が言わせたものではない言葉が、彼女の口から飛び出した。

真夜「プリキュア・ダークネス・エヴォリューション！」

え？私、何を言ってるの？と思った途端、真夜は全身を暗黒の闇で覆われた。そしてその闇の中でどこから飛んできたのか、大量のクロアゲハが彼女の身体に集まっていき、漆黒の衣装へと変化して



いく。髪型はふたつのリボンによってツインテールに結ばれた。完全に変身を遂げた真夜の前に、再び闇が消えていく。真夜は突如変わった自分の格好をしばし驚いた表情で眺め始めた。

真夜「これは・・・！？」

アルティメット「ほう・・・！闇の力を手に入れたか・・・！！」

振り向くと、いつの間にかアルティメットが扉を開けて入ってきた。そしてしげしげと真夜の格好を眺め回す。

真夜「アルティメット、これは何なの？私に何があったの？さっき私、プリキュアって・・・」

アルティメット「そうだ。おまえはプリキュアになったのだ。ただし、光ではなく闇のプリキュアとしてな」

真夜「闇の・・・プリキュア・・・」

真夜は思わず我が耳を疑った。三年前、プリキュアとして闇の脅威から世界を救った自分が三年後になってまたプリキュアになるとは思ってもいなかった。しかも光ではなく、闇のプリキュアに。アルティメット「ふむ。名前を決めてやらんとな。そうだな・・・おまえは人間でありながら新しい世界を作るために今の世界を滅ぼそうと自らの意思で闇と手を組んだんだからな。おまえはこれからこう名乗るがいい。全てを無へ誘う漆黒の墮天使<sup>いざな</sup>、キュアリベリオンと・・・！！」

真夜「キュアリベリオン・・・」

真夜はその名を口にすると、手の上にある怨念<sup>グラッジ</sup>口紅を改めて眺めた。

今ここに、史上最凶のプリキュアが誕生した。

外伝    Z E R O    } C u r e R e b e l l i o n ' s    b i r t h d a y }

次は、ギガバトルナイザー編！

風が凄く気持ちいい……。真夜は鮮やかな草原を前に深呼吸をした。

真夜「銀河の中に、こんな星があつたなんて……」

彼女はひさしぶりに心の底から感激した。全身が癒される気がした。

真夜がいる場所は、惑星デント。地球と同じような環境が整い、星全体が溢れんばかりの緑が生い茂る無人の星だ。太陽の光を浴びて、酸素が木々から大量に放出され、宇宙服を着なくても楽に呼吸ができる。この星は地球からかなり離れていて、人間の目にはまだ見つかっていない。ただ無人と言ったが、鳥や虫、そして数多くの小動物が暮らしているようだ。真夜が立つ位置からも象に似た動物が群れをなして走っているのが見えた。

まさに楽園だ。真夜はそう思った。

しかし、この楽園のどこかに全宇宙を無にする力を持つ恐ろしい兵器が眠っている。真夜はその任務のためにこの星に来たのだ。

ワンダー・プラネット。三時間前。

真夜「ギガバトルナイザー……。？何それ？」

真夜は無数の監視カメラから遂に完成し、オープンしたテーマパーク内のアトラクションに笑顔で入るうとする妖精や精霊たちの映像をじっくり眺めているアルティメットの背中に尋ねた。アルティメットは屋台からもらってきたのか、紙コップのジュースをストロ―でちゅうちゅう吸いながら答えた。

アルティメット「ギガバトルナイザーとは、かつて大昔に俺と同じように全宇宙を無にしてしまおうと考えたやつが開発した究極の闇の兵器だ。伝説によるとギガバトルナイザーは単なる兵器ではなく、

全ての光のパワーを吸い尽くしてエネルギーにし、さらには死者さえも蘇らせて操ることができるらしい。だがそいつは結局M・・・なんとか星雲に住む光の巨人との戦いに敗れ、ギガバトルナイザーもその時封印されちゃったようだ。俺もその話を聞いた時は一度あきらめたんだが・・・どうやら俺は悪魔に気に入られたらしい」

そこまで言うと、アルティメットはようやく真夜に顔を向けた。

その表情は邪悪な笑みで喜びを表していた。

アルティメット「封印された場所が判明したのだ。惑星デントという星のどこかということかな」

真夜「・・・まさか、そのギガバトルナイザーを探してこいって言うんじゃないでしょうね」

アルティメット「そのまさか、だ」

真夜「冗談言わないでよ！私一人で星まるごと探せるわけないですよ！」

アルティメット「しょーがねえな。これを貸してやるよ」

アルティメットはぽいつと何かを真夜に投げ、真夜は片手でキャッチした。

彼が投げたものは、透明な光球だった。光球の中には黒い指針が漂うように揺らいでいる。

真夜「これは？」

アルティメット「そいつは邪悪な力を感知するセンサーだ。反応したら、凄いですピードで回転する。惑星デントでそいつが回りだしたら、ギガバトルナイザーは近くにあるということだ」

じゃあおまえが行けよ。真夜はそう言おうと思ったが、あきらめた。

要するに、アルティメットは面倒を自分に押しつけたのだ。今のご主人様に文句を言ったとしても、きつと無駄だろう。それに自ら主従関係を結んだ以上、自分はアルティメットの僕だ。<sup>しもへ</sup>ご主人様の命令なら、もう聞くしかない。それに、そのギガバトルナイザーが地球を滅ぼすのに本当に必要となるなら・・・。

真夜はすぐ城から外へ、そしてテーマパーク内を歩いてゲートを出ると、待機していた宇宙船・スペースホークA<sup>エース</sup>に乗り込み、惑星デントに向かった。

しかし惑星デントに着いたものの、やはり大自然の中で大昔に封印された闇の兵器を探し出すのは至難の業だった。一応近くの森の中に潜り込み、かれこれ一時間以上も歩いたが、センサーはまだ反応しない。

疲労を感じていると、ひんやりとかわいた風が吹いた。鳥のさえずりが聞こえ、樹木をつくる影に、空気さえ緑色に染まりそうで、真夜は不思議な感覚で頭上を見上げた。

極彩色の花が咲き乱れ、木々の根は地面から立ち上がるように板状に波打っている。全ての木々が力強く、生命感に溢れていた。

もし地球から全ての生命をを滅ぼしたら、新しい地球<sup>ほし</sup>で自分もこんな大自然をつくってみようかな。真夜がそう感じた時だった。

キイイイインッ！

センサーが反応し、高速で回転しだした。

真夜「えっ？」

ギガバトルナイザーがこの近くに？真夜は足を止め、周囲を急いで見回した。すると、前方にそびえ立つ大木に隠れて、小さな洞窟が黒々とした口を開けているのが彼女の目に映った。

あそこか？真夜は洞窟に近づき、中に足を踏み入れようとした。

バチッ！！

だが突然、真夜は何かに身体を弾かれた。

真夜「痛っ・・・！」

真夜が思わず後退すると、目の前の空間に、パリ、パリ、と電流が流れた。

シールドか。真夜は瞬時で理解した。おそらくこれは侵入阻止と同時に警告でもあるのだらう。おとなしくここは引き下がれと。そ

うなると、洞窟の先には多くの罠<sup>トラップ</sup>が仕掛けられていると考えるべきだ。

だが同時に真夜は確信した。ギガバトルナイザーはこの奥にあることを。

真夜「ちょうどいいわ。私も力を試したかったところだったから・

・

グラッジ・ルージュ

真夜は怨恨口紅を取り出した。そしてキャップを開いて上空へ向けた。

真夜「プリキュア・ダークネス・エヴォリューション！」

真夜は闇に包まれて衣装が変わっていき、悪のプリキュア・キュアリベリオンに変身を遂げた。

キュアリベリオンとなった真夜は右腕に闇の力を溜めていく。やがて右腕に邪気が渦を巻くように集まり始め、リベリオンは洞窟を守るシールドに向かって勢いよく拳を叩き込んだ。瞬間、森に轟音が響き、驚いた鳥たちが飛び立っていく。木々はざわめき、数本が倒れていった。

リベリオンの闇の一撃は一発でシールドを粉々にした。リベリオンは他にシールドが張っていないかを確かめると、穴の奥へ進み始めた。

当然だが、洞窟の中は暗闇で、道が複雑に伸びていた。リベリオンはセンサーと、自身で生み出した黒い鬼火を頼りに前へと進んでいった。かびくさく、冷たい空気。洞窟とはいえ、これも惑星デントの一部と思うと信じられない気もした。リベリオンはしばらく進んで歩いていたが、突如ハツと全身に危機感が走り、さつと後方に飛びのいた。そして足元を鬼火で照らした。

リベリオンの足元の一步先は、崖のきわだった。あと半歩の距離で山のクレバスのように、鋭く切り込まれた深い溝が口を開けている。その深さ、目もくらむようでリベリオンは正直に危なかったと

思った。ただ道はそこで途切れてはいなかった。よく見ると、少しでも油断したら谷底へまっさかさまになりそうな、崖に沿う幅三十センチほどの険しい道が続いている。先に進むにはここを通るしかない。リベリオンはため息をつく、岩壁を抱きかかえるように谷底を背にして、横ばいに進み始めた。

リベリオンは岩肌の突起している部分を？みながら、着実にゆつくり進んでいく。崖に沿った細い道はU字状に曲がりながらも向こう岸に繋がっていた。リベリオンはようやく到着すると、自分が辿ってきた道を振り返った。

帰りもここ通るのか。リベリオンはそう思うと、どっと肩の荷が重くなった。

それが始まりというかのように、その後数々の罠がリベリオンを襲った。侵入者を潰さんと迫ってくる天井に、水責め。炎の谷に吸血植物。

リベリオンは直感とアルティメットの化身相手に鍛錬を行っただえで使いこなせるようになった闇の力で罠を次々とかわし、突破していった。やがて最後の関門である剣山の雨を突破すると、センチが一際強く反応し、鬼火だけが頼りだった暗闇が墨が薄まるようにものの影が分かるようになっていった。一歩進むごとに明るさは増し、そこが目的地だと分かる入り口に着いた時は、洞窟の出口かと思わず間違ってしまいそうな明るさだった。だが外の白っぽい明るさではなく、少々青がかかった明るさで、まだそこは洞窟の中なのだと理解できた。

リベリオンは一旦足を止めると、少しだけ息を吸って、一気に広い空間へと足を入れた。

そこは洞窟の中だと一瞬忘れてしまいそうな場所だった。まずとても広い。例えるなら学校の運動場ぐらいだろうか。空間の壁と天井は全て乳白色で統一され、キラキラと細かな輝きを放っている。

中央には空間の半分くらいの広さを持つ泉があり、さらにその中に九つの岩が突き出していた。九つの岩はぐるりと囲むように円形に並んでいる。岩と岩の間はほぼ等間隔とっていいだろう。円形に並ぶ九つの岩の中央には透明なひし形の結晶体が置かれていた。ストーンサークルなのだろうか。ふとリベリオンは前にテレビで紹介された石を円形に並べた古代の遺跡のことを思い出した。そしてじっと結晶体のほうに視線を移した時、リベリオンはハッと目を大きく見開いた。

リベリオンは見たのだ。結晶体の中に黒いロッドのようなモノが封じ込まれているのを。そして確信した。あれがギガバトルナイザーだということを。

リベリオンは高く跳躍し、泉へと降りた。ちゃぷちゃぷちゃぷ、と泉に波紋を広げてリベリオンは一直線に結晶体を目指して進んでいく。とうとう結晶体の目前にまで進み、足を止め、リベリオンが手を触れようとしたその時だった。

???「待て！」

空間に声が響き、リベリオンはハッと声がした方向へ振り向いた。ついさっきまでリベリオンがいた空間への入り口の所に、ふたりの人影が立っていた。



外伝 First Mission ～GigaBattleNizer～

次回、後編。あのふたりが映画よりも先に登場！？

外伝    **F i r s t    M i s s i o n    { G i g a B a t t l e N i z e r }**

ギガバトルナイザー<sup>ギ</sup>を手に入れる前のキュアリベリオンの攻撃技を  
披露！

入り口の前に立つ、ふたりの人影を見たりベリオンは一瞬両目をパチクリさせた。

無理ないかもしれない。なにしろ、ふたりは人の形のシルエットをしているものの、人間と呼ぶには言い難い外見をしていたのだ。

ひとりは銀のボディに肩から繋がるグリーンのV字のライン。全身からしてスマートで、紳士的にも見える。ただ、問題は顔だ。銀のボディの男の顔は黄色に輝くゴーグルが十字に描かれていた。あれは目なのだろうか。一見カッコよくも見えるが、リベリオンにはどうしても奇妙な生き物にしか思えなかった。

しかしもっと凄いのは、その銀のボディの男の隣に立って腕を組んでいるもうひとりの赤いボディの男だ。赤いボディの男の顔はなんと炎が燃え盛っていたのだ。ゴオゴオと勢いを増し、時折火の粉を散らすその顔はちよつと触れただけで火傷してしまいそうだが、男は全く熱くないというふうに平然としていた。それゆえに目も口もどこにあるのか全く分からない。なんてデタラメな生き物だとリベリオンは思わざるをえなかった。男の赤いボディはもりもりに筋肉が剥き出しになっており、胸の黒い部分にはオレンジの発光体が収まっている。

リベリオン「・・・あなたたちは、誰？」

リベリオンが訝しげに両目を動かして尋ねると、ふたりの男は誇らしげに自己紹介した。

銀のボディの男「私は鏡の騎士・ミラーナイト。光の国より遣われし惑星デントの番人！」

赤のボディの男「俺は炎の戦士・グレンファイヤー。同じく光の国より遣われし惑星デントの番人！」

リベリオン「・・・私も、いろんな怪人と会ってきたけど、どうリアクション取ればいいか分からないのに会ったのは、あなたたちが

初めてよ……」

外見も凄いが名前も凄い。だが見事に適性が合っている。名は体を表すという言葉がまさにぴったりなふたりだった。

ミラーナイト「そこのお嬢さん、そこにあるのはかつて全宇宙を消滅の危機に至らせたという闇の兵器・ギガバトルナイザーなのです。お嬢さんのような方が触れてよいものではありません。危ないので、すぐに洞窟を引き返してください。なんでしたら、我々が外までご案内……」

ミラーナイトが丁寧な物言いでしたが、最後まで言う前に彼の視界からリベリオンの姿が瞬時に消えた。

ミラーナイト「えっ……？」

グレンファイヤー「危ねえっ！ミラーナイト！」

グレンファイヤーの声にミラーナイトが振り返った瞬間、彼の視界いっぱいにはリベリオンの拳が迫ってきた。瞬間移動か！？とミラーナイトが驚いた途端、グレンファイヤーが急いで彼を突き飛ばして助け、代わりにリベリオンの拳を胸に受けた。

グレンファイヤー「ぐっ……。嬢ちゃんにしては、なかなかいいパンチじゃんかよ」

グレンファイヤーはダメージを受けたがひるんだ程度で、吹き飛ばどころか、一歩も後退しなかった。グレンファイヤーの反応に、リベリオンは少し驚いたが、すぐに拳を繰り出した腕を引っ込め、今度は彼の横腹を狙って鋭い蹴りを放った。だがグレンファイヤーはジャンプしてかわすと、体勢を起こしていたミラーナイトの隣へ着地した。

グレンファイヤー「ミラーナイト、どうやらあの嬢ちゃん、ギガバトルナイザーのこと知ってて来たみてえだぞ。どうする？」

ミラーナイト「お嬢さんを痛い目に遭わせるのは好まないが、仕方あるまい」

グレンファイヤー「だな」

ミラーナイト「そこのお嬢さん、申し訳ないがあなたを我々の敵と

して排除します！」

ミラーナイトとグレンファイヤーは同時に戦闘体勢の構えを取った。それを見て、リベリオンも思わず構える。ふたりの構えから、溢れんばかりの戦闘力を感じ取ったからだ。ふざけた外見と名前を持つが、このふたりは強い。これは少々きつくなるかもしれないとリベリオンは覚悟した。

ミラーナイト「はあっ！」

グレンファイヤー「おりゃあっ！」

ふたりは力強いかけ声をあげると同時にリベリオンに接近し、まずミラーナイトが鋭い手刀を繰り出した。それをかわし、リベリオンは彼の腹部にキックを放とうとしたが、そうはさせまいと今度は横からグレンファイヤーが炎をまとった拳を伸ばした。

グレンファイヤー「グレンファイヤーパンチ！」

一瞬で全てを焼き尽くしてしまいそうな炎のパンチが直前にまで迫り、リベリオンは急いで跳躍し、再び泉に降りようとした。だが跳び上がったリベリオンを狙い、ミラーナイトが両腕を光らせた。

ミラーナイト「ミラーナイフ！」

両腕から三つの光手裏剣が飛ばされ、リベリオンを追う。予想外の攻撃にリベリオンは一つはかわしたが、あとの二つは肩と太ももを切り、傷口から赤い血が飛んだ。

リベリオン「くっ……」

傷を負いながらもなんとか泉に着地したりベリオンに再びグレンファイヤーが攻撃する。グレンファイヤーは頭上に両腕を伸ばすと、両腕から炎が飛び出し、長い棒状の武器をその中から出現させた。グレンファイヤー「ファイヤースティック！」

グレンファイヤーはファイヤースティックと呼んだ武器を両腕で器用に振り回すと、ファイヤースティックは紅蓮の炎をまとい、リベリオンに目がけて火の玉の形状をした火球を強く弾き飛ばした。強力な火球が猛スピードでリベリオンを襲う。まずい、と思ったリベリオンはさつと飛びのいてかわしたが、火球はリベリオンがいた

位置に激突し、衝撃で泉の水が噴水のように天井高くまで噴き上がった。

リベリオン「凄い力……。でも私がいつまでもやられてると思ったら、大間違いよ」

火球をかわしたリベリオンは両腕に闇の力を込めた。やがて彼女の両手に黒い光球が紫の小さな電撃を流しながら現れる。リベリオンは自分より高い位置に立つミラーナイトとグレンファイヤーを刺すような視線で睨んだ。

リベリオン「リベリオン・デストロイド・ボール」

リベリオンは両腕から二つの光球を飛ばした。光球はふたりの頭上を越え、すぐ後ろの白壁に直撃する。瞬間に爆発と強大な炎が噴き、全身に強い衝撃を受けたふたりは勢いよく吹き飛ばされた状態で、彼女のいる泉の方向へと向かってきた。

ミラーナイト・グレンファイヤー「ぐああああああああっっ！

」

悲鳴をあげながら目の前を飛んでいる隙だらけのふたりを、リベリオンは見逃しはしない。すぐさまふたりに向けて両腕を伸ばし、次の攻撃を行った。

リベリオン「リベリオン・デモンズ・カッター」

今度は黒い鉤爪のような邪気の刃が飛ばされ、宙を回っているふたりの身体を高速で切りつけ、傷だらけにしていく。ミラーナイトとグレンファイヤーはさらに悲鳴をあげて、泉の中へドボン！と音ともに叩きつけられた。

リベリオンは一瞬の躊躇なく、弱っているふたりへ駆けていき、まずはグレンファイヤーの胸ぐらを驚？みにすると、渾身の一撃を叩き込む。次に腹部に十発もの連続パンチを高速で浴びせ、最後にその炎の顔目がけて強烈な蹴りを叩き込んだ。多少の一撃には強いグレンファイヤーでも次々と繰り出される連続技には耐えられず、身体が後ろに吹き飛び、白壁に背中から激突した。

ミラーナイト「グレンファイヤー！おのれ！クロスシルバー！」

立ち上がったミラーナイトが両腕を目の前で交差させて白い光線を放つ。しかし、リベリオンはこれをかわすと、ミラーナイトに向かって走り、右手をガツと獣の手のような形に開いて彼の左肩を鋭く、そして深くひつかいた。

ミラーナイト「ぐああっ！」

リベリオン「これはさっき怪我させたお返しよ」

リベリオンは冷たく言うと、さらに一瞬で背後に回り、ミラーナイトの首根を？んでギガバトルナイザーを封じている結晶体に顔を強く叩きつけた。しかも何度も、何度も……。ミラーナイトはなされるがまま殴られ続け、十字のゴーグルに小さな亀裂が走り、腕がだらんとなった。

グレンファイヤー「ミラーナイト……！！」

リベリオンに壁に叩きつけられたグレンファイヤーは全身に激痛を感じながらもなんとか立ち上がり、もう一度ファイヤースティックに力を込めた。たちまちファイヤースティックは炎に包まれ、グレンファイヤーは最後の力を振り絞って、ミラーナイトを痛め続けるリベリオンの背中を狙って最大級の火球を飛ばした。

もの凄い業火の塊が、リベリオンの背後に迫る。だがリベリオンは口元にかすかに笑みを浮かべると、くると振り返り、その業火に向かって、片手でミラーナイトを全身丸ごと投げ飛ばしたのである。

グレンファイヤー「なっ！？」

すでに弱り果てたミラーナイトにかわす気力などもう残っていない。彼はあつという間に業火に焼かれ、この世のものとは思えないほどの絶叫をあげた。そしてリベリオンは瞬間移動をして業火の届かな位置へと避難する。

ミラーナイトを呑み込んだ業火は勢いを衰えず、さらにストーンサークルをも巻き添えにした。空間全体を炎と轟音、爆風が一瞬で包む。

グレンファイヤー「ぐうううううう……！！」

衝撃に目を瞑り、吹き飛ばされまいと耐えるグレンファイヤー。  
やがて炎も爆風も次第に消えていき、静かになっていく。ようやく  
目を開いたグレンファイヤーの前には、煙が霧のように充満してい  
た。すると、何も見えない空間の向こうから、リベリオンの一言が  
彼の耳に届いた。

リベリオン「どうもありがとう」  
グレンファイヤー「！」

やがて晴れていく煙の壁。それが完全に消えた時、グレンファイ  
ヤーの目に飛び込んできたのはギガバトルナイザーを片手に握り締  
めたリベリオンの姿だった。彼女の足元には全身大火傷を負ったミ  
ラーナイトが横たわっている。驚いた反応をするグレンファイヤー  
に、リベリオンはゾツとするような残酷な視線を向けた。

リベリオン「あなたのおかげで、お目当てのものが手に入ったわ」  
グレンファイヤー「・・・おまえ、まさか最初からこれを狙って・

・・・!?」

リベリオン「さあ?でも、あなたの火球を初めて見た時、正直に凄  
いと思ったわ。もし威力を増したら、なんでも壊せるんじゃないか  
とも・・・ね」

グレンファイヤー「き、貴様あつ・・・!」

やられた。あの女はまんまと俺の力、そして仲間を助けようとす  
る思いを利用してギガバトルナイザーの封印を解きやがったのだ。  
そのためにあいつはミラーナイトを痛みつけ、ゴミのようにとどめ  
を刺したというのか。だとしたら、なんという非情さだ。

グレンファイヤー「うおおおおおおおおおっ!」

グレンファイヤーは怒りが込み上がり、ファイヤースティックを  
高く振り上げて、叫びながら走り出した。そしてリベリオンに接近  
し、距離を縮めていく。彼女の目前まで来たグレンファイヤーはフ  
アイヤースティックを渾身の力で強く振り降ろした。

だがキンッ!と音が響いて、ファイヤースティックはもの凄  
い力で彼の手から弾き飛ばされた。



「え？」と声を出した次の瞬間、グレンファイヤーはギガバトルナイザーの先端で横腹を殴られ、その強い力で今度は巨大なクレーターができるほど壁に叩きつけられた。

グレンファイヤー「がああっ！」

グレンファイヤーの気力もそこまでだった。立ち上がらない彼を見届けたリベリオンは片手で握り締めたギガバトルナイザーを全体的に眺めた。

弱っていたとはいえ、捨て身でかかってきたグレンファイヤーを一撃で動けなくするなんて……。

確かに強大な力を持つ武器である。封印されたのも今なら理解できる気がした。

ふたりを倒したリベリオンはジャンプし、もとの入り口の位置へ降りた。そして片手にギガバトルナイザーを握ったまま、空間を出ようとした。

ミラーナイト・グレンファイヤー「待て……」

だが微動ながらもゆっくりと上体を起こしたミラーナイトとグレンファイヤーの声がリベリオンを止めた。ふたりの声を聞いたリベリオンはまさかまだ戦うつもりなのかと少し驚いて振り返ったが、ふたりは次の瞬間意外なことを口にした。

ミラーナイト「あなた……名前は？」

リベリオン「……は？」

グレンファイヤー「てめえの……名を……聞いてんだよ……」

名前。そういえば名乗っていなかったな、とリベリオンは思い出した。

リベリオン「私は……全てを無へ誘<sup>いたな</sup>う漆黒の堕天使、キュアリベリオン……」

ミラーナイト「キュアリベリオン……」

グレンファイヤー「覚えてぜ。おまえの名……」

そう言くと、ふたりは両手を震わせながらもゆっくりと上げ、小さな光を生み出した。ミラーナイトは銀の光。グレンファイヤーは

赤の光。二つの光はゆつくりとふたりの両手から離れると、やがてリベリオンのいる方向に目がけてスピードを増す。リベリオンは一瞬構えを取ったが、二つの光は彼女の両脇を通ると、凄いスピードで入り口から空間を出ていき、すぐに洞窟の奥へと見えなくなった。グレンファイヤー「よく聞け。俺たち・・は・・今、父親の・・最期を・・娘に・・・伝えた」

リベリオン「娘？」

結婚してたのかよ。

ミラーナイト「我々は・・もうこれまでです。しかし・・あなたの・・目論みは・・必ず我々の娘たちが・・阻止します・・・」  
グレンファイヤー「娘は・・俺よりも強えぜ。・・覚・・悟しと・・けよ・・・」

それがふたりの最後の言葉だった。

ミラーナイトとグレンファイヤーは力を使い果たし、ぐつたりと倒れた。そして全身を光と炎の粒と化していき、みるみるうちに消滅していく。

娘か。あのふたりの娘って、どんなだろうな。いつか本当に会う日が来るのだろうか。

ふたりの最期を見届けたリベリオンはそう思うと、踵<sup>きびす</sup>を返し、空間を出ていった・・。

アルティメット「ほう。これがギガバトルナイザーか・・。確かに本物のようだ」

ワンダー・プラネットに戻ったリベリオンは即座にギガバトルナイザーをアルティメットに渡した。アルティメットは釣り上がった白い両目で満足そうに眺め回した。しばらく眺めた後、アルティメットは今度はリベリオンのほうに目を向けた。そしてじつと彼女の全身をしげしげと眺める。なぜ彼が自分を眺めるのか意図が分からなかったが、リベリオンは黙っていた。

やがて眺めるのをやめたアルティメットはギガバトルナイザーをリベリオンに手渡した。

リベリオン「え・・・？」

アルティメット「おまえが使え」

リベリオン「は、はい？」

アルティメット「これから俺たちは全世界を敵に回すことになる。おまえはそれを覚悟したうえで、俺の右腕になったんだろう？なら、そいつを完全に使いこなして来たる敵を全て排除しろ。そして俺を守れ・・・いいな？」

リベリオン「は・・・はい！」

リベリオンは全身を引き締めたように返事した。そしてアルティメットからギガバトルナイザーを両手で受け取った。

アルティメット「（そして何も知らないまま、最後まで利用されるがいい・・・）」

アルティメットは最後に心の奥でそう付け足すと、紙コップのジュースをストローでちゅると飲み干した。

こうして彼女は最強の闇の兵器を自分のものとし、次第に使いこなせるようにしていった。

・・・そして一年後。

アルティメット「これが招待状を贈った19人のプリキュアだ」

アルティメットは19枚の写真を真夜に渡した。そこには一枚ずつ、19人の少女の姿が写っている。

真夜「19人もいたなんてね・・・」

自分以外にもプリキュアがいたことにも驚いたが、19人もいたのも驚きだ。

アルティメット「やつらのうちの誰かは8月1日必ず来る。数人かもしれないし、もしかしたら全員来るかもしれない。よく顔を覚えておけ。おまえの役目は二つだ。一つはプリキュアに近づいて視察し、

俺に報告すること。二つはそのプリキュアを倒し、そして・・・」  
真夜「ギガバトルナイザーでプリキュアのパワーを全部吸い取るんでしょ？」

みなまで言わず、真夜が言った。アルティメットはしばし沈黙した後、「ああそうだ」と答えた。

アルティメット「いよいよだ。時は来た」

真夜「了解したわ。8月1日が楽しみね・・・」

真夜はそう言つと、手に持っている19人のプリキュアの写真をもう一度眺め、両目を鋭く細めた。

瞬間、突如写真に黒い火の手が上がり、火はあつという間に全ての写真に燃え広がっていく。

彼女の手の中で灰と化していった19枚の写真は、そのまま真下の床へとこぼれていき、真夜はそれを冷たい目で見届けると、監視室を出ていった。

外伝    **F i r s t    M i s s i o n    〈 G i g a B a t t l e N i z e r 〉**

プリキュアたちとの戦いよりもキュアリベリオンの非情さを出しました。

次回はそれからの真夜を描く最後の外伝。そして、衝撃の展開！

## 外伝 真夜、その後・・・そして新章へのプロローグ

窓から外は、庭の木々たちが陽の光を浴びて育まれている。枝がのびのびと生き、生命力を溢れさせていた。

子供の頃、この庭でよく遊んだなと真夜は少し懐かしく思っていた。そしてこの光景が今も昔も変わらないことに喜びを感じた。

彼女がいる場所は、両親がいた国際医療団体の本部が管理している児童養護施設内の一室。ニューヨークに到着した真夜は、その部屋でロモモと一緒に暮らしていた。

部屋はおよそ広いといえないが、ひとりが生活するには十分なスペースだ。テレビは置いてあるし、シャワー室もある。

ロモモ「真夜ちゃん、みんなから手紙が来たロモモ！」

一旦玄関に飛んだロモモが嬉しそうに顔を弾ませて戻ってきた。

真夜は「本当？」と尋ねると、すぐさま郵便受けから19通の封筒を手に取り、部屋に戻った。

あれからもう二ヶ月半が経つ。真夜は組織で医療や福祉等の講義や実践を受けながらも合間を縫い、プリキュアたちと手紙のやり取りを続けていた。

時間をかけ、真夜は一枚ずつ目を通していく。そこに書かれた字を通して、みんなの想いや心が伝わり、真夜は微笑みを浮かべた。

最後の一枚を開く。差出人の名はつばみだった。

「真夜さんお元気ですか？ニューヨークでもがんばっていますか？

私たちのほうでは学園祭の後片づけをしたり、強くなるための特訓や試練を受けたりと大変です。でも、これもみんなの心の花を守るためと辛くてもあきらめずに続けています。

だけど、辛いことばかりではありません。実は私たちにすごいことが起きたんです。

私たち、今度花の都パリでファッションショーに参加することに

なりました！

えりかのお母さんが経営するファッションショップ・フェアリードロップがパリに進出したんです。それで、そのお披露目として私たちがモデルに選ばれてしまいました！

私にえりか、いつき、えりかのお姉さんで現役モデルのももかさんとゆりさんも一緒にファッションショーに出てくれます。パリで私たちがモデルデビューするなんて、すっごく楽しみで、ドキドキです！

パリに到着しましたら、真夜さんにもおみやげを買ってきます。楽しみにしてください。

もしとても辛くて耐えられないことがあったら、いつでも私たちのことを思い出して、連絡をください。きっと真夜さんの力になります！

私たちはいつだって真夜さんの味方です！

たとえどんなに離れていても、私たちは友達なんですから。

」

あの娘らしい手紙ね。真夜はふふつと笑った。

真夜「つぼみたち、パリに行くんだって」

ロモモ「へえ、いいロモね」。ロモモもパリに行ってみたいロモモ！

真夜「ロモモ、気持ちは分かるけど、当分無理よ。パリに行くお金なんてないし、そもそも勉強中の身である私たちにそんな余裕なんてないわ」

ロモモ「ガクッ・・・残念ロモ」

真夜「ま、パリが火の海にでもなったら、人命救助として行くかもしれないわね」

ロモモ「！・・・真夜ちゃん！」

真夜「冗談よ」

ロモモ「冗談でも、そんなこと言っちゃいけないロモ！」

真夜「ごめん……。確かにちよつと悪かったかもね」

口モモ「……。真夜ちゃん、口モモはまだ心配なんだ口モ」

真夜「口モモ？」

口モモ「口モモはまだ怖いんだ口モ。真夜ちゃんがまたキュアリベリオンになって、口モモから離れていくんじゃないかって……。

口モモはもう真夜ちゃんとは離れたくない口モ……」

真夜「……。……」

真夜は静かにつばみからの手紙を傍らに置いた。

真夜「口モモ、私ね、あの戦いで気づいたの」

口モモ「口モ？」

真夜「確かに私は雨牙真夜。その他の誰でもない。でも、キュアリベリオンも私であることに変わりないのよ。事実、私は本気で地球を滅ぼし、全ての命を奪おうと考えていたんだから……。今だつてそう。私はまだ愚かな戦争や環境破壊が止まらないこの世界を許していないし、お父さんとお母さんを殺したのがアルティメットでも、そもそも世界が少しでも安定していたら、ふたりは犠牲にならなかったんじゃないかと思うの。たとえどんなに私たちが声をあげて叫んだとしても、世界が変わらなければ、私はいつかまた、心の中の闇が暴走してキュアリベリオンに変身するかもしれない……」

口モモ「真夜ちゃん……。……」

真夜「でも大丈夫よ、口モモ」

口モモ「えっ？」

真夜「あの戦いで、私は信じる心も持ったわ。あの時、みんなの想いがひとつになったから、地球は救われたのよ。みんなの光を見て私思ったんだ。もう少しでも世界を信じてみてもいいかもしれないって。だから大丈夫。もうそう簡単にキュアリベリオンは現れたりしないわ」

口モモ「そう口モね……。……」

口モモはそう言つて微笑んだ。



そうだ。真夜ちゃんは強くなったんだ。

もうそう簡単に世界を滅ぼそうと思ったりはしない口モ。キュアリベリオンは現れない口モ。

そう信じて。

アイスランド。ラキ火山。

ラキ火山はラカギガル火山とも呼ばれ、1783年に噴火し、火山灰による大量の雪によつて「火山の冬」と呼ばれる小氷河期を起こし、国民の24パーセントが餓死したどころか、遠く離れた日本の地にまで広がって、「天命の大飢饉」と呼ばれる冷害で百万人の死者を出した恐怖の伝説を刻んだ歴史を持つ。

今も火口の下ではどろどろの溶岩湖があるが、約220年前にありつただけのパワーを十分使い果たしたのか、それ以降は一度も噴火しておらず、周辺の住人たちも穏やかに長く暮らしていた。

その火口に上空から一機の鷲に似た形の宇宙船がゆっくりと降下していったことに誰も気がつかなかった。

宇宙船は火口の側に着陸すると、側面の扉が自動で開き、一人の少女を降ろした。

少女は漆黒の衣装を身につけ、髪型を黒のリボンでツインテールに結んでいる。そして右目を眼帯で覆っていた。

眼帯をした少女は斜面を降り、火口の中へ近づいていく。やがて表面温度約1000の地へ足を踏み入れたが、少女は全く平気な様子で火口の中心へと徐々に歩いていった。ようやく火口の中心へと着いた少女はその位置からわずかに見える溶岩湖へ片手を伸ばした。

するとゴボツ、という音とともに中心から溶岩の噴水が起こり、少女は素早く後方へと離れる。噴火と比べたらまだおとなしいほどのものだが、それでも一瞬でも触れたらあつという間に全てを溶かす力を持つ。熱気が周辺に噴き出し、少女の髪も毛が一本残らず逆

立った。

そして次の瞬間、溶岩の噴水の中から巨大な鎌が現れた。

柄は3メートルはあり、全身がまるでススのように黒く染まっている。刃は三日月のように曲がって、鋭利さを増していた。

鎌はゆつくりと地に降りると、溶岩の噴水は治まり、次第に火口湖の下へまた戻っていく。少女はその右手で鎌の柄を？み、刃をまじまじと見つめた。

少女「これが百年前、過去のプリキュアたちとの戦いで封印されたという悪魔の発明と呼ばれし兵器『希望狩』ウィッシュ・ハント……」

少女がそう呟いた途端、突然ポケットの中の携帯が鳴り出した。

少女は空いた左手で取り出し、耳に当てる。

少女「私よ。……ああ、おまえか。……そう、見つかったの。了解。すぐ行くわ」

少女は携帯を閉じてポケットに戻すと、火口湖を背にして再び歩き、斜面を登り始めた。当然、溶岩の中から現れた黒い大鎌を手に持ったまま。

やがて宇宙船・スペースホークAエースの所に戻った少女はその中に乗り込み、大鎌を傍らに置いて、座席に腰を降ろした。少女が座った途端、天井のテレビにアニメキャラのスペースホークが現れた。

宇宙船「オジヨウサマ、コノママオモドリニナラマスカ？」

少女「いや、今から行き先を言うからそこに行つて。でもその前に、お嬢様はやめてといったはずよ。おまえが言くと吐き気がする」

宇宙船「！……モウシワケゴザイマセン。リベリオンサマ……」

・  
」

少女「分かればいい。行き先は……」

少女は行き先を告げると、傍らに置いた大鎌の刃をまるで愛する者を慈しむかのような目でなでて微笑を浮かべた。

少女「もう少しで『また』会えるね……真夜」

数分後、宇宙船は上空へと向けて機体を傾けて発射し、あっという間に消えた。

世界に、新たな魔の手が忍び寄ろうとしていた……。

外伝 真夜、その後・・・そして新章へのプロローグ（後書き）

これにて外伝も終了となります。ありがとうございました。

次回は、私とプリキュアたちが対談し、舞台裏のエピソードや語られなかった謎を解説していきます。

## 対談 桔梗 X プリキュアオールスターズ

桔梗「みなさん、こんにちは〜。作者の桔梗です。『プリキュアオールスターズDX2NEXT』を最後まで読んでいただき、ありがとうございました！最後はゲストの方々とトークを交えて本編でも明かされなかった秘密やエピソードを明かしていこうと思います。ゲストはもちろん、プリキュアのみなさんです！」

プリキュアたち「こんにちは〜！！！！！！」

桔梗「では、トークを始めていきましょう！何か質問があったら、どんどんしてね！」

トークスタート！

ラブ「はいはいはい！まず私から！この作品を書こうとしたきっかけは何だったの？」

桔梗「きっかけは、原作の『ウルトラ銀河伝説』を観たからだね。でもはつきり言って、私もうウルトラマンは卒業した年齢だったし、新作がばんばん作られても全然興味は出なかった。でも、去年公開された『ウルトラ銀河伝説』に関しては悪のウルトラマンの登場、そして光の国の壊滅と大きな話題を呼んでね、舞台も今までのような地球じゃなく、銀河になっているからこりゃスケールがでかいなと思ってひさしぶりにウルトラ映画観たいなと思ったよ」

うらら「それで、映画は観に行けたんですか？」

桔梗「いや・・・残念ながら都合が重なって結局観に行けなかった。それで6月のレンタルを待つのを余儀無くされたよ。で、やっとレンタルDVDを手に入れて家で観てみたら・・・」

祈里「観てみたら？」

桔梗「もう、面白いのなんの・・・てか、圧巻だね！ウルトラマンたちはマジで真剣勝負してるし、日本の特撮とアクションはまだ死んでないと思っただよ。怪獣が宙返りをするという違和感を除いて・・・でも何よりもよかったのは、やっぱり映画の目玉となる悪のウ

ルトラマン、ベリアルだった」

せつな「そんなによかったの？」

桔梗「うん。ベリアルはとても魅力的なキャラクターだった。今までもウルトラマンシャードーとかイーヴィルティガとか悪のウルトラマンは登場したけど、みんなスマートでカッコよかったんだよね。でもベリアルは違う。あの顔のシャープさといい余裕のありそうな表情といい、どの悪のウルトラマンよりも強くてワルそうだった。ギガバトルナイザーを武器にウルトラマンたちを非情なまで痛みつける姿には思わず痺れが来たくらいだったよ」

美希「それで・・・影響を受けて、映画をベースに私たちの小説を書こうと思ったわけ？」

桔梗「はい・・・。舞台も宇宙にしようと思いました。考えてみれば、今までプリキュアで宇宙を舞台にした作品が意外にもなかったからね。ニセモノの宇宙で戦ったことはあるけどね。答えはこれでもいい？」

のぞみ「はいはい！次は私！今回登場したキュアリベリオンがそのウルトラマンベリアルをモデルにしているのは分かるんだけど、

『リベリオン』という名前は最初から決まっていたの？」

なぎさ「あつ、それ私も知りたい！教えて！」

桔梗「ううーん、実は名前についてはそうとう苦労したよ。最初名前は『キュアルシフェル』に決めてたのよ。ベリアルだって由来は堕天使からだったから」

りん「なんでボツになったの？」

桔梗「書く寸前になって気づいたんです。プリキュアの名前はみんな英語ということに・・・」

いつき「ああ・・・なるほど」

桔梗「『ルシフェル』も英表記名はあるんだけど、オリキャラとはいえプリキュアの名に人物名みたいなのをつけてよいのだろうか？と悩んだ挙句、あきらめました。で、悪のプリキュアなんで、ふさわしい名前をいろいろ探して候補に挙げました」

ひかり「どんな名前が候補に挙がったんですか？」

桔梗「とりあえずざっと挙げると、evil（邪悪）、devil（悪魔）、revenge（復讐）、heartless（非情）、cruel（残酷な）等等……。最終的にrebellion（反逆、反抗）に決めたのは響きが女の子っぽくも聞こえるし、モデルのベリアルの名にも少し似ているからかな」

咲「じゃあ、ウルトラマンゼロをモデルにしたキュアセイバーは？」  
桔梗「セイバーも苦労しました。候補はrelief（救済）、goddess（女神）、sacred（神聖な）等等……。最終的にはsavior（救世主）に決まりました。響きもいいし、カッコいいと思ったので」

かれん「原作をアレンジしたのはなぜなの？」

桔梗「はじめは原作同様にひとりのプリキュアが力を求めるあまりに道を踏み外してしまい、乱世を起こした末、他のプリキュアたちに封印され、長く眠っていたが、復活したという設定にしようと思いました。でもいくら道を踏み外したとはいえ、女の子が暗い所で長いこと眠っていたというのはさすがに可哀想じゃないかと思いました。で、急遽歴代と同じようになって世界を守るために戦っていたプリキュアが世界の実態を知って絶望し、闇の力を自ら得て悪のプリキュアになったという設定に変えました。そこで雨牙真夜という初めて普通の人間が変身する悪のプリキュアが生まれたわけです」  
えりか「（目を輝かせて）おおーっ！」

桔梗「悪のプリキュアは過去にも登場しているけど、みんな『造られた』存在でしょ？もう仮面ライダーも悪い人間が悪のライダーにばんばん変身している時代だからね、プリキュアオールスターズももうそろそろ悪のプリキュアがまた登場していいと思ったし、世界を絶対守ってみせると思っているプリキュアがいれば、逆に今の世界なんか消えればいいのにと本気で思っているプリキュアがいたっていいとも思っただよね。ただ、そのきっかけとして両親が殺されたという設定には頭を悩ませましたが、これぐらい起きないと世

界を憎まないだろうと思い、決めました」

ほのか「第二部でベリアルルのポジションをキュアリベリオンから黒幕のアルティメットに変えたのはどうしてなの？」

桔梗「うん、やっぱりさ、いくら悪とはいえ、プリキュアがプリキュアを倒すなんて気持ちのいいものじゃないと思うんだ。たとえ悲しい過去を持つていたとしても、間違っていると思えば、全力で止めて間違いを認めさせて救うのがプリキュアじゃないかなと考えて、それでキュアリベリオンは本当は黒幕のアルティメットに利用されていたことにしたの。そもそもベリアルだってレイブラッド星人に操られていて、本当はあんなことはしたくなかったんじゃないかなと感じた箇所があつてね。そこからキュアリベリオンはキュアセイバーに戻ったとしたんだ。ゼロも危うく道を踏み外しそうになったからそこからヒントを得てね」

ゆり「キュアリベリオンとキュアセイバーの衣装について参考にしたものはあるの？」

桔梗「キュアリベリオンの衣装については高校女子の制服とタキシードを、キュアセイバーはウェディングドレスを参考にした衣装にしています」

こまち「そう言われてみれば、セイバーの衣装はウェディングドレスと共通点が少しあつたわね」

くるみ「それに綺麗だったわ・・・（物思いにふけるくるみ）」

桔梗「（手を叩いて）はい！どんどん行くよ！次の質問は？」

舞「じゃあ私が。真夜さんの声は誰を想定しているの？」

桔梗「それはみなさんにお任せするよ。でもまあ、私のイメージとしては、浅野真澄あさのますみさんかなあ・・・。はい！次で最後！」

つぼみ「え・・・ええ・・・と。あの、次回作あるんですか？」

桔梗「あるよ」

えりか「うおっ！やったっ！！」

桔梗「でも、まだほとんどストーリーできていない。そもそも次の原作となる映画が公開されていないからね。書き始めるとしたら、



早くても来年の1月からかなあ・・・」

咲「あと三ヶ月・・・。みんな待っててくれるかなあ・・・。」

桔梗「待っててくださいとしか言えませんが。私としては、やむをえなかったとはいえ今作ではリベリオンとセイバーの直接対決を出せなかったという唯一の不満が残ったから、次回作ではこの対決を実現したいと思っている。次回作の敵は今作以上に非情で冷酷にするつもりだから、きみたちも覚悟したほうがいいよ」

ラブ「ひえっ！」

のぞみ「ところで、原作で登場するあの三人をモデルにしたキャラクターも出るの？」

桔梗「出すつもりだよ。でももうひとつ、その三人には過去の東映アニメヒロインもモデルに加えようと考えているよ。ひとりはきみたちの大先輩に確定してる」

なぎさ「えっ？それって、まさかセーラ・・・」

桔梗「わあーっ！それ以上言っちゃダメ！というわけでみなさん！あとのふたりについてはあの女の子をモデルにしてほしいと思ったら、ばんばん要望を言ってください！ただし、年代がかなり前（例えば魔女っ子メちゃん）のはやめてくださいね。それでは本日はここまで！ありがとうございました！」

幕、閉じる。

対談 桔梗 X プリキュアオールスターズ（後書き）

ご愛読ありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2498n/>

---

プリキュアオールスターズDX2NEXT 新たな伝説 銀河最大の超決戦！

2011年2月12日20時58分発行